

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—43—

朝倉郡杷木町所在
クリナラ遺跡・若宮遺跡

1997

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—43—

朝倉郡杷木町所在
クリナラ遺跡・若宮遺跡



(1) クリナラ遺跡出土 異形石器・管玉・ナイフ形石器・牙状尖頭器

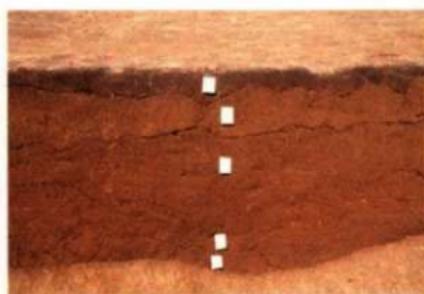


(2) クリナラ遺跡出土 十字形石器・糸巻形石器



(1) クリナラ遺跡出土 磨製石のみ・両端抉入磨製石器

(以上3点は石丸洋氏撮影)



(3) クリナラ遺跡基本土層



(4) 第7号住居上層の縄文遺物出土状態



(5) V・VII区 第2層縄文遺物出土状態



(6) IV・V区 第2層遺物出土状態

クリナラ遺跡全景（第1層下部）



クリナラ道路全景（第2a号下向）（以上、2点は大塚清美氏撮影）



序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告は、朝倉郡杷木町所在の杷木インターチェンジ建設地内における、クリナラ遺跡・若宮遺跡についてのものであります。その内容は、縄文時代晩期の堅穴住居群を中心とする一大集落跡と、出土した貴重な縄文土器・石器類であります。

他に例を見ない豊富な成果を公開することができた本報告書を、文化財愛護思想の普及、研究・教育等の資料としてご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり、地元の方々をはじめ、数々のご協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会
教育長光安常喜

例　　言

- 1 本書は、昭和62・63年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて、九州横断自動車道建設に伴って発掘調査を実施した報告である。
- 2 本書に収録した遺跡は、クリナラ遺跡・若宮遺跡である。ともに、福岡県朝倉郡杷木町に所在し、杷木インターチェンジ建設地内に位置する。なお、巻末に補遺として、報告書刊行後に整理ミスで出てきた柿原I縄文遺跡出土石器及び天園遺跡出土縄文土器を併せて報告する。
- 3 本書掲載の現場における遺構実測図・測量図は、クリナラ遺跡が日高正幸・田中康信・中間研志、若宮遺跡では牟田サエ子・谷口晶子・矢野シズ子・高瀬セツ子・後藤カミヨ・林ツユカ・佐藤扶美子・目修二・堀内宏行・日高・伊崎俊秋が作成した。出土遺物の実測は、クリナラ遺跡の弥生～歴史時代の土器と縄文土器底部片を大野愛里、磨石・凹石を甲斐孝司、他を中間が行った。若宮遺跡の出土遺物実測は、原富子・伊崎、遺構・遺物の整図は塙足里美、クリナラ遺跡遺構の製図は塙足、出土遺物の整図は豊福弥生・中間・甲斐・松永通明が行った。
- 4 出土遺物の整理は、九州歴史資料館岩瀬正信氏の指導のもとに、県文化課廿木事務所にて行い、同事務所に保管している。
- 5 遺構の写真撮影は中間・伊崎が行い、空中写真はフォト・オオツカによる。出土遺物は九州歴史資料館にて北岡伸一が撮影したが、うち巻頭カラー遺物写真は石丸洋氏による。
- 6 本書で使用した方位は、すべて座標北である。
- 7 本書の執筆・編集は、IVを伊崎が、他を中間が行った。
- 8 クリナラ遺跡出土遺物の説明文中の記述について補足しておく。

※ P1～P423 ……第1層下面で検出したビット等

P424～ ……第2a層下面で検出したビット等

※ 2層 No.○○～IV～VI区の第2a層掘り下げ中に出土した遺物に付した取上げ番号で、1/20実測図に記録。

※ 土器の調整のうち、未記述の部位については、磨滅して調整不明の意である。

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
II 位置と環境	5
III クリナラ遺跡	9
A 調査の概要	9
B 弥生～歴史時代の遺構と遺物	13
1 積穴住居跡	13
2 土 壤	19
3 包含層等出土遺物	20
C 繩文時代の遺構と遺物	27
1 積穴住居跡	27
2 埋 蔵	38
3 土 壤	40
4 集石遺構	43
5 烟状遺構	45
6 出土土器	45
7 出土石器等	115
D 各 論	191
1 C14年代測定	191
2 繩文晚期土器	192
3 繩文晚期石器	205
4 クリナラ縄文集落	216

IV 若宮遺跡	219
A 調査の概要	219
B 1・2区の調査	222
1 1区の遺構と遺物	222
2 2区の遺構と遺物	225
C まとめ	228
V 棦 遺	228
A 柿原I縄文遺跡出土石器	228
B 天園遺跡出土土器	230

I 調査の経過

九州横断自動車道建設に伴い、杷木インターチェンジとなる部分については、当初調査予定地に含まれていなかった。更に、用地買収の遅れもあって、試掘調査についても実施できないままになっていた。

昭和62年3月に至って、インターチェンジ本体部分の各尾根上、谷部等の試掘調査が行われて、谷部分のクリナラ遺跡調査範囲を遺跡と判断することができた。しかし、この谷の周囲の尾根・斜面からは何ら遺構・遺物を検出することはできなかった。また、より南側の進入路部分の丘陵部にあたる若宮遺跡については、未だ未買収範囲であり、この時点では試掘調査に入れなかつた。

現地発掘調査は、昭和62年5月末～11月中旬の約5ヶ月半の長さに及んだ。この間、東勝小尾根の手掘り試掘、6月には西ノ迫高地性集落の新聞・テレビ共同記者会見、同遺跡の現地説明会、8月には西ノ迫遺跡文化講演会、9月にも同遺跡のNHK収録・放映などへの対応に追われた部分もあるが、大半はクリナラ遺跡の立地が谷の斜面であり、梅雨～夏場の雨水による遺跡の保持、進入路部分の確保作業に力をさかなければならなかつたことによる。常に雨に泣かされた現場であった。

調査範囲は、STA272～273の本線の北側にあたり、クリナラ遺跡の発掘面積は4,180m²に及んだ。その結果、北部九州では近年稀に見る縄文時代晩期の集落、畝状遺構、夥しい土器・石器を含む包含層、古墳時代の谷中央に作られるという珍しい立地の堅穴住居跡等が発見され、多大な成果を得ることができた。殊に、縄文晩期黒川式期の遺物は量・組成ともに目を見張るものがあり、とりわけ注目される。

なお、発掘調査にあたり、日本道路公団・杷木町建設課・同教育委員会、地元の作業員の方々には、酷暑の期間中でもあり、御協力を厚く御礼申し上げたい。更に、渡辺正氣先生、九州大学教授西谷正先生、花粉分析の北九州大学教授畠中健一先生等の各先生には、現地にて多大な御指導を賜った。心から感謝申し上げたい。

昭和62年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	杉田 美昭
次長	菱刈 庄二
総務部長	安元 富次
管理課長	森 宏之

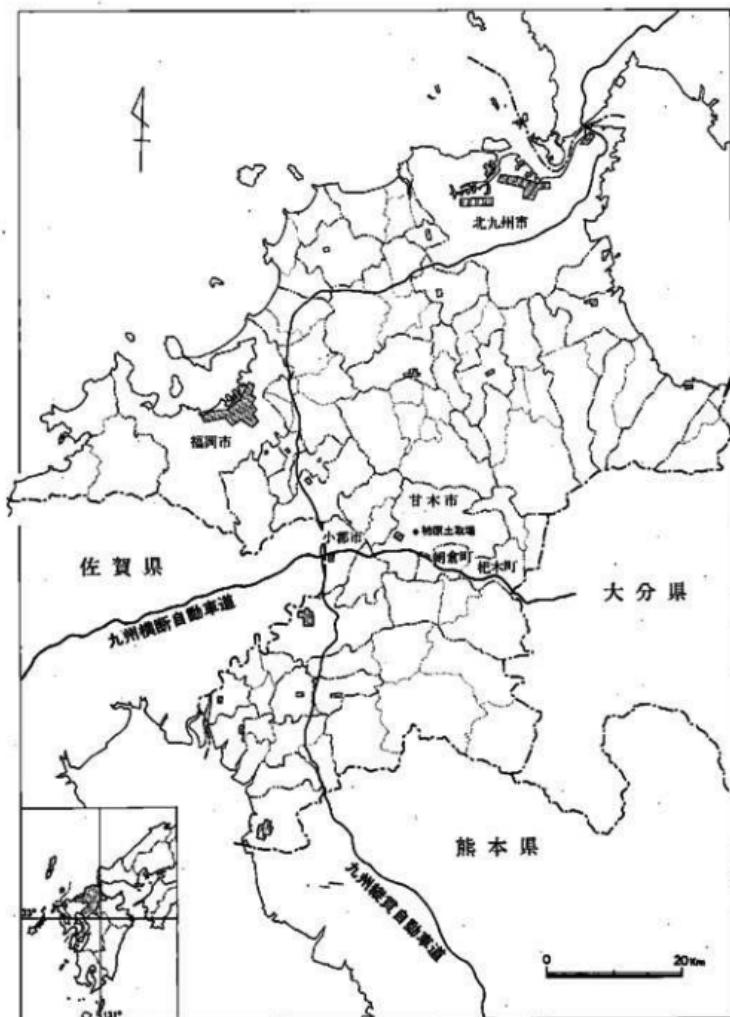


Fig. 1 九州横断自動車道路線図

管理課長代理 佐伯 豊

日本道路公團福岡建設局甘木工事事務所

所 長	風間 徹
副 所 長	西田 功 (事務)
同	中村 義治 (技術)
庶務課長	徳永 登
用地課長	松尾 伸男
工務課長	後藤 二郎彦
小郡工事区工事長	友田 義則
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄
朝倉工事区工事長	上野 満
杷木工事区工事長	小沢 公共

福岡県教育委員会

總 括

教 育 長	友野 隆
教育次長	竹井 宏
指導第二部長	渕上 雄幸
文化課長	窪田 康徳
文化課長補佐	平 聖峰
文化課長技術補佐	宮小路 賀宏
文化課參事補佐	栗原 和彦
文化課參事補佐	柳田 康雄

庶 務

文化課庶務係長	平 聖峰 (兼任)
同 事務主査	長谷川 伸弘
同 主任主事	川村 喜一郎

調 査

文化課調査班總括	柳田 康雄 (兼任)
同 技術主査	井上 裕弘
同 技術主査	高橋 章
同 主任技師	佐々木 隆彦
同 主任技師	中間 研志 (クリナラ遠跡担当)
同 主任技師	小池 史哲

同 主任技師	伊崎 俊秋（若宮遺跡担当）
同 技 師	小田 和利
同 文化財専門員	木村 幾太郎
同 臨時職員	日高 正幸（クリナラ遺跡担当）
同 調査補助員	高田 一弘
同	武田 光正
同	佐土原 逸男
同	平嶋 文博
同	向田 雅彦
同	田中 康信

発掘調査作業員

〈クリナラ遺跡〉 井上武雄 小川人巳 梶原俊幸 友納浩 林ツユカ 奈須道子
 佐藤扶美子 時川千代子 塚本トシ枝 伊藤夏子 小川貞子 藤本公子 野田ミエ
 山本フミ子 梶原アヤ子 伊藤ミネヨ 梶原ハヤ子 梶原マツエ 田中サツキ
 原田ヨネ 井手照子 山下けさ江 滝生アヤ子 山本チサヨ 青柳美雷 日野マツ子
 藤本和子 横村スズ子 井手和枝

なお、本報告書作成に係る平成8年度の関係者は以下のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局 長	藤波 督
総務部長	佐野 博志
管理課長	三根 敬正
管理課調査役	東 清彦
管理課長代理	前田 正信
埋蔵文化財担当	渡 宏之
同	中田 理絵（前任）

福岡県教育委員会

総 括	
教 育 長	光安 常喜
教 育 次 長	松枝 功
理 事	大村 寛
指導第二部長	竹若 幸二

文化課長	松尾 正俊（前任）
文化課長	石松 好雄
文化課参事	柳田 康雄
文化課長補佐	元永 浩士
文化課長技術補佐	井上 裕弘
同 調査班総括	橋口 達也
同 参事補佐	木下 修
同 参事補佐	小池 史哲
庶務	
文化課管理係長	黒田 一治
同 主任主事	鶴我 哲夫
整理	
文化課参事補佐	中間 研志（執筆担当）
甘木歴史資料館副館長	伊崎 俊秋（執筆担当）
整理指導員	岩瀬 正信（遺物整理担当）
同	平田 春美（遺物実測担当）
同	豊福 弥生（製図担当）
同	北岡 伸一（写真担当）

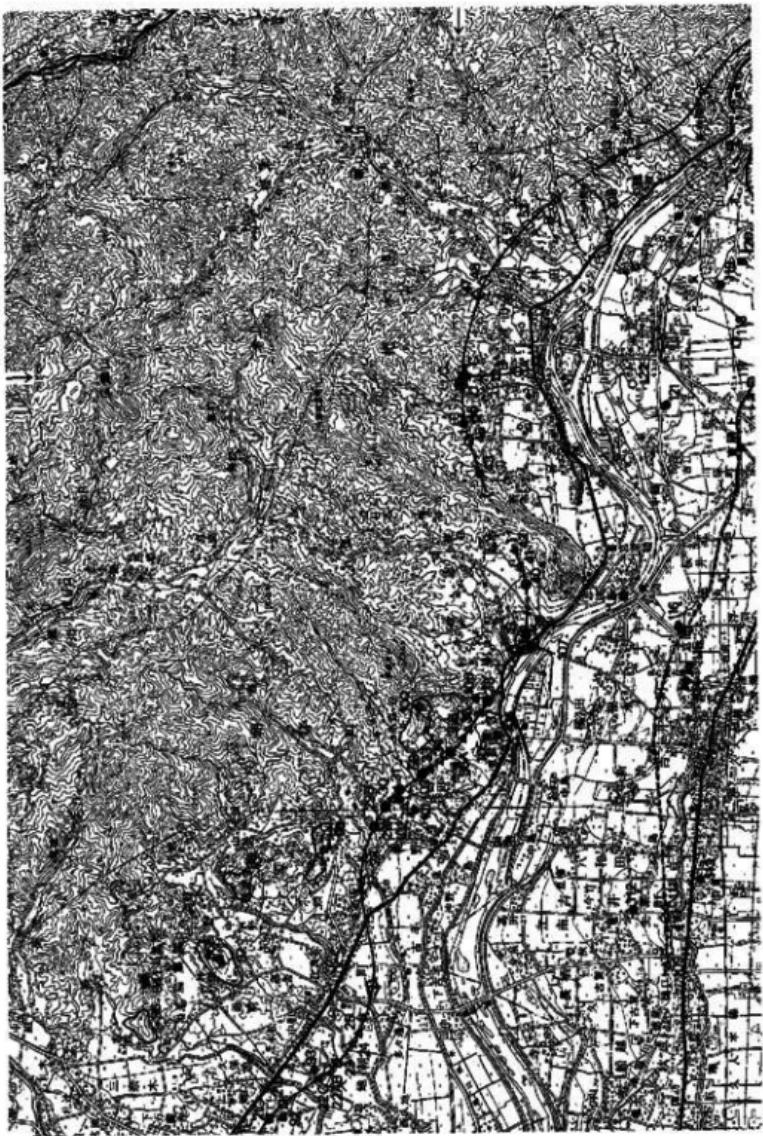
II 位置と環境

クリナラ遺跡は、福岡県朝倉郡把木町大字塞水字クリナラ^{ヒタツヤ}396・423・432～435番地に位置し、地目は畑・山林である。現在、九州横断自動車道の把木インターチェンジ内北側寄りのループ部分にある。

把木町は、福岡県のはば中央に位置し、筑紫太郎の異名を持つ筑後川の中流北岸にあたる。現把木町市街地の北側丘陵中に当遺跡は存在する。

遺跡の立地は、筑後川冲積地面から一段高くなった中位段丘の丘陵から更に高くなった山中の高位段丘中の谷にあたっており、決して眺望の良い好占地であるとは言えない。平野部から北へ谷に沿って入り込み、更に東側に小支谷を透って、奥深い部分の谷頭からその中途までの部分であり、遺跡の南北両側はやせ尾根でさえぎられている。遺跡東端の谷頭頂部まで登ると、東側直下に別の浸蝕谷と、南側むこうに平野部を僅かに望むことはできる。このような立地の

Fig. 2 クリナラ遺跡・若宮遺跡の位置(1/50,000)



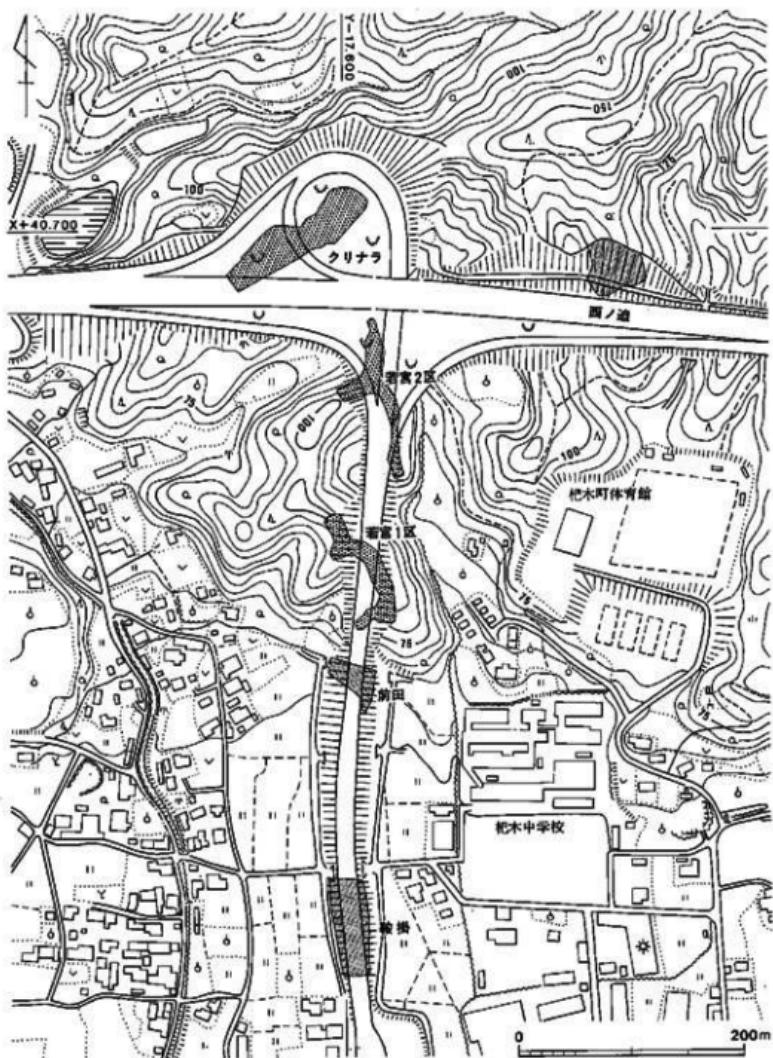


Fig. 3 杷木I.C.付近の各遺跡 (1/5,000)

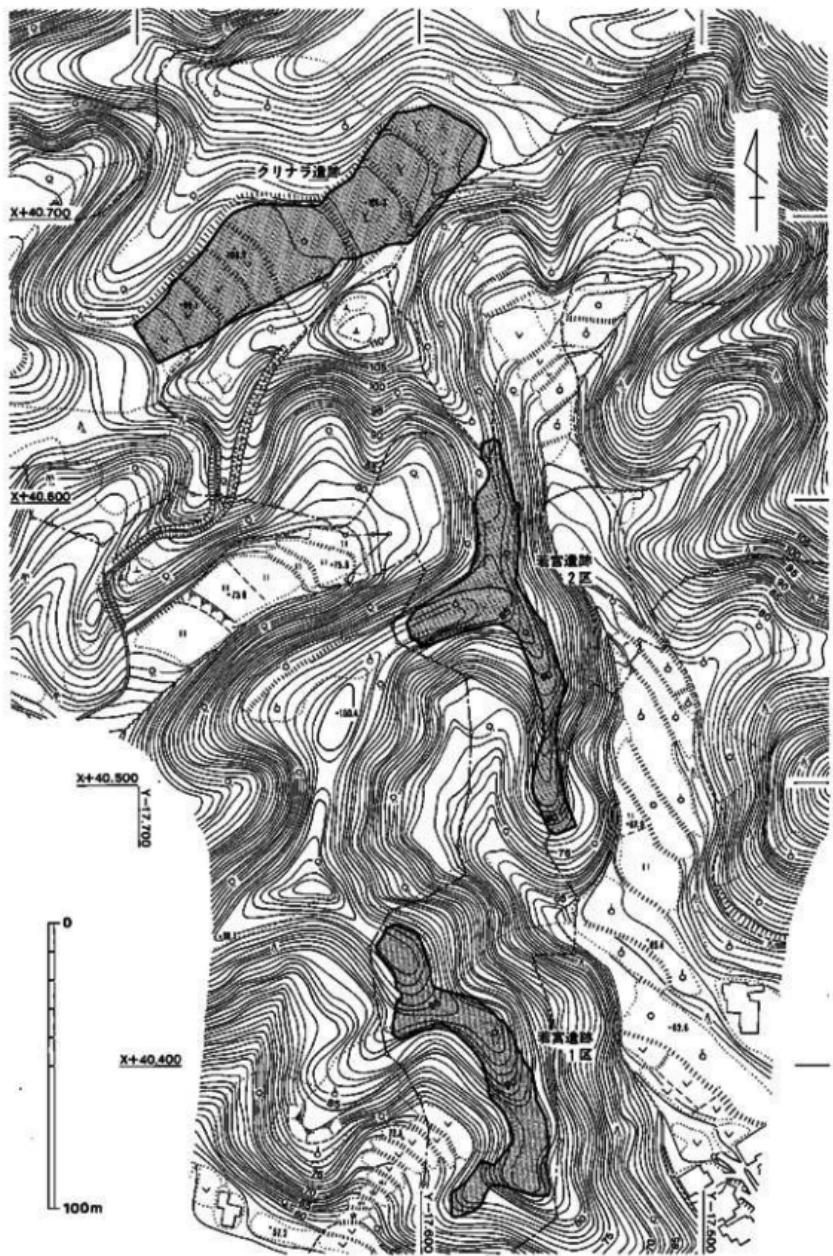


Fig. 4 クリナラ遺跡・若宮遺跡周辺地形図 (1/2,000)

中で、特に古墳時代堅穴住居跡2軒が谷全体から見ると中位の谷筋中央に発見されたのはまさに異様である。特殊な性格の住居と考えざるを得ないであろう。縄文晩期としての立地は、狩獵・畑作等を想定すればあながち悪い占地とも考えられない。

当遺跡周辺の地質は、花崗岩風化土壌で、より西側の甘木市を中心とする黒色片岩・緑色片岩地帯とは異なる。遺跡周囲の尾根は、風化の激しい花崗岩培乳土（所謂ヒメマサ）であり、浸蝕が著しい。

九州横断自動車道路線内の発掘調査で、甘木・朝倉地方の縄文時代の様相がかなり明らかになりつつある。特に、甘木市東部から朝倉町・杷木町に至るまでの調査地点では、必ずと言って良い程、縄文土器片が出土している。中には大遺跡と言ってよい程の多量の遺構・遺物が得られている遺跡もいくつか認められる。本シリーズ報告書が完結する際に、甘木・朝倉地方という視野で検討が可能となろう。

ここでは、甘木・朝倉・浮羽地域の縄文晩期遺跡について概観してみたい。まず、甘木市北側山麓の柿原I縄文遺跡（註1）では、黒川式新段階のまとまりのある多量の遺物と、住居跡・土壤等が発見されている。偏平打製石斧が1点しか出土していない特徴が認められた。

また、甘木市東端の段丘上に位置する高原遺跡（註2）では、晩期前半から刻目凸帯文土器に至るまで多量出土している。特に晩期中葉の古窓式段階の土器群には注目すべきものがある。

朝倉町の低位段丘の最縁辺部に位置する治部ノ上遺跡（註3）では、量的にはそれ程ではないが、土壤の中から晩期後葉の良好なセットが出土している。

以上の他にも、多くの晩期遺跡が調査されているが、概して小規模のものが多い。報告書が続々と刊行されている最中であり、全体の様相を綿密に検討すべき時が近づいている。

- 註1) 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第37集」福岡県教育委員会 1995
2) 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第31集」福岡県教育委員会 1994
3) 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第32集」福岡県教育委員会 1994

III クリナラ遺跡

A 調査の概要

試掘調査の結果、谷部のみの段々畠10枚について本調査を実施することにした。重機による表土剥ぎ後の土層の状況と、試掘結果からみて、縄文時代晩期を主体とする遺跡であると判断



Fig. 5 クリナラ遺跡第1層下面全体図 (1/600)

した。更に地形的に見て、谷部への堆積状況がかなりあると想定して、上層面での造構検出作業と同時に、トレンチを入れて縄文包含層の堆積状況をさぐることにした。

地形現況 本遺跡は東北東の谷頭から西南西へ下った谷中途までの、長さ140m、幅35~20mの範囲で、標高110~95mで15mの高低差がある。南側平野部の鞍掛遺跡の造構面が標高46~47mであるので、平野部との比高差は48~64mとなる。本遺跡の南側尾根頂部付近は墓地となっており、この上に立つといくらか南方へ眺望が開ける。この部分から南へ尾根が派生して300m程延びており、この尾根上に若宮遺跡が所在する。クリナラ遺跡の谷頭部から南東側を見ると、直下に比高差30m程の深い谷部があり、この谷は平野部からまっすぐに北へ入り込んでいる。本遺跡に平野部から至る道としては、西側から入る谷もあるが、こちらは寒水の集落のある大きな谷から更に狭い支谷を遙らねばならず判かりづらい。往時としては、意外と東側の谷を北進して90mの急斜面をよじ登って本遺跡へ至ったのではないかと考えられる。

発掘区設定 遺跡の現況は、谷部の段々畑であったが、畑自体は細かくは10枚に分かれているが、表土剥ぎの結果、第1層上面（黒色土包含層上面）で全体が6段の面となつたため、北東の谷頭部をI区とし、以下南西へ向けてVI区までを設定した。I区北東端には旧溜池跡があり、これら段々畑への水やりに用いられたものであろう。また、Fig. 5に見る如く、III区とIV区の境の段が2m程と高く、IV区の北東側に第1層の堆積がみられず、造構の稀薄な部分が認められる。このことから、本遺跡は大きく2分されるが、この段が古墳時代以降の畑の開墾により大きく削り込まれたことがわかる。ただ、IV~VI区には後述する如く谷筋に直交する小溝群で構成される「畑状造構」が発見されたのに対し、I~III区ではそれが認められない事は、すでに縄文時代から地形的にその境部で大きな段差があったことも考えられる。

基本層序 遺跡の谷への堆積土の状況を確認するために、I区とV区に谷筋に直交するように各々トレンチを設定し掘り下げた。想定していた通りに、谷筋中心からほぼ左右対称にレンズ状堆積が認められ、更に、谷下方へと堆積は厚くなっていた。Fig. 6に見る如く、表土を除去した後の黒色土を第1層とした。この層には縄文晩期～弥生・古墳～奈良末までの遺物を多く含んでいた。ただし量的には圧倒的に縄文晩期黒川式期の遺物が多い。第2層は上半の暗黄褐色土(a)、下半の黄褐色土(b)に分けられ、2a層が縄文晩期遺物の包含層となっている。2b層はやや砂質で、この上半には遺物が僅かに含まれるが、層位的に更に2b層内を分層することは不可能である。第3層は紫褐色土層で60~80cmと厚く堆積している。第4層は黄茶褐色粘質土、第5層は暗褐色土、第6層は真砂土の二次堆積土、第7層が花崗岩培乱土の地山となっている。各トレンチとも、中央付近では各層の堆積が厚いため、最下層まで掘り下げることは出来なかった。造構は第1層の下面、即ち第2a層の上面で縄文晩期の小ピット群、畑状造構の小溝群、古墳時代堅穴住居跡等が検出された。さらに下の第2b層上面では、Fig. 18に示したように、縄文晩期の堅穴住居跡・土壤・堆壘・集石遺構・小ピット群等が検出された。

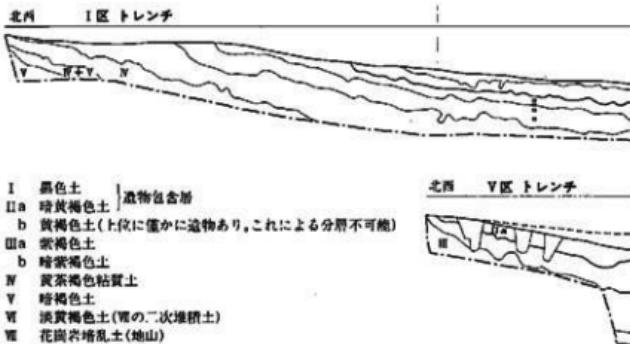
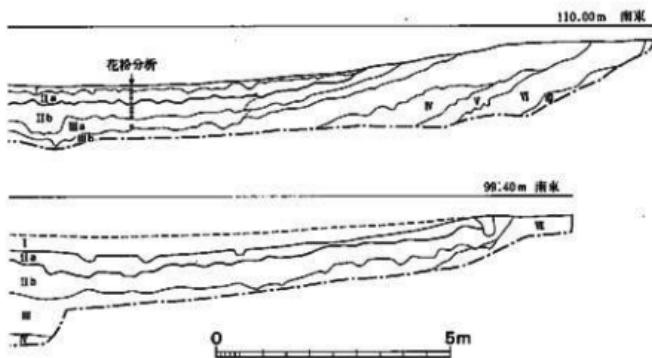


Fig. 6 クリナラ遺跡基本土層実測図 (1/120)

よって、この2面が造構面となっており、層位的に手掘りしたので、かなり厳密に分層できたと思う。これにより、第1層での遺物出土状況は各時代のものが混在していたので、遺物は各区毎に一括して取り上げ、第2a層では縄文晚期単純と確信したので、各遺物は1/20実測図に位置と高さを記録して「第2層 No.○○」として取り上げた。(出土ドット状況はFig.19参照)また、ピット番号は、P423までが第1層下面のもので、それ以降の番号は第2a層下面検出ピットのものである。

造構の概要 本遺跡で検出した造構は下記のとおりである。時代順に包含層出土品も記す。

旧石器時代後期	ナイフ形石器等僅か
縄文時代後期	包含層から土器少量
縄文時代晚期	堅穴住居跡 7軒 土 壤 2基 埋 瓶 1基 集石造構 2基 畝状造構 小溝25条 小ピット 数多
弥生時代中～後期	包含層から土器少量
古墳時代後期	堅穴住居跡 2軒
奈良時代	包含層から土器僅か
平安時代以降	土 壤 1基 現代の畝に伴う溝等



B 弥生～歴史時代の遺構と遺物

1 堪穴住居跡

第1号堪穴住居跡 (Fig. 7, PL. 5)

遺跡の南西最端に位置する方形住居である。4.04×4.2mのほぼ正方形プランをなし、約17m²の面積となる。煙道の付くカマドを北西壁中央に持つ。4主柱穴構造で、柱痕も明確であった。柱間心々距離は、25cm尺として南東辺と北東辺が7尺、南西辺が7.2尺、北西辺が8尺となる。カマド前面の柱間が広くなっている。床面までの深さは北東側で60cm、南西側で24cmとなる。柱穴は深く床面から80cm程もある。柱痕の直径14~18cmで、平均的な太さかと思われる。床面は全体に貼床が20cm以上厚く敷かれており、その下層は中央部と南西側とに掘り込みが認められる。西隅の住居壁外側に半円形で深さ20cm程の掘り込みがみられ、入口部の段階状施設かとも考えられる。この住居は焼失家屋で、北東壁寄りにて検出された厚さ1cm程の板状炭化材をはじめ、床面上に多くの炭化材片・焼土等がみられた。また、中央西寄りの床面上には、長さ60~30cmの大小の花崗岩塊石が残っており、いずれも上面は焼けてやや赤変している。作業台石として置かれていたものであろう。土器類はカマド内とその西側付近に土師器壺・竈類が集中して出土した。

カマド (Fig. 8, PL. 6)

長いトンネル状煙道を持つ、遺存状態良好なカマドである。両袖前半側に花崗岩をしっかりと埋め込んで立て、壁側の袖部には施肥を混入した土を用いている。カマド内部中央には、方柱

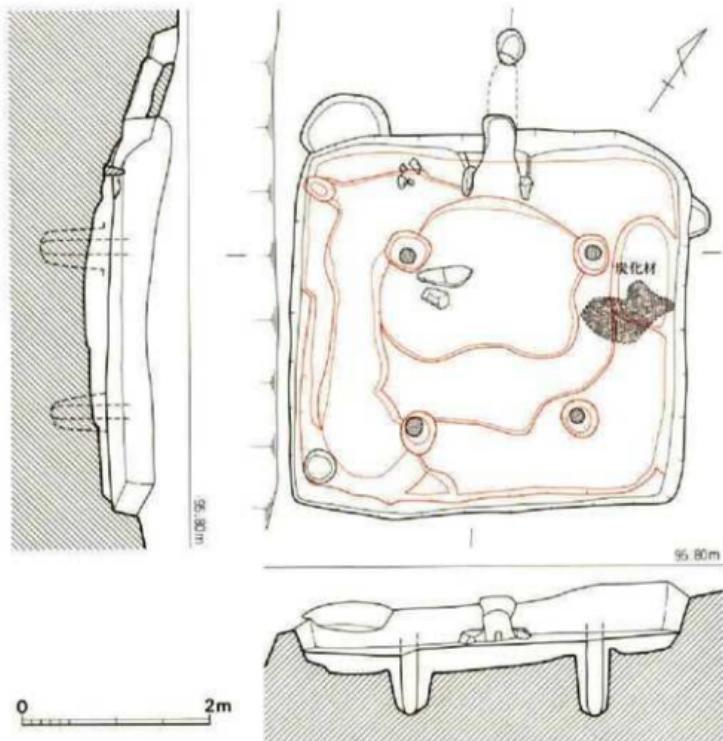


Fig. 7 第1号住居跡実測図 (1/60)

状の花崗岩支脚をしっかりと立てている。この上に土師器小壺を2重にかぶせて支脚を補強している。煙道は斜面に沿ったような角度で傾斜して登っており、煙出し部で上方に口を開けている。トンネル部の最大幅30cm、下端での長さ110cmとなる。

出土遺物 (Fig. 9, PL. 27)

杯蓋 (1) 復原口径13cmとなる須恵器で、床面下からの出土品である。天井外面は回転ヘラ削り、他は内外とも回転ナデ調整。胎土に僅かに粗砂粒を含むが大旨精良で、焼成堅緻で外面は濃灰色、内面は淡灰色をなす。

小壺 (2~4) 2はカマド内支脚にかぶせられていたもので、口径14cm、器高15.2cmとなる。丸く胴が張り、頭部内面にはしっかりした稜を持つ。胴部内面はヘラ削り、外面は継ハケを施

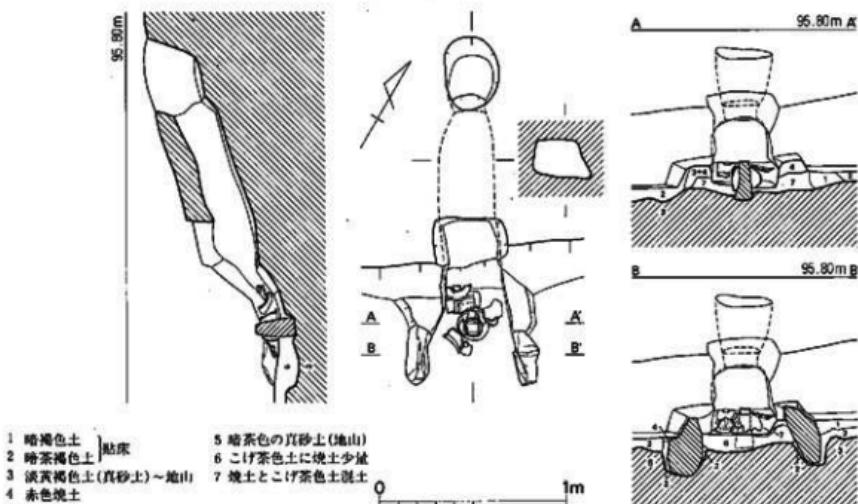


Fig. 8 第1号住居跡カマド実測図 (1/30)

す。胎土に細砂粒をやや多めに含み、焼成良好で内面は茶褐～褐色、外面は橙～黄褐色をなす。

3は、カマド支脚の上に2重にかぶせてあった外側のものである。口径14.8cm、器高17cm弱となる土師器である。2とは趣きを異にし、頭部内面に稜をつくらない。胴部内面はヘラ削り上げ、外面は緩～斜めのハケを施す。細砂粒を多く含み、焼成良好で橙褐色をなす。4は床面下出土のもので、胴部内面はヘラ削りであろう。細砂粒を僅かに含み、焼成良好で内面は暗茶色、外面は茶褐色をなす。

5(5～8)はカマド内出土品で、やや肥厚して外傾する程度の口縁を持つ。内面屈折部以下は不定方向のヘラ削り、外面は粗いハケ調整を施す。細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は淡黄褐～茶褐色をなす。6は床面下出土品で、横に偏平気味の把手部分で、器壁に貼り付けるタイプである。強い指頭ナデで調整されており、小ぶりの器種に付くと思われる。粗砂粒をかなり含み、焼成良好で淡橙褐色をなす。7はカマド外左側床面出土品で、復原口径24cmで、胴部内面にヘラ削り、外面には緩ハケを施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は黄褐～褐色、外面は淡黄褐～暗褐色をなす。8はカマド内出土品で、底径12.8cmとなる。胴部中位には挿入式の把手剝離痕がみられ、胴部内面はヘラ削り上げ、外面は緩ハケを施す。胎土に細砂粒をやや多めに含み、焼成良好で内外面とも淡褐～暗褐色をなす。

以上の第1号住居跡出土土器のうち、1は6C後半代の特徴を示し、2と3は重ねて使用さ

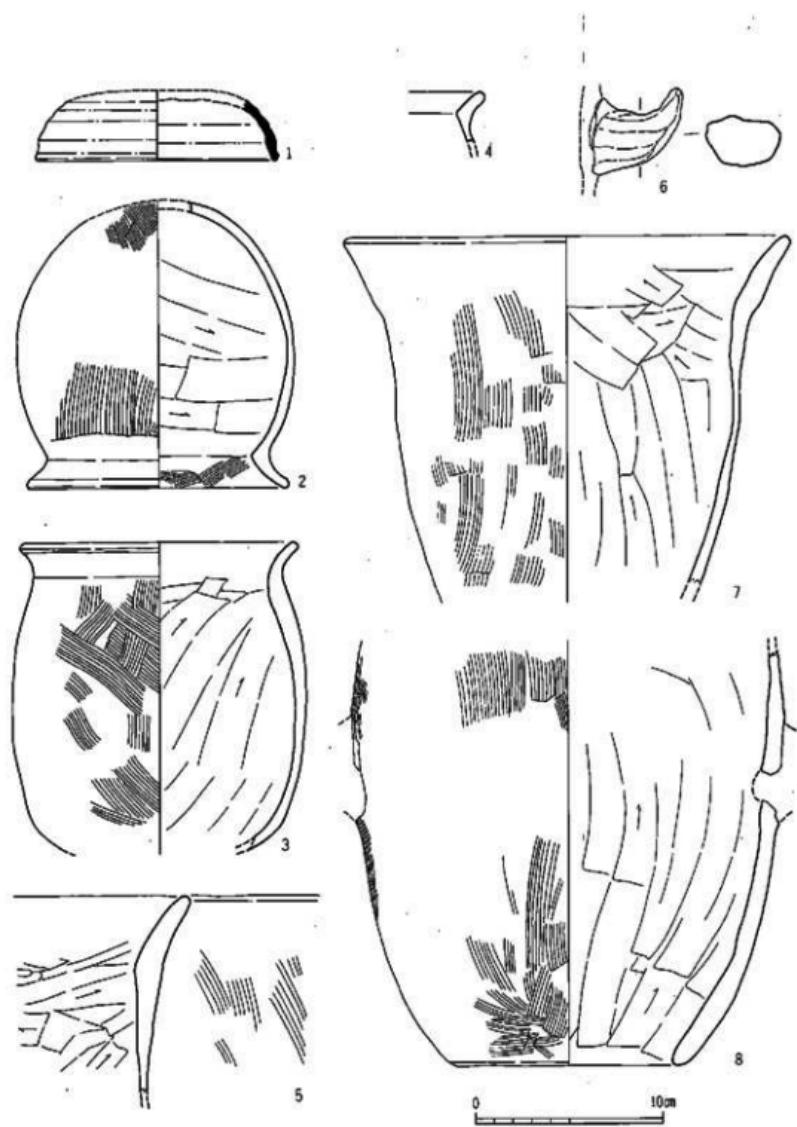


Fig. 9 第1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

れた同時性が確かであるにも関わらず、器形が異なるという判断に苦しむ状況をみせている。土師器櫃については、各々ほぼ同類と思われ、6C代のものとしてよからう。以上のことからこの第1号住居跡は6C後葉の所産と見ておきたい。

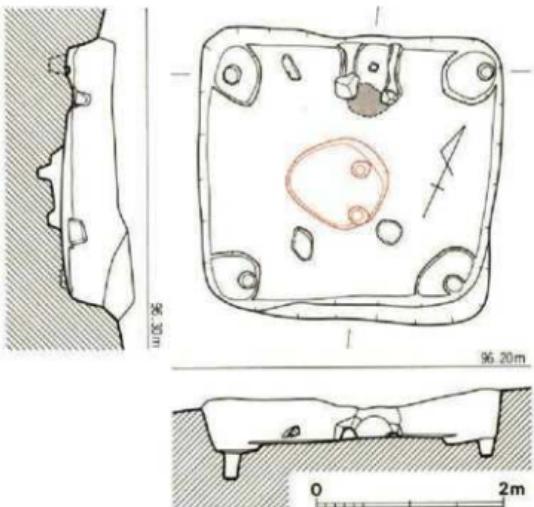


Fig.10 第2号住居跡実測図（1/60）

第2号竪穴住居跡

(Fig. 10, PL. 7)

遺跡の最南西端の第1号竪穴住居跡から3m離れた隣に位置する小型方形住居である。この住居

も第1号住居同様、谷筋中央部に位置しており、極めて特異な占地を示している。というのも、発掘調査中に雨が降る度に、谷筋を流れ下る水でまたたく間に冠水し、翌朝には土砂で住居内は半分以上埋まっていたという経験をしたからである。山間部の谷陰にひそむように建てられた古墳時代住居というだけで、極めて稀例である上に、位置が全く非合理的な場所である。これは、雨の少ない季節だけの極めて短期間の居住地と考えざるを得ず、この地方の天気からみると、秋の数ヶ月間にのみ使用されたものと考えられる。これらの事から、秋の狩猟地のキャンプ的な性格にしかならないと判断できる。

第2号住居跡は、床面が $2.7 \times 3\text{ m}$ 、面積 8.1 m^2 の小型類横長的プランのものである。四隅は丸味を持っており、第1号住居跡とは異り、意識的なものと考えられる。4主柱穴構造であるが、珍しいことに四隅際に設けられており、小型住居故の特例なのであろう。柱穴間心々距離は 25 cm として北辺が11尺、東辺と南辺が9尺、西辺が8.5尺強となる。カマド側の柱穴間が広くなっているのは第1号住居跡と同様である。床面南寄りに扁平な灰白色と、青灰色の凝灰岩質の大きな石が2個置かれており、表面はいずれもツルツルして、一部に焼けて赤変部がみられる。いずれも作業台石として用いられたものであろう。また、カマドの西側には長さ 30 cm の花崗岩が発見されたが、これはカマド構築石材と思われる。床面中央には梢円形の掘り込みがみられ、貼床構造を意図したものであろう。なお、この掘り込み中に、カマド中心から延び

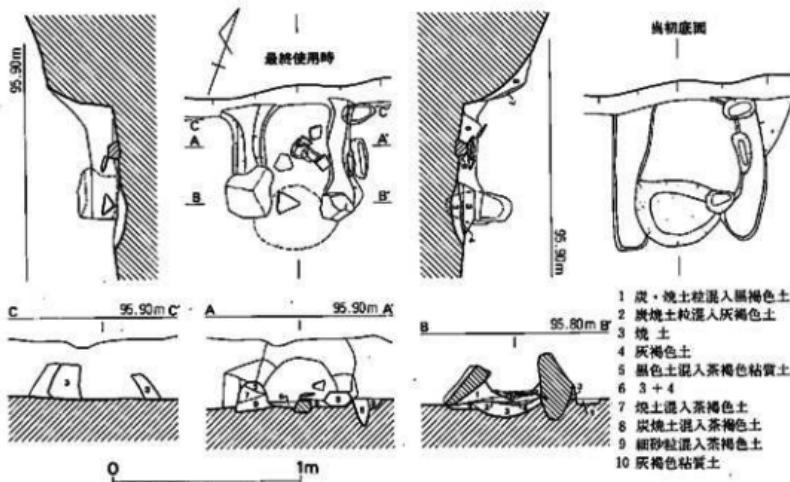


Fig.11 第2号住居跡カマド実測図 (1/30)

る主軸線上に2個の小ピットが掘り込まれていたが、これは貼床下のものである事からして、上屋架構の際に、屋根の中心を支えた板の支柱であった事が考えられる。

カマド (Fig.11, PL. 8)

住居北壁のやや東寄りの位置にずらして設けられている。最終使用時のものとは規模もやや大きく、位置も東へややずれた当初時のカマドも検出できた。火床面も明らかに2層に重なっており、作り換えは明らかである。当初のものは、右袖に石材抜き取り痕がみられ、袖全体に石材を用いていたと思われる。これに対して、最終使用時のものは、両袖最前面だけに花崗岩を立てており、これから壁までの間は焼土が混入した土を積み上げている。また、カマド内中央には、土製の方柱状であるが14cmと低い支脚が掘えられていた。更に、煙道は精査したが検出できなかった。第1号住居跡のカマドと似てはいるが、相違点も上述のように多い。

出土遺物 (Fig.12)

土器器窓 (1~4) いずれも小ぶり類で、1・2は所謂小壺類としていいかもしれない。1は胎土に粗砂粒をかなり含み、内外ともに著しく磨滅して調整不明。焼成やや不良で内外ともに淡黄褐色をなす。肥厚せずに外方へ開く口縁となる。2は、頸部内面に稜をつくり、以下はヘラ削りを施す。粗砂幾らか含み、焼成良好で明褐色をなす。3はカマド内出土品で、復原口径16.6cmとなり、胴の張る器形である。内面のしっかりした稜の下は横位ヘラ削りを施す。焼成良好で橙黄色をなす。4はやや凸レンズ的平底窓となる類で、内外とも磨滅している。粗石

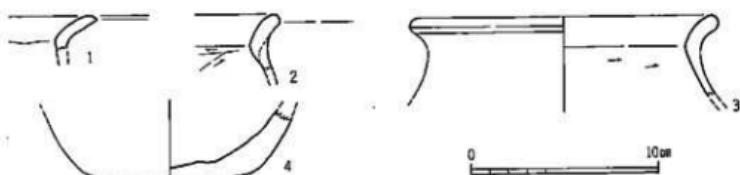


Fig.12 第2号住居跡出土土器実測図(1/3)

英粒、雲母片を多く含み、焼成良好で内面は橙褐色、外面は橙黄褐色をなす。

以上の出土土器は、古墳時代後期の特徴を良く示しており、住居跡自体の年代は、第1号住居跡と同様の6C後半と見てよかろう。

2 土 壤

第1号土壙 (Fig.13, PL.24)

V区の北西端の、第1層黒色土の範囲外にて検出された性格不明の焼土壙である。上段が浅い二段掘りになっており、長軸が等高線と直交するように掘り込まれている。長さ207cm、幅87cmの不整長方形掘り込みが2~8cm程掘られ、その中央に83×40cm、深さ18cmの長方形掘り込みがみられる。この中央壙の壁上半部は黄色にガチガチに焼けており、更にその周辺から北東側一段目底面全体に渡って赤茶色に焼けている。この中の埋土は断面図に見る通り、中央壙の殆どに消し炭状の炭がつまっており、火を使う施設であったことは明白である。

注目すべきは、この長軸中心線上に、中央壙底面に6個、北東側上段面に1個の、直径3~5cmの小さな杭打ち込み痕が並ぶということである。図面上で見ると陥し穴状にも見えるが、規模や、時代等から明らかに否定できる。焼く前にこの上に何らかの構造物があり、それを支えていたものなのか、或は、何かを焼く為に、それを浮かせて火のまわりを良くする為に杭で支えたものなのか、結論は出てこない。

また、この造構から西南方の谷中心方向へ下がって続く溝(P265としたもの)も、この土壙と有機的に関連するものと考えられる。6.6m延びており、第1層下面の烟状造構と考えられる溝を明らかに切っている。

時期的には、まず、この土壙自体が第2b層を掘り込んでいることや、上記の烟状造構を切っている事から、繩文晚期よりは新しい事がわかる。次に位置的にみて、この段々烟状の造成がかなり行われた後に作られていること。更に埋土から見て、第1・2号竪穴住居跡等のものとは全く違って、新しい土であること。土器小片が少量出土しているが繩文ではなさそうであることなどが指摘できる。

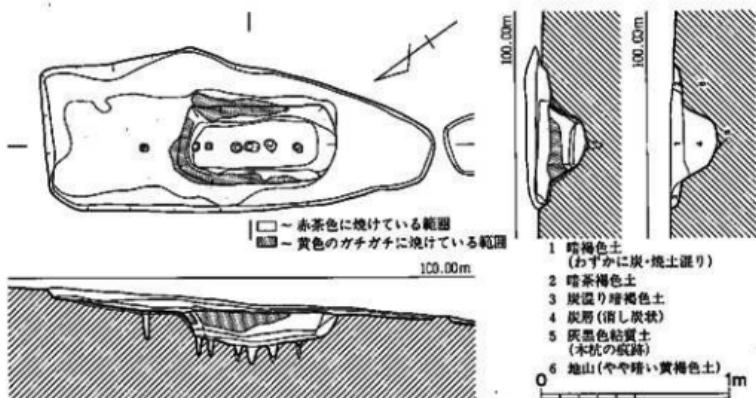


Fig. 13 土壌実測図 (1/30)

ここで、日本アイソトープ協会に依頼したC14年代測定結果を参考にしてみよう。詳細については、別項に掲げるので、ここでは結果だけを見てみよう。 970 ± 75 yB.P. の測定結果が出ており、西暦に直すと、AD905~1055年となる。つまり平安時代中~後半となり、この時代の可能性も考えられる。ただし、他の測定例では古く結果が出ている傾向があるので、もっと新しくなる可能性もある。いずれにしろ、平安中~鎌倉期の所産ではないかと考えておく。

遺構の性格については、一見して、火葬土壙や炭焼窯説が考えられるが、焼骨の1点の出土も無い事や、底面の杭痕跡などから、この両説を簡単に支持する訳にはいかない。類例の増加を使って判断したいと思う。

3 包含層等出土遺物

ここでは、各区第1層出土品を中心とした赤生土器・土師器・須恵器・鉄器等についてまとめて報告しておきたい。

赤生土器 (Fig. 14・15)

壺 (1~15・26~31・34・35) 1は、VI区1層出土品で、口径35cmで、丸く外反した口唇部に刻目を施す。頸部下の沈線は深めでしっかりしている。内外磨滅しており、粗・細砂粒が多く含み、角閃石が目立つ。焼成良好で外面は煤が付着して黒茶褐色、内面は黄茶褐色をなす。2は、I区第1層出土品で、胴部内外面はナデている。粗砂僅か含み、焼成不良で内外面ともに淡黄褐色をなす。3はI区第2上層出土品で、粗・細砂かなり含み、焼成やや不良で内外面と

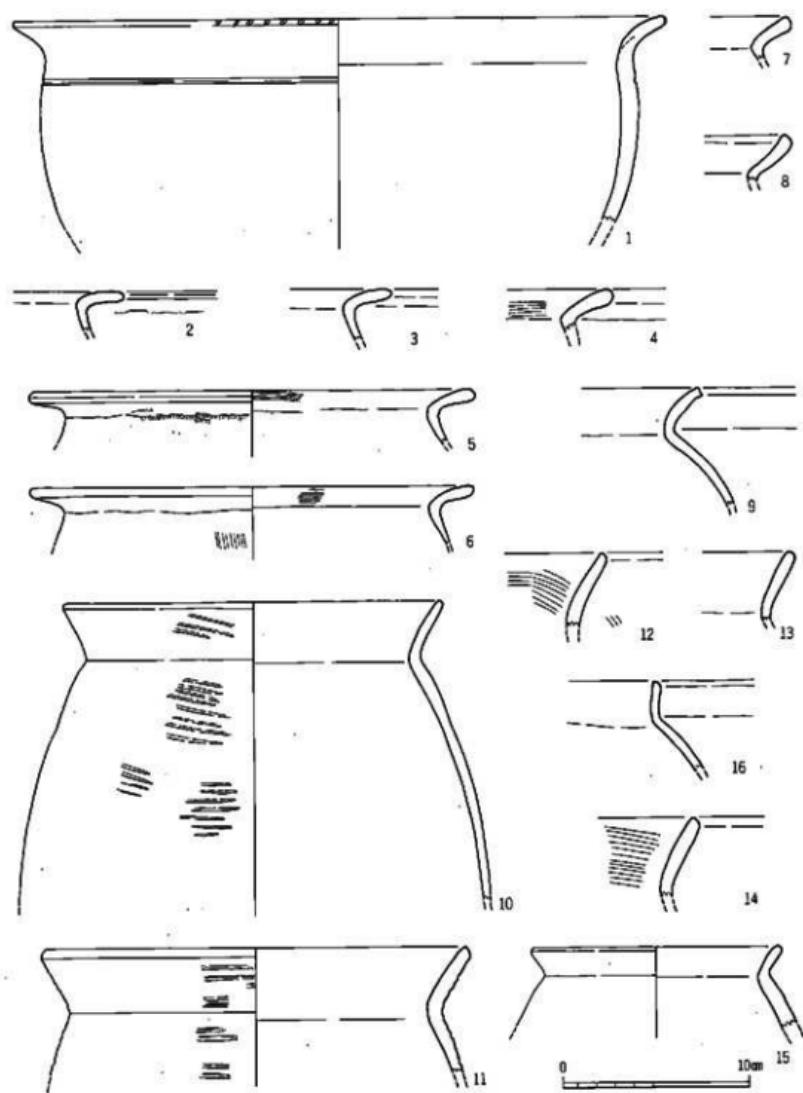


Fig.14 第1層出土弥生土器実測図（その1）(1/3)

もに淡黄白色をなす。全面磨滅。4はI区第1層出土品で、口縁内面に粗い横ハケを残し、胎土に粗砂僅か、細砂幾らか含む。焼成やや良好で淡黄褐色をなす。口縁内面一部に赤色スリップが残る。5は、I区第2上層出土品で、口径24cm、口縁内面に横ハケを残す。胴部内面は横ナデ、外面は継ハケ後ナデしている。粗砂僅かに含み、焼成不良で内外面ともに淡黄褐色をなす。口唇周辺に赤色スリップがかかる。7は、III区第1層出土品で、胎土に細砂粒を僅かに含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は白黄褐色をなす。8はI区第1層出土品で、細砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内面は淡茶褐色、外面は肌色をなす。9は、IV区第1層出土品で、強い胴張りを見せる。内外面ともに磨滅しており、粗・細砂粒をかなり含む。10は、口径20.4cmの長胴となる類で、P533出土品。外面にかなり細身の横位敲きを施し、胴部内面はナデかと思われる。粗砂粒を多く含み、焼成不良で内外面ともに暗黄灰色をなす。11は、VI区第1層出土品で、口径23cm。外面にやや粗い横位敲きを施し、内面は丁寧にナデしている。粗砂多く含み、焼成やや不良で内面は淡緑灰色、外面は暗黄～緑灰色をなす。12は、I区第1層出土品で、内面に粗いハケ、外面はハケをナデ消している。細砂粒をいくらか含み、焼成良好で内外面ともに明るい肌色をなす。13は、第2層No.684として取り上げたもので、上層からの小ピット掘り込み等による混入品であろう。内面は丁寧なナデで、外面もナデか。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内外面ともに淡橙色をなす。14は、I区第1層出土品で、内面は粗い横ハケ、外面はナデでいる。細砂粒を僅かに含み、焼成良好で明黄褐色をなす。15は、III区第1層出土品で、口径13.4cmの小型類。内外面ともにナデしており、外面には凹凸がある。粗砂多く含み、焼成やや良好で暗黄茶色をなす。26は、III区第1層出土品で、底径8cmの僅かに上げ底状となる類。外面に継ハケを施し、内面はナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面は白褐色、外面は黄赤色をなす。27は、I区第2上層出土品で、外面に継ハケを施し、内面は横ナデ。粗・細砂かなり含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は淡黄褐色をなす。28は、III区第1層出土品で、底径6.7cmの僅かに凸レンズ状となる類。内外面ナデで、内面には指頭圧痕がある。粗・細砂多く含み、焼成良好で内面は褐色、外面は褐～淡橙色をなす。29は、VI区第1層出土品で、内面は丁寧なナデ、外面は磨滅。粗砂かなり含み、焼成良好で内面下半は黒褐色、上半は黄茶褐色をなす。外面は暗褐～黄褐色をなし、底外面中央が上げ底状となる類。30は、底径9cmでI区第2上層出土品。外面は継ハケ、内面はナデ。焼成良好で内面は淡褐色、外面は淡黄褐色をなす。31は、II区中央部出土品で僅かに凸レンズ状になるタイプ。粗砂粒を極めて多く含み、焼成良好で内面は淡橙色、外面は淡櫻灰色をなす。内面はナデ、外面は磨滅。底外面中央が僅かに窪み、粗・細砂を多く含む。焼成良好で内面黄橙褐色、外面橙褐色をなす。35は、IV区第1層出土品で、稜線のシャープな凸レンズ状類。内面はナデ、体部～底外面は難なナデを施す。底径9.4cmで、粗砂多く含み、焼成やや不良で内面は茶褐色、外面は暗黄～黒色。

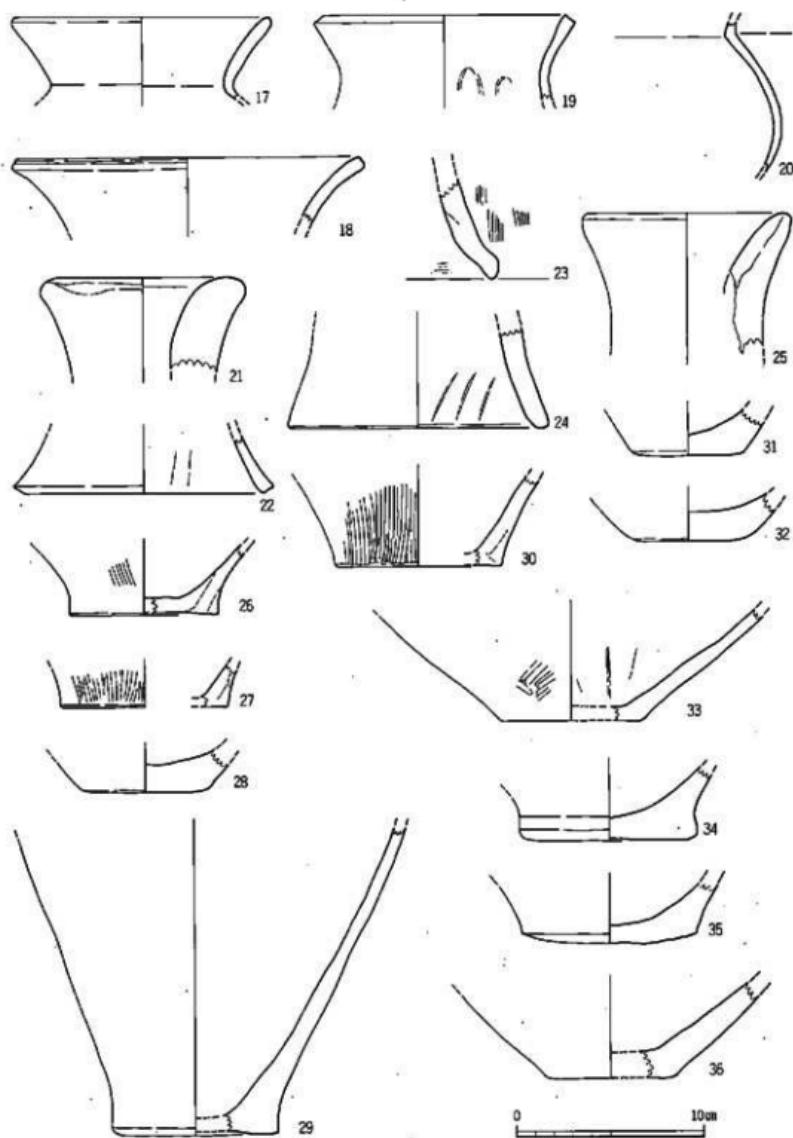


Fig.15 第1層出土赤生土器実測図（その2）(1/3)

壺（16～20・32・33・36）16は、I区第1層出土品で、短頸の直口壺。頸部内面は強い横位指ナデ、他の内外面はナデ。細砂幾らか含み、焼成不良で暗黄茶色をなす。17は、V区第1層出土品で、口径14cm。内外面ともに磨滅して、粗・細砂を多く含む。焼成不良で黄褐色～灰緑色をなす。18は、V区第1層出土品で、口径18.4cmの開口壺。口唇端に沈線を入れ、外面はナデ、内面は磨滅。粗砂多く含み、焼成良好で橙褐色をなす。19は、IV区第1層出土品で、口径14cmで、口唇部がへこむ。細砂粒をやや多めに含み、内外面ともにナデ調整。焼成良好で褐色。20は、IV区第1層出土品で、内外磨滅。細砂多く含み、焼成良好で内面は褐色。外面は黄褐色をなす。32は、V区第1層出土品で、僅かに凸レンズ状となる頬。内外面ナデ。粗・細砂多く含み、焼成良好で内面は褐色。外面は淡黄褐色をなす。33は、IV区第1層出土品で、底径7.4cmとなる。外面にヘラ磨きが残り、内面は雑なナデ。細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面暗茶褐色。外面は暗灰褐色をなす。36は、II区第1層出土品で、底径7cm。内外面ナデで、粗砂多く含み、焼成良好で内面淡黄褐色。外面淡橙褐色をなす。

器台（21～25）21は、II区第1層中央部出土品で、器壁が2.6cmもある部厚い例。内外面ナデしており、粗・細砂多く含み、焼成良好で暗灰茶褐色をなす。22は、IV区第1層出土品で、内外面ともナデのわりと精製品。細砂やや多く含み、焼成良好で褐色をなす。23は、P33出土品で、外面に粗いハケを残す。内面はやや凹凸多く、粗砂幾らか。細砂多く含み、焼成良好で暗黄茶褐色をなす。24は、P64出土品で、外面は丁寧なナデ。内面下半は横位ヘラ削りの上をナデ、下半は丁寧なナデ。粗石英粒多く含み、焼成良好で淡黄灰茶色をなす。25は、I区第1層出土品で上端径11.2cm。内外面ともナデしており、外面は凹凸かなりあり手捏ね的。細砂多く含み焼成良好で内面橙褐色。外面は暗褐色。

以上の弥生時代土器のうち、1は前期末、2～6・18・19・22・26・27・29・33・34・36は中期末、7～9・16・17・20は後期初頭、15・28・31・32・35は後期中葉、10～14・21・23～25は後期末の所産である。以上のように細々とではあるが、弥生期の遺物が散見できるということは、この地に狩猟・採集を目的としたような臨時的キャンプが設けられたこともあったことを示している。日常生活土器が殆どであることからも、特殊な目的ではなかったろうと思われる。

古墳時代以降の土器 (Fig. 16)

土師器壺（1・4）1は、V区第1層出土品で、口径15.6cmとなり、頸部の凸帯が剥げている。全面磨滅しており、粗細砂かなり含む。焼成やや良好で橙褐色をなす。4は、V区第1層出土品で、口径14cm。内外面磨滅著しく、粗・細砂多く含む。焼成不良で内面は淡青灰褐色。外面は淡青灰～灰黒色をなす。

土師器壺（2・3・6）2はV区第1層出土品で、胎土精良の薄手精製品。内面稜から下がっ

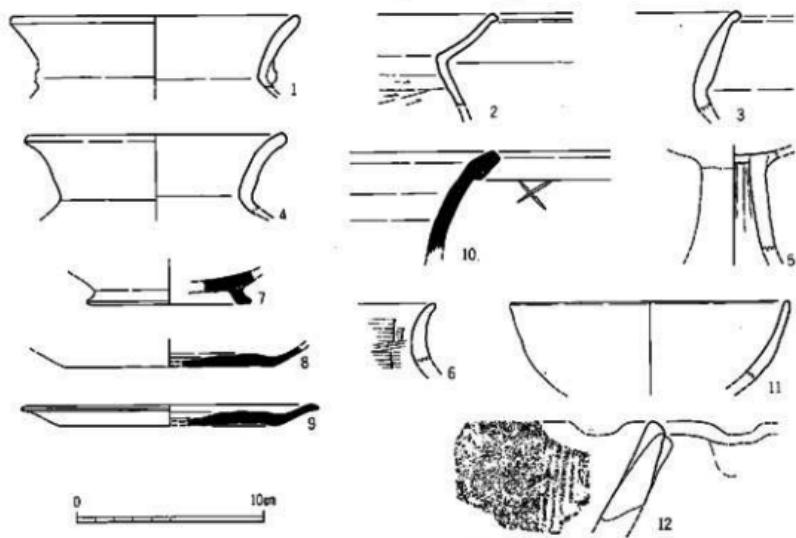


Fig.16 第1層出土古墳・歴史時代土器実測図（1/3）

た位置から下が横位ヘラ割り。他は内外面とも横ナデ。焼成やや良好で内外面とも淡黄褐色をなす。3はV区第1層出土品で、口縁外面下半で中ぶくらみする類。全体に作り粗く、粗砂かなり含み、焼成不良で内面は茶褐色、外面は暗褐色をなす。6はP97出土品で、内面に横ハケを残し、外面は横ナデを施す小壺。焼成良好で内面は黄茶色、外面は橙茶色をなす。粗砂僅かに含む。

土師器高杯（5）IV区第1層出土品で、内外面ともに磨滅しているが、内面にシボリ痕が残り、胎土精良。焼成やや良好で脚外面は暗灰褐色、脚内面は暗褐色、杯部内面は棕褐色をなす。須恵器杯（7）IV区第1層出土品で、外方に踏ん張った高台を付ける。内外面回転ナデで、焼成堅緻で淡灰色をなす。

須恵器皿（8・9）いずれもV区第1層出土品で扁平な中型類。8は、胎土精良で焼成やや軟質で淡灰色をなす。9は底内面中央のみナデツケ、外面は雑な回転ヘラ切りのまま。胎土精良で生焼け気味。体部外面は濃灰色。他面は灰白色をなす。

須恵器壺（10）IV区第1層出土品で、内外面とも回転ナデ。外面にはヘラ記号がみられ、石英・黒色粒をいくらか含み、焼成堅緻で内面は灰褐色、外面は黒色をなす。

黒色土器（11）V区第1層出土品であるが、当初、縄文晩期単純マリ形土器とも考えたが、焼

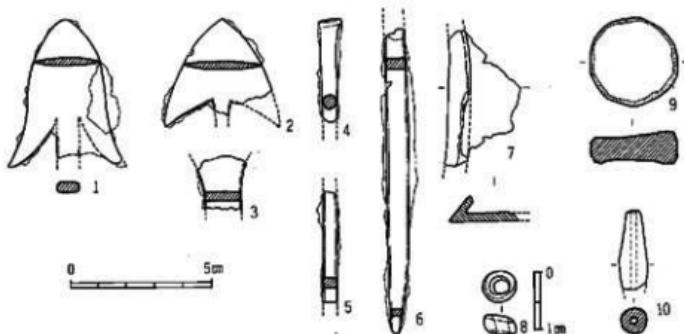


Fig.17 第1層出土鉄器・玉・土製品実測図（1/2, 8のみ実大）

成が一見瓦器的にも見えたため、ここで報告しておく。口径15cmで内外面横ヘラ磨きかと思われ、外面にはやや凹凸がある。胎土精良で焼成や良好。内外面ともに灰黒～黄褐色をなす。摺鉢（12）VI区第2層出土品で、極めて磨滅している。片口が付き、5条の摺目が認められる。細砂粒をかなり含み、焼成は完全に土師質で、内外面ともに灰黄褐色をなす。

以上の土器類のうち、1は庄内新併行期、2～5は布留古～中段階、6は6C後葉前後かと思われる。7・10は7C後葉、8・9は8C末～9C初頭、11は10C代、12は中世まで降るであろう。以上のように各時代にわたって、この地に足跡が残されている。6C後半には竪穴住居が営まれているが、それも間違いなく特殊目的のものであり、他の時代の痕跡についても定住地ではなく、山間地の一時的な仮小屋的な存在を暗示しているのであろう。

鉄器・土製品・玉 (Fig.17, PL.27)

鉄鎌（1～6）1～4はVI区第1層出土品で、1は脇挟りの大きな平根類である。幅4.2cm、現存長5.2cm、重さ17.3g。2は復原幅4.1cm、現存長3.8cm、重さ7.1gとなる。3は広根鎌かと思われ、現存重量3.2g。4は頭部上面が丸く、断面も丸いため、鉄釘類かと思われる。長さ3.7cm、頭部径8mm、重さ3.2gとなる。5はV区1層出土品で、現存長3.9cm、幅4.5mm、厚さ3.5mmとなる。6はP134出土品で、細根鎌かと思われるが、断面が下まで長方形であり、他の工具類の可能性もある。現存長10.7cm、重さ17.1g。

鉄歯先（7）P37出土品で、鋸がひどいが、小ぶりの歯先かと思われる。折り曲げ部が短く、現存長4.8cm、幅2.5cm、重さ13.3gとなる。同じ穴から黒色土器小片が出土しており、平安期のものであろう。

小玉（8）ガラス製でIV区第1層出土品。黄白色をしているが、本来透明なものであろう。直

径5.5mm、厚さ3~2.5mm、孔径2.5mm、重さ0.1g。時期不明。

円形土器片（9）IV区第1層出土品で、弥生の底部片かと思われる土器片の周囲を磨って所謂メンコ形に仕上げたもの。土器そのものは細砂多く含み、焼成良好で内面が黄灰色、外面は茶色をなす。直径3.1cm、厚さ1.1~0.8cm、重さ9.2gとなる。内外面とも磨滅している。

土鏡（10）III区表土排土中出土品で、筋鉢形をした小型類。胎土精良で茶褐色をなし、現存長2.7cm、最大径1cm、孔径2mm、重さ3g。西隣の天國遺跡出土品と類似しており、平安末~鎌倉期の時期が参考になろう。

銅鏡（PL.27）表採品として「照寧元寶」1枚が採集されている。北宋神宗の1068年初鋤とされ、上述してきた最新段階の遺物と符合するものであろう。

C 繩文時代の遺構と遺物

本遺跡の第1層とした黒色土層から出土した遺物の大半は、繩文晩期の黒川式期のものであったが、前章で報告した如く、I区やV区を中心に弥生~歴史時代のものが僅かに混入していた。そのため、この層掘り下げ段階での遺物取上げの詳細な記録は意義が少ないと判断して、各区毎にまとめて取り上げた。

次の第2層においては、混入品まず無しとの推測から、出来得る限り1点毎に記録して取り上げた。特にFig.19に示したIV~VI区の第2層出土品はすべてドットに落としてみた。その結果、図に見る如く、遺物の集中部分が第2層下面（正確には第2a層下面）で検出した住居跡や土壤と重なっているのがわかる。特に住3・5・7、土壤3では明確である。このことから、第2層下面で検出した各遺構は、実際には第2層のいずれかの高さから掘り込まれていた可能性が高いと言える。これは、土質の区別が極めて困難な状況であったからというのと同時に、調査者が第2層出土品のあまりの豊富さに目を奪われていたという事にもよる訳で、深く反省しなければならない。

1 竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡（Fig.20, PL.15~16）

遺跡の西南半、V区北寄りに位置する方形住居である。東側で第6号竪穴住居跡を切っている。平面形はいくらか平行四辺形的で、3.6~3.9×3.6~3.96mで、面積は約14.2m²となる。柱穴は壁沿いに並ぶ12個が主なものと考えられ、後述する第4・6号住居跡と共通する構造を持つ。床面は周囲の等高線と同様にいくらか傾斜をみせる。住居内部には2ヶ所に大きな焼土

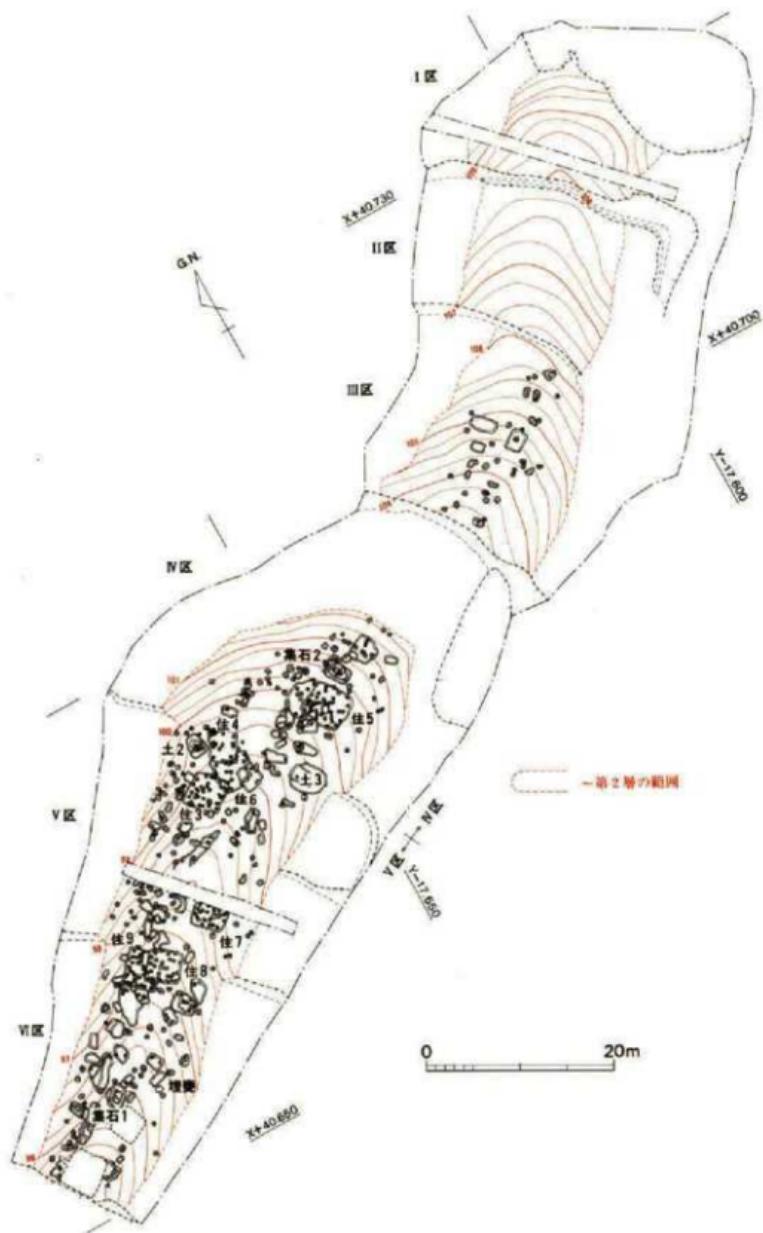


Fig.18 クリナラ遺跡第2層下面遺構全体図 (1/600)

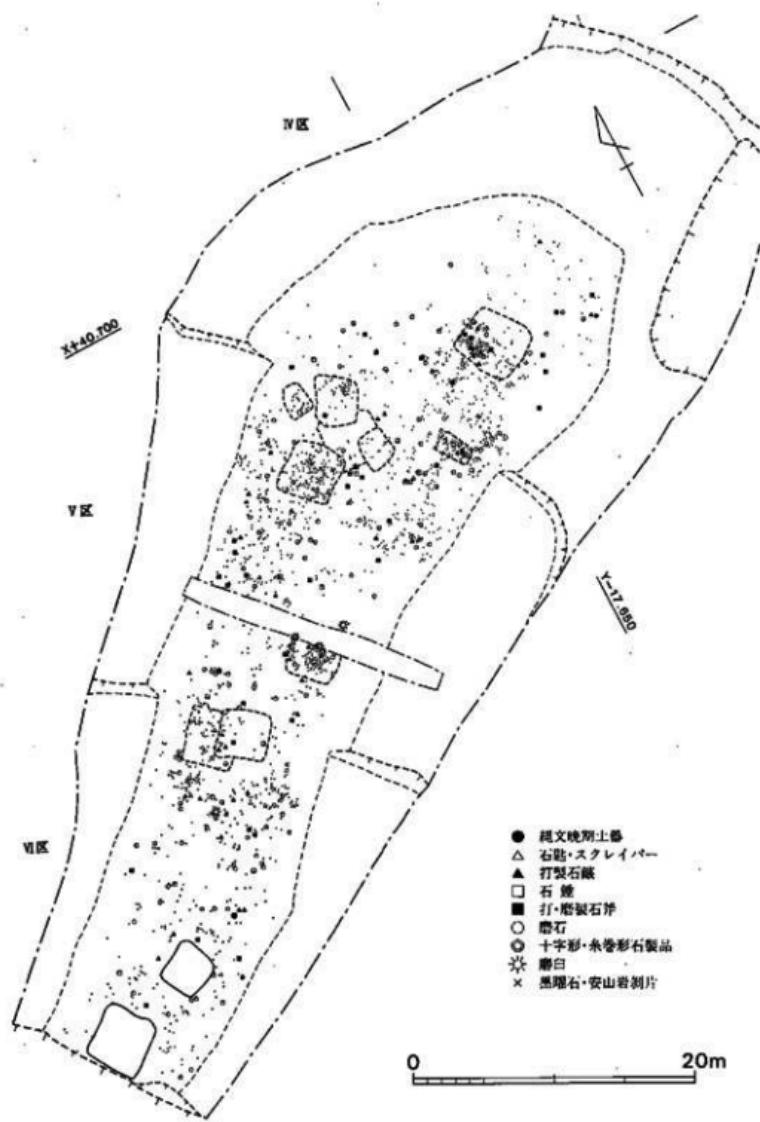


Fig.19 クリナラ遺跡第2層遺物出土状態 (1/400)

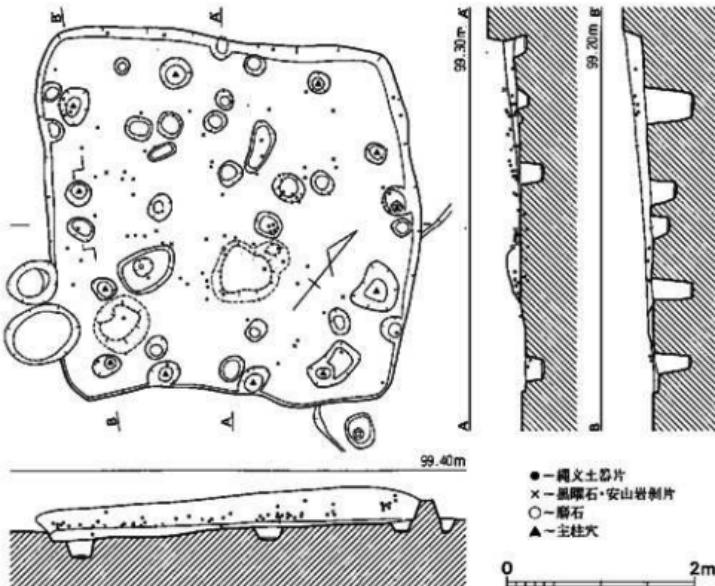


Fig.20 第3号住居跡実測図 (1/60)

部分が検出されたが、掘り込まれたという状況ではなく、正確に炉であるとは判断し難い。遺物は土器片が多く、黒曜石・安山岩の剝片もいくらか見られ、小型打製石器製作のあったことも判かる。

出土遺物 (Fig.21)

精製深鉢 (1) 断面三角形の口縁部外面に沈線2条を入れる類で、内外面ともかなり平滑であり、ヘラ磨き調整であろう。細砂多く含み、焼成やや良好で、内面は暗褐色、外面は暗茶色。
精製浅鉢 (2) 口径23cmで内面に稜を作り、外縁のふくらみは丸い。口縁内面に段を作り、全面横ヘラ磨き。内面稜直下には、強いヘラ先ナデにより凹凸がみられる。胎土精良で焼成やや不良、内面は暗褐色。外面は黒褐～暗黄褐色をなす。マリに近い器形である。

マリ (3) 内面に稜をつくり、その直上に浅い沈線を巡らす。内外面ヘラ磨きで胎土精良、焼成不良で内外面ともに黒茶褐色をなす。

粗製深鉢 (4) 口径19.4cmで、僅かに外傾して開く小ぶり類。内面は雑な横位擦過で凹凸が多く、外面は横位擦過の上をナデ。粗・細砂・金雲母を多く含み、焼成良好で茶～黒色をなす。

打製石器 (Fig. 27-30) 安山岩製歛形器で、住居内のP2出土品。長さ18mm、幅11mm、厚さ3

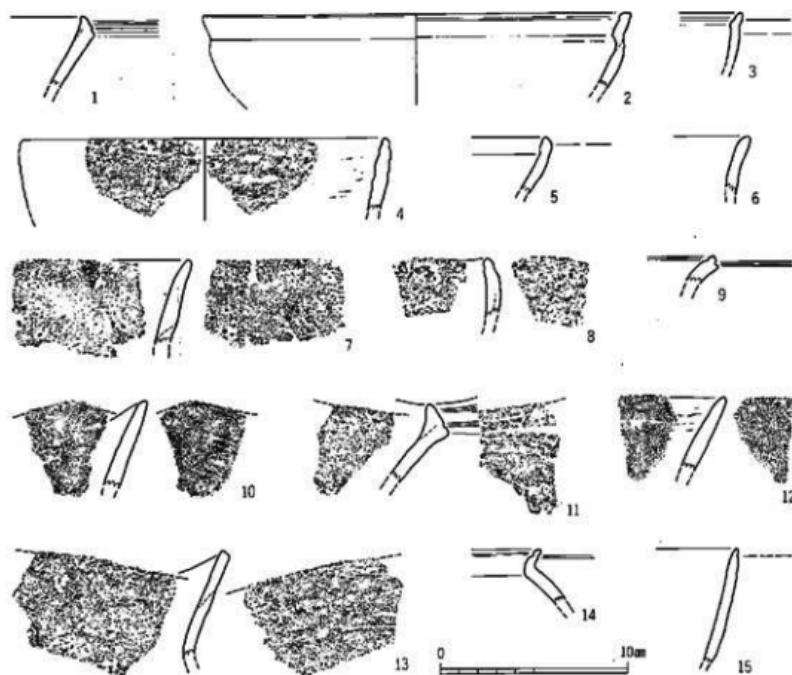


Fig.21 第3～5・7・8号住居跡出土縄文土器実測図（1/3）
(1～4:3住, 5～8:4住, 9～11:5住, 12・13:7住, 14・15:8住)

mm、重さ0.3gとなる。左脚端部欠損

使用剣片 (Fig.107-3, Fig.111-33) 3は漆黒色良質の黒曜石綫長剣片の片側刃のみ使用している。長さ30mm、幅12mm、厚さ4.5mm、重さ1.7gとなる。上端部の極状刺離等は新しいもの。33は大きな不純物を含む黒色黒曜石で、不定形剣片の両側縁を難に調整しているが、大きめの調整剣離もみられ、意識的な削器に近い。下刃も刃こぼれがあり、使用されている。打面は自然面で、長さ40mm、幅30mm、厚さ7mm、重さ7.5gとなる。

以上の出土遺物のうち、土器の1は縄文後期三万田式で、2は屈曲部外面が丸くなり、3も内面が浅い沈線状になっているなど、2・3は晩期黒川式でも新しい様相を示す。よって、当第3号住居跡は黒川新期の所産となろう。石器類も矛盾はない。

第4号堅穴住居跡 (Fig.22, PL.17)

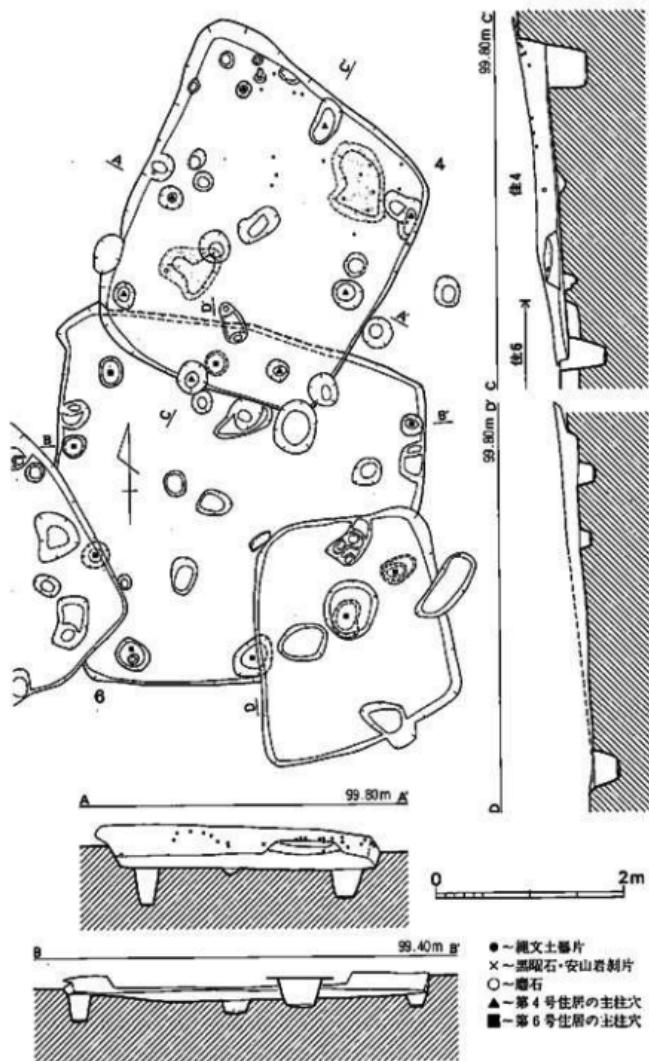


Fig.22 第4・6号住居跡実測図 (1/60)

V区の最北端で前記第3号住居跡の北隣に位置する。南側で第6号住居跡を切る。北隅が尖ったやや歪な長方形小型住居で、 $3.5 \times 2.9m$ で、面積が $10.15m^2$ となる。床面は谷中心方向へ僅かに傾斜している。主柱穴はすべて壁沿いのもので、四隅の4個と、各壁中央の4個の計8個となろう。図中C-C'ラインの2柱穴が大きく深いため、棟持ちの役目を果したと考えられる。床面には大きな焼土部が2ヶ所みられるが床面への掘り込みもなく、炉である確証はない。遺物は全体にやや浮いた状態で出土した。

出土遺物 (Fig.21)

精製深鉢 (5・6) 5は内側が丸く肥厚する口縁で、下端で更に屈曲して深鉢的器形になるかと思われる。内外磨滅しており、細砂幾らか含み、焼成不良で暗灰黄～淡褐色をなす。6は粗・細砂かなり含むが、肩で屈曲する半精製深鉢となろう。内外ともナデ調整的で、焼成不良、内外茶褐色をなす。

粗製深鉢 (7・8) 7はやや外傾気味に開く類で、内面は磨滅。外面は凹凸の多い雜な横位擦過状調整。粗・細砂多く含み、焼成不良で茶褐色をなす。8は内湾類で、内面は雜な横位擦過、外面は雜なナデで凹凸が多い。粗・細砂多く含み、雲母が目立つ。焼成良好で茶色をなす。

使用剝片 (Fig.112-41) 床面出土品で、不純物を多く含む黒曜石を用いる。単純な使用剝片であるが、直角方向の打点転移がみられる緩長状不定形剝片の最遠辺にのみ細かい丁寧な調整がみられ、エンドスクレイバー的用途が考えられる。片側縁にも刃こぼれがみられる。打面は自然面で、長さ94mm、幅26mm、厚さ4mm、重さ5.2g。

以上の出土遺物のうち、土器5は類例が少なく、時期比定が難しいが、口縁の中途半端な肥厚をみると繩文晩期黒川式の新段階のものとしてよからう。南隣の第3号住居跡と主軸方位があり、同時存在は無いかもしれないが、略近接した時期の住居と考えられる。

第5号竪穴住居跡 (Fig.23, PL.18)

遺跡の中央付近、IV区の中央に位置し、繩文期住居群では最北東端にあたる。東南隅が大きく隅丸になる方形住居跡で、 $4.6 \times 4.1m$ で面積が $18.9m^2$ となり、本遺跡では最大の繩文期住居となる。床面は幾らか中央がへこみ、中央やや西寄りに焼土の入った浅い穴があり、炉跡と考えられる。小ピットは床面全体に散在するが、明確に柱穴構造を示すものは無い。壁際にもかなり見られるが全周描っていない。或は第4号住居跡の如く、8本柱の可能性も考えられる。東辺は壁際の3柱穴、他3辺は壁から60cm程内側に並ぶ小ピットを用いると建ちそうである。

出土遺物 (Fig.21)

精製浅鉢 (9・10) 9は厚手の口縁端部の内外面に沈線を入れる類で、口縁が長めに開くものではないかと考える。磨滅しており、胎土精良で焼成不良、灰黒色をなす。10は波状口縁浅鉢の山形凸起部分で、外面はヘラ磨き、内面は横位ヘラナデ的。細砂かなり含み、焼成不良で橙

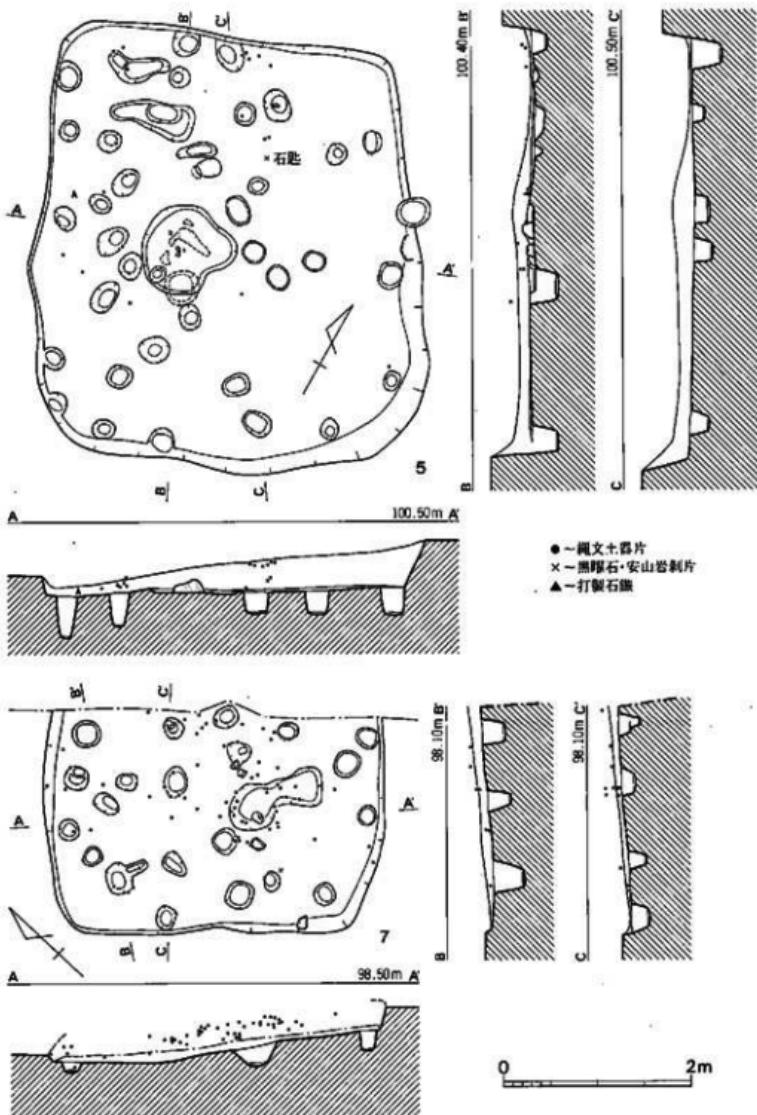


Fig.23 第5・7号住居跡実測図 (1/60)

茶色をなす。

精製深鉢 (11) 断面三角形口縁の外面に 2 条の沈線を施した波状口縁で、外面はヘラ磨き、内面は磨減。微細砂を幾らか含み、焼成不良で内面白褐色、外面は淡褐～灰褐色をなす。

磨製石斧 (Fig. 79-7) わりと薄手中型となりそうな刃部のみの小片で、白色の網目状縞が入る濃青黒色の蛇文岩製。斜位の研磨擦痕の他に刃部右半部には使用痕が残っている。5 g。

偏平打製石斧 (Fig. 82-3) 緑色片岩製で、刃部側の当住居出土品と基部側の第 2 層 No. 692 とが接合したものである。表裏面とともに素材剥離面を大きく残したままで、縁辺に難な調整を施しただけのものである。基部側を細くした整美なものである。長さ 15.4 cm、幅 4.8 cm、厚さ 1 cm、重さ 96.2 g となる。

打製石鎌 (Fig. 97-44, Fig. 99-70) 44 は安山岩製五角形鎌で、難な作りで表裏に素材剥離面を残し、剥片鎌的である。長さ 19 mm、幅 15 mm、厚さ 2.5 mm、重さ 0.8 g。70 は、漆黒色良質の黒曜石製で、表裏とも難なつくり。現存長 16 mm、幅 17 mm、厚さ 3.5 mm、重さ 0.9 g となる。

石匙 (Fig. 101-7) 安山岩製縦長削片の両側縁に片面側づつの刃部調整を施したもので、かなり風化している。打面は疊面で、長さ 55 mm、幅 28 mm、厚さ 10 mm、重さ 12.7 g となる。

以上の出土遺物のうち、土器 9 は晩期黒川式期でも原初段階に近いと思われ、10 は黒川式古期、11 は後期三万田式深鉢となる。よって当第 5 号住居跡は、縄文晩期黒川式古期に営まれたものと考えられる。

第 6 号竪穴住居跡 (Fig. 22, PL. 19)

V 区の北端部に位置する方形住居で、北側を第 4 号住居跡に、南西側を第 3 号住居に、南東側を大きめの土壤に切られている。北西隅がやや尖り気味になる台形的なプランで、3.93 × 3.1 ~ 3.95 m で面積が 13.9 m² となる。床面は中央がやや低くなり、全体に南側へやや傾斜する。柱穴は壁沿いにやや不規則にではあるが 9 個が配列されているのが判る。床面にはがとおぼしき痕跡は認められない。出土土器は少量で、実測に供し得るものは無い。石器のみ記す。

出土遺物

石斧模造品 (Fig. 78-20) 床面出土品で、暗灰～灰色の黒色片岩製。周辺を簡単に整形加工しただけのもので、石材が軟質であることや、使用痕跡も無い事などから、小型の実用品ではなくて、偏平打製石斧のミニチュア、或は小石製円盤として他用途としてのものと考えられる。長さ 5.8 cm、幅 3.8 cm、厚さ 1.1 cm、重さ 29 g となる。

スクレイバー (Fig. 102-12) 住居内の P 2 出土品で、安山岩製。機長気味の不定形削片の上辺と下辺に刃部調整を施すが、全周使用可能。あまり風化しておらず、長さ 24 mm、幅 33 mm、厚さ 13 mm、重さ 10.3 g となる。

使用削片 (Fig. 108-15) 不純物を僅かに含む黒曜石製縦長削片の両側縁を各々表裏面側から

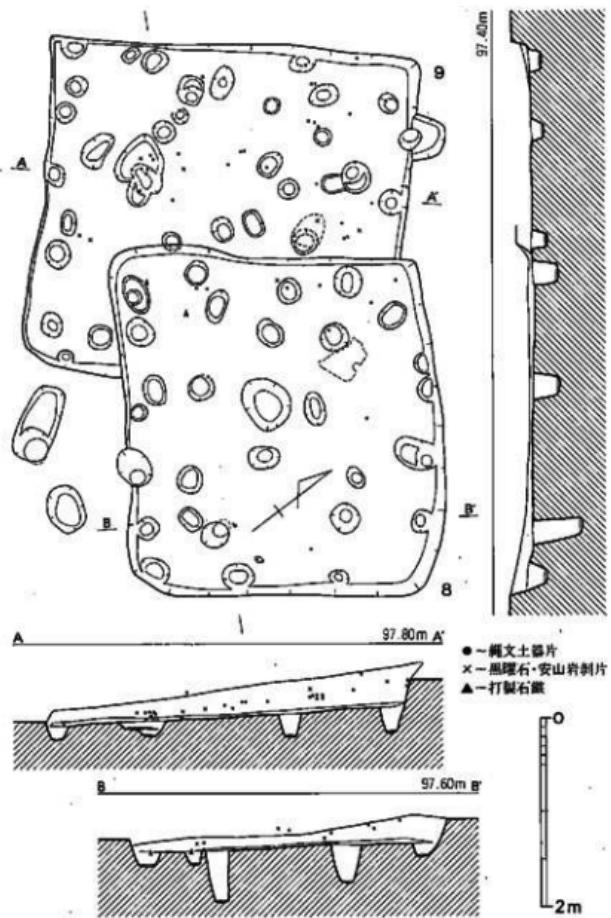


Fig.24 第8・9号住居跡実測図 (1/60).

のみ細調整を施したもの。打面は調整面で、長さ39mm、幅22mm、厚さ5mm、重さ3.6g。

以上の出土遺物だけから当住居跡の時期を判断するのは困難であるが、他の縄文晩期住居と主軸も異り、第3・4号住居にも切られれていることから、明らかに時期が古いものと考えられる。第3・4号住居跡が黒川式新期であるとすると、黒川式古期のものとするのが妥当であろ

う。遺跡全体に三万田式土器片が散見するが、この第6号住居が後期まで遡るとは思えない。

第7号竪穴住居跡 (Fig. 23, PL. 20)

遺跡の南半、V区の南西端寄りに位置する。試掘調査時と土層確認の為に更に掘り下げたトレンチにより、北東側を失っている。 $3.64 \times 2.3 + am$ の方形住居で、正方形であったとしたら $13.2 m^2$ の床面積となる。床面は西側へ傾斜しており、床面には23個の小ビットが検出された。主柱穴らしきものの配置は明確でないが、他の縄文住居と同様に壁際沿う小ビットが生きてくるのかもしれない。床面には焼土や炉とおぼしき掘込みは見られなかった。出土遺物は、住居ライン検出前の上位に多量みられ、その中には大型の磨臼 (Fig. 123-4) もあった。

出土遺物 (Fig. 21)

精製浅鉢 (12) 波状口縁となる可能性をもつもので、内面は横位擦過、外面は横位ヘラナデであろう。細砂多く含み、焼成やや良好で内外面ともに黒褐色をなす。

精製深鉢 (13) 内面は平滑で丁寧なナデ、外面は横位擦過の上をナデしており、やや凹凸がある。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成やや良好で内面は茶褐～暗褐色、外面は暗茶褐色をなす。

以上の出土土器は、いずれも黒川式土器の中でも古い様相を示すものと考えられるため、当第7号住居跡は縄文晩期後葉古段階の所産と判断できよう。なお当住居内埋土をすべて現地にて水洗し、炭化米・種子等の選別を行ったが、特筆すべきものは出てこなかった。

第8号竪穴住居跡 (Fig. 24, PL. 21)

遺跡の西南端、VI区の北東端に位置する。西隅が僅かに尖り気味となる方形住居で、 $3.6 \times 3.4 m$ 、面積が $12.2 m^2$ となる。西側で第9号住居跡を切っている。床面は中央がわずかに低くなっている。床面には29個の小ビットが検出されたが、主柱配置となるような類ではない。他の縄文晩期住居と同様に壁沿いの小ビットで構成される柱穴配置となるのかもしれない。燒土が北隅寄りに検出されたが、掘り込みも無く、明確に炉と判断し難い。出土遺物は量が少い。

出土遺物 (Fig. 21)

精製浅鉢 (14) 丸く胴張りする類で、内面に棱をつくり、口縁外面に細身の沈線、内面には段に近いような沈線を施す。内外面横ヘラ磨きで、胎土精良、焼成不良で淡灰黄色をなす。

マリ (15) 口縁外面に沈線を意識した凹部をつくり、内外面ともにヘラナデに近い横位磨き。外面下半はやや凹凸がある。細砂少量含み、焼成不良で内面は淡黄褐色、外面は暗褐色をなす。径20cm以上の大きめの器種となろう。

打製石鐵 (Fig. 97-31) 乳灰色不透明のチャート質石材で、厚手の幅広い鍔形鐵である。裏面右下端に主要剝離面を残す。長さ25mm、幅23mm、厚さ5.5mm、重さ2.1gとなる。

以上の出土遺物のうち、土器14は典型黒川式土器のうち古期のもので、資料としては少ない

が、当第8号住居跡の時期は縄文晩期後葉古段階とされよう。

第9号竪穴住居跡 (Fig. 24, PL. 21)

VI区の北東端に位置し、南東側を大きく第8号住居跡に切られている。3.9×3.55mの方形住居で、13.8m²の床面積となろう。床面は西南側へ傾斜しており、小ピットが多数検出されたが主柱穴配置を示すものではない。床面北東寄りに焼土が検出され、小ピットの上にかぶっていったが、炉跡と判断できない。出土遺物のうち、図示できるものは無い。住居の時期としては、形態・方向が他住居と同様である事や、出土土器細片の検討から、縄文晩期後葉古段階のものと推定できよう。

2 埋 窟

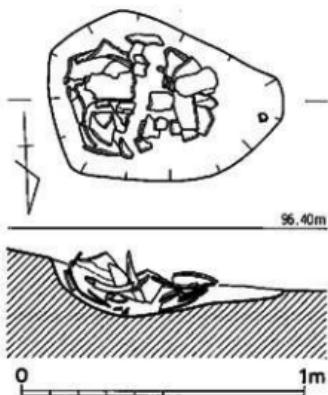


Fig. 25 第1号埋窓実測図 (1/20)

第1号埋窓 (Fig. 25, PL. 22)

遺跡の西南端近くの、VI区中央付近に位置する。谷筋中心から東南側へややずれた緩斜面に在る。略楕円形土壇の中に大型の深鉢が潰れた状態で検出された。底部側がきちんと下にあり、直立状態で据えられていたものであろう。別個体の中型深鉢も混在していたため、合わせ壺風に上からかぶせていたと考えていたが、土器を復原した結果、中型深鉢が小さすぎて、それは不可能である事が判った。中型深鉢が全周の1/3程しか残っていないので、その大きな破片を蓋としてかぶせたものと解釈される。なお埋窓中からは何ら他の遺物は発見できなかった。

使用深鉢 (Fig. 26, PL. 28) 1は口径28cmで、肩で屈折して丸く外反する口縁となる。口縁中位内面には不明瞭な稜をつくる。内面の調整は横位擦過の上をナデており、胴部上半は凹凸が多い。外面は肩部から上が横位ナデ、胴部中位までが未調整的な指頭横位ナデで凹凸著しい。以下わりと丁寧なナデから最下付近は縦位の指頭ナデ上げ。粗・細砂を多く含み、焼成やや良好で、内面下半は黒色、上半は暗茶褐色。外面上半は赤茶褐色、稜以下は暗褐色。2は、口径39.4cm、胴部最大径38.8cm、器高41cm以上と大型品で、肩は稜をつくらず丸く張り、直線的に外傾して開く口縁となる。内面の調整は稜より上がナデ、以下は横位擦過の上を縦な横位ナデを施し、凹凸が多い。外面は屈折部以上が横位擦過の上をナデ、胴部は斜位擦過の上を横位に

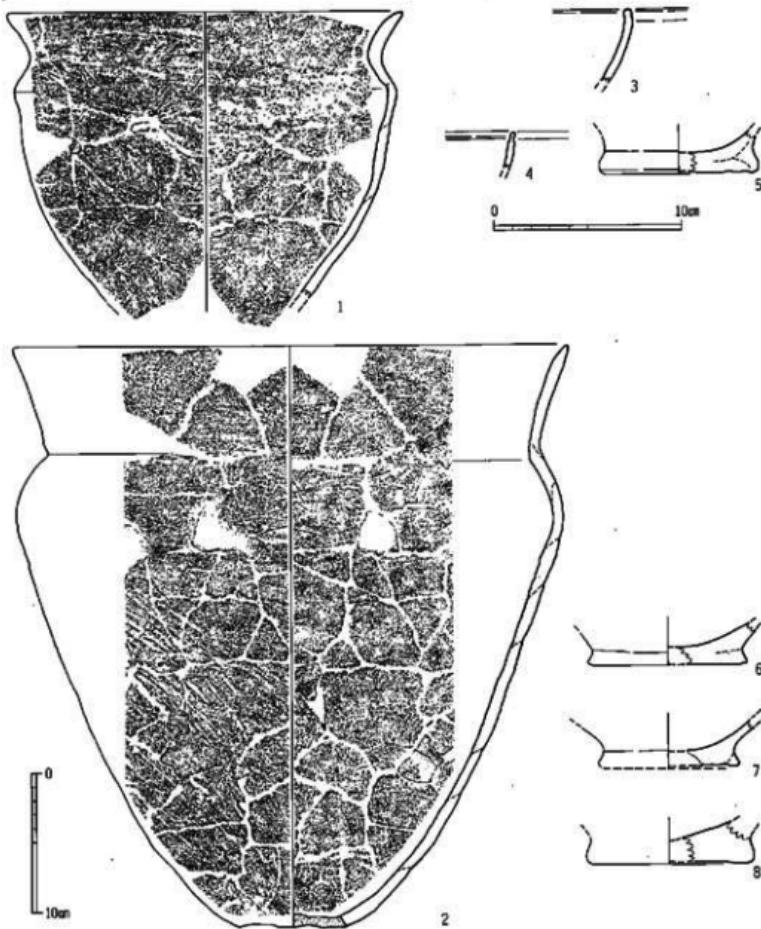


Fig.26 埋甕・土壤・集石造構出土土器実測図 (1・2:1/4, 3~8:1/3)
(1・2:埋甕, 3:土壤2, 4・5:土壤3, 6~8:集石1)

雜にナデている。肩部付近と最下付近はやや丁寧にナデ消されている。凹凸が極めて多い。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面は茶褐色だが下半のみ黒茶色。外面は茶褐～暗黄茶色をなす。胸部外面下半にはほぼ全周に煤が付着する。底部は打欠きか。

以上の土器は、1が反転して開口部の下半部でやや折れ曲がり風となる特徴を示し、晩期中葉精製深鉢の様相を幾らか残している。2の肩部が丸く張る特徴は熊本県菊池市天城遺跡出土土器の中に類例がみられる。ただ、天城例は口縁が長く伸び、調整が粗い磨きで全体に御領式系の範疇を超えない類で、本例との差が明らかである。本例は天城例の系統の中の最新段階として、1とのセット関係からも、晩期（中葉末～）後葉古段階に位置付けられよう。

3 土 壤

第2号土壙 (Fig.27, PL.24)

V区の北端部、第4号住居跡の北西隣に位置する。長軸を南北にとる長方形土壙である。長さ210cm、幅175cmで全体に浅い。底面は凹凸があり、中央付近に小ピットが3個みられる。土器片はかなり出土したが、図示できるものは1点のみである。土壙の性格は不明確であるが、他の大きな縄文期の穴がプランも底面もダラダラしていたのに対し、ここで土壙としてとり上げたものは、客観的にもしっかりしたものであり、単なる落込み等ではなく、土壙基等の意味のある性格のものと思う。

出土遺物 (Fig.26)

マリ（3）口縁外面が僅かにへこみ、やや厚手の大ぶりの器形になるかと思われる。内外面ともに磨滅しており、粗砂僅かに含むが大旨胎土精良で焼成不良。内面は暗茶褐色、外面は灰褐色をなす。

以上の土器からこの土壙の時期を判断するのは困難であるが、典型的黒川式期のマリ形土器の形状よりも古相を示すと思われ、また、当土壙の主軸方向が第6号住居跡と同じである事等からも、当土壙の年代は備文晩期後葉の古段階にあたると考えられよう。

第3号土壙 (Fig.27, PL.25)

V区の最東北端に位置し、主軸を北西から南東にとる長方形土壙である。第2号土壙と丁度対称位置の南東側斜面にて検出された。長さ255cm、幅156～124cm、深さ58cmとなる。プラン・壁ともにしっかりした掘り込みで、遺物も石器等多種類が埋土上半部分から出土した。土壙の性格は明確にできないが、墓や貯蔵施設等の可能性を残しておこう。

出土遺物 (Fig.26)

マリ（4）口縁を玉縁状につまみ出した、直徑20cm弱の小型品となろう。内外面横ヘラ磨きで胎土精良、焼成不良で内外黒色をなす。土壙内のP2から出土したもの。

深鉢底部（5）底径8.6cmで内外面とも磨滅している。粗・細砂多く含み、焼成良好で、内面は淡橙褐色、外面は橙褐色をなす。1/4強残存。

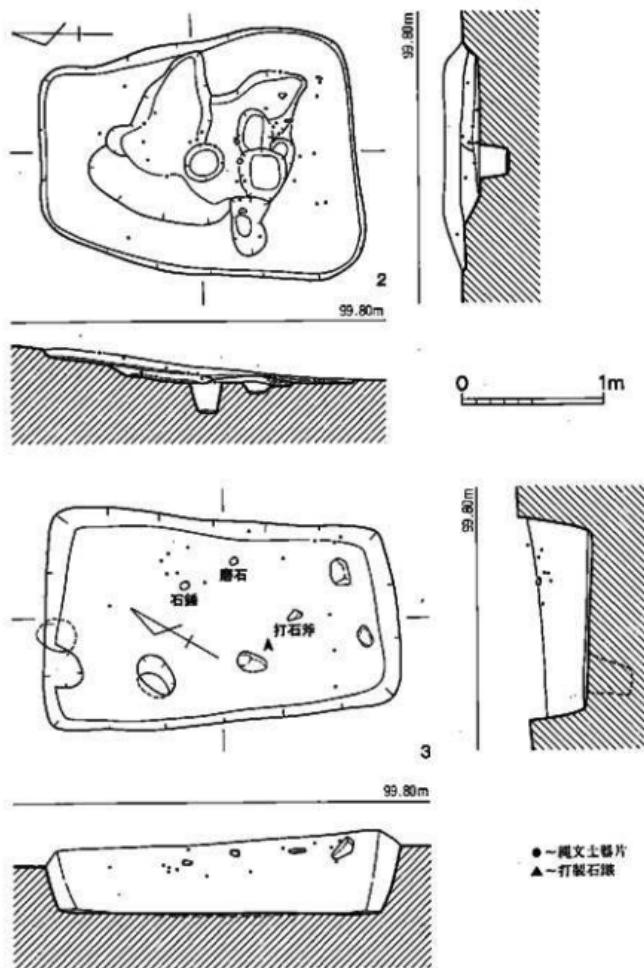


Fig.27 第2・3号土壤実測図(1/40)

幅平打製石斧 (Fig. 84-14) 淡青灰色の凝灰岩的石材を用い、薄手楔形類。表面のみに部分的に磨面が認められる。全体に風化著しく、長さ10.7cm、幅5.1cm、厚さ7.5mm、重さ44.5g。

打製石錠 (Fig. 98-53) 縞状をなす安山岩製で、作りの上手な鋸齒状錠。長さ26mm、幅14mm。

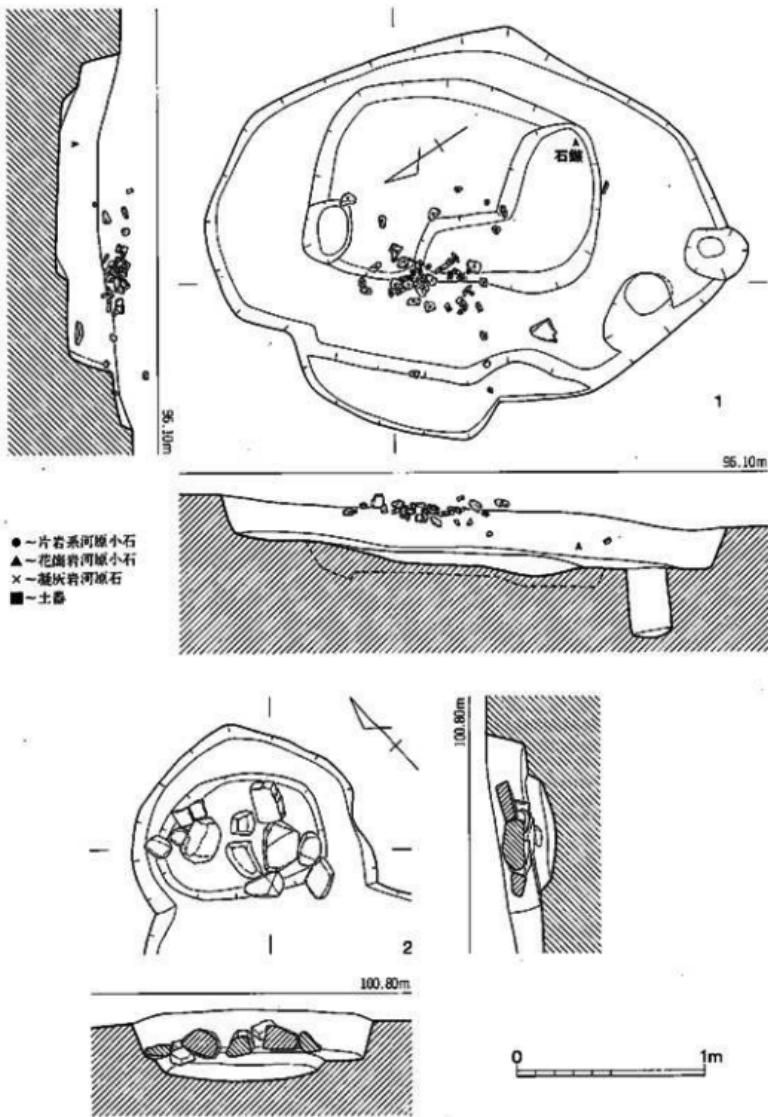


Fig.28 第1・2号集石造構実測図 (1/30)

厚さ3mm、重さ0.9gとなる。

打欠き石鑿 (Fig.116-61) 小河原石の両端を打欠いただけのもの。法量等は Tab.1 を参照。

以上の出土遺物のうち土器の4は、口縁の形状が黒川式浅鉢のものと類似しているが、内外の凹部がややだらけていることから、古相を示すものではないと判断される。土壇自体の主軸方位も近隣の住居のものと合っている事から、当土壇の時期は縄文晚期後葉の新設階だろう。

4 集石造構

第1号集石造構 (Fig.28, PL.14・22)

VI区中央の第2号住居跡の北隣に位置し、50個程の小河原石が集積され、その下に土壇が検出されたものである。埋土はやや暗い茶褐色土で炭粒を幾らか含むが他の包含層とあまり変わらない。土壇は $2.8 \times 2.2\text{m}$ で、底面は凹凸があり、中央が低い。集石は焼けてはおらず、形態上墓の可能性もあるが、性格は不明確。

出土遺物 (Fig.26)

底部（6～8）6は円盤貼付状態で内外面ナデ。粗砂多く含み、焼成良好で内面は黒色、外面は橙褐色。7は内外面ナデで浅鉢底部。細砂多く含み、焼成良好で内面は黄褐色。外面は淡橙褐色。8は磨滅しており、粗・細砂多く含み、焼成良好で橙褐色。深鉢底部。

磨製石斧 (Fig.81-17) 集石の下から出土したもので、硬質頁岩製で丁寧に研磨されているが、図示したものはいずれも使用擦痕である。やや薄手の中型品となりそうである。重さ11g。

打製石鑿 (Fig.98-55・65) いずれも集石の下層から出土したもので、55は姫島産黒曜石製でかなり丁寧に作る。現存長23mm、幅13mm、厚さ3mm、重さ0.7gとなる。65は安山岩製で作りは雑。下辺は新しいプランティング的調整が施されている。裏面中央に少し主要剥離面を残す。長さ16mm、幅17mm、厚さ3mm、重さ0.6g。

以上の遺物から、縄文晚期後葉のいずれかの時期の遺構と推定できる。

第2号集石造構 (Fig.28, PL.23)

IV区中央に位置し、掘り込みの中に25～10cm大の花崗岩塊石が12個検出されたもの。掘り込みは2段で、上段が $130 \times 100\text{cm}$ 、下段が $90 \times 65\text{cm}$ 、全体の深さが38cmとなる。石及び周辺の土に焼けた痕跡無く、出土遺物も図示できるものは無い。造構の性格としては、中段に蓋をかぶせ、その上を石で覆った覆石土壇墓と考えるのが最も妥当であろう。詳細な時期が確定できないが、層位や周辺の造構等からみて縄文晚期後葉と考えられる。

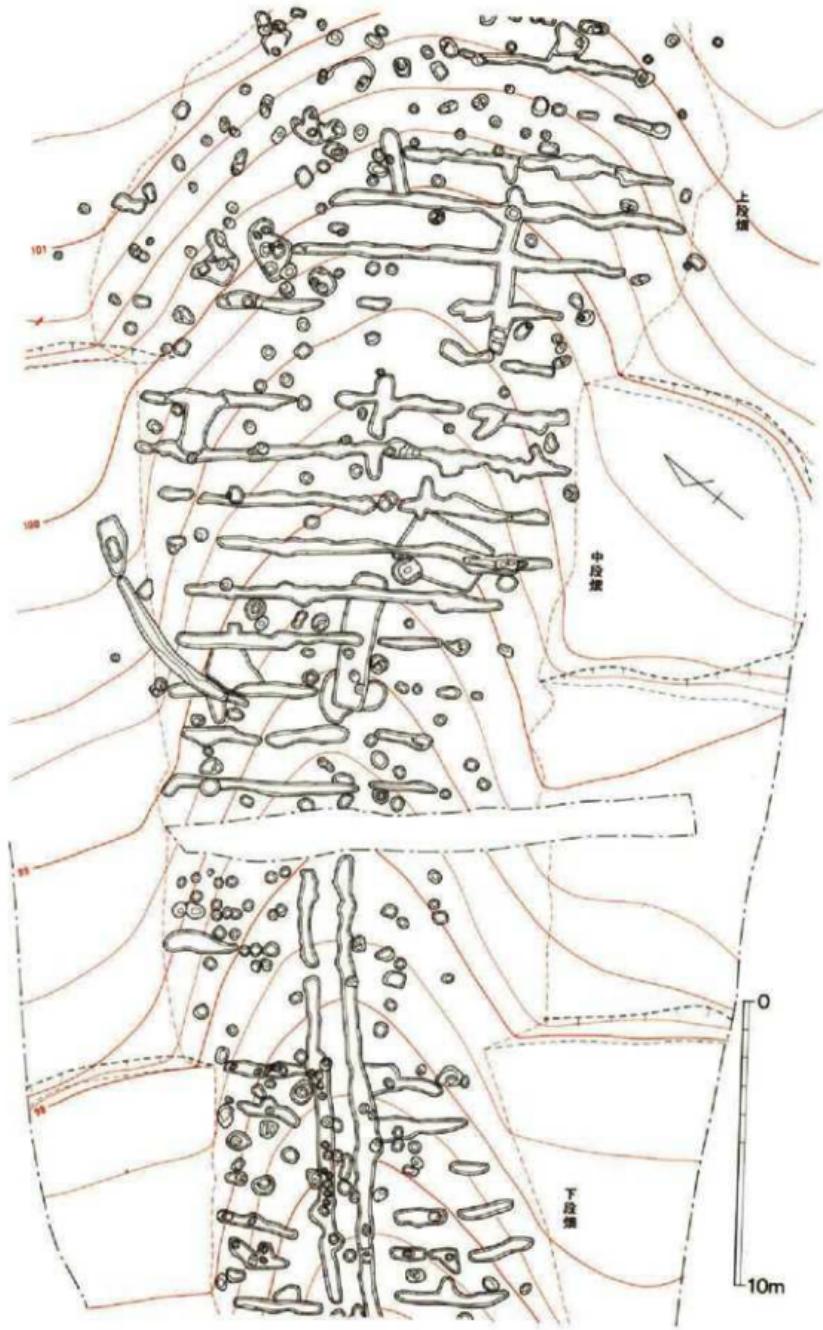


Fig.29 烟状造構実測図 (1/200)

5 番 状 造 構

遺跡の南西半部の中心に、IV～VI区にわたって谷筋中心線に直交する小溝25条が検出され、その溝中から縄文晚期後葉の土器しか出土しなかった為、該期の畠跡と判断した。

小溝は幅70～20cm（平均40cm弱）、深さ3～20cm（平均5cm程）で、その両端は第1層黒色土包含層がかぶっていた範囲内で止まっている。小溝間は140～80cmだが、110cm程ではほぼ一定している。III区の南西端にも小溝がみられるがそれ以南が切られているため畠状造構となるか不明確。

谷筋中心線に沿って走る縦溝が、この小溝群と直交して走っているが、明らかに小溝群を切っている。縦溝はII区からVI区まで各所にみられ、V～VI区では2本平行している部分もあり、谷沿いの道の可能性もある。ただ地形からみて常識的には雨水の流れた自然の流水跡と考えられる。また、これら小溝群はV区中央付近で第2層中途で検出された長方形・不整形の土壇をいくつか切っており、本遺跡縄文晚期の中ではより新しい段階であった事は明らかである。

畠の区画が判かる。まずV区のトレンチから南側9.5mの間が途切れしており、全体として大きく2区画に分けられる。うち北半のIV～V区のものは途中小溝の切れ目は無いが、IV区の上半側で小溝群が東南側へ寄っており、V区の小溝群とは畠の区画が異なると想定できる。よって上・中・下の3枚の畠が復原できる。上段畠は10×14m程で、140m²となり、位置的に中段畠より東南寄りとなるが、小溝間隔等は変わらない。中段畠は14×15m程で210m²となり、最も大きな区画となる。下段畠は8.5×11m程で93.5m²となり、最も小さい区画となる。下段畠は小溝の左右両端が斜面上方へやや曲がっており、上・中段畠の様相と異なる。

これら小溝からの出土遺物は、第2層に掘り込まれている為、多くの縄文晚期後葉の土器片がみられた。明らかに畠状造構に伴うと確定できる土器が分離できず、詳細に時期を決定できないが、縄文晚期後葉を降るもののが無い為、この時期の造構と判断される。

なお、この畠状造構に栽培された植物を知りたいということで、北九州大学畠中健一教授に花粉分析をお願いし、現地にて試料採取していただいた。（PL.25・26）その結果、土壤の関係で花粉そのものを検出できなかったとの回答を得た。非常に残念であるが、畠中教授の御指導により試料は別にも採取してあるので、今後機会を得て他の方法で分析を期したいと思う。

6 出 土 土 器

ここでは、縄文住居跡等の各遺構出土以外の、多量の包含層出土品、各ピット出土品、新しい古墳時代住居等に混入していた縄文土器をまとめて報告する。なお、第1層黒色土層と第2a層黄褐色土層を丁寧に掘り分けて土器を取り上げたが、以下に細分類した器種毎について詳

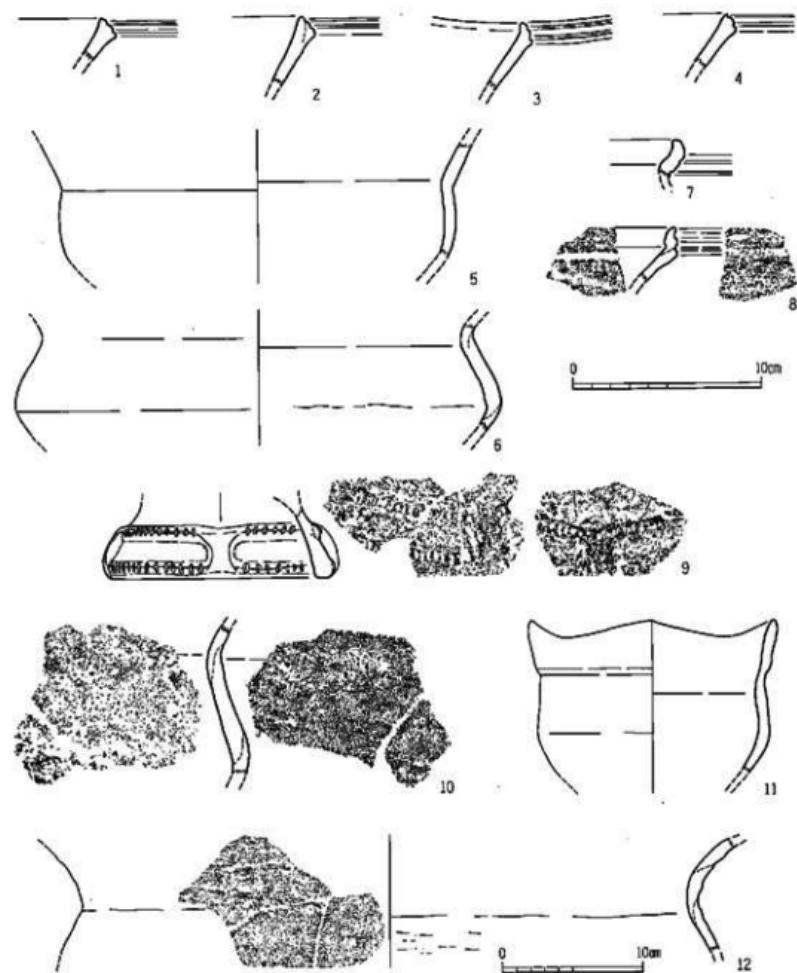


Fig.30 繩文後期土器実測図（1～11：1/3, 12：1/4）

細に検討した結果、第1・2層間で明確な差異は出なかった。即ち各分類で一方の層からしか出土していないものに注目したが、すべて両層出土のものが混在しており、層位別の報告は無意味だと考え、合わせて報告したいと思う。層位毎の多少については本文中で細かく検討する。

縄文後期土器 (Fig.30, PL.29)

深鉢 (1 ~ 7・10~12) 1はV区1層出土品で口唇外面に2条の沈線を巡らす。磨滅しており胎土精良で焼成不良、内面黄褐色。外面は暗灰褐色。2も1と同類で2層No.307。内面はナデ、外面は磨滅。細砂多く含み焼成不良で淡褐色。3はP338出土品で波状口縁となる。内外面へラ磨きで平滑。細砂幾らか含み焼成やや良。内面暗黄褐色。外面はこげ茶色。4はIII区2層出土品で内外へラ磨きか。細砂幾らか含み、焼成やや不良で淡黄褐色。5は2層No.548で頸部径21cm。内面は丁寧な横へラ磨き、外面も同様かと思われる。細砂多く含み、焼成やや良好で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色。6は2層No.550で、外面胴部縫以上はナデ、以下は雑な斜位擦過。内面頸部直下は強い横位指ナデ、以下は雑な横ナデ、粗砂幾らか、細砂多く含む。焼成やや良好で内面は灰色、外面は胴部上半が淡褐色、下半がこげ茶色。7はP52出土品で波状口縁になるかもしれない。沈線2条を巡らせ、内外横へラ磨き。細砂幾らか含み焼成良く暗褐~茶色。10は2層No.685で、外面は横位ナデ、頸部付近は指オサエによる凹凸があり、内面は剥落。粗・細砂かなり含み、焼成不良で灰黄~灰黒色。11はIII区1層出土で、口径13cmの小型品。内外へラ磨きで粗砂僅か、細砂多く含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は頸部から胴部縫まで暗茶色。他は黒色をなす。12は頸部径44cmの大型品で、口縁外面は未調整風の雑な横ナデで凹凸多い。胴部外面は丁寧なナデ。口縁内面はナデか。胴部内面は横位擦過状。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面は茶色、外面は暗褐~暗茶褐色。

浅鉢 (8) III区2層出土品で、口縁外面は完全な凹線2条を施し、内面は横へラ磨き。細砂かなり含み、焼成不良で内面黒褐色、外面は灰黄色をなす。

脚台部 (9) 2層No.713とV区2層出土品が同一個体で、脚端径11.8cm。縦位のブリッジ部は全周に4ヶ所。全面磨滅しており、粗砂幾らか、細砂多く含み、角閃石が目立つ。焼成やや不良で内外黄褐色をなす。透し部は残存部分では見当たらない。晩期後葉になる可能性あり。

以上の土器は1~5が三万田系、8は御領式、9は三万田~御領式期か。6・10・11は後期後半~末、12は晩期中葉の異類。

精製浅鉢 A類 (Fig.31~38)

口縁が長く外反して伸び、端部が沈線や玉縁状で飾られる類をA類とした。晩期前半の、伝統的に変化してゆく代表的器種である。系統的な変化により6種に細分される。

A1類 (3・6・9~11) 長く伸びた口縁の端部が上方に立ち上がり、その外面に沈線1条を巡らせたもの。いずれも内外面横へラ磨き。3はV区2層出土品で、細砂僅かに含むのみ。焼成やや良好で黄茶~暗褐色をなす。6はVI区2層出土品で口縁が角ぱり、細くシャープな沈線を施す。胎土精良で焼成やや良好、内面は暗褐色、外面は灰黒色。9はIV区2層出土品で細砂幾らか含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は暗黄褐色。10は2層No.494で、粗砂少量、細砂

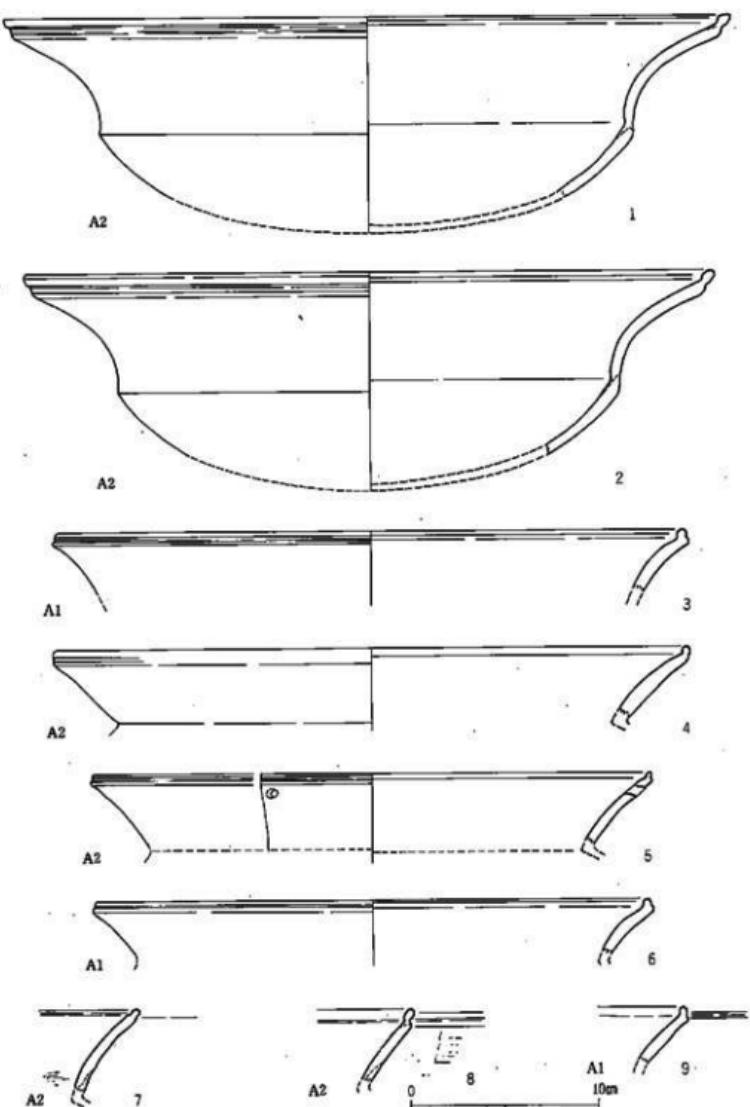


Fig.31 精製浅鉢実測図 (その1)(1/8)

幾らか含む。焼成不良で内面は黒褐色～暗褐色、外面は暗黄褐色～灰黒色。口縁外面は沈線ではなく全体に凹状となる。11は2層No.80で細砂幾らか含む。焼成不良で淡灰黄色。口縁端は外側だけつまみ出し風となる。

A2類 (1・2・4・5・7・8・12~15・19~25) 長く伸びる口縁の端部を内外から押さえるか沈線を入れるかして、玉縁的につくる類。1は2層No.7で、口径38.9cmで、口縁上面を平坦につくり、外面は凹線状となる。内外面横ヘラ磨きだが、体部外面はやや粗いヘラナデ状。微細砂をかなり含み、角閃石が目立つ。焼成やや不良で暗黄褐色～黒色。2は2層No.7で口縁外面に太い回線を施し、他は面取り状で角ばる。内外面丁寧な横ヘラ磨きで、微細砂かなり含み角閃石が目立つ。焼成やや不良で内面は暗黄褐色、下半は黒色。外面は黒褐色と暗黄褐色が半々。4はIV区2層出土品で丸い玉縁状断面につくる。外面一部のみに回線の痕跡があり、内外面横ヘラ磨き。微細砂かなり含み焼成やや不良で内面は暗茶褐色。外面は暗褐～茶色。5はV区2層出土品で破損部際に補修孔がある。内外面横ヘラ磨きで胎土精良、焼成不良で内面は暗褐色。外面は淡黄褐色。7はIV区2層出土品で不明瞭な玉縁状口縁をなす。内外とも横位ヘラ磨きだが外面は難。内面下端は横位擦過。胎土精良で焼成やや良好。淡黄灰褐色。8はP28出土品で内面横ヘラ磨き、外面は横位擦過痕残る。細砂かなり含み、焼成不良で茶褐色～暗褐色。12は2層No.86で玉縁部が欠損。内外丁寧な横ヘラ磨きで細砂幾らか含み、焼成やや良好で暗茶褐色。13はVI区1層出土品で、内面に浅い凹線を施すのみで傾きも他と異り、時期的にも新しくなる可能性あり。やや磨滅し、胎土精良で焼成不良で内面は灰～白黄色。外面は白黄色。14はP413出土品で、内面に浅い凹線を施し、外面沈線は不明瞭。内外面横ヘラ磨きで胎土精良。焼成不良で白黄色。かなり大口径品。15はIV区2層出土品で内外磨滅。胎土精良、焼成やや不良で内面は暗灰褐色。外面は黄白褐色。19は住2混入品で内外磨滅。胎土精良で焼成不良。淡黄白色。20はIV区1層出土品で体部外面は横位ヘラナデ、他面は磨滅。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成良好内面は茶褐色。外面は暗褐色。21はP220出土品で内外磨滅。微細砂多く含み焼成不良で灰黄褐色。22はP229出土品で内外面丁寧な横ヘラ磨き。細砂幾らか含み、焼成良好で暗茶褐色。23は2層No.86でかなりの大型品。丁寧な横ヘラ磨きで、胎土大旨精良。焼成良好で暗灰茶褐色。24はP229出土品で内外面ともに丁寧な横ヘラ磨き。かなり大口径となり、微細砂かなり含む。焼成やや不良で暗褐色。25は2層No.29で体部くびれ直上に内外に稜をつくりA4類に近付きつつある。かなり大口径で、内外面ヘラ磨きであろう。微細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は灰色。外面は黄灰色。

A3類 (16~18・26~33) A1類の形態で体部外面稜の直上に段をつくる類。A2類と比べると口縁の伸びがやや短かめで器壁が薄手のものが多い。また、A1・2類よりも体部外面稜部分の角がより外方へとび出した感じ、即ちその部分の断面の角度がより90度に近くなるという特徴を示す。この外面中途の段が付く類は精製深鉢にもみられ、晩期中葉の古段階から新段階

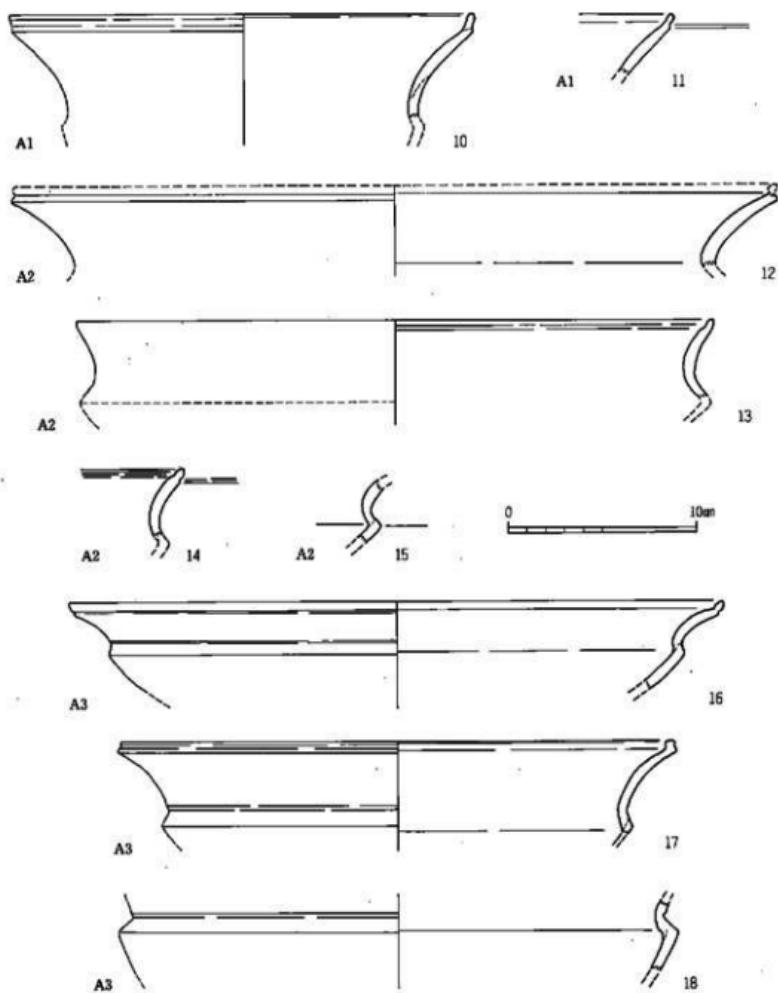


Fig.32 精製浅鉢実測図 (その2)(1/3)

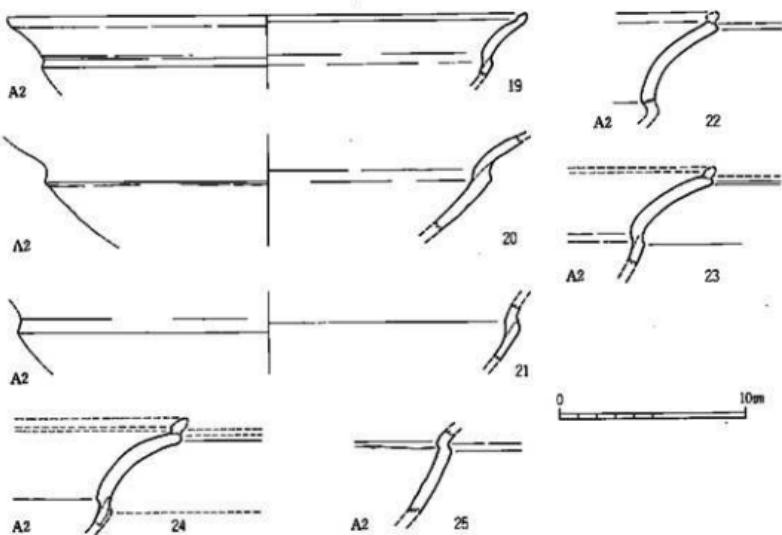


Fig.33 精製浅鉢実測図（その3）(1/3)

へ移行する中途での判かり易い特徴となっている。16は、V区2層出土で内外横ヘラ磨き。口径35cmで胎土精良。焼成やや不良で内面淡黄褐～暗褐色。外面黒褐色。17は口唇上面が平坦面をなし外面は凹状にへこむのみ。2層No146で内外磨滅。微細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は暗褐色。外面は暗灰黄褐色。18は2層No285で外面の段はしっかりしている。内外面丁寧な横ヘラ磨きで胎土精良。焼成やや不良で淡灰黄～暗灰褐色。26はP229出土で口径34cm。口縁外面に太い凹線を施し、内外面丁寧な横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面は暗褐色。外面は淡黄灰色。27はP229出土で真中に切目を入れた低いリボン状凸起を付け、外面に細い沈線を施す。内外面横ヘラ磨きで胎土精良。焼成不良で内面は黒色、外面は黄褐色。28は2層No64で口縁に凸起があるが形状不明。口縁外面は凹線で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面は淡褐色。外面は淡褐～暗褐色。29は2層No517で口縁に凸起があるが形状不明。内外磨滅で、胎土精良。焼成やや不良で灰黄褐色。薄手で口縁外面に沈線を持たず、頸部外面の段も不明瞭。30はVI区2層出土で内外かなり磨滅。胎土精良で焼成やや良く、内面は暗褐～暗黄褐色。外面は黄褐～灰褐色。31はP138出土で内外横ヘラ磨き。外面の段は沈線状であり、くびれがきつくなりA5類に近づく。胎土精良で焼成良好、内面は黒褐色。外面は肌色。32はIV区2層出土で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良、内面は暗黄褐色。外面は

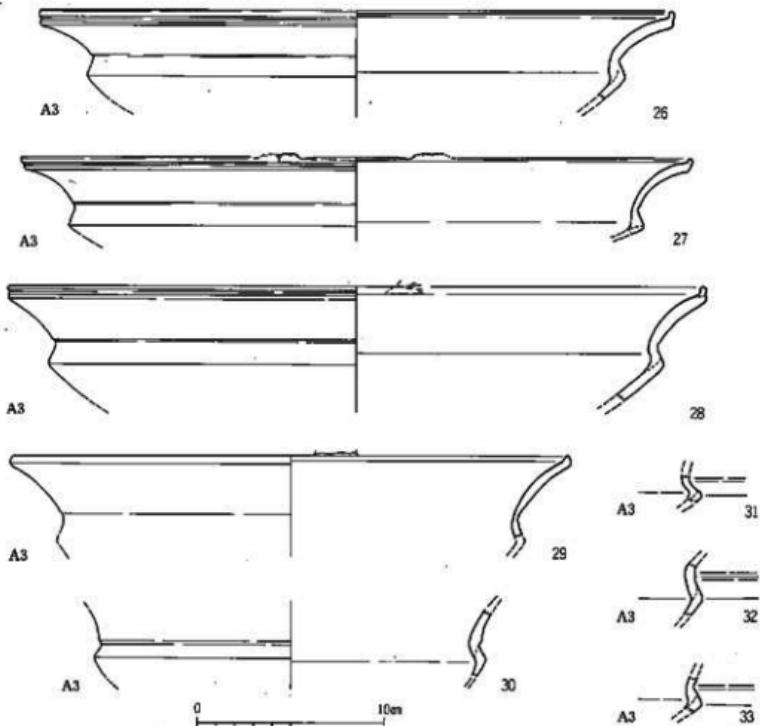


Fig.34 精製浅鉢実測図（その4）(1/3)

暗褐色。33はP229出土で外面の段は浅い沈線状となる。内外面横ヘラ磨きで胎土精良、焼成不良で内面黒褐色、外面は淡橙色。

A4類(34~44・54・55・58・119・125) 口唇外面或は両面に沈線を入れ玉縁状に作り、長く伸びて開く口縁の中途ではっきりと折れて内面にしっかりした後をつくる類。A5類よりも体部上端の屈曲がゆるやかで、更にその上の外折部までが長いもの。つまり、A3類の外面の段部分が明瞭に外折状に変化した2段屈折の類と言うことができる。34はVI区1層出土で、外面に浅い凹線を施し、屈折状況がまだA2類の19~25を抜けきっていないものであるが、中途の内外の稜がはっきりしているということでこの類に入れた。内外面磨滅し、胎土精良で焼成やや不良。内面は白黄褐色、外面は暗黄灰~黒色。35はV区1層出土で山形の3連凸起を付

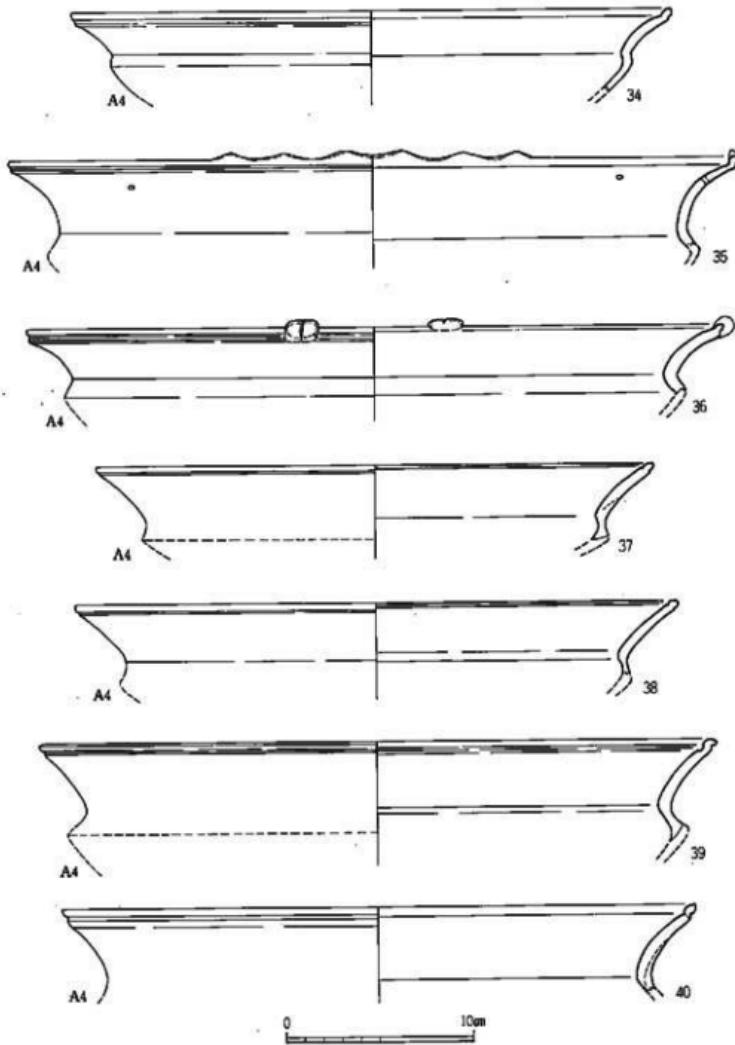


Fig.35 精製浅鉢実測図（その5）(1/3)

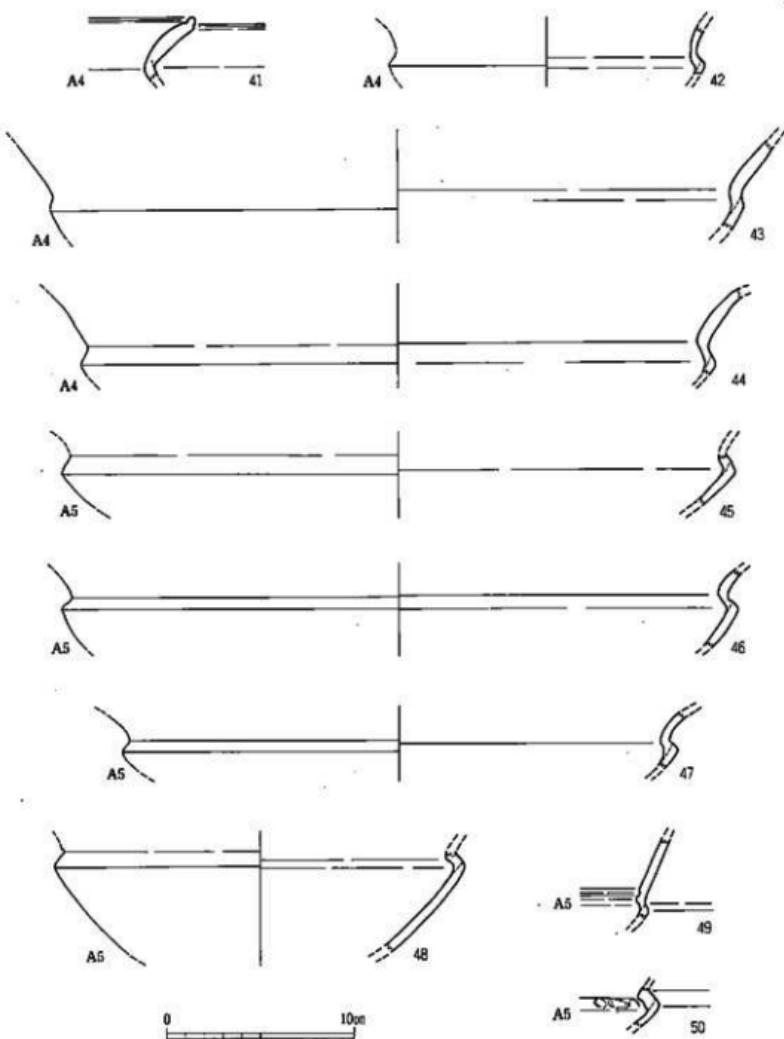


Fig.36 精製浅鉢実測図 (その6)(1/3)

ける。径2mmの小さい補修孔があり、内外面横へラ磨き。胎土精良、焼成不良で黒色。36は2層No.543で中央に切目を入れる小凸起を付け、外面にしっかりした沈線を施す。細砂かなり含み焼成不良で内面は暗茶～黒褐色。外面は暗褐色。1/8残存。37は内外横へラ磨きで細砂幾らか含む。2層No.33で焼成良好。内面は黒褐色、外面は暗茶色。38はIV区2層出土で内外面丁寧な横へラ磨き。口唇外面に細いがしっかりした沈線。粗砂僅かに含み、焼成良好で内面は黒褐色。外面は暗褐～茶褐色。39はV区2層出土で内外面丁寧な横へラ磨き。胎土精良で焼成やや良く暗灰褐色。40はV区2層出土で内外面丁寧な横へラ磨き。胎土精良で焼成やや良く、内面は濃灰褐色。外面は淡灰黄色。41はV区2層出土で内外へラ磨き。細砂幾らか含み、焼成やや良く内面は黒褐色、外面は暗黄褐色。42は2層No.338で薄手小型類。胎土精良、焼成良好で淡褐色。43は2層No.231で内外面横へラ磨き。細砂少量含み、焼成不良で内面は灰暗褐色。外面は淡黄褐色。44はP426出土で胎土精良、焼成不良で内面は濃灰褐色。外面は淡灰～灰褐色。54は2層No.99で胎土精良、焼成不良で肌色～淡黄灰白色。55はIV区2層出土で内外横へラ磨きだが、内面屈折部は横位擦過。口唇の2条沈線は深め。胎土精良、焼成不良で淡黄灰色。1/6残存。58は大口径品で2層No.576、内面横へラ磨きで外面は磨滅。微細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は橙白色。119はIV区2層出土で、55とともにC1類に繋がるタイプ。口径31cmで外面は丁寧な横へラ磨き、内面屈折部は横位擦過。胎土精良で焼成不良。内面は灰褐～淡褐色。外面は淡黄褐色。125は2層No.29で119と同タイプ。磨滅しており、胎土精良、焼成良好で肌色。

A5類(45～53・56・57)わりと長めの口縁で口唇部を玉縁状につくり、短くきつい2段屈折をみせる類。52がその代表例で、A4類の亞種と見ることもできるがD1b類や、黒川式特有の体部屈曲部が外方へ肥厚しはみ出すような器種へと繋がる重要な類である。45はP291出土で内外面横へラ磨き、胎土精良で焼成良好。内面は淡褐色、外面は暗褐～淡褐色。46は2層No.59で内外やや磨滅。細砂幾らか含み焼成不良で黒～暗茶色。47は2層No.86で、内外面横へラ磨き。胎土精良で焼成やや良く、地は黄白色だが淡茶色のスリップ状器表が残る。48は2層No.577で外面は丁寧な横へラ磨き。細砂幾らか含み焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は暗茶褐色をなす。49は2層No.408で内外面横へラ磨き。細砂幾らか含み焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗茶褐色。薄手で直線的に開きH1類と共に通する異類となるかもしれない。くびれ上方内面に回線を施すのはこれ1点のみ。50はP390出土で内外磨滅。細砂かなり目立ち焼成不良で淡橙褐色。屈折部内面は指オサエで凹凸あり。51は2層No.577で外面はやや右下がりの横位へラナデ。細砂幾らか含み焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は茶褐色。52は2層No.401で口径24cm。口唇外面に極細の沈線を施し、内外面横へラ磨きだがくびれ部内面のみ横位擦過。細砂幾らか含み焼成やや不良で、内面は黄灰～灰褐色、外面は淡黄褐～暗褐色。53はP230出土で屈折部がやや長いがくびれがきついのでこの類に入れた。胎土精良で焼成不良。内面は灰色、外面は黄白色。

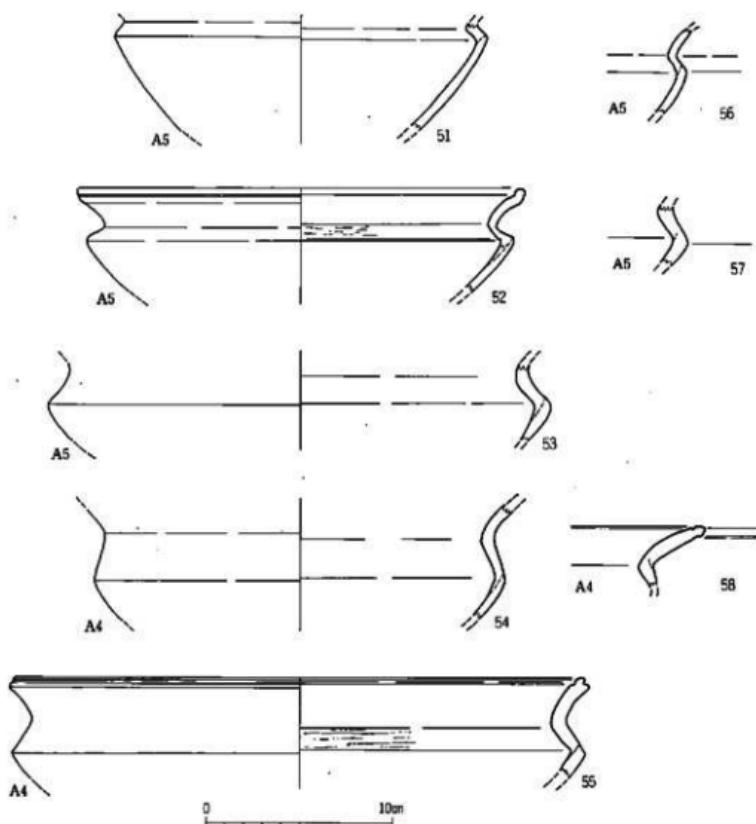


Fig.37 精製浅鉢実測図 (その7)(1/3)

内外磨滅。56は2層No59で細砂かなり含み、焼成不良で黒褐色。57も53と同類でP229出土。胎土精良で焼成不良。内面は暗灰色、外面は白褐へ黄灰色。内外磨滅。

A6類(59~66) 口唇内側を丸く肥厚させ片側玉縁状につくり、2段屈折の外面稜に幅広い凹線を施す類。口頭部の器壁が厚めで外面稜以下の体部外面を横位擦過のままにする特徴がある。勿論A4類から変化したものであるが、C2a類とも関連があり、独特な片玉縁状口唇部は晩期黒川式を特徴付けるものである。59はV区2層出土で内外面丁寧な横ヘラ磨きだが体部外面だけはやや雑。口径27.7cmで胎土精良、焼成不良で内面黒色、外面は淡褐色をなす。屈折部外

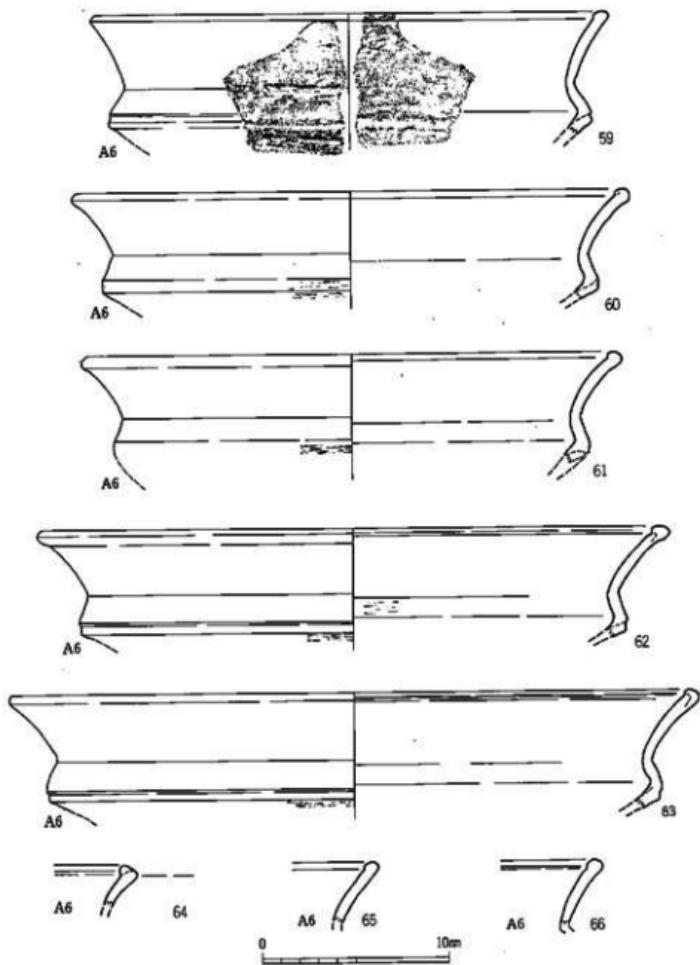


Fig.38 精製浅鉢実測図（その8）(1/3)

面積には凹線を入れ、全体に残りが良く精製品。60はV区1層出土で内外丁寧な横ヘラ磨きだが、屈折部外面稜上と以下外面は横位擦過。微細砂かなり含み焼成不良で内面は黒褐色、外

は暗黄褐色。61はV区1層出土で内外横へラ磨きだが、屈折部外面稜上は横位擦過。微細砂かなり含み焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗黄褐色。62は2層No362で内外面横へラ磨きだが体部外面と屈折部内面は横位擦過。口径34cmで微細砂をかなり含む。焼成やや不良で内面は黒～淡灰褐色、外面は暗褐～淡赤黄色。1/6残存。63は2層No362で内外横へラ磨きだが体部外面は横位擦過。微細砂かなり含み、焼成不良で内面は黒～淡褐色、外面は暗黄～淡茶褐色。64はVI区2層出土で口唇部が四角っぽくやや角ばっており A 6類の原初形態となろう。内外磨滅。胎土精良、焼成不良で暗褐色。65はVI区2層出土で内外磨滅。細砂幾らか含み、焼成やや不良。内面は暗灰褐色、外面は淡茶褐色。66はV区2層出土で内面横へラ磨き。細砂多く含み焼成不良で内面は黒褐色、外面は淡褐色。

精製浅鉢 B類 (Fig. 39~42)

口縁が長く直線的或は内湾気味にやや立ち気味に開き、大きく波状口縁となる類。長い口縁が低く寝て大きく開く類はE類とした。精製深鉢の中にもこの器形のものがあり、小破片の場合には区別し難いものも含まれる。体部との境の屈曲は僅かで、その外面に太い線を入れるのが特徴である。また、胎土に細砂粒を含むものが多い点も見逃せない。内湾するものが主体をなすことからG類あたりを祖形とする可能性がある。装飾の有無等で3種に分類した。

B1類 (67~72) 外面に平行沈線による文様を施した類。69や73のように長く伸びそうなものもあるが、67のように内湾度が強く短い口縁となるものもあり、G類との共通性が考えられる。67はP316出土で3条の沈線文を施す。内外磨滅。細砂多く含み焼成良く内面は明茶色、外面は暗黄褐色。68はIV区1層出土で山形凸起部分。3条のシャープな沈線文で胎土精良。焼成不良で内面は暗黄褐色、外面は黄褐～明茶色。69はVI区2層出土でシャープな沈線5本を施す。胎土精良で焼成不良、内面は暗黄灰色。外面は黄褐色。70はVI区2層出土で細砂幾らか含み焼成不良で暗灰褐色。最上の沈線は斜めに上がり、下2条は横に水平に巡る。71はV区2層出土で2条のしっかりした沈線文。微細砂かなり含み、焼成不良で内面は淡茶～暗黄褐色、外面は茶～灰褐色。72はIV区1層出土で山形凸起部に近い部分。シャープな沈線文で上1条のみが斜めに上がり、下4条は横に平行に走る。胎土精良で焼成不良。内面暗黄褐色、外面黄褐色。

B2類 (73~74) B類の器形を持つもののうち、沈線文以外の装飾を持つ類。B2a類は74で口唇部を小さな玉縁状に作る類。2層No302で内外磨滅。細砂かなり含み、焼きは良く、黄茶褐色～灰黑色。凸起頂部はもっと高い。B2b類は73で2層No220出土。細身の断面三角形貼付凸帯を巡らす類。内外面へラ磨きで微細砂幾らか含む。焼成不良で内面黒褐色、外面暗黄茶褐色。凸起頂部はもっと高くなろう。

B3類 (75~118) B類のうち沈線文等装飾を持たないものであるが、この種が圧倒的に多い。薄手で口唇部が尖る形状のものが多い。厚手で口唇部がやや角張ったもの (82・84・109) は

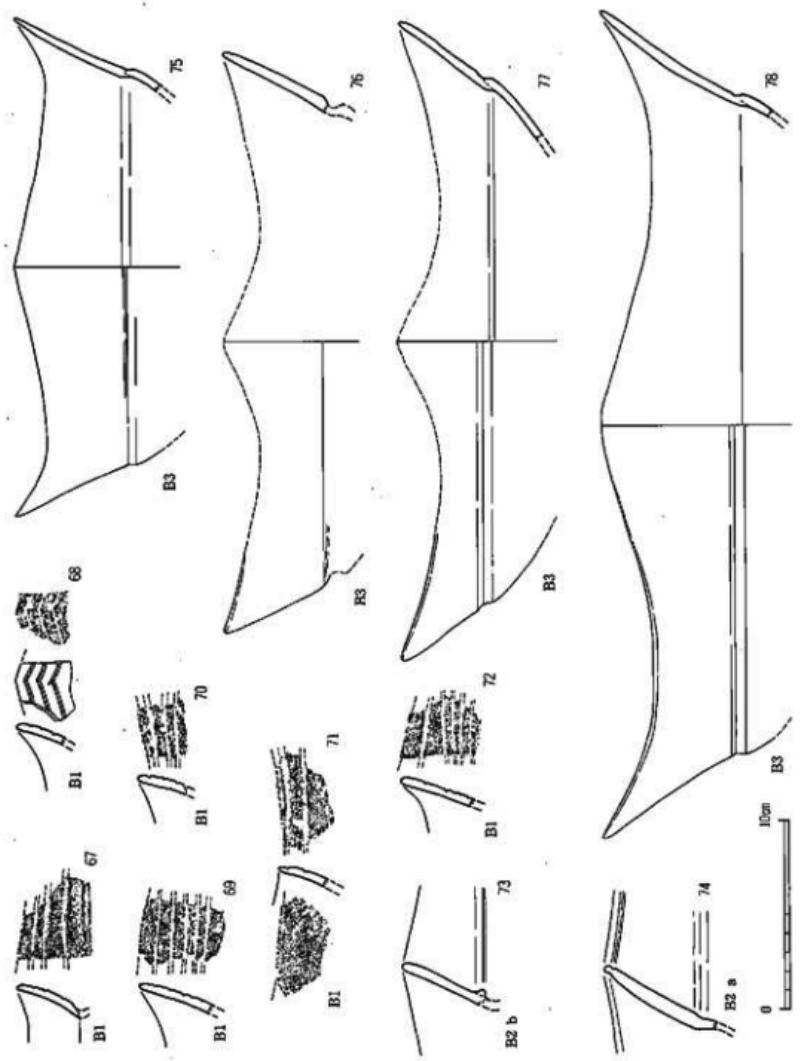


Fig.39 精製焼鉄実測図 (モの9)(1/3)

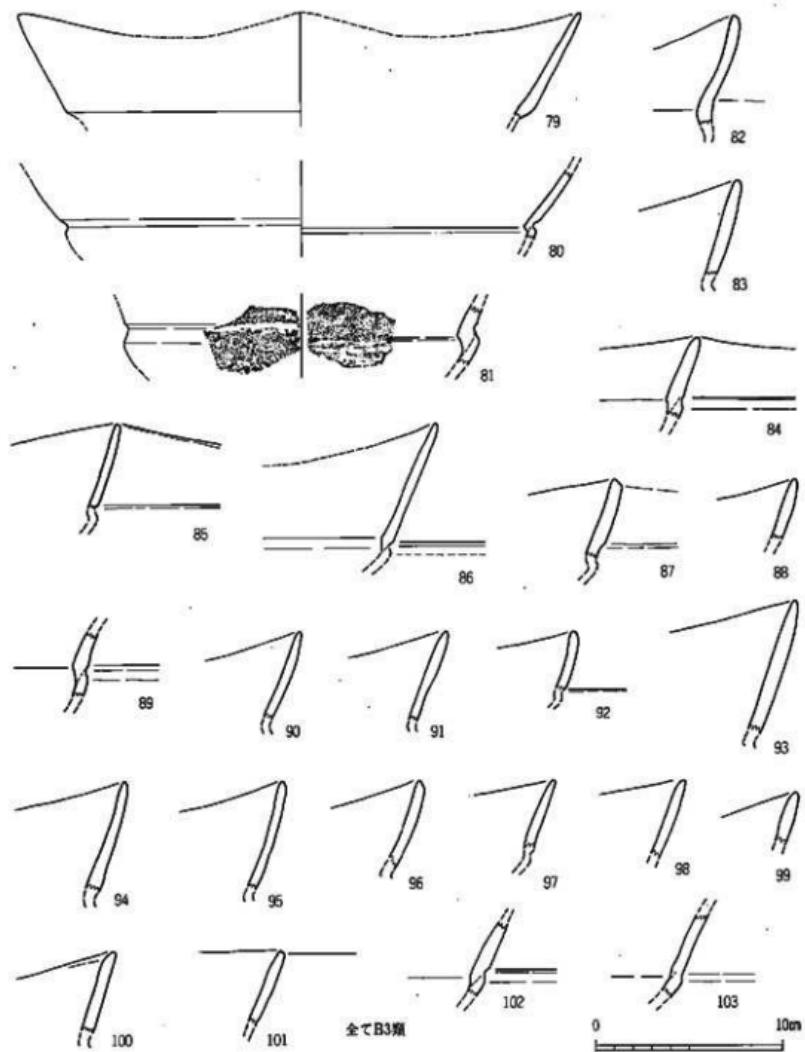


Fig.40 精製浅鉢実測図 (その10)(1/3)

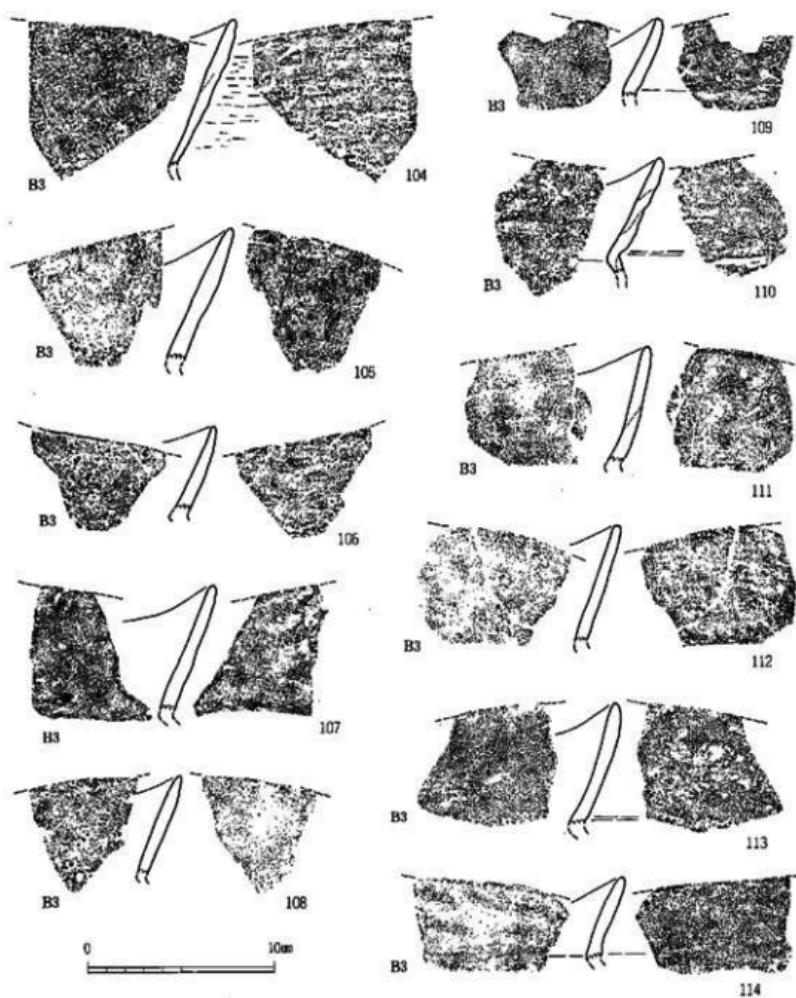


Fig.41 精製浅鉢実測図 (その11)(1/3)

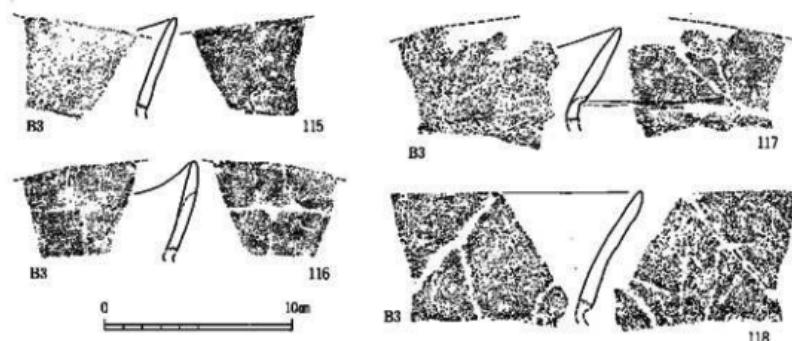


Fig.42 精製浅鉢実測図（その12）(1/3)

精製深鉢となる可能性も強い。山形凸起部は4ヶ所と思われる。76は、2層No634で口径26.6cm。内外面丁寧なヘラ磨きで、微細砂かなり含み、焼成不良で内面は黒褐色。外面は黄茶褐～暗褐色。くびれ部外面は沈線状になる部分もある。76はⅢ区2層出土でくびれ部外面凹部は横位擦過。微細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面灰褐色。外面は淡黄褐色。77は2層No20で内外面横ヘラ磨き。細砂かなり含み、焼成不良で黒褐色。凸起頂部はもっと高くなろう。78は2層No634で口径44cmの大型品。内面ヘラ磨きで外面磨滅。微細砂かなり含み、焼成不良で暗黄褐～黒色。79はⅢ区2層出土で内外磨滅。細砂かなり含み焼成やや不良で、内面は暗黄灰～暗褐色。外面は淡褐～暗黄褐色。80はP133出土で内外ヘラ磨き。微細砂かなり含み、焼成やや不良で内面は黒褐色。外面は灰褐～淡褐色をなす。81は2層No390で内外ヘラ磨き。微細砂幾らか含み、焼成不良で内面淡褐色、外面は淡茶色。82はⅢ区2層出土で器表かなり剥落。厚手で深鉢か。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成良く内面は暗茶色。外面明橙色。83はV区2層出土で内面ヘラ磨き、外面磨滅。細砂多く含み焼成不良で、内面は淡黄～茶褐色。外面黒褐色。84はIV区1層出土で微細砂かなり含む。焼成やや良好で淡灰茶褐色。85は2層No341で細砂かなり含み、焼成不良で淡黄灰褐色。86は2層No490で細砂僅かに含む。焼成不良で内面暗黄茶色。外面は暗灰茶褐色。87は2層No658で内面ヘラ磨き、外面磨滅。微細砂多く含み焼成不良で、内面こげ茶色。外面淡褐色。深鉢か。88はV区1層出土で内面ヘラ磨き、外面磨滅。細砂幾らか含み、焼成やや良く暗黄灰色。89はV区2層出土で細砂多く含み、焼成やや良く内面黒色。外面は暗褐色。90は2層No473で細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は淡茶色。外面は灰黑色。91はV区2層出土で細砂幾らか含む。焼成やや良く内面は暗茶褐色。外面は黒褐色。92はP262出土で細砂僅かに含む。焼成不良で内面茶褐色。外面は灰黑褐色。93はP143出土で内外横ヘラ磨き。細砂多く含み、焼成良く内面黒色。外面黄茶褐色。94はVI区1層出土で粗砂

幾らか、細砂多く含み、焼成やや良。内面淡茶色、外面は暗灰茶褐色。95はIV区1層出土で細砂幾らか含み焼成やや良。内面暗灰茶褐色、外面暗黄褐色。96はV区1層出土で胎土精良。焼成不良で灰黒色。97は2層No54で細砂幾らか含む。焼成やや良く内面は暗褐色、外面茶色。98は2層No177で細砂多く含む。焼成不良で内面は暗褐色、外面は茶褐色。99はP262出土で内面横へラ磨き、外面磨滅。微細砂かなり含み、焼成やや不良で黒褐色。100はP157出土で、細砂幾らか含む。焼成良く内面は暗黄灰色、外面は赤茶色。101は2層No97で、口唇部が平坦面をなすがこれも波状口縁となろう。細砂かなり含み焼成不良で淡褐色。102は2層No239で細砂かなり含む。焼成良く内面暗灰褐色、外面茶褐色。103は2層No697で粗砂僅かに含む。焼成やや良く内面は茶褐色、外面上半は暗茶褐色、下半は黒色。104は2層No13で外面は横位擦過。内面は丁寧なナデ。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成やや不良で内面暗黄褐色。外面は暗褐～黒色。105はP157出土で外面はやや丁寧なナデ。粗砂かなり、細砂多く含み、焼成不良で茶褐色。106はIV区1層山土で粗砂幾らか、細砂かなり含む。焼成不良で内面黒色、外面は淡茶褐色。107は2層No42で、内面は平滑、外面は雑な横位擦過的。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面灰黒色。外面淡褐色。108はV区2層出土で、粗砂幾らか、細砂多く含む。焼成不良で内面明茶色、外面は暗茶褐色。109は2層No389で、内面は横位へラ磨き、外面は雑な横位へラナデ。粗砂僅かに含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は淡茶～暗褐色。110はIII区2層出土で内面中位に強い横位指ナデがみられ、外面はナデしているが上半に横位擦過痕が残る。粗砂僅か、細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は明黄褐色で凹凸多し。111は2層No243で内外面横位へラナデであろう。粗・細砂かなり含み、焼成不良で橙茶色。112は2層No493で内面は平滑、外面は磨滅。細砂かなり含み、焼成良く内面は黒褐～淡褐色、外面は明赤茶色。113は2層No87で内面はへラ磨き、外面は雑な横位へラナデ。粗砂少量、細砂多く含み、焼成良く茶褐色。114は2層No203で内面横位へラ磨き、外面は横位へラナデ。粗砂僅か、細砂多く含み、焼成やや良く内面は暗灰褐色、外面は暗褐色。115は2層No231で内外横位へラナデか。粗・細砂幾らか含み、焼成不良で黒～淡褐色。116はV区2層出土で内面は平滑、外面は凹凸多し。微細砂幾らか含み、焼成やや良く内面は淡灰黄色、外面は淡茶褐色。117は2層No182で外面はへラナデ、内面磨滅。粗砂多く、細砂かなり含む。屈曲部形状から深鉢になるかもしれない。焼成不良で内面は明茶色、外面暗茶褐色。118は2層No421で内外磨滅。粗・細砂幾らか含み焼成不良で暗黄褐色～暗茶褐色。波状になる確認は無い。

精製浅鉢 C類 (Fig. 43~52)

晩期後葉黒川式土器の典型的器種として丸く脣張りする浅鉢をC類とする。A4類から変化して丸く脣張りするまでの各段階が明らかになった。まず、A4類から脣部の鋭い稜が丸くな

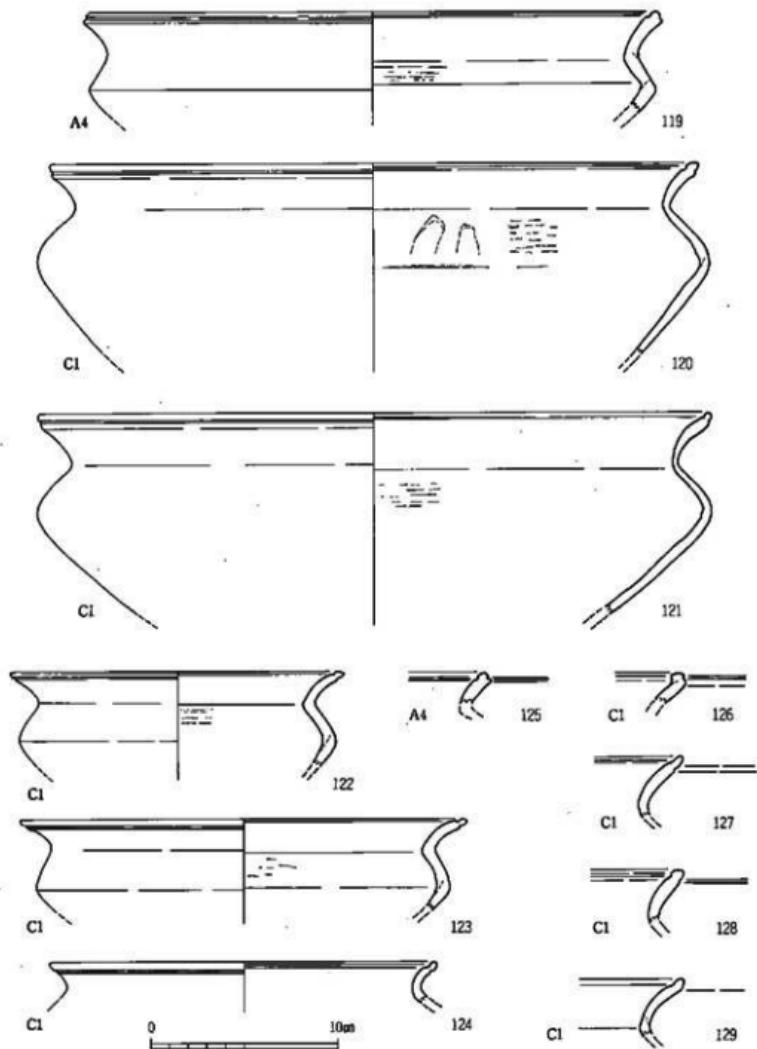


Fig.43 精製浅鉢実測図（その13）(1/3)

り、C2類の段階で頸部内面稜が鋭くなり、胴部も外側へぐっと張り出す。それまで長かった口縁部がC3類で短くなり、頸部内面稜も脱角に内側へせり出す。最終段階としてC4類の短く外反する玉縁につくらない口縁の形態となる。この変化のポイントは口縁の長さと頸部内面稜の形状にあるようだ。以上の変化課程に従って5類に細分した。なお、図にはA4類からの変化が判り易いように119を頭に入れておいた。

C1類 (120~124・126~132) A4類の胸部稜が丸っこくなり胴張り状になるが、胴部はまだ口縁端より外方へは大きく張り出さず、頸部内面稜がまだシャープに角張らない類。典型的黒川式胴張り類の初現形態と言える。120は2層No.407で口径34.6cm。口唇内面に沈線に近い段、外面に細身の沈線を入れる。胴部下半外面はやや斜位の雑なヘラナデ状磨き、以上は横ヘラ磨き。内面胴部上半は横位擦過の上を横位ヘラナデ。下半は横位ヘラ磨き。粗石英僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面暗灰黒褐色。外面は暗黄~黒褐色。121は2層No.407で、粗石英極く少量、細砂かなり含む。焼成不良で内面は暗灰褐色。外面は淡黄~黒褐色。外面は胴部下半はやや雑な横~斜位のヘラナデ状磨き、以上は丁寧な横ヘラ磨き、内面胴部上位付近は横位擦過の上を横ヘラ磨き。122はⅢ区2層出土で口径17.9cm。外面横ヘラ磨きで内面胴部上半は横位擦過。胎土精良で焼成やや良く、内面は淡黄褐色。外面は暗褐色。123はⅢ区2層出土で口径24cm。外面は丁寧な横位ヘラ磨き。内面胴部上半には擦過痕が残る。胎土精良で焼成やや良く、内面は肌色。外面はこげ茶色。124は2層No.448で頭部は稜をなさず外反する。胎土精良で焼成不良、内面は黒色。外面は白褐色。127はVI区2層出土で、内外に浅い凹線を施す。内外面横ヘラ磨きで、胎土精良、焼成不良で白褐色。128はVI区2層出土で外面の沈線はシャープ。内外面横ヘラ磨きで胎土精良、焼成やや良く内面暗褐色、外面灰黑色。129はI区1層出土で内外面横ヘラ磨き、胎土精良で焼成不良。淡橙褐~淡黄褐色。130は2層No.220で極めて強く外反して開く異類で、或はこの類というよりC2b類変種かもしれない。胎土精良で焼成不良、内外黒色。131はP413出土で内外面ヘラ磨き。胎土精良、焼成不良で内面灰黒色、外面淡橙色。132は2層No.220で強く外反する130と同類。口唇内面は沈線に近い段。胴部上端内面は横位擦過痕。胎土精良で焼成不良、内面灰黒色、外面は灰白~灰黒色。

C2類 (133~185・187~258) 胴張り類のうち、本遺跡では圧倒的多数を占めるもので、C1類よりも胸部が外方へ張り出し、頸部内面稜がシャープになる類。口縁部はまだ長く、口唇部内外両面に沈線や段を入れて玉縁状にする。このうち、口縁部が長く、胸部が算盤玉状に稜を持って強く張り出すものをC2a類、口縁部がやや短くなり、胸部が丸くなりあまり外方へ張り出さないものをC2b類とした。両者は当然変遷の過程を示している。C2a類 (133~159・163) 133は2層No.58で口径35cm。内外面横ヘラ磨きで胴部内面上半には横位擦過がかなり残る。細砂含むが大抵胎土精良で、焼成やや良く、内面は暗黄灰色。外面は暗茶~黒褐色。134は2層No.58で口唇外面に浅い雑な沈線。内外面横ヘラ磨きだが口縁外表面は横ナデ、胴部内面

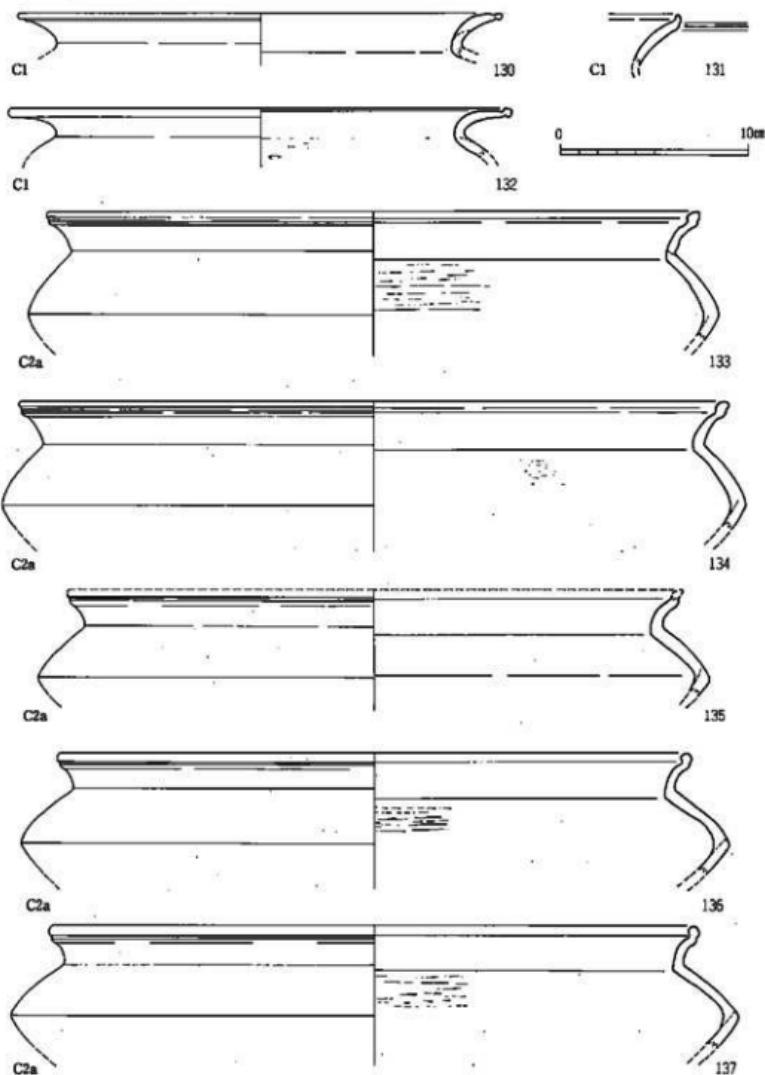


Fig.44 精製浅鉢実測図 (その14)(1/3)

上端には横位擦過痕残る。胎土精良、焼成良く内面は暗黄褐～暗褐色、外面は暗赤茶（化粧土か）～黒褐色。135はV区2層出土で内外磨滅するが角々はシャープ。微細砂かなり含み焼成やや良く内面黒色、外面暗黄茶褐色。136はV区2層出土で内外横へラ磨きだが胴内面上半に横位擦過痕残す。口唇外面にしっかりした細沈線を施す。微細砂粒かなり含み、焼成やや良く、内面暗黒褐色、外面暗黄～黒褐色。137はV区2層出土で内外面へラ磨きで胴部内面上半には横位擦過がかなり残る。細砂幾らか含み、焼成やや良く内面は黒褐色、外面暗黄茶～暗褐色。138はP139出土で口径28cmの薄手精製品。外面横へラ磨きで口唇外面の沈線等は無い。細砂僅かに含み、焼成良好で内面黒色、外面は淡黄褐色。139はI区トレンチ2層出土で、外面はややへこみ気味。外面横へラナデ状で胎土精良。焼成不良で黄褐色。140は2層No117で小さな中央切目の凸起を付ける。口唇外面一部に浅い沈線残す。胴部内面上端には横位条痕が僅かに残る。微細砂かなり含み、焼成不良で内面は灰黒～暗黄褐色、外面は暗褐～暗黄褐色。141は2層No117で、140と同様C2a類としては異質で、口縁部が短かめで強く外反し、頸部が厚く内側の稜が強くせり出している点など、C3類の要素が出てきている。内外面かなり磨滅。微細砂かなり含み、焼成不良。内面灰褐～黄褐色、外面暗褐～淡黄褐色。142は2層No602で内外面横へラ磨き。胎土精良で焼成やや不良、明茶～暗茶色。断面上下端は接合面。143はVI区2層出土で胎土精良。焼成不良で明橙褐色。144は2層No140で胎土精良。焼成良く内面灰黄～黒褐色、外面明橙茶色。145はV区2層出土で外面は雜な斜位へラナデ状で凹凸多い。微細砂かなり含み、焼成不良で内面暗褐～灰褐色。外面橙～黒色。146は2層No689で胸部外面下半は丁寧なヘラナデ状、他面はヘラ磨き。胎土精良で焼成良く内面黒褐色。外面は茶褐～黒褐色。147は2層No689で内外面丁寧な横へラ磨き。胴部内面上半に横位擦過痕僅かに残る。胎土精良、焼成良く内面暗褐色、外面は橙褐～暗茶褐色。148はP167出土で内外面丁寧な横へラ磨き。胎土精良で焼成良好、外面は赤茶～明黄褐色。内面は黒褐色。149はIV区2層出土で上端がやや平坦面となり内外に細沈線を施す。内外面丁寧な横へラ磨き。胎土精良で焼成良好、黒茶褐色。150はP272出土で内外面横へラ磨き。胎土精良で焼成良く、内面淡橙褐色、外面淡灰褐色。151はII区中央部出土で外面に極めてシャープな段をつくる。胎土精良で焼成不良、内面は暗褐色、外面上端は黄褐色、以下灰黑色。内外面丁寧な横へラ磨き。152はIV区2層出土で胎土精良。焼成良く暗黄灰褐色。内外面丁寧な横へラ磨き。153は2層No685で胎土精良。焼成不良で内面灰黑色、外面白褐色。154はV区2層出土で外面は横位の雜なヘラナデで凹凸多い。細砂かなり含み焼成不良で内面暗黄灰～黒褐色。外面淡茶～灰黄色。155はP413で内外面へラ磨きだが胴部外面稜以下は左下がり斜位。胎土精良で焼成不良、内面淡褐色、外面淡黄褐～黒色。156はV区2層出土で細砂幾らか含み、焼成不良で内面淡黄褐色、外面は暗黄褐色。157はVI区2層出土で薄手品。補修孔があり、胎土精良で焼成やや良。内面淡橙色、外面淡黄茶色。158はVI区2層で胎土精良。焼成やや良く内面橙褐色、外面黄灰褐色。159はP233で内外面横

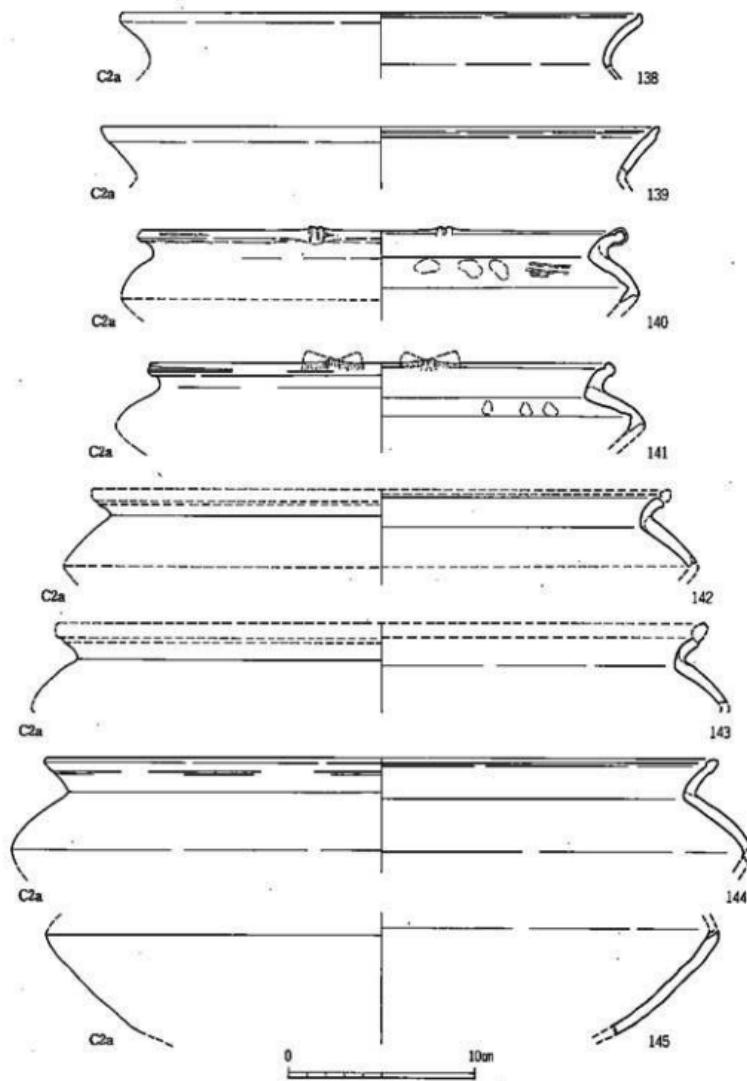


Fig.45 精製浅鉢実測図 (その15)(1/3)

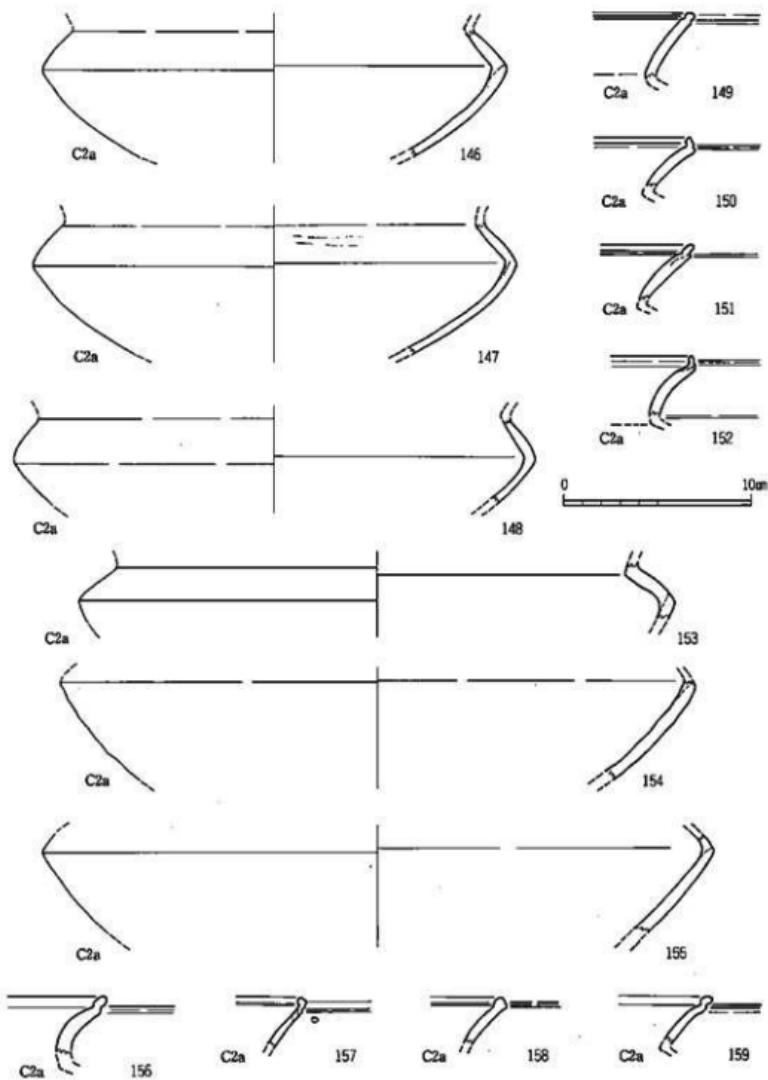


Fig.46 精製浅鉢実測図（その16）(1/3)

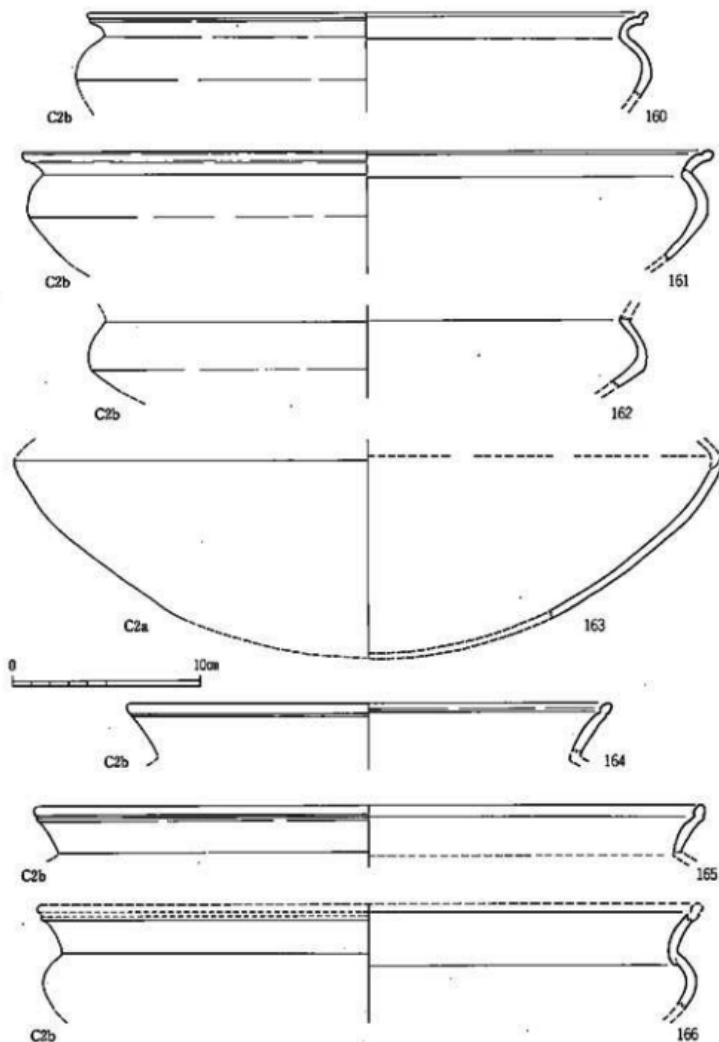


Fig.47 精製浅鉢実測図 (その17)(1/3)

ヘラ磨き。胎土精良で内面こげ茶色、外面暗茶褐色。163は2層No133で外面は雑な横～斜位のヘラナデであろう。細砂幾らか含み、焼成不良で内面暗灰黄褐色、外面灰黄～暗褐色。C 2b類（160～162・164～185・187～258・263・265）この類の中で報告するもののうち、口縁小破片の中にはC 1類・C 2a類の可能性のあるものも幾らか混ざっているが、全体の器形が判からず確定できない為、ここでまとめている。160はP231出土で口縁外面に部分的に消える浅い沈線を施す。胸部最大径部にわりとはっきりした稜をつくるが腹部全体は丸く張る。内外面横ヘラ磨きで胎土精良、焼成不良で淡褐～暗褐色。薄手で口径30cm。161は2層No680で、胎土に細砂幾らか含むが大旨精良。焼成不良で暗灰黄褐色。162はV区2層出土で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面暗黄灰色、外面黒褐～黄褐色。164は2層No86で口縁外面に浅いがシャープな細沈線を施す。内外面丁寧な横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良く内面暗茶色、外面淡黄茶褐色。165はP539出土で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良く淡黄灰色。166は2層No573で口縁内面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良、内面黒褐色、外面肌色～暗褐色。この164～166は口縁が長めであり外傾度が強くなく、C 2b類の中でも古相を示す類。167は2層No487で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良く黄茶褐色。168は2層No299で内外横ヘラ磨き。粗砂僅か、細砂幾らか含み、焼成良好。外面黒褐色、内面橙褐色。169はIV区2層出土で内外横ヘラ磨き。細砂幾らか含み、焼成やや不良で橙茶～暗茶褐色。170はVI区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面一部黒褐色で他は明茶色。171はV区2層出土で内外丁寧な横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面黑色、外面暗灰褐色。172はV区1層出土で内外丁寧な横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面黒褐色、外面淡褐色。173はIV区2層出土で口縁内面にやや沈線的な段、外面に浅い凹線を施す。内外丁寧な横ヘラ磨きで胎土精良。焼成不良で内面暗褐色、外面暗黄灰褐色。174はIV区2層出土で内外面丁寧な横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面は黒褐色、外面は暗褐色。173・174は頸部内側が鋭角に張り出しC 3類に近付きつつある。175はP576出土で外面に沈線無し。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成良く暗褐～淡橙褐色。176はV区2層出土で胎土精良。焼成やや不良で灰褐色。177はV区1層出土で口縁外面横位へラナデで面をなす。胎土精良で焼成良く内面は肌色～灰黑色、外面は肌色。178はI区2上層出土で外面に深くシャープな沈線を施す。内外横ヘラ磨きで細砂幾らか含み、焼成不良で内面淡茶褐色、外面暗褐色。179はV区1層出土で胎土精良。焼成良く内面灰黒～淡褐色、外面橙褐色。180はVI区2層出土品で内面ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良、内面黒～黄褐色、外面淡黄灰色。181は2層No457で外面の凹線は浅く痕跡的。胎土精良で焼成不良、白灰褐色。182はII区2層出土で口径43cmの大型品。微細砂幾らか含み、焼成やや不良で暗黄茶褐色。183はII区2層出土で胎土精良。焼成やや良く外面橙褐色、内面明黄茶色。184はII区2層出土で胎土精良。焼成不良で暗黄～褐色。185はP464出土で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面暗褐色、外面黄白褐～暗褐色。187は2層No72で内外横ヘラ磨き。

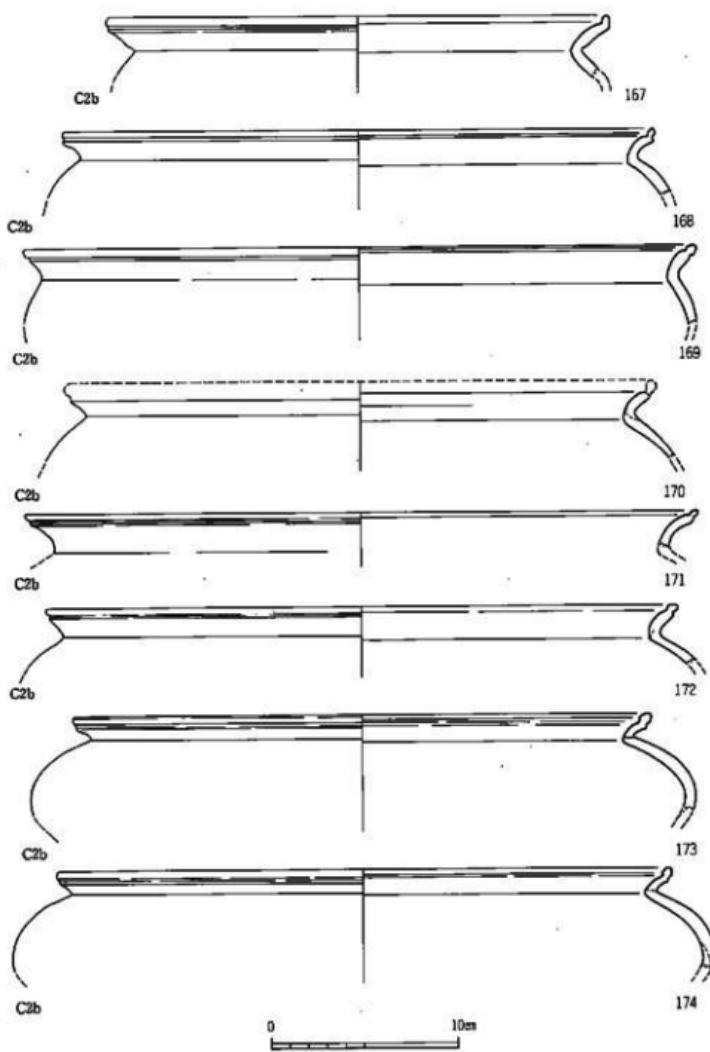


Fig.48 精製浅鉢実測図 (その18)(1/3)

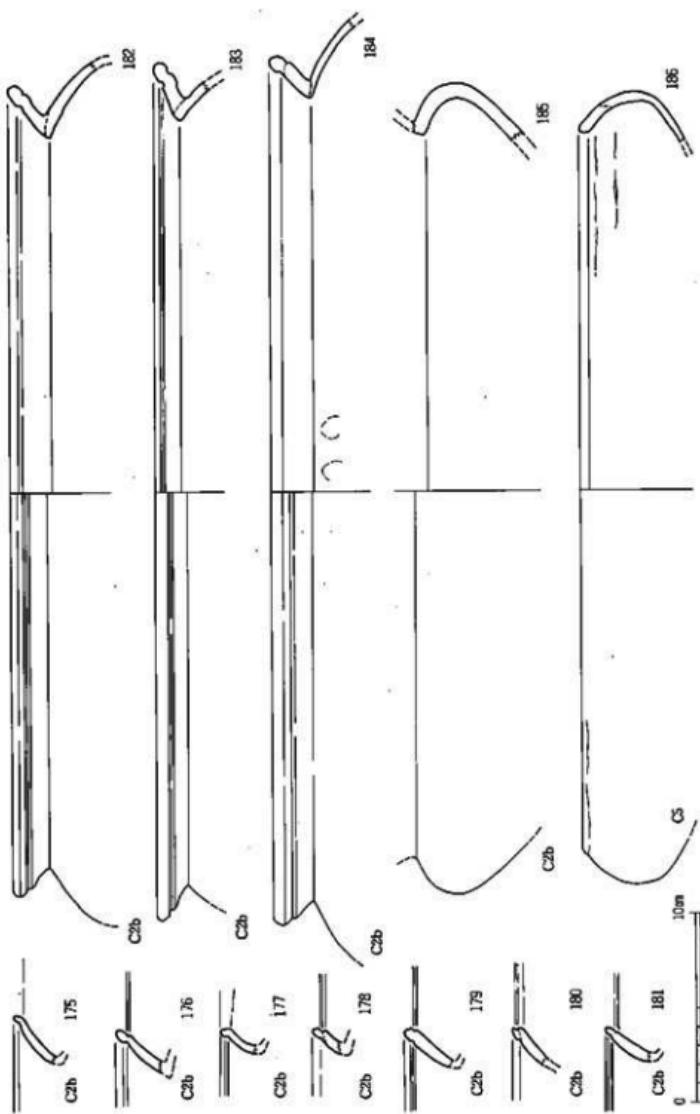


Fig.49 桐製曳鉤実測図 (モ19)(1/3)

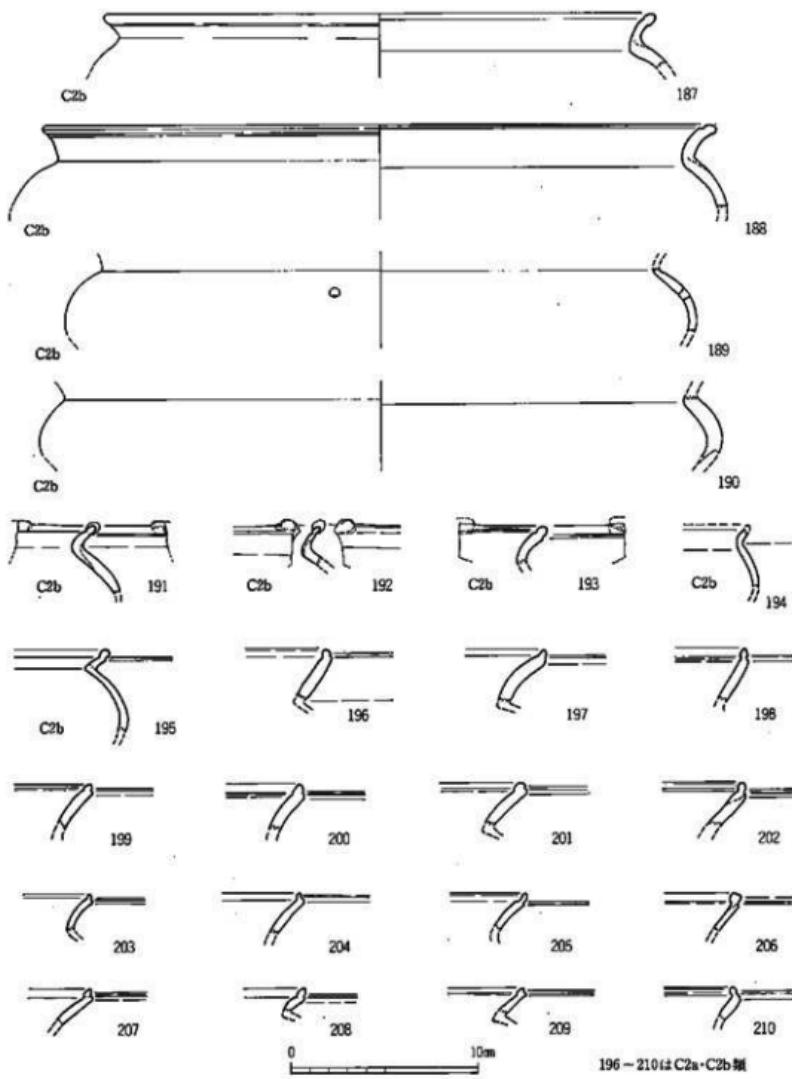


Fig.50 精製浅鉢実測図 (その20)(1/3)

細砂幾らか含み、焼成やや良く内面淡灰褐色、外面暗褐色。188は2層No378とNo384が接合したもの。口縁内面にしっかりした沈線、外面には部分的に消える浅い沈線を施す。内外丁寧な横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良、暗褐～淡橙褐色。189は2層No510で全面器表剥落。細砂幾らか含み、焼成不良で内面黒褐色、外面暗褐色。補修孔あり。190はP280出土で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面黒色、外面白褐～暗褐色。191はP141出土で内外横ヘラ磨き。小さい凸起が付くが形状不明。胎土精良で焼成不良、内面暗灰褐色、外面淡黄褐色。192はIV区1層出土で小さな瘤状凸起が付く。胎土精良、焼成やや不良で灰黄色。193はP340出土で小さな凸起が付く。胎土精良で焼成不良。内面灰黒～淡褐色、外面黄灰色。194はI区トレンチ2層出土で薄手小型品。マリB3類と共通するものか。胎土大旨精良で焼成不良。内面暗灰黄色、外面は淡褐色。195はP555出土品で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面暗黄灰色、外面淡黄白～暗褐色。内面穢が鋭く、C3類に近づいている。196はV区2層出土で細砂僅かに含む。焼成やや不良で内面暗茶灰色、外面灰茶褐色。197はV区2層出土で内面ヘラ磨き。粗砂僅か、微細砂幾らか含み、焼成良く内面黒褐色、外面は黒～橙褐色。198は2層No256で胎土精良。焼成良好黄茶色。199はVI区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面黒色、外面暗灰～黄褐色。200は2層No860で、内外横ヘラ磨き。胎土精良で内面黒色、外面橙褐色をなす。201はVI区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良、焼成やや不良で暗褐色。202はVI区2層出土で細砂幾らか含み焼成不良。内面茶褐色、外面暗褐色。203はI区トレンチ2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良、焼成良好で内面灰褐色、外面灰黒～淡褐色。204はV区2層出土で内面横ヘラ磨き。胎土精良、焼成良好で内面黒色、外面上端は黒色、以下肌色。205はP300出土で薄手の径20cm弱となる小型品。内外横ヘラ磨きで胎土精良、焼成やや良好で内面黄灰色、外面明橙色。206はV区2層出土で内外ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良好、淡橙～黒色。207はP381出土で外面にしっかりした沈線を入れる。胎土精良で焼成不良、暗褐～灰黑色。208はVI区2層出土で胎土精良、焼成不良で淡褐色。209はV区2層出土で胎土精良、焼成不良で淡褐色。210はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良く内外淡褐色。211はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。外面にしっかりした沈線を施す。胎土精良で焼成良好、灰黃褐色。212はP407出土で内外に浅くかなり不明瞭な凹線を施す。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成やや不良で内面は淡茶褐色、外面暗黄褐色。213はV区1層出土で微細砂幾らか含み、角閃石が目立つ。焼成不良で内面黒褐色、外面黄褐色。214はP370出土で外面にシャープな細沈線を施す。内外横ヘラ磨きで胎土精良。焼成やや良く淡灰褐色。215は2層No547で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良、内面淡茶色、外面暗褐色。216はIV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良く、淡茶褐色。217は2層No545で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好暗褐～淡褐色。218はV区2層出土で外面に細沈線2条を入れる異類。本遺跡出土例ではこれ1点のみ。胎土精良で焼成やや良く、内面暗黄灰色、外面暗灰褐～淡橙

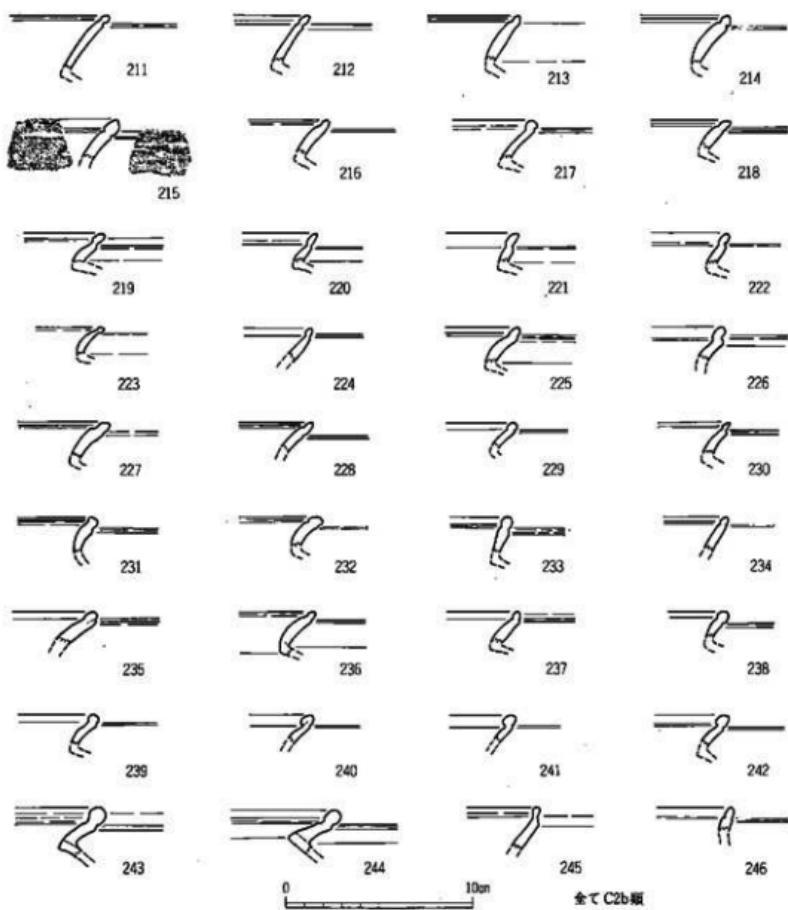


Fig.51 精製浅鉢実測図（その21）(1/3)

色。219はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好、内面黒色、外面淡褐色。220はV区2層出土で胎土精良、焼成やや良好。内面黒褐色。外面淡褐色。221はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良く暗褐～淡褐色。222はIV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面黒色、外面淡褐色。223はVI区2層出土で胎土精良。焼成不良

で内面暗黄灰色。外面黄白色。224は2層No302で胎土精良。焼成不良で黒色。225はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良。焼成やや不良で暗灰褐色。226はP286出土で、細砂幾らか含み焼成不良で内面茶褐色。外面暗褐色。227はVI区2層出土で内外ヘラ磨き。外面は痕跡的凹線。胎土精良。焼成不良で灰白色。228はVI区2層出土で胎土精良。焼成不良で内面灰褐色。外面白褐色。229はP345出土で胎土精良。焼成不良で内面暗灰褐色。外面肌色。230はIV区2層出土で内面に小さな段をつくる。胎土精良。焼成やや不良で淡白褐色。231はP222出土で内外横ヘラ磨き。内面に沈線に近い段をつくり。胎土精良。焼成不良で内面黒色。外面黒～白黄色。232はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面肌色。外面暗褐色。233はIV区1層出土で外面に太めのしっかりした沈線を施す。胎土精良で焼成やや不良。内面灰褐色。外面は淡黄褐色。234はIV区2層山土で内外横ヘラ磨き。胎土精良。焼成良好黒褐色。235はIV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成良好。内面暗褐色。外面淡茶～黄褐色。大型品となろう。236はIV区2層出土で胎土精良。焼成良好淡褐色。237はV区2層出土で細砂僅かに含む。焼成良好で内面淡黄褐色。外面淡茶色。238はP229出土で外面にしっかりした沈線を入れる。胎土精良。焼成やや不良で内面黒褐色。外面黄白色。239はV区2層出土で細砂僅かに含み。焼成不良で内面黒褐色。外面暗茶褐色。240はIV区2層出土で外面に細沈線を施す。胎土精良。焼成不良で暗灰色。241はIV区2層出土で胎土精良。焼成やや不良で灰褐色。242はIV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良。内面黒褐色。外面灰黑色。243はP23出土で細砂幾らか含む。焼成不良で淡黄褐～暗褐色。244はP26山土で胎土精良。焼成不良で明黄茶～黄白色。245はII区2層出土で内面ヘラ磨き。外面は横位擦過に近いヘラナデ。細砂かなり含み。焼成やや不良で内面暗灰褐色。外面茶色。246はV区1層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面淡褐色。外面暗褐色。247～258は外面に沈線等の無いものを集めたが、C3類典型例のように口縁が短いものではなく、むしろ長くて頸内面が丸みを持っているものが多くC1類の古い様相を示すと考えた方がよいものも多い。247はIV区1層出土で内外横ヘラ磨き。微細砂幾らか含み。焼成不良で内面淡褐～黒褐色。外面暗黄褐色。248はIV区2層出土で細砂かなり含み。焼成不良で黄褐～黒褐色。249はV区1層出土で内面の段は沈線状部分もある。胎土精良。焼成不良で内面灰黑色。外面灰黄色。250はI区トレンチ2層出土で細砂僅かに含むのみ。外面横位ヘラナデ。焼成不良で内外黄褐色。251はV区2層出土で口唇部が角張り。古相を示す。胎土精良で焼成やや良く黄灰色。252はVI区2層出土で胎土精良。焼成不良で内面淡褐色。外面淡橙褐色。面取りされた口唇内側にはしっかりした太沈線を入れる。253はP194出土で内外面ヘラ磨き。内面にはしっかりした沈線を入れる。微細砂幾らか含み。焼成良好で内面茶褐色。外面暗褐色。254はP237出土で細砂かなり含み。焼成良好暗茶褐色。255はVI区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面暗褐色。外面橙褐色。256は2層No472で胎土精良。焼成不良で内面淡褐～黒褐色。外面淡灰褐色。257はVI

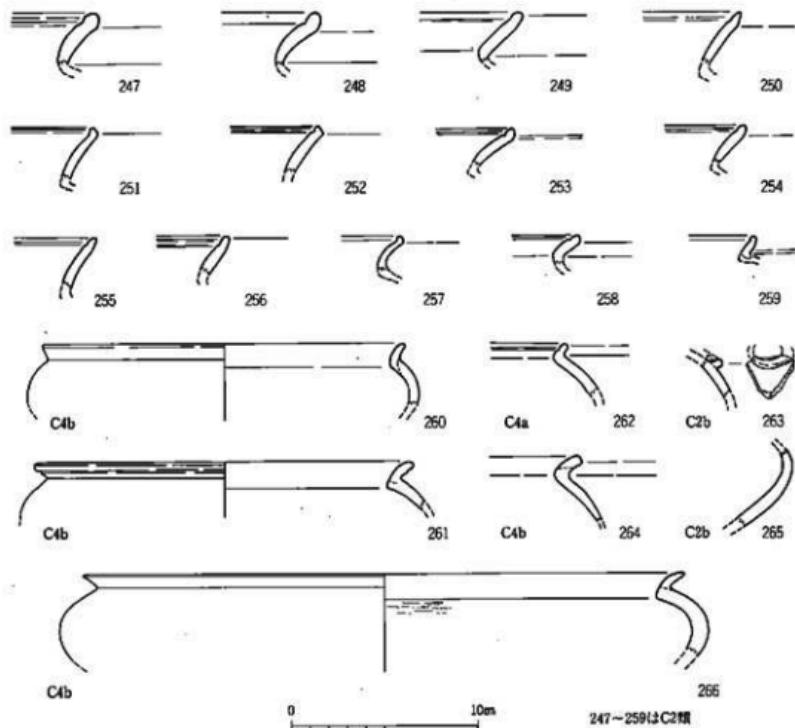


Fig.52 精製浅鉢実測図 (その22)(1/3)

区1層出土で胎土精良、焼成不良で淡灰褐色。258はVI区2層出土で内外横へラ磨き。胎土精良で焼成やや不良。内面黒褐色、外面白褐色。263はC2b・C3・C4類のどれか決め手は無いがここで報告しておく。265も同様。263はV区2層出土でリング状貼土紐を貼り付けたもの。胎土精良で焼成やや不良。内面淡灰黄褐色、外面は褐色。265は2層No.715で、径20cm程の小ぶり品。粗砂僅か、細砂多く含み、焼成良く内面赤茶～茶褐色、外面暗褐色。

C3類(259)本遺跡出土品の中にはこの類の典型例は無い。丸く張る腹部に極めて短い片玉緑口縁だけがちょこんと載る類で、頸部内面が鋭く、内側へ張り出す。基本的に口唇外面に沈線を持たない。本遺跡でこの類の典型例が無いというのは明らかに時期差を示すものと理解できる。近い例の259をとり上げた。2層No.380で内外ヘラ磨き。胎土大旨精良で焼成良好、内面

淡褐色、外面淡茶褐色。

C 4 類 (260~262・264・266) 丸く脣張りする器形で、口縁が玉縁をつくらず短かく外反するのみの類。沈線の有無により 2 種に細分した。C 4a 類 (262) 口縁内面に沈線を持つもので、P414出土品。細砂僅かに含み焼成不良で内面黒色。外面は暗褐~淡茶褐色。器表剥落。C 4b 類 (260・261・264・266) 260は P412出土で内外丁寧な横ヘラ磨き。口径19.4cmで胎土精良、焼成やや不良で内面黒褐色。外面黒褐~暗灰褐色。261は 2 層No364で内外ヘラ磨きか。口縁外面に凹線状部が部分的にある。胎土精良、焼成やや不良で内面淡褐~暗褐色。外面黒褐~淡茶色。264はIV区 1 層出土で胎土精良、焼成不良で明茶色。266は 2 層No344で内外ヘラ磨きであろう。頸部直下内面は横位擦過痕僅かに残る。胎土精良、焼成不良で内面黒褐色。外面白褐~暗褐色。

C 5 類 (186) 丸く脣張りする C 類ではあるが、無頸のものを区別した。186の形状から見て C 2b 類の口頸部の無いものと見られる。2 層No252で口径38cm。外面は横ヘラ磨きであろう。内面磨滅するが上半はやや凹凸あり。胎土精良で焼成不良。口縁内外は明黄褐色、他は黒褐~暗褐色。1/8 残存。

精製浅鉢 D 類 (Fig. 53)

浅い体部から 2 段に短く屈折して、外方へ開く長めの口縁を持つ類。口唇部は尖るのが特徴で玉縁を作らない。器形全体としては果物皿状の浅く広い形状と言えよう。口縁部が長いものから短いものへ、屈折部が 1 回のものから 2 段屈折へ、さらにその折れ曲り角度がきつくなるものへと変化がみられ、3 種に細分した。この類は胎土に細砂粒を含むものが多いのも特徴で、同じく口縁端が尖る B 類と同様で、両者の関連性が現われる。

D 1 類 (267・268・270・275) 屈折部が 2 段屈折にならないもので、口唇部が尖るものと玉縁になるものとに分けられる。D 1a 類 (275・270) は口縁が長く伸び、屈折部は 1 段のまとまる類。275は V 区 2 層出土で内外磨滅。粗砂少量、細砂多く含み、角閃石がやや目立つ。焼成良好で内面茶褐色。外面暗茶褐色。270は VI 区 2 層出土品で、内面に穂がみられることから、D 2 類へ近づいており両類の中間的形態を示す。内面横ヘラ磨きで微細砂幾らか含む。焼成不良で内面黒色。外面灰黄色。D 1b 類 (267・268) D 1 類にしか入れられないものであるが、D 1a 類よりも口縁が短く、口縁の外反もゆるやかで、くびれ部外面が外方へ突出するなど、趣きがかなり異り、まったく別種となる類かもしれない。267は I 区 2 上層出土で細砂幾らか含む。内外横ヘラ磨きか。焼成不良で暗褐~淡褐色。268は V 区 2 層出土でくびれ部外面がシャープに上外方へ突出する。胎土精良、焼成不良で内面灰黑色。外面淡灰褐色。内外磨滅。D 2 類 (269・271~274・276) 長めに外反して開く口縁で、2 段屈折する類。口縁先端は尖るが沈線を入れるものとそうでないものを分けた。屈曲部は D 3 類ほどきつくない。D 2a 類

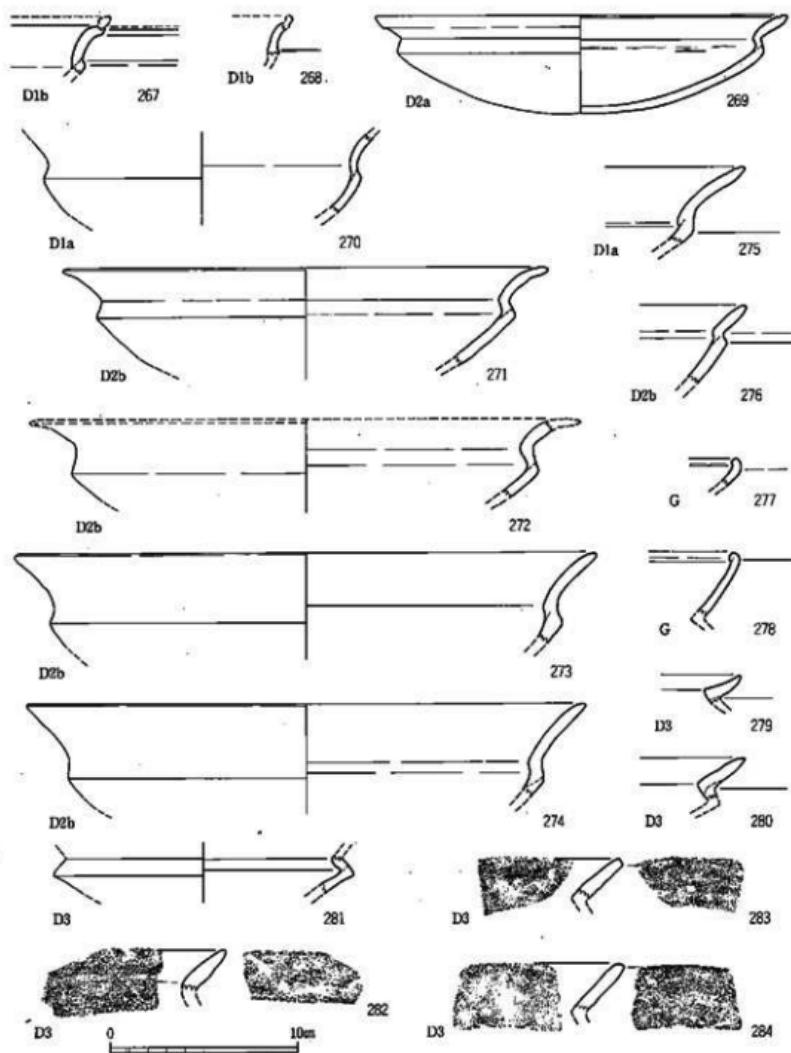


Fig.53 精製浅鉢実測図 (その23)(1/3)

(269) は口唇内面に沈線を入れ、口縁が短かめで、やや D 3 類に近い。269は 2 層 No.400 で内外面横へラ磨き。細砂幾らか含むのみで焼成やや良く、内面黒～暗黄褐色、外面暗灰褐色～淡褐色。口径 22cm、器高 5.2cm、1/3 強残存。D 2b 類 (271～274・276) 271は P186出土で内外へラ磨きであろう。細砂かなり含み焼成不良で、外面黒色、内面暗茶～黒褐色。272は 2 層 No.381 で内外面へラ磨き。粗砂幾らか含む。焼成やや不良で外面黒色、内面暗褐色～茶褐色。273は 2 層 No.17 で細砂多く含む。焼成良好で内面暗茶褐色、外面暗褐色。体部外面はやや凹凸あり。274は IV 区 2 層出土で内外磨滅。粗砂少量細砂多く含む。片岩片・角閃石・黒曜石細片も含む。焼成やや不良で内面暗黄茶褐色、外面暗灰褐色～暗褐色。276は V 区 2 層出土で内外横へラ磨き。細砂幾らか含み焼成不良。内面暗黄褐色、外面暗褐色～黒褐色。

D 3 類 (279～285) 強く外開きする短い口縁からほぼ直角に 2 段屈折して浅い体部へ続く類。強い屈折に特徴がある。279は VI 区 2 層出土で内外へラ磨き。胎土精良で焼成不良、灰～黒灰色。口縁が内湾しており、マリ B 3 類的器形、或は C 類のような胴張りになる可能性も残る。280は V 区 2 層出土で細砂幾らか含み、焼成不良で灰褐色。281は VI 区 2 層出土で粗石英粒を幾らか含み、焼成不良で内面黄灰褐色、外面灰～黒褐色。内外横へラ磨き。A 5 類にも近い。282は 2 層 No.93 で粗砂少量、細砂多く含む。焼成不良で茶褐色。内外磨滅。283は P357出土で内面横へラ磨き、外面はやや凹凸多くナデか。細砂幾らか含み、焼成不良で内面黒色、外面黒褐色。284は V 区 1 層出土で内面横へラ磨き、外面は横位の雜なナデでやや凹凸がある。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面こげ茶色、外面黒褐色。285は全く器種が違って C 類の胴張り類の変種かもしれない。P226出土で外面横へラ磨き、内面磨滅。口径 22cm で胎土精良、焼成不良で灰黒色。

精製浅鉢 E 類 (Fig. 54-286～290)

先端が尖った口縁が長く大きく開き、くびれ部で小さく屈曲するが体部も口縁と同じ角度で真っすぐ開く類で、口縁の形態は B 類と酷似するが、開く角度が全く異り、E 類は全体に浅い開いた皿状形態をなす。胎土も良く、286のように装飾を持つものがある点からも、薄手精製の祭祀用的な特殊土器と考えられる。286は 2 層 No.565 で、口縁外面に竹管文、体部上端に爪形の半裁竹管文を施す。細砂少量含むが大旨精良。焼成不良で黄灰色。287は P270出土で胎土精良で焼成不良、明黄褐色。288は 2 層 No.240 でくびれ部外面に沈線を施す。胎土精良で焼成不良、内面灰黒色、外面明肌色。289は 2 層 No.231 で胎土精良、焼成不良、内面灰黒色、外面肌色。290は P390出土で胎土精良、焼成不良で内面淡茶褐色、外面は暗褐色。

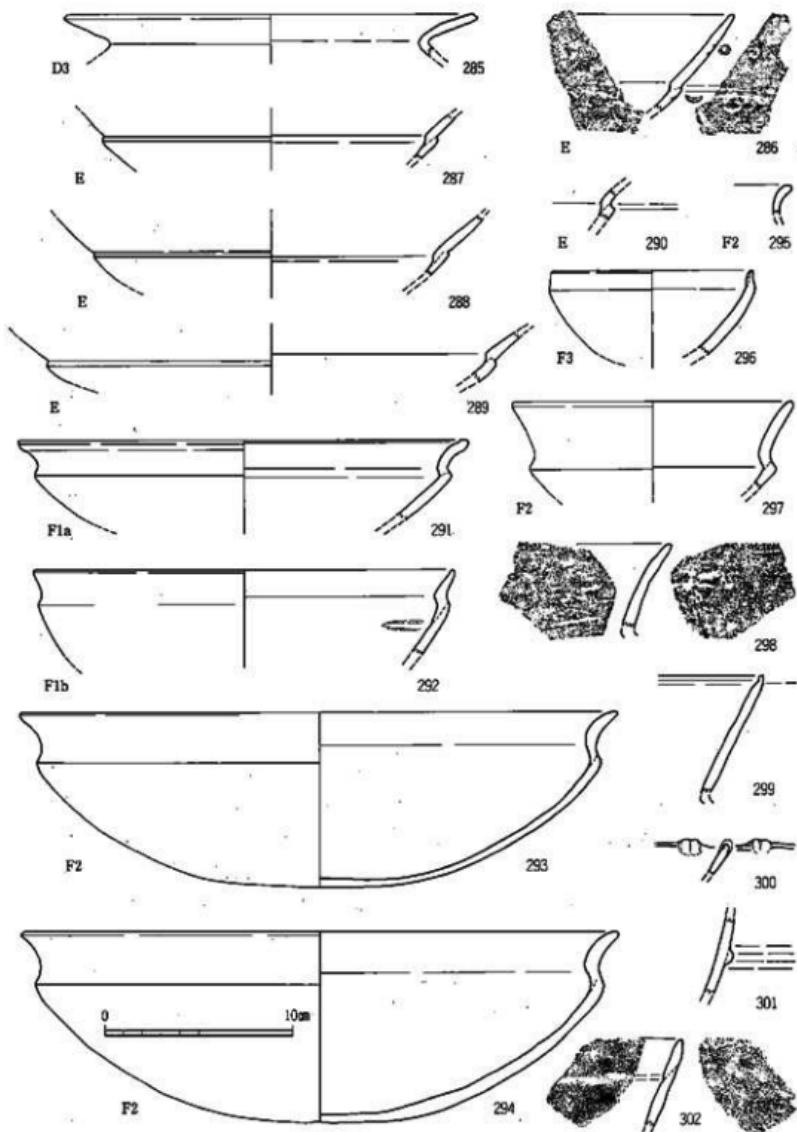


Fig.54 精製浅鉢実測図 (その24)(1/3)

精製浅鉢 F類 (Fig.54-291~297)

短い口縁が丸く外反して立ち上り、丸底の鉢状の器形となるもので晩期末葉～弥生早・前期の鉢形土器の系統へと繋がる類。F2類を典型とするが、亜種または祖形的なものを区別して2種に細分した。

F1類 (291・292) 291のような口唇部が玉縁的な様相を残したり、くびれ部が外面稜の直上で小さく屈折気味になる類。F1a類 (291) は口縁内面に小さな段をつくり、D1b類 (267) と共に通するような形態をなす。P296出土で内外面ヘラ磨きか。粗砂僅かに含み、焼成やや良く淡黄褐～灰色。口径24cm。F1b類 (292) は頸部内面にしっかりした稜をつくり、短く直線的に外傾する口縁となる。外面稜はむしろ丸っこくなり、マリB2類的でさえある。本来F類には含まない方が良いのかもしれない。2層No.314で内外面横ヘラ磨き。内面には部分的に指押さえナデが残る。粗砂かなり含み、焼成やや良く内面暗褐色、外面は暗褐～茶褐色。

F2類 (293～295・297) 全体から見ると短めの口縁が丸く外反して立ち上がる丸底鉢状類。297のような小型特異類もとりあえずここで報告しておく。293はIV区2層出土で口径32cm、器高9.4cm。口縁外表面は横ヘラ磨き、体部外表面はヘラナデ状。粗砂かなり含み、角閃石が目立つ。焼成やや良く黄白～黒褐色。294はIV区2層出土で口縁外表面と内面は横ヘラ磨き。体部外表面は丁寧なヘラナデ状。粗砂幾らか含み、角閃石が目立つ。焼成やや不良で内面淡黄灰～黒褐色、外面淡黄褐～黒褐色。295はP12出土で粗砂幾らか含み、焼成不良で黄白褐色。297はI区2層出土で内外ヘラ磨き。微細砂僅かに含み焼成不良で灰黒～黄褐色。

F3類 (296, Fig.57-40) 外面がへこみ、短く直立する口縁に丸い鉢状体部が付く類。小型類でマリとしても良い。296はP296出土で内外横ヘラ磨き。微細砂幾らか含み焼成良好で、内面暗褐色、外面は明茶～暗褐色。口径10.8cm。Fig.57-40は手違いでマリの図の方に入れたが、この類そのものである。V区2層出土で内外丁寧なナデか。胎土精良で焼成やや明灰黄色。外面に継位の条痕的痕跡がみられる。

精製浅鉢 G類 (Fig.53-277・278)

口唇内側が突出し、内湾して開く薄手タイプである。全体の器形がよく判らないが、頸部以下が長く外方へ張り、もう1回屈折する晩期中葉新段階の精製深鉢となる可能性も残る。277はP475出土で外面縁は不明瞭。胎土精良、焼成不良で黒褐色。278はV区1層出土でやや磨滅するが内外ヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良、内面暗褐色、外面黄茶褐色。

精製浅鉢その他類 (Fig.54-298～302)

ここでは薄手精製品で浅鉢と同種と思われるが明確に前記までのどの類にも属さないものや、どれかに入るだろうが決められないものをまとめて報告する。中でも299などは別類を立てて

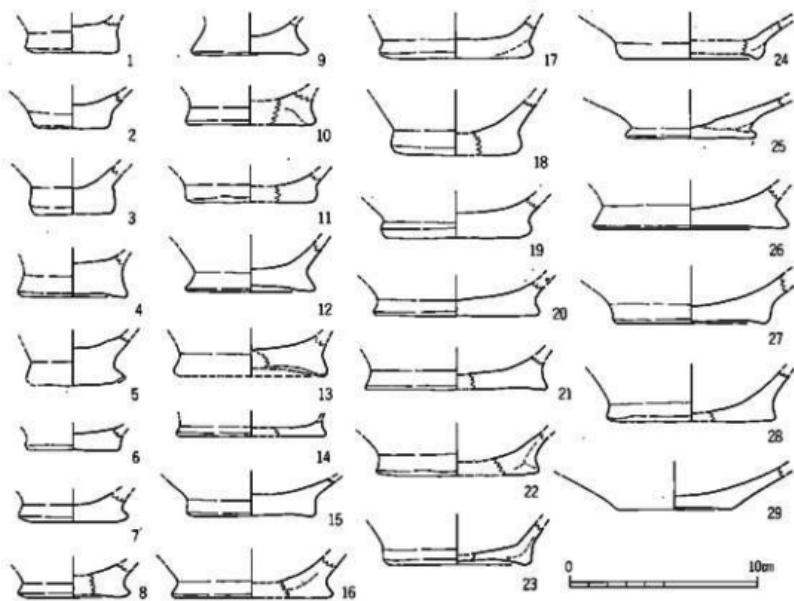


Fig.55 浅鉢底部実測図 (1/3)

もよいのだが、類例がこの1点のみで何ともしようがない。298は2層No704で、外反して聞く長い口縁で、波状となるB類、或は丸い胴張りとなるC類の可能性もある。内外面横ヘラ磨きで、外面は雑。粗砂僅か、微細砂かなり含み焼成やや不良。内面暗灰褐色、外面黄褐色。299は2層No616で内外ヘラ磨き。直線的に長く聞く口縁で、口唇内側をへこませて玉線様につくる。細砂かなり含み焼成やや不良。内面茶褐色。外面暗褐色。以下の胴部形状は見当がつかない。300はV区2層出土で中央切目の瘤状凸起が付く薄手品。内外磨滅しており、胎土精良で焼成やや良く灰褐～黒褐色。A 5類か D 2a類となるか。301はVI区2層出土で外面に横位の丸っぽい台形状凸帯を付ける。外面横ヘラ磨き、内面磨滅。胎土精良、焼成不良で淡褐色。B 2b類となるか。302はIII区2層出土で内面は丁寧な横ヘラ磨き。外面は横位ヘラナデでやや凹凸あり。内面中位に凹線状部があり、丁度接合部ではあるが意識的段状部と思われる。細砂いくらか含み、焼成不良で黒褐色。B 3類の波状口縁類、或はもっと外傾してE類となるか。

浅鉢底部 (Fig.55)

ここでは浅鉢の底部のうち丸底類を除く、平底・上げ底類を報告する。径が小さく厚手類

(1~5) や、大・中径類で縁だけが接地するはっきりした上げ底類 (12・13・23・24・27・29) 等が特徴的である。1はⅢ区2層出土で径5cm。内外ナデで淡橙色。2は2層No.352で径4.1cm。内面暗橙褐色。外面橙褐色。3はVI区1層出土で径4.2cm。内面ナデで褐色。外面は橙褐色。4はP141出土で径5.8cm。内外面ナデで僅かな上げ底。5はIV区1層出土で径5.2cm。内外面ナデで橙褐色。6は2層No.88で径5cm。内面褐～暗茶褐色。7はV区2層出土で径5.8cm。内外面ナデで内面橙褐～橙黄褐色。8はV区2層出土で径6cm。内外面ナデで僅かな上げ底。内面淡褐色。外面橙褐色。9は2層No.21で径6.2cm。僅かな上げ底で内面橙褐色。外面黄橙褐色。10は2層No.60で径7cm。内面ナデで暗褐色。外面橙褐色。11は2層No.233で径7cm。内面橙褐色。外面明橙褐色。12はV区2層出土で径7cm。底外面ナデで上げ底。内外橙褐色。13はⅢ区1層出土で径8.2cm。内外面ナデで内面暗褐色。外面橙褐色。14はV区1層出土で径8cm。薄手円盤底部で内外面ナデ。胎土精良で橙灰色。15はVI区1層出土で径6.9cm。内外ナデで僅かな上げ底。内面褐色。外面淡橙褐色。16はP417出土で径8.6cm。内面黒色。外面橙褐色。17は2層No.319で径8.3cm。内面ナデで褐色。外面橙褐色。18はV区1層出土で径7cm。内外面ナデで厚手類。内面黄褐色。外面橙黄褐色。19は2層No.66で径8cm。内外面ナデで内面は褐色。外面は橙褐色。20はV区2層出土で径9cm。内外面ナデで内面褐色。外面橙褐色。21はP300出土で径9.8cm。僅かな上げ底で内面ナデ。内外黄褐色。22は2層No.64で径8.8cm。内面暗褐色。外面明橙褐色。23は2層No.532で径8cm。内面に炭化物付着して全体に上げ底。内面黒色で外面黄～褐色。24は2層No.541で径7.2cm。全体に上げ底で細砂幾らか含む。焼成不良で外面淡橙褐色。内面黒褐色。25はV区1層出土で内外面ナデ。径7cmで粗砂僅かに含み。焼成やや不良。内面暗褐色。外面橙褐色。26はⅢ区1層出土で底径10.4cm。僅かな上げ底で内外面ナデで淡橙黄色。27はVI区1層出土で径8cm。僅かな上げ底で内面ナデ。内面黄橙褐色。外面橙褐色。28はV区1層出土で径9cm。内外黄褐色。29は径6cmでIV区2層出土。内外ナデで褐色。僅かな上げ底。

マリA類 (Fig.56)

マリ形土器特有の極く短い口縁に至らない、まだ長めの段階で、口縁中位内面に段をつくる類。口唇部が角張り、ものによっては段のかわりに沈線を施す。当然精製浅鉢A4類と同様の変化過程段階を示している。本遺跡ではこの類の出土は僅かで、糟屋郡久山町堀田遺跡ではこの例が圧倒的に多く、マリA類がB類より一段階古いという時期差を示していると思われる。

A1類 (1~3) 口縁中途内面に段をつくり、頸部で短く2段屈折し、深い体部となる類。1は註記もれの出土地点不明品で、内外横ヘラ磨き。波状口縁になるが凸起部はもっと高くなろう。細砂幾らか含み、焼成不良で内面淡褐～灰黑色。外面黄茶褐色。2はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。胎土精良で焼成やや良好。内面黒褐色。外面白褐色。3はV区2層出土で内外横

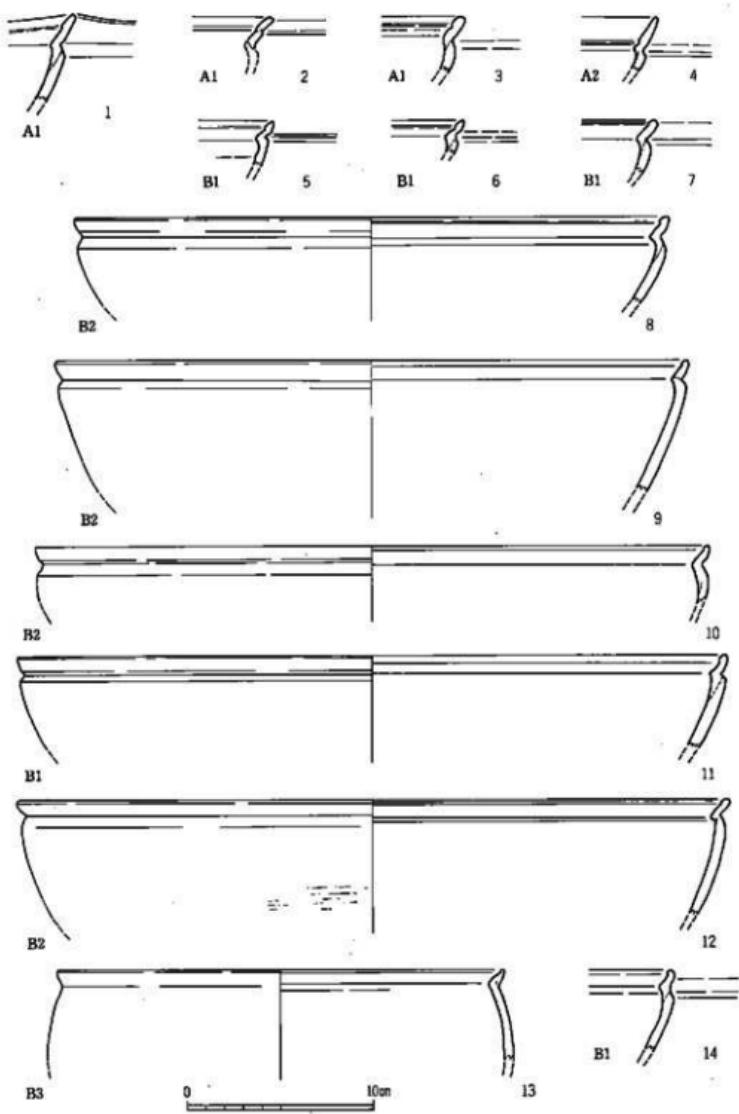


Fig.56 マリ実測図 (その1)(1/3)

ヘラ磨きか。細砂かなり含み、焼成不良。内面黒色、外面暗灰褐色。

A2類（4）内面に沈線を施す類である。同様な例は精製浅鉢 A5類（49）にもみられ、沈線の位置等は酷似するが、口縁の長さ、くびれ部の形状が異なるため、一応別類と考えておく。4は内外横ヘラ磨きでIV区2層出土。内面の沈線はしっかりしており、胎土精良、焼成不良。内面灰黒～暗褐色、外面は淡黄褐色。

マリB類 (Fig.56・57)

極く短い口縁が片玉縁につくられ、短く屈折して深めの体部へと続く類。屈折部の内面稜はいずれも脱いが、外側の体部との境の稜がしっかりシャープな稜をなすものと丸みをもつものとに細分される。

B1類（5～7・11・14～16・18～24・26）外面体部上端の稜がしっかり角張るシャープな類だが、5・6のように口縁内面の玉縁下段がまだA1類的なものも含む。5はIII区2層出土で口唇内面がやや平坦状をなし、A1類の雰囲気を残す。胎土精良で焼成不良、内面灰褐色、外面淡黄褐～灰色。6はIV区2層出土で、口縁内面は玉縁と段の中間的類。胎土精良で焼成不良、内面淡褐色、外面灰黄色。7はV区2層出土で内外面横ヘラ磨き。胎土精良で焼成不良、内面は暗褐色、外面は暗茶～褐色。11は2層No.285で内外横ヘラ磨き。胎土精良、焼成やや良く暗灰茶褐色。口径38cm。14はV区2層出土で内外ヘラ磨きであろう。細砂僅かに含み、焼成良好で暗黄茶褐色。15はIV区2層出土で細砂僅かに含む。焼成やや良く内面灰褐色、外面暗褐色。16はV区2層出土で細砂幾らか含む。焼成やや良く内面明黄褐色、外面明黄～灰黑色。18はIV区1層出土で内外ヘラ磨き。細砂僅かに含み、焼成良好で内面灰茶褐色、外面淡茶色。19はIV区1層出土で細砂幾らか含む。焼成不良で灰黃褐色。20はV区1層出土で細砂かなり含む。焼成やや不良で内面淡灰茶褐色、外面淡茶褐色。21はP497出土で径20cm強の薄手小型品。胎土精良で焼成不良。内面淡茶褐色、外面黑褐色。22も小型品でIV区2層出土。細砂僅かに含み、焼成不良で内外黒褐色。23はP345出土で胎土精良、焼成不良で内面こげ茶～淡褐色、外面黄灰～暗褐色。24は2層No.244で、粗砂僅か、細砂幾らか含む。焼成不良で内面濃灰色、外面淡褐色。26はIII区2層出土で細砂僅かに含む。焼成やや良く暗橙褐色。

B2類（8～10・12・17・25・27～38）玉縁口縁につくるマリのうち体部上端外面稜部分が丸みを持ちふくらみをみせるもの。B1類と余り区別がつかないものも多いが、12や17が典型例となる。8は2層No.380で口径31.8cm。体部外面稜は丸くなる部分と明瞭な稜線をなす部分と両方ある。内外横ヘラ磨きであろう。微細砂幾らか含み、焼成良好で内面暗褐～黒褐色、外面茶褐～暗褐色。9は2層No.184で外面やや凹凸あり。細砂かなり含み、焼成やや不良で内面淡灰茶褐色、外面は暗黄茶～灰黑色。10はP262出土で細砂幾らか含む。焼成やや不良で内面淡褐～暗灰褐色、外面淡褐色。12は2層No.67で外面下半に横位擦過痕残る。口径38cmの大型品で

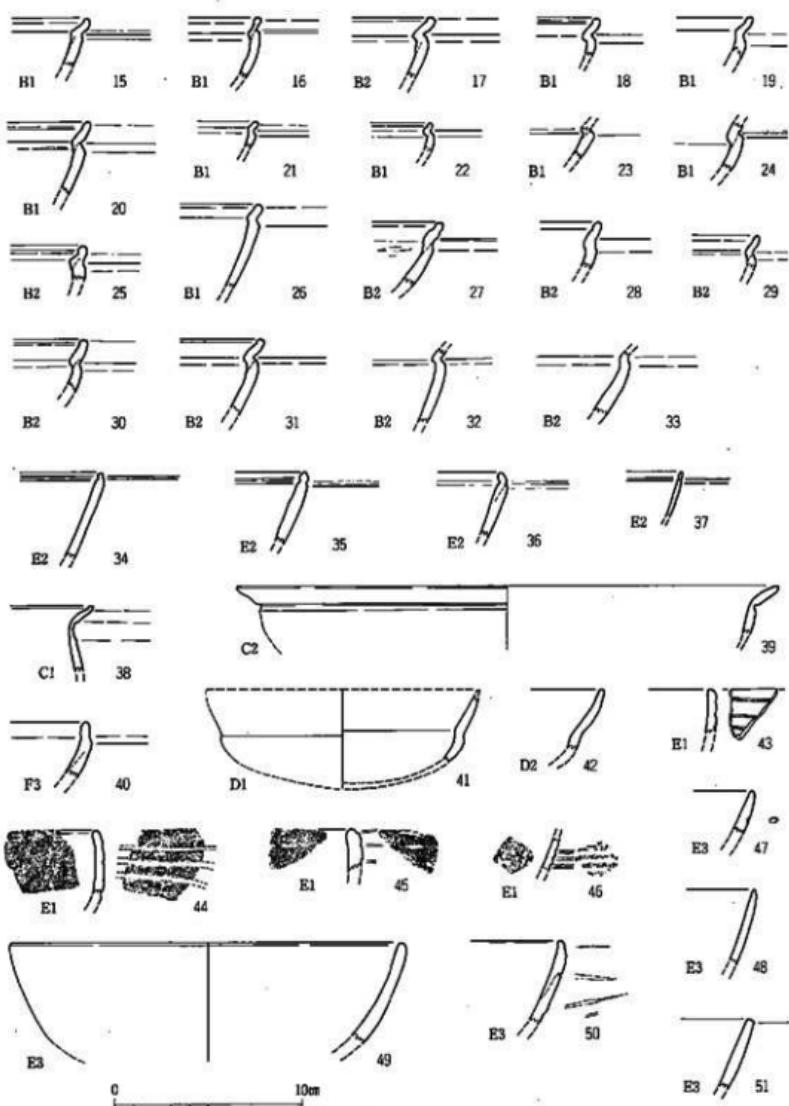


Fig.57 マリ実測図 (その 2)(1/3)

細砂幾らか含む。焼成やや不良で内面灰灰褐色、外面淡茶～淡灰黄色。17は2層No.82で細砂幾らか含む。焼成やや良好内面灰褐色。外面は淡黄灰色。25はVI区2層出土品で胎土精良。焼成不良で淡黄茶褐色。27はIV区1層出土で内面頸部下に横位擦過痕残る。細砂僅かに含み、焼成やや不良で暗褐色。28はIII区2層出土で細砂僅かに含み、焼成良好く橙茶色。29はV区2層出土で細砂僅かに含み、焼成良好く茶色。30はV区2層出土で胎土精良。焼成不良で内面灰灰色。外面黑色。31は2層No.86で内外面横ヘラ磨き。かなり大口径となり、細砂僅かに含む。焼成やや不良で内面暗灰褐色。外面橙茶褐色。32はV区2層出土で内外横ヘラ磨き。細砂僅かに含み、焼成不良で内面灰黄褐色、外面淡橙褐色。33は2層No.82で細砂幾らか含み、焼成不良で内面淡褐色。外面黒褐色。

B3類（13）片玉縁口縁を持つが、体部が中位で最大径を持つ胴張り類。ざんぐりした全体の器形自体は古閑式の内湾口縁類の中にみられ、あながち特殊品ではない。13はP262出土で内外ヘラ磨き。口径24cmの中型品で胎土精良だが角閃石片が目立つ。焼成良好で黒灰色。1/6存。

マリC類 (Fig.57)

薄手で短かめの口縁が外折して強く開き、深いマリ状体部となる類。頸部の外面は凹状に強くへこむ特徴がある。マリB3類と共通性あり。

C1類（38）口縁内面を片玉縁状につくり、胸部がマリB3類的に張る類。38はIV区2層出土で内外磨滅。胎土精良で薄手精製。焼成良好で肌色。

C2類（39）短い口縁が外折する類で口唇部は尖り気味になる。39は小片のため径が不正確。波状口縁の可能性もある。IV区1層出土で細砂僅かに含む。焼成不良で内外暗灰灰～灰茶褐色。特殊例と考えざるを得ない。

マリD類 (Fig.57)

長めの口縁がやや長めに外傾して立ち、頸部で屈曲して浅い体部となる類。頸の屈曲がシャープなもの（1類）と丸味をもってだらけた感じのもの（2類）に細分した。

D1類（41）復原口径14.5cm、器高5.4cm程となりそうな小型品でP138出土。内外横ヘラ磨きであろう。粗砂僅かに含み、焼成やや不良で内面灰褐色～肌色、外面暗灰褐色～明黄白色。

D2類（42）VI区2層出土品で内外ヘラ磨きか。細砂幾らか含み、焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は灰褐色。頭部が丸く屈曲し、端部は丸くおさめる。個体変容の特殊例と思われる。

マリE類 (Fig.57)

頸部をつくって屈曲するのがマリA～D類であったが、ここでは屈曲を持たずに単純にポール状（マリ形）となる類。文様の有無等により3種に細分した。狭義のマリ形土器である。

E1類（43～46）内湾気味に立ち上がる口縁の外面に横の平行沈線を施したもの。44のように下弦曲線文となるものもあり所謂滋賀里系と関連するものである。43はVI区2層出土で、3本の平行沈線は斜めに下がるかもしれない。粗砂かなり含み、焼成不良で内外暗灰褐色。44はV区2層出土で内外面へラ磨き。しっかりした3本の沈線のうち下2本は曲線となる。微細砂かなり含み、焼成不良で内面茶色、外面灰～淡灰褐色。45はP138出土で内面は横位擦過の上をナデか。微細砂幾らか含み、焼成やや不良で内外淡褐色。やや厚手。46はP139出土で細砂多く含む。焼成不良で内面茶色、外面灰紫色。

E2類（34～37）屈曲部をつくらないマリのうち口唇内外面に沈線を入れて玉縁状とする類。うち34などは精製浅鉢その他類の299とも似ており、共通性が考えられる。34はP291出土で微細砂多く含み、焼成不良。黒褐～淡茶褐色。やや内湾気味。35はIV区2層出土で外面横へラ磨き、内面磨滅。細砂幾らか含み、焼成良く淡黄褐色。36はP313出土で内外へラ磨き。胎土精良で焼成良く内面淡茶黄色、外面黄白褐色。37はIV区2層出土で厚さ2mmと極めて薄手。胎土精良、焼成不良で黒褐色。

E3類（47～51）内湾気味に開いただけの無文の単純マリ類。47はP229出土でやや磨滅するが内外へラ磨き。外面に「米圧痕」がみられ貴重な資料。長さ4.75mm、幅2.7mmで長短比1.76の短粒類。出土層位が第1層下面に掘り込まれたピットのため、断定はできないが、縄文晩期後葉古段階（黒川式古期）と比定できる重要な例である。胎土精良で焼成やや良く内外淡褐色。48はP310出土で内外丁寧なへラ磨き。胎土精良で焼成良く内面灰褐色、外面黒色。49は2層No.391で口径21.2cmのやや厚手類。内面へラ磨き、外面もかなり平滑で、細砂幾らか含む。焼成良く内面暗黄褐～茶褐色。外面黒褐～暗黄褐色。50は2層No.462で内面横へラ磨き、外面横位条痕の上へラナデか。細砂僅か含み、焼成やや不良で内面淡茶褐色、外面淡褐色。51はP27出土で内外横へラ磨き。口唇部が角張り、胎土精良、焼成不良で黒褐色。

精製深鉢A類 (Fig. 61-37・39)

長く立ち上がり開いた頭部の上に短い口縁を直立に付ける類。縄文後期末からの伝統的器種の流れ中で最終のもので、口縁外面をへこませるものと、無文の垂直面をなすものとがある。本遺跡では極めて稀少例。37はVI区2層出土で粗砂幾らか細砂多く含む。焼成やや不良で内面暗黄～暗褐色、外面淡茶褐色。39はV区1層出土で胎土精良。焼成不良で暗灰黄色。

精製深鉢B類 (Fig. 61-31～33・35)

縄文晩期中葉の入佐・古開式段階の、肥厚して外開きする口縁の外面に沈線を施す類のくずれたもの。条痕や沈線・縫合調整等、口縁外面の文様帶を多少とも意識した類だが、ここに掲げる例はいずれも残映的状況のもので、素直にC類に入れてしまっても良い。31はIV区2層

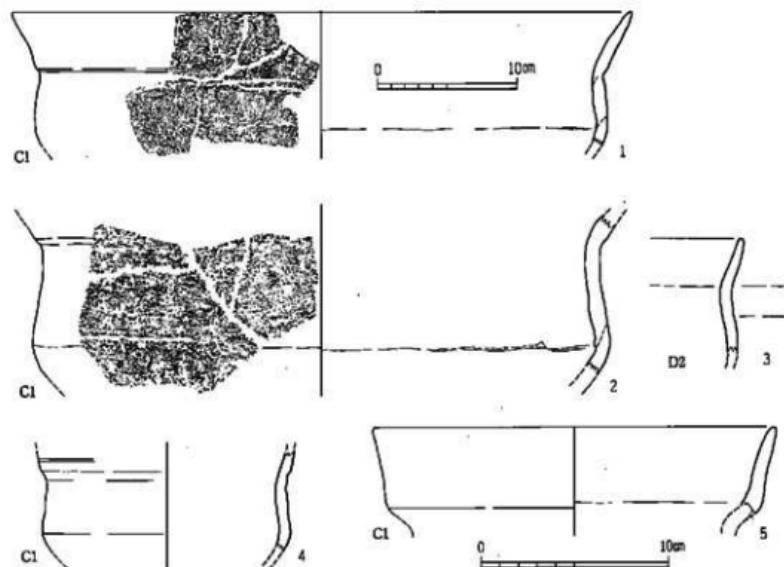


Fig. 58 精製深鉢実測図（その1）(1のみ1/4, 他は1/3)

出土で細砂多く含む。焼成良く檀茶色。太くしっかりした沈線。31はP360出土で内面は丁寧なナデで平滑、外面はやや雑な横位ヘラナナデ状で凹凸多し。胎土精良で焼成不良。内面淡褐色、外面明黄褐色。33はV区2層出土で外面上半に横位条痕、下半は横位擦過。内面は平滑でヘラナナデ状。細砂幾らか含み、焼成不良で黒褐色。35はP360出土で内面丁寧な横ヘラ磨き、外面上半は凹凸を残す。

精製深鉢 C類 (Fig. 58・59・61)

肥厚する長めの口縁が開き、頸部が僅かに内傾して立ち、下端で屈曲して体部へと続く類。基本的にはD類の2段屈折深鉢に直結する類。頸部の長さが古闕・入佐段階典型例より短く、D類への移行段階であることを如実に示す。波状口縁となるものをC2類とした。

C1類 (1・2・4・5・30・34・36) 上記C類のうち波状口縁とならない類。1は口径44cmの大型品でIV区2層出土。外面は横位擦過の上ナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面暗茶褐色、外面茶～黒茶色。口縁外面と下端付近に煤付着。2は2層No509で、外面は横位擦過の上をナデ、内面は凹凸かなり多い。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面明茶色、外面茶～

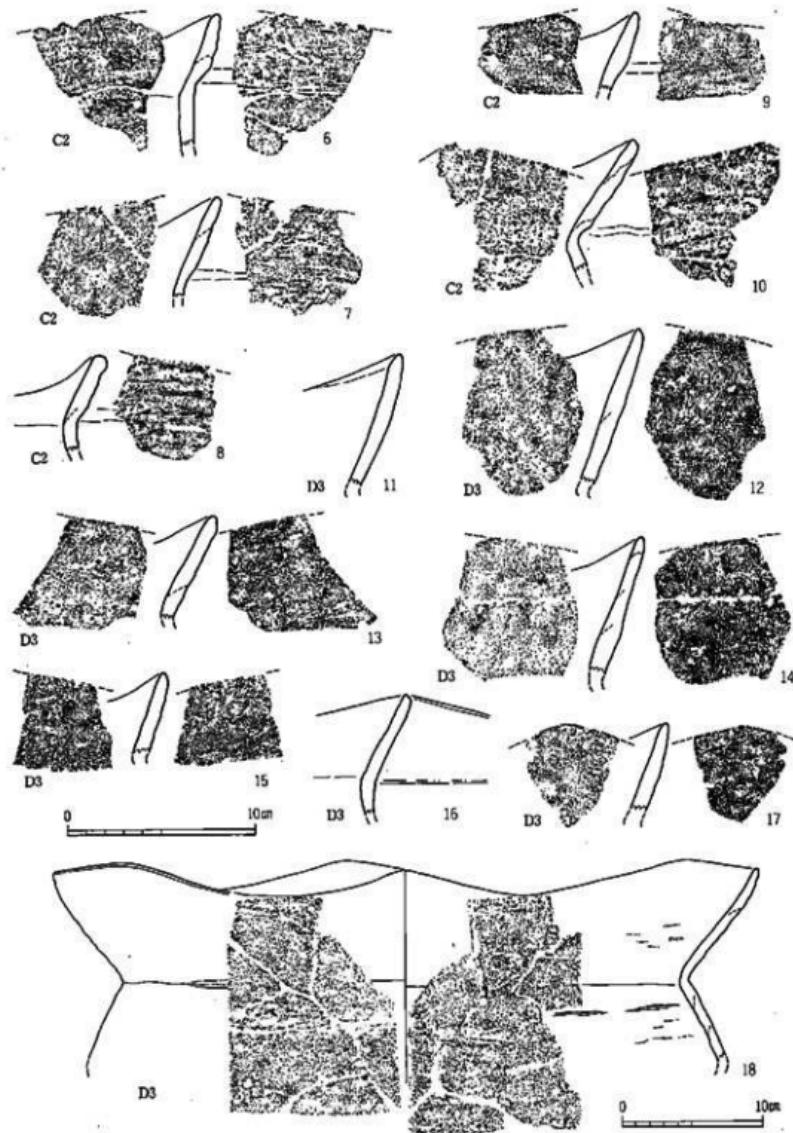


Fig.59 精製深鉢実測図（その2）(18のみ1/4, 他は1/3)

暗褐色。4はIV区1層出土の小型品。内外平滑で口縁外面に不明瞭だが沈線があるようだ。細砂かなり含み、焼成不良で内外暗褐色。5は2層No.395で内外やや雜な横位ヘラナデ。粗・細砂多く含み、焼成やや良く淡褐色。断面下端は接合面。30はVI区2層出土で内面ヘラナデ、外面は極めて雜な横位ヘラナデ。粗・細砂幾らか含む。焼成やや良く内面暗灰茶褐色。外面明茶色。34はV区1層出土で内面に凹線が入る。外面はやや強い横位指ナデで凹凸やや多し。内面ナデか。細砂多く含み、焼成良好で内面淡茶褐色。外面暗黄褐色。36はP237出土で内面横位ヘラナデ。深鉢D類でもよいが、低い凸帯状の肥厚が意識的になされている為この類に入れられた。微細砂かなり含み、焼成不良で黒～淡茶色。

C2類（6～10）口縁外面が肥厚して波状口縁となる類。全器形としてはD3類と大差無いが、6のように頸部がまだ立つ頃も残る。6は2層No.89で粗・細砂幾らか含む。内面横位擦過の上をナデ、口縁外面は雜な横位擦過で凹凸多し。頸部外面はナデで上端には横位条痕残す。7は2層No.369で内面は平滑なナデ、外面は雜な横位擦過。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面茶色。外面は暗茶褐～黒褐色（煤付着）。8はVI区住1混入品で内面ナデ、外面は横位ヘラナデで凹凸やや多い。焼成良く橙茶色。粗・細砂幾らか含む。9はIV区1層出土で外面はやや雜な横位ヘラナデ。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面茶色。外面は煤が付着して暗褐色。10は2層No.666で頸部内面横位擦過、口縁外面は凹凸の多い雜な横位ナデ。他面はナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良で暗茶褐色。

精製深鉢D類 (Fig. 58～60・63・66)

長めに開く口縁から頸部で「く」字状に折れて下へ張り、更に屈折して体部下半へ続く類。口縁の肥厚したものは見られず、外面屈折痕直上に段や沈線を施す浅鉢A3類と共通する特徴を持つもの（D1類）、口縁が波状となるもの（D3類）、それ以外の通常のもの（D2類）等に細分できる。この類は典型的繩文晩期中葉新設階の土器で本遺跡の主要時期のひとつを示している。

D1類 (Fig. 66-90・95～97) 外面縁の直上に段や沈線を施す類。90はP390出土で外面は横位条痕かなり残る。内面ヘラナデか。粗砂少々、細砂多く含み、焼成不良で淡黄褐色。段は明瞭。95は2層No.703で内面やや雜な横位ヘラナデ、外面は丁寧なヘラナデ。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成やや不良で内面黒色。外面は淡茶～暗黃灰色。96はP121出土で内面横位ヘラナデ、外面は横ナデか磨き。外面に細く浅い沈線を施す。粗砂僅か細砂かなり含み、焼成不良で暗灰褐色。97はV区2層出土で外面に2条の太い沈線を施す稀類。内面には横位条痕を施す。外面縁から下は横位擦過。粗・細砂少量含み、焼成やや良く内面暗黄褐色。外面暗褐色。

D2類（3・19～29・61・62・64・66・89・91～94）口縁が大きく開き、胸部で更に屈曲するもので波状口縁にならない類。口縁が直線的・内湾気味に長く開き、頸部～胴上半が強く直線

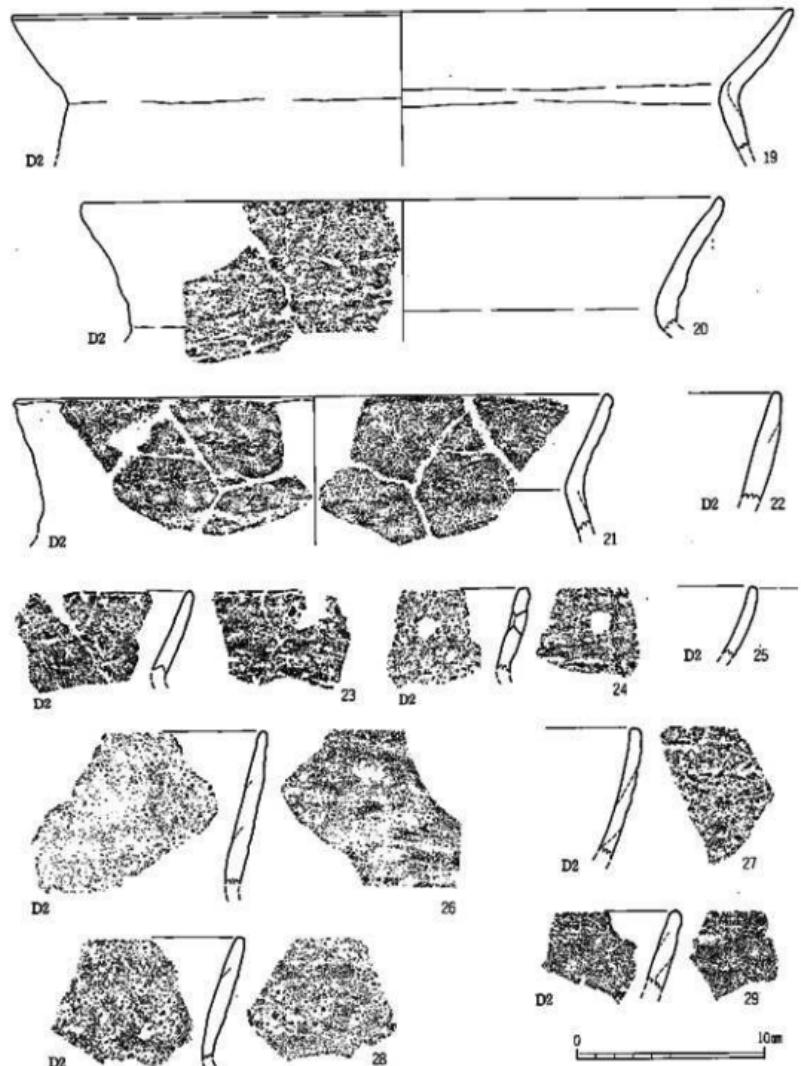


Fig.80 精製深鉢実測図 (その3)(1/3)

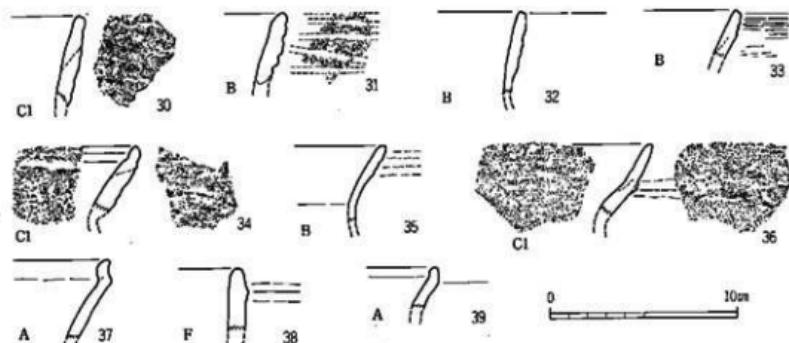


Fig.61 精製深鉢実測図(その4)(1/3)

的に張るのが特徴であるが、3のように小ぶり類あまり張らないものも含めた。3はⅢ区2層出土で各部の屈折はかなり不明瞭。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成やや良好で内面は暗褐色。外面は暗赤茶色。19は2層No.69で口径41.8cmの大型品。口縁内面は丁寧なヘラナデ、他は磨滅。粗・細砂かなり含み、焼成良く内面は茶褐色、外面は暗黄茶色。20はIV区2層出土で口径34.4cm。外面は極めて雑な指ナデで凹凸多し。粗・細砂多く含み、焼成やや良好で内面暗茶褐色。外面茶褐色。21は2層No.69で外面は雑なナデで大きな凹凸多し。内面丁寧なナデで細砂多く含み、焼成良く内面茶色。外面暗褐～暗茶色。22は2層No.22で内面は横位ヘラナデで平滑。外面上端はナデ、以下はやや凹凸あり。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面暗褐色、外面暗茶色。23は2層No.663で外面は雑な横位擦過で凹凸多し。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成やや良好で内面淡茶褐色。外面上半は淡茶色、下半は煤がこびりついて黒色。24はVI区2層出土で外面雑な横位ヘラナデ。粗・細砂かなり含み、焼成良好明茶色。両面穿孔の補修孔あり。25は2層No.599で小型精製品。内面ヘラ磨き、外面横位擦過の上をヘラナデか。細砂僅かに含み、焼成不良で内面茶色。外面淡橙褐色。26は2層No.60で半粗製のE2類になるかもしれない。内面横位ヘラナデ。外面は横位条痕の上を雑なヘラナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面暗黄褐～黒色。外面茶褐色。27はIV区1層出土で内面横位擦過の上を丁寧なヘラナデ、外面は雑な未調整風横ナデで凹凸多し。粗砂少量、細砂かなり含み、焼成不良で内面暗褐～黒褐色。外面暗茶褐色。28は2層No.685で外面下端は横ナデ、上半は極めて雑な横位未調整風。口縁外面の凹凸が意識的に残されており、B類のなごりを示す。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面灰色。外面淡褐色。29はI区1層出土で外面横位ヘラナデ。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成不良で内面茶色。外面は煤付着して暗茶褐色。61・62・64・66は屈曲部外面に蝶ネクタイ状凸起類で、このD2類に属すると思われるが、中にはE2類に近いカーブのものもあり、黒川式

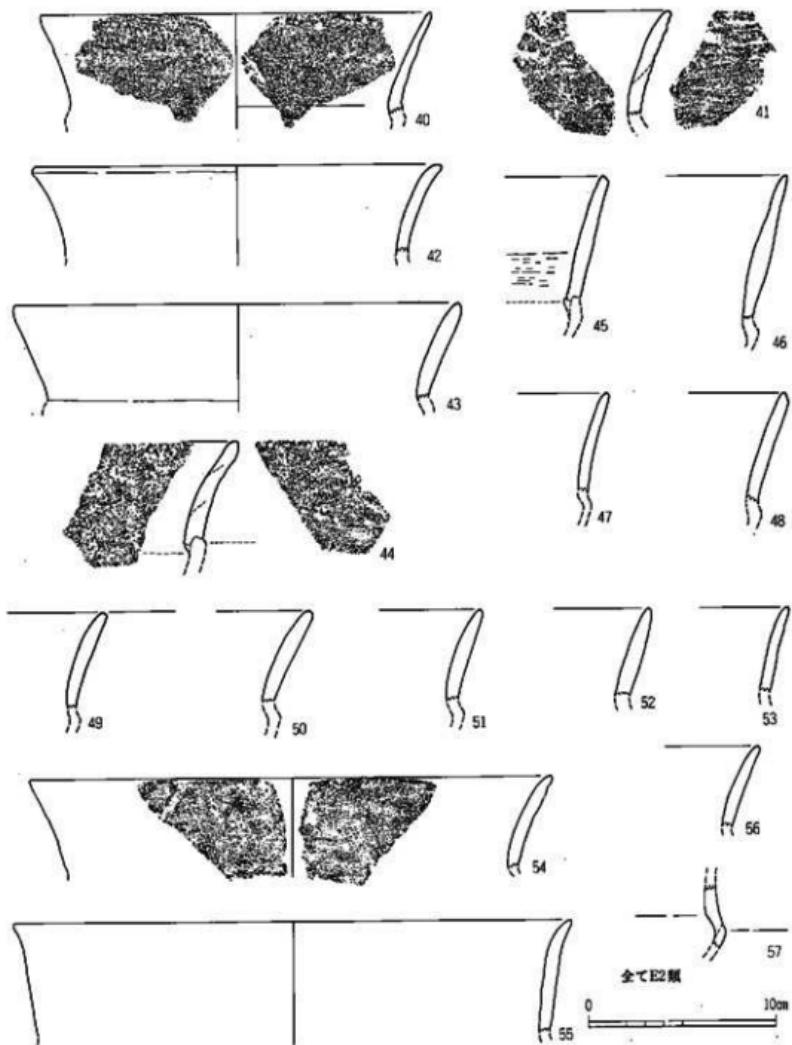


Fig.62 精製深鉢実測図 (その 5)(1/3)

古期に属するであろう。61はVI区2層出土で丁寧なナデ作りで小型精製品のもの。胎土かなり精良、焼成良好で橙褐色。断面は丸っこく孔径3mm。62はV区1層出土で丁寧でシャープな作り。細砂僅かに含むのみで焼成やや不良。淡黄灰褐色で長さ33mm、幅16mm。孔は無い。64はP193出土で左右両端が上に跳ね上がる。かなり大口径深鉢で作りは雑。粗砂かなり含み焼成やや良く、外面茶色。内面暗茶褐色。孔径4mm。66はP227出土で、長さ64mm、幅33mmのぶつとい蝶ネクタイ。大口径深鉢で器内面上半は丁寧なナデ、下半は横位擦過の上をナデ。粗砂多く含み、焼成良く内面暗褐色。外面茶褐色。金雲母が目立つ。孔径4.5mm。頸部から体部屈曲部の破片では、頸部が強く内傾せず直立気味に立つ類が多く古相を示し、典型的D2類は94のみである。89はIV区1層出土で外縁以上は横位擦過の上をやや雑なナデ、以下はナデ。粗・細砂多く含み焼成やや良く、内面淡茶褐～暗褐色。91は2層No251で内面上半ヘラナデ、下半は強い横位指ナデ。外面は雑なナデで凹凸多く、部分的に横位条痕を残す。92は2層No23で内面横位擦過。外面上端は斜位条痕が残り、以下襷までが雑なヘラナデ。襷以下が斜位擦過。粗・細砂多く含み、焼成やや内面暗茶色。外面暗褐色。93は2層No685で内面上半は強い横位指ナデ。外面はやや凹凸があり雑なナデか。粗・細砂多く含み、焼成不良で淡灰黄色。94は、P227出土で内面横ナデ、外面雑なヘラナデか。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面暗褐色。外面茶褐色。

D3類（11～18）大きく2段屈折する深鉢のうち波状口縁となる類。精製浅鉢B3類の大型品と区別がつきにくいものもある。大きく開く口縁は内湾気味となるものが特徴で、口唇部は尖るものが多い。凸起部分は単純な山形をなす。11はP230出土で粗・細砂かなり含む。焼成不良で茶色。12はVI区2層出土で外面にやや凹凸あり。粗・細砂多く含み、金雲母が目立つ。焼成良好外面明茶色。内面黒褐色。13は2層No23で外面雑な横位ヘラナデで凹凸あり。粗砂多く含み焼成やや不良で暗茶褐色。14はV区2層出土で内面ナデ、外面は雑な横位ヘラナデか。焼成不良で茶褐色。15は2層No219で外面は雑な横位ヘラナデで凹凸あり。粗・細砂かなり含み焼成不良で内面淡茶～淡褐色。外面は暗褐色。16はV区2層出土で細砂かなり含む。屈折部外面には不明瞭な蛇線。焼成やや不良で内面は暗茶褐色。外面は暗褐色。17はP357出土で外面は雑な指ナデでやや凹凸あり。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で茶褐色。18は2層No23で口径50cmとなる大型品。凸起部は全周で4ヶ所となる。内面横位擦過の上ナデ、外面雑な横位ヘラナデで凹凸多し。粗・細砂多く含み、焼成不良で暗茶～黒褐色。

精製深鉢E類（Fig.62～66）口縁に屈曲等を持たず頸部全体が長く外反して開き、その下端で屈曲して胴部へと続く伝統的御領式系深鉢の類。破片を見ると一見粗製土器に見えるものも多く、精・粗の区別をはずして「定型深鉢」と称した方が良い。頸部全体が弧をなして全体に丸く反るもの（E3類）、頸部下端近くで屈曲をみせるもの（E2類）、口頭部外面に文様を

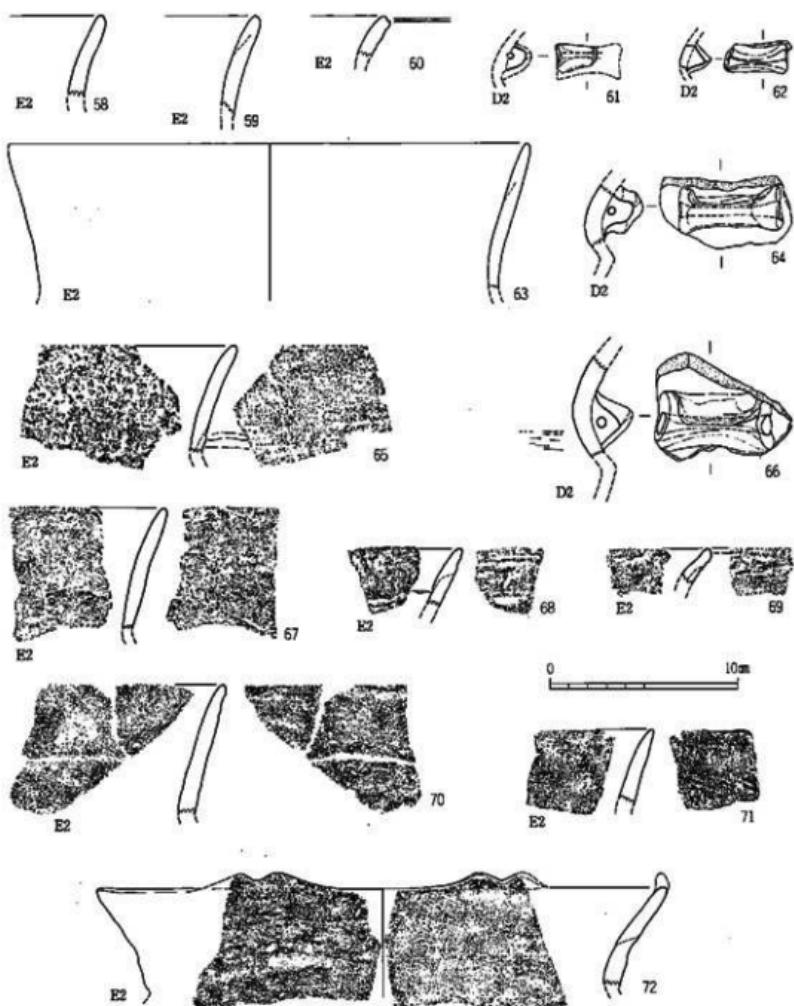


Fig.63 精製深鉢実測図(その6)(1/3)

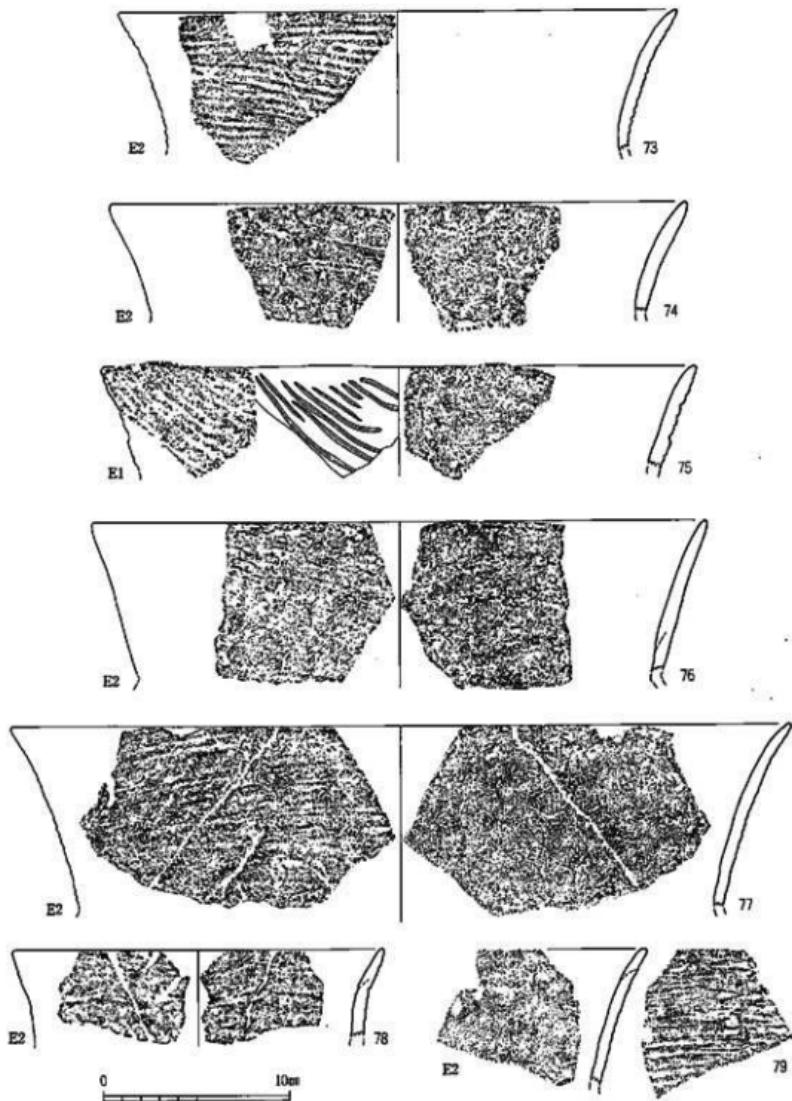


Fig.64 精製深鉆実測図 (その7)(1/3)

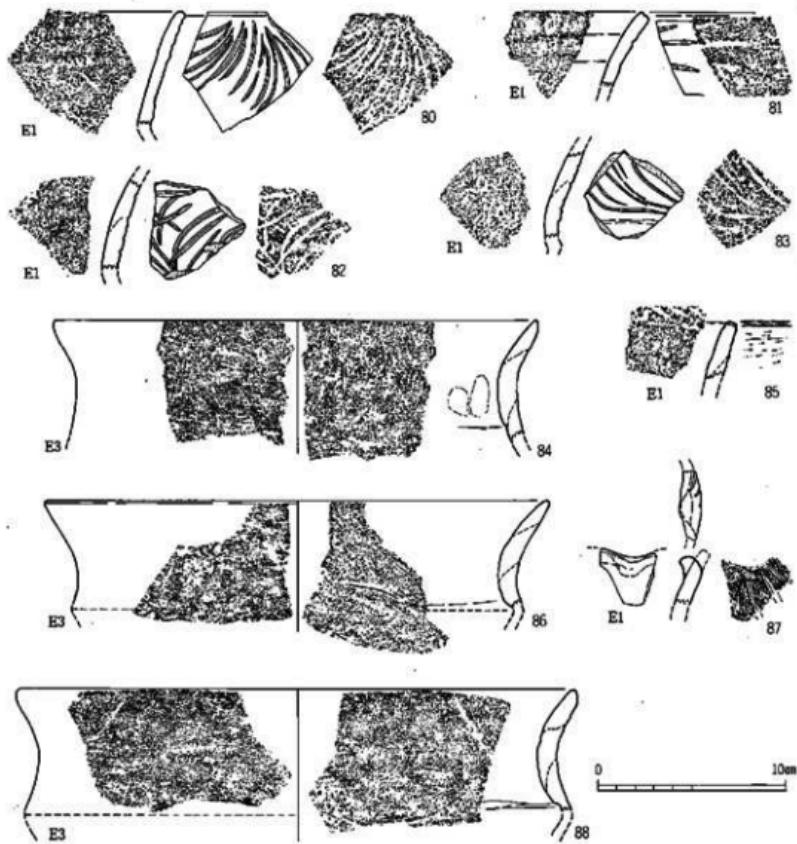


Fig.65 精製深鉢炎測図(その8)(1/3)

施すもの(E1類)等に細分できる。

E1 (75・78・80~83・85・87) E2類の大ぶりで粗製のもの、E2類の小ぶりで粗製のものの口頸部外面に曲線による文様を施した類。75はV区2層出土で口径32cm。内面ナデ、外面にかなり難なヘラ先による斜位平行曲線文。粗・細砂多く含み焼成良好で内面黒~暗黄茶褐色、外面茶色。雲母が目立つ。78はP306出土で内外面横位ヘラ磨きだが、外面は難。外面上半は斜位の太めで難な沈線2本が施される。粗砂少量、細砂幾らか含み、焼成良く暗茶褐~赤茶色。

80は2層No.409で外面に弧状曲線を多く施す。粗・細砂多く含み、焼成やや良く、内面は黒色、外面上半は暗茶褐色、下半は明茶褐色。81は2層No.83で口唇外面が凹状となる。内面に極めて細い沈線が2条、外面にやや太めの沈線文が3条施される。粗・細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面黒褐色、外面は黄褐色。82は2層No.473で、外面に複雑な曲線文を施すが全体としては重弧的な構成となるようだ。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面黒灰色、外面は明茶色。83は2層No.424で外面に曲線文を施す。粗・細砂多く含み、焼成良く内面黒～暗褐色。外面紫茶色。85は口唇部に斜位の細い棒押圧による刻目を施す類。Ⅲ区2層出土で内面は横位擦過の上をナデ、外面はやや難な横位擦過。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面暗褐色、外面淡黄褐色。87はP575出土で外面に3本の斜行沈線がみられ、口縁を上から指で押さえてへこませている。沈線は深くシャープで、波状口縁頂部となるかもしれない。細砂かなり含み、焼成やや良く内面茶色、外面暗褐色。

E2類（40～60・63・65・67～74・76・77・79）口頭部が長く伸びて開くが、その下端付近で小さく屈曲して脣外面縁に繋がる類。黒川式土器深鉢の代表的器形である。40は2層No.57で口径21cmのやや小ぶり類。内外横ナデで粗・細砂多く含む。焼成不良で内面黒色、外面暗茶褐色。41は2層No.579で内面下端は横位擦過、それ以上は横位ナデ、外面は粗い横位擦過で上端に横位条痕残る。42はⅢ区1層出土で外面難な横位ナデ。粗・細砂かなり含み、焼成やや良く、内面茶色、外面は煤がこびりついて黒褐色。43は2層No.121で内外面丁寧なナデ。粗・細砂かなり含み、焼成不良で内面茶色、外面暗茶褐色。44は2層No.29で外面は横位条痕の上を難なナデ。粗・細砂かなり含み、焼成不良で茶色。45はP193出土で内面上半は丁寧なナデ、下半は横位擦過。細砂かなり含み、焼成良く内面黒色、外面茶色。46はIV区2層出土で内面丁寧なナデ。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面淡茶褐色、外面暗茶色。47は2層No.171で内外磨滅するが平滑。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面黒色、外面淡黄褐色。48は2層No.723で粗砂多く含み焼成不良。内面赤茶～暗茶色。外面暗褐色。49はV区2層出土で口唇部は面をなす。細砂多く含み焼成やや不良で、内面茶褐色、外面暗茶色。50は2層No.161で外面横位ヘラナデ。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成不良。内面茶色、外面暗褐色。51はIV区2層出土で内外面丁寧なナデか。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成不良。内面茶色、外面暗茶褐色。52はIV区2層出土で粗砂かなり、細砂多く含む。焼成良く、内面暗茶褐色、外面茶色。53はIV区1層出土で外面にやや凹凸あり。細砂かなり含み、焼成やや不良で内面茶褐色、外面暗黄茶褐色。54はP296出土で内面ナデ、外面は難なヘラナデか。粗砂少量、細砂多く含み、焼成不良。内面茶色、外面暗茶褐色。55はV区2層出土で粗・細砂多く含む。焼成良く内面淡褐色、外面淡茶褐色。56は2層No.708で内外丁寧なナデであろう。粗砂僅か、細砂少量含む。焼成不良で淡黄褐色。57はI区2層出土で内外磨滅するがかなり平滑。細砂多く含み、焼成やや不良。内面黒褐色、外面暗褐色。58は2層No.426で外面はかなり凹凸あり。細砂多く含み

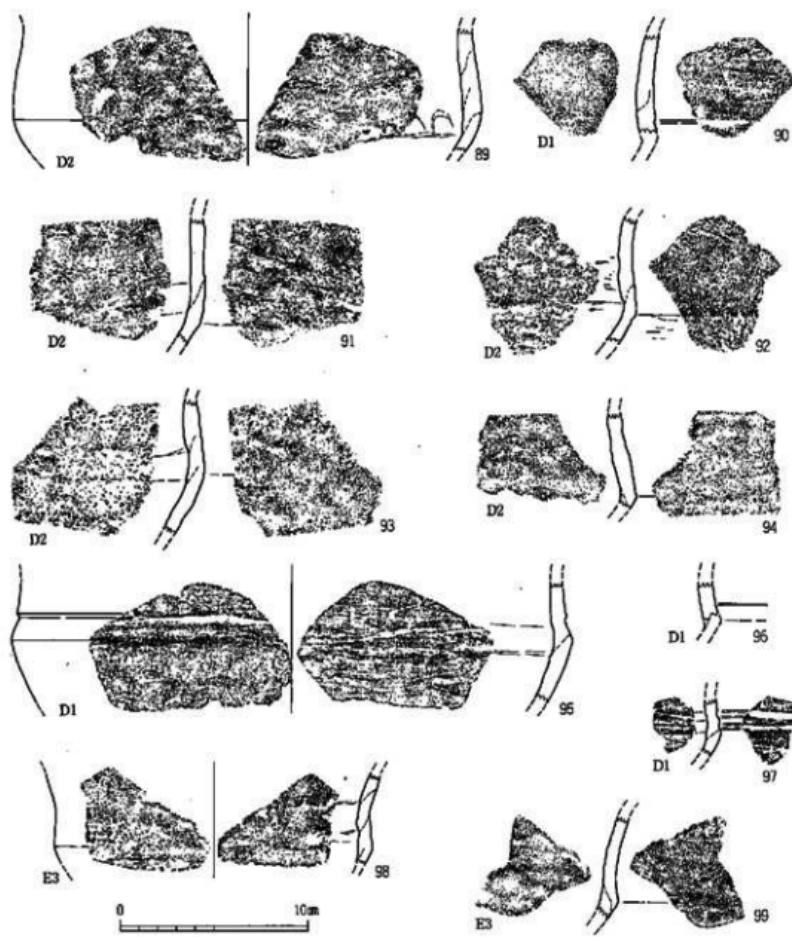


Fig.66 精製深鉢実測図（その 9）(1/3)

焼成不良。内面淡灰褐色。外面淡黄灰褐色。59はV区2層出土で外面丁寧なナデ。粗砂幾らか含み、焼成良く内面黒～淡茶色。外面淡黄茶色。60はP(?)出土で口唇端に沈線を施す。外面横位ヘラナデか。粗砂かなり含み、焼成不良で内面淡褐色、外面茶色。63は2層No313で内

面丁寧なナデ。細砂幾らか含み焼成不良。茶～灰黄～黒褐色。65は2層No303で外面下端に雑な段をつくる。外面ナデで横位条痕が僅かに残る。粗・細砂多く含み焼成不良。内面茶褐色。外面暗黄茶褐色。67は2層No119で内面は丁寧なヘラナデ、外面は擦過。粗砂幾らか、微細砂かなり含み、焼成不良で内面明茶色。外面暗褐色。68はP274出土で内面横位ヘラナデ。外面は横位条痕の上をヘラナデか。粗砂僅か、細砂幾らか含み、焼成不良で内面黒色、外面淡褐色。69はP196出土で内面は雑な指ナデで凹凸多し。外面は横位条痕の上をナデ。粗・細砂幾らか含み、焼成不良。内面黒褐色、外面暗褐～茶色。70は2層No456で外面は横位条痕の上を雑なヘラナデか。細砂幾らか含み、焼成やや良く淡黄褐色。71は2層No449で外面下半には斜位条痕残る。微細砂かなり含み、焼成不良。内面淡褐～黒色。外面茶色。72はP231出土で2つ(以上)の山形を連接する凸起をつける。外面は凹凸多く横位擦過の上を雑なナデか。粗砂・金雲母多く含み、焼成不良。内面茶色、外面やや暗い茶褐色。73はV区2層出土で外面の横位アナグラ条痕は目立つ。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面暗茶～淡褐～黒褐色。外面暗茶褐色。口径30cm。74はV区1層出土で内面横位擦過の上をナデ、外面はやや右下がりの横位擦過。粗砂幾らか、細砂多く含む。焼成不良で内面茶色、外面暗茶褐色。76はV区1層出土で内面は平滑、外面は右下がり斜位のヘラナデ。細砂かなり含み、焼成不良。内面淡黄茶～黒色、外面茶褐色。77は2層No251で口径42cmの大型品。内面丁寧なナデ、外面横位アナグラ条痕。粗・細砂幾らか含み、焼成不良で内面暗黄～黒色、外面暗黄茶色。79はP227出土で外面は横位条痕の上をヘラナデ、内面は横位擦過の上をナデか磨き。粗・細砂かなり含み、焼成やや不良で内面黒色、外面淡黄茶褐色。

E3類 (84・86・88・98・99) 口頸部がE2類のように下端付近で屈曲せず、全体が弧状に外反する類。84は2層No463で内面指オサエ痕以下は横位擦過。外面はナデで上下端に横位擦過痕残す。粗・細多く含み、焼成不良で内面は暗黄茶～灰黑色、外面は茶色。口径26cm。86はVI区1層出土で内面下半と外面中位に横位擦過痕残る。粗・細砂・雲母を多く含み、焼成不良で内面黒～暗茶色、外面茶褐色。88は2層No621で口径30cm。外面下半は横位擦過。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面黒褐色、外面茶褐色。外面上半に煤付着。98はIV区2層出土で粗・細砂かなり含み、焼成不良で内面黒褐色、外面暗茶褐色。内面下端は強い指ナデ、外面中位はナデ。99はIV区1層出土で内面上半は雑な横位ヘラナデで凹凸かなりあり。下半は強い指ナデ。外面頸部はわりと丁寧な横位ヘラナデ。胴部外面は横位擦過の上ナデ。粗・細砂かなり含み、焼成不良で内面灰黄色、外面暗黄褐色。

精製深鉢F類 (Fig.61-38)

厚手の直立する口縁の外面に凸帯状肥厚部を付ける類。IV区1層出土で極めて磨滅。外面は三角凸帯か肥厚か定かでない。微細砂多く含み、焼成不良で内面茶色、外面黒褐色。全く時期

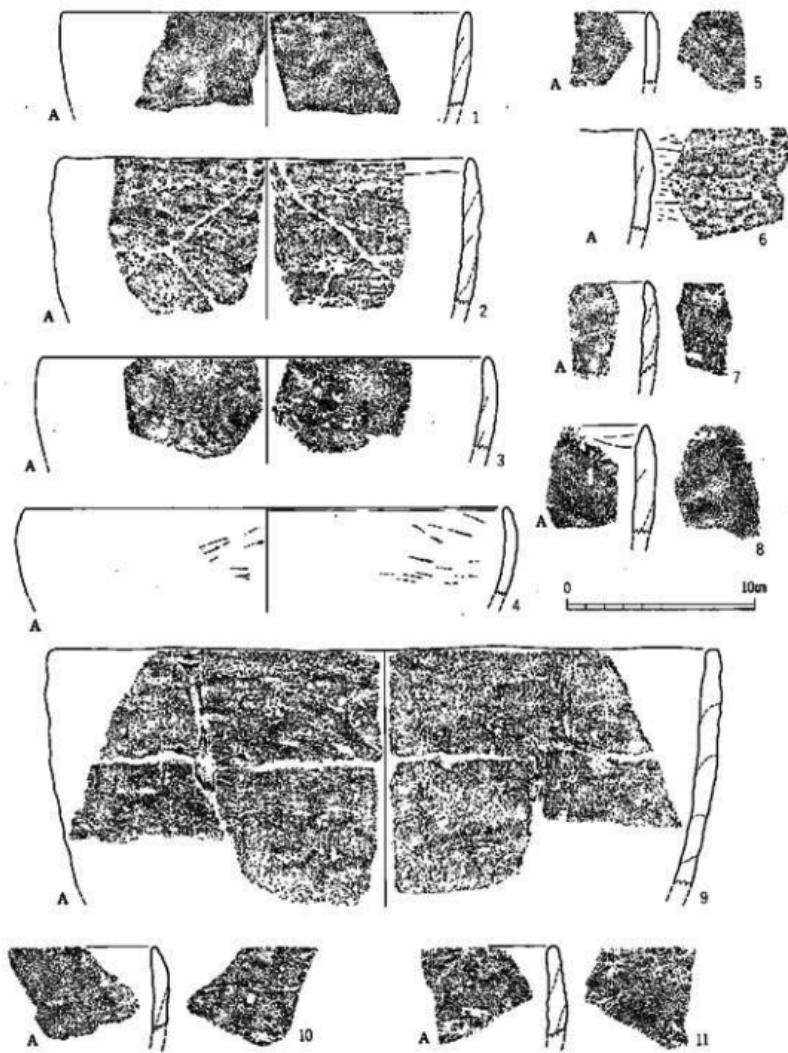


Fig.87 粗製深鉢実測図 (その1)(1/3)

の異なる可能性もあるが、特殊例として類別してみた。粗製深鉢 C2 類とも全く違う。

粗製深鉢 A 類 (Fig. 67・68)

大小の粗製深鉢の中で体部上半が内湾気味に立ち上がる類。器形全体としてみれば直口乃至外傾のものもあり、必ずしも内湾する事を意味していない。1は2層No216で口径22cm。内面は雜なナデ、外面は雜な横位ヘラナデ。粗・細砂多く含み、焼成やや良く内面赤茶～暗黄茶色、外面暗茶褐色。2はP349出土で内面横位条痕の上をとても雜なナデ。外面は凹凸著しい未調整風雜なナデ。粗・細砂多く含み、焼成良好で内面暗褐色。外面茶褐～暗茶褐色（煤付着）。3はP232出土で内面横位擦過の上をナデ。外面も同様か。粗・細砂・金雲母多く含み、焼成やや不良。内面茶褐色、外面煤付着して暗茶色。4はIII区1層出土で口径26cm。薄手できれいに内湾する類。内面横位擦過の上ナデか。外面横位擦過の上横位ヘラナデで凹凸多し。粗・細砂かなり含み、焼成やや不良。内面暗褐色、外面は煤がこびりついて茶～黒褐色。5はP223出土で外面は雜な未調整風ナデで凹凸多し。粗細砂かなり含み、焼成やや良く内面暗灰茶色。外面茶色。6はIII区2層出土で内面は横位擦過の上をナデ、外面は雜な横位擦過で凹凸多し。粗・細砂多く含み焼成やや良く、内面暗褐～茶色、外面茶色。7はP365出土で内面は凹凸が多い横位ヘラナデ、外面は雜な未調整風ナデ。粗・細砂多く含み焼成不良で内面こげ茶色、外面は煤付着して黒褐色。8はP349出土で内外面ナデ。口唇内側は強い指ナデ、外面上端には条痕が残る。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面暗褐色、外面橙褐～淡茶褐色。9はP517出土で口径35.8cmの大型類。内面ナデで指オサエ状凹凸がかなり多い。外面は雜なナデ。粗・細砂極めて多く含み、焼成不良。内面黒色、外面暗灰黄褐～暗褐色。10はIV区2層出土で内面雜な横ナデ、外面は雜な横位擦過状で凹凸多い。粗・細砂多く含み焼成不良。内面肌色、外面暗茶褐色。11はP30出土で内面は凹凸多い雜な指ナデ。外面は雜な横位擦過状。粗・細砂多く含み、焼成良好で橙茶褐色。12は2層No627で外面は雜な横位擦過状。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成やや良く内面淡茶色、外面淡黃茶色。13はP247出土で内面横位の雜な指ナデ。外面は殆ど未調整的で凹凸著しい。粗・細砂多く含み、焼成不良で内外橙茶色。14は2層No472で内外凹凸多し。粗・細砂少量含み、焼成やや良く淡褐色。15は2層No289で内面雜なナデ、外面は極めて雜なヘラナデ。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成不良。内面橙茶色、外面黒色。16は2層No399で内面は斜位擦過の上をナデ。外面は未調整風横位擦過、下半はナデ。粗・細砂かなり含み、焼成やや不良。内面黄褐色、外面は煤付着して暗褐色。17はP143出土で内面極めて雜な横位擦過、外面は横位条痕の上を雜なナデ。焼成やや良く内面明茶色。外面は煤がこびりついて茶褐～黒褐色。粗・細砂・金雲母を多く含む。18はP114出土で内面に横位条痕が僅かに残る。外面は横位の雜な擦過状で凹凸多し。粗・細砂多く含み、焼成良好。内外面茶～淡褐色。19はP414出土で粗砂僅か含み焼成不良。内面橙褐色、外面暗橙褐色。

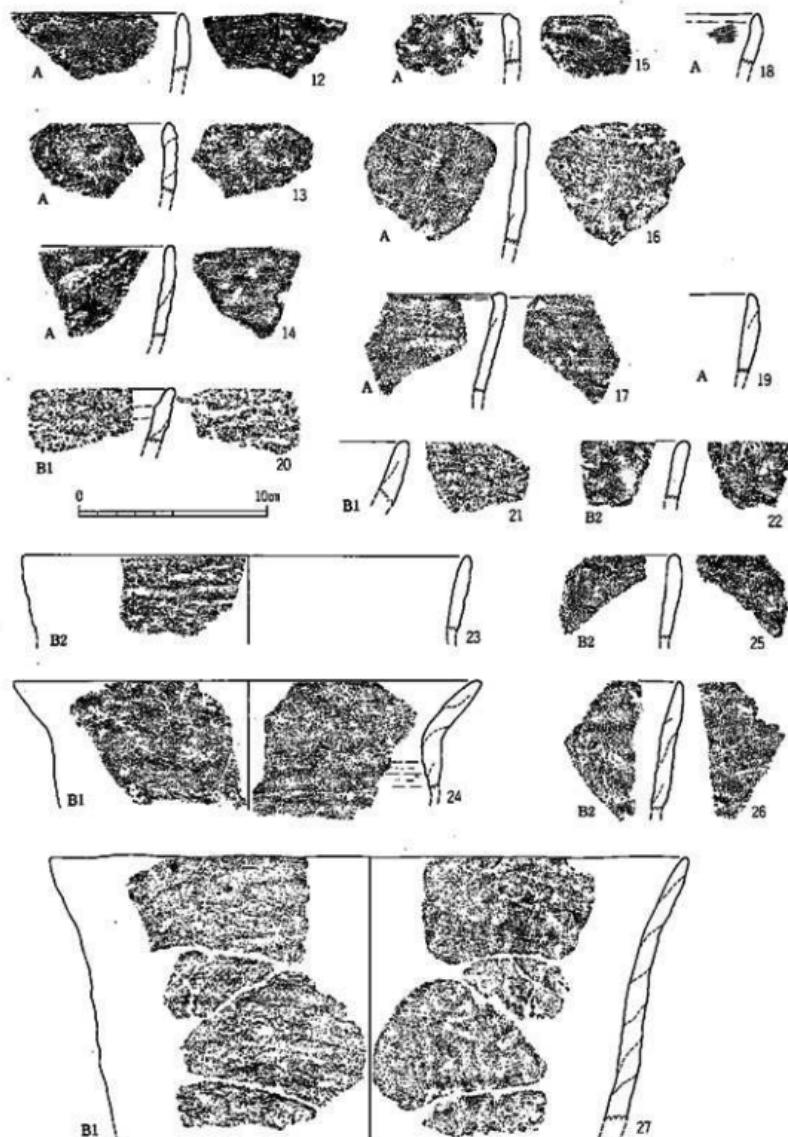


Fig.68 粗製深鉢実測図 (その2)(1/3)

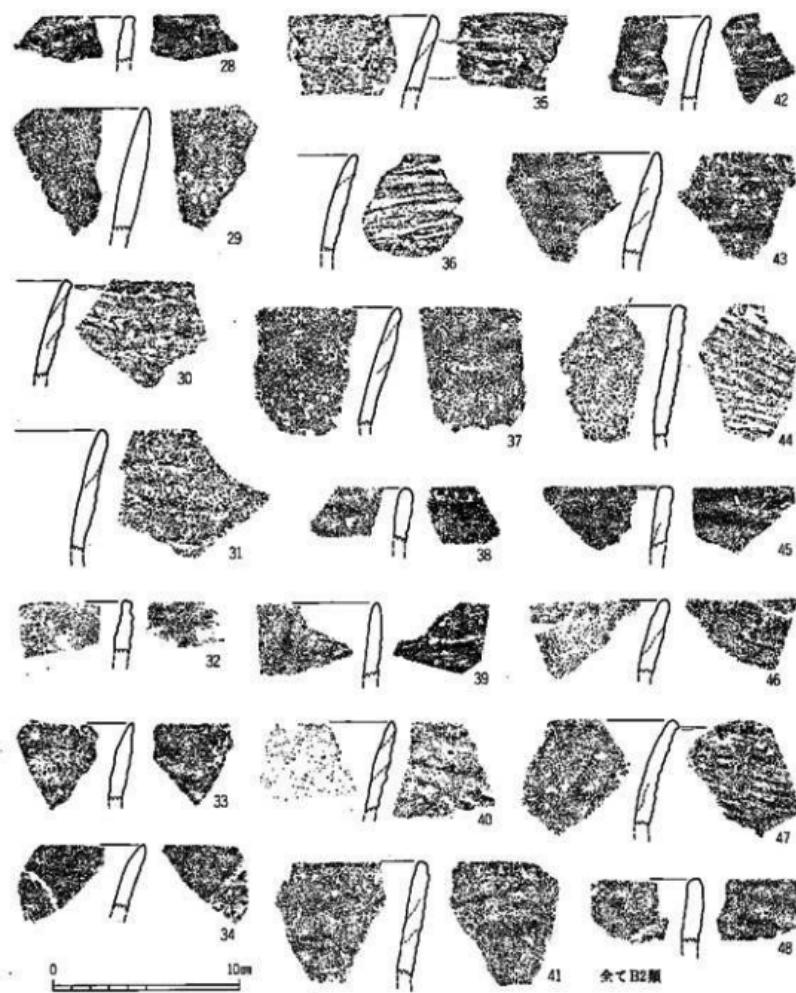


Fig.69 粗製深鉢実測図(その3)(1/3)

粗製深鉢 B 類 (Fig. 68~70)

口縁部が外傾・外反して開く類。明らかに意識して強く開くもの (B 1 類), 外傾的な僅かな開き方のもの (B 2 類) に細分した。

B 1 類 (20・21・24・27) 極端に開く 24 の他は B 2 類との中間的なものである。20 は P215 出土で内面は雜な横位擦過かナデ。外面は雜なナデで凹凸著しい。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面茶褐色。外面は黒褐~茶色。21 は IV 区 2 層出土で粗・細砂多く含み、焼成良好茶褐色。24 は 2 層 No.459 で内面下端は横位擦過。口径 25cm で粗・細砂極めて多く含む。焼成不良で暗茶褐色。27 は P90 出土品と P231 出土品が接合したもので内面丁寧なナデ。下半に縱方向指オサエの凹凸幾らかあり。外面は極めて雜な未調整風横位指ナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面は暗灰褐色。外面は淡褐~灰褐色だが下半は煤がこびりつき黒色。

B 2 類 (22・23・25・26・28~48・50・52) この中には外面に条痕を残したものなど、精製深鉢 E 2 類に含まれるものもある。22 は 2 層 No.185 で外面は雜な横位擦過の上をナデしており凹凸多し。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面は赤茶色、外面は茶色。23 は P243 出土で内面は平滑、外面は強い横位指ナデで凹凸著しい。口径 24cm で粗砂少量・細砂かなり含む。焼成不良で内面淡茶褐色、外面黒褐色。25 は I 区 2 上層出土で内面はナデで上端に横位条痕残す。外面は雜な横位ナデ。細砂多く含み焼成不良で内面黒色、外面黄茶褐色。26 は P5 出土で内面強い指ナデで凹凸多し。外面は雜なナデで横位条痕が下半に僅かに残る。粗砂少量、細砂かなり含み、焼成不良で茶褐色。28 は P354 出土で内面は雜な未調整風ヘラナデで凹凸著しい。外面はナデ、粗・細砂多く含み、焼成やや不良。内面暗褐色、外面暗灰褐色。29 は V 区 2 層出土で粗・細砂多く含み、焼成やや良く内面暗茶褐色、外面明茶色。30 は 2 層 No.708 で外面は雜な横位擦過。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面暗茶褐色、外面は煤が付着して黒褐色。31 は VI 区 2 層出土で外面は強い横位指頭ナデ、内面は横位擦過であろう。粗・細砂多く含み焼成不良で内面茶褐~暗褐色、外面は暗褐色。32 は V 区 2 層出土で内外凹凸極めて多し。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成不良で黒色。33 は 2 層 No.194 で外面は凹凸多く雜な横位ナデか。粗・細砂多く含み、焼成不良で内外茶色。34 は 2 層 No.593 で外面は雜なナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面黒褐色、外面淡褐色。35 は 2 層 No.488 で外面は凹凸多く雜な未調整風ナデか。粗・細砂多く含み、焼成良好淡褐色。36 は 2 層 No.623 で外面横位アダラ条痕。粗・細砂かなり含み、焼成不良で内面茶褐色、外面茶~暗褐色。37 は 2 層 No.20 で外面横位擦過の上を雜なナデか。粗・細砂多く含み、焼成不良で内外茶褐色。38 は V 区 1 層出土で外面は雜なナデで凹凸多し。粗砂幾らか、細砂多く含む。焼成不良で内面淡褐色、外面茶褐色。39 は P715 出土で内面横位擦過の上をナデ、外面は雜な未調整風横位擦過。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成不良で茶褐色。40 は P383 出土で内外面とも斜位の極めて雜な指ナデ。粗・細砂多く含み、焼成不良。内面黒褐色。外面は煤が付着して暗褐色。41 は 2 層 No.29 で外面は雜な横位指頭ナデで凹凸多し。

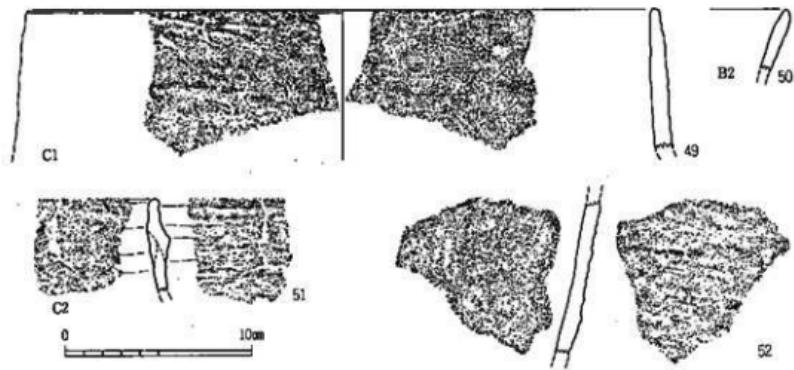


Fig.70 粗製深鉢実測図（その4）(1/3)

粗・細砂多く含み、焼成やや良く、内面暗褐色～赤茶、外面茶色。42はP414出土で内外面ヘラナデだが、内面下半と外面は横位アナグラ条痕が殆ど残る。粗砂少量、細砂かなり含み、焼成不良で内面黒色。外面褐色。43は2層No.499で内面は強い横位指ナデ、外面は極めて雑な未調整風横ナデ。粗砂多く含み、焼成やや良く内面橙褐色。外面茶褐色。44は2層No.441で内面雑な横位擦過、外面は斜位アナグラ条痕。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面暗茶褐色。外面は煤が付いて黒褐色。45は2層No.658で内面横位ナデ、外面は雑な横位指頭ナデ。粗砂幾らか、細砂かなり含む。焼成良く茶褐色。46は2層No.519で外面は雑な横位ナデか。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面黄褐色～灰褐色。外面茶色。47はV区2層出土で外面はやや右下がり横位アナグラ条痕。内面は雑な横位擦過か。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面茶色。外面暗茶褐色。48はP227出土で内面は雑な横位擦過、外面は雑な横位指ナデ。焼成良好で内外面茶色。50は2層No.185で外面は凹凸がある。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成良く淡褐色。52は脚部下半片でどの類になるか不明だが、ここで説明する。2層No.657で外面はやや右下がり斜位条痕の上を雑な未調整風ナデ。内面はナデか。粗・細砂多く含み、焼成良く赤茶～黒褐色をなす。

粗製深鉢 C類 (Fig.70)

口頭部が内傾する粗製深鉢で、口縁外面に凸帯状に肥厚部を持つもの（C1類）と、単純に内傾するだけのもの（C2類）とに区別される。個体数は各1点ずつと少ないが、晩期末葉の刻目凸帯深鉢の発生を考える上で重要な類と考える。

C1類 (49) 直線的な口頭部が内傾して立つ類で、2層No.153。内面横位ヘラナデ、外面は横位

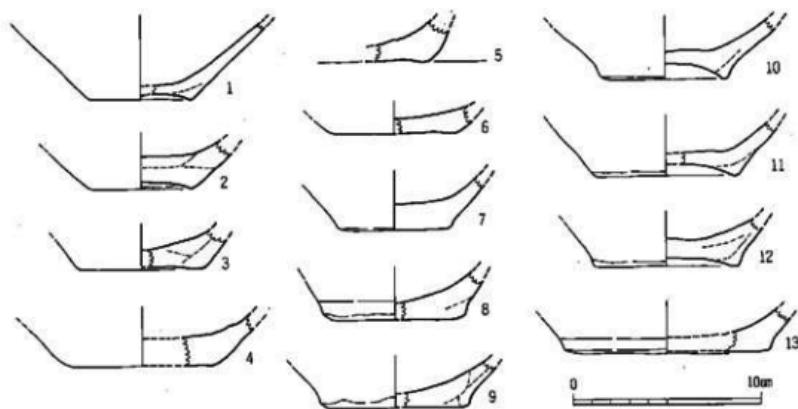


Fig.71 深鉢底部実測図（その1）(1/3)

条痕をナデ消しており凹凸がかなりある。口径34cmと大きめで、肩部の形状は判らないが、肩部直上で小さく屈曲して外面に稜をつくる。精製深鉢E2類の中のバラエティーとして内傾する類と考えられる。

C2類(51) 内傾する口頭部の口縁直下外面を肥厚させ三角凸帯状に隆起させる類。2層No.439で内面は強い横位指ナデ、外面は横位条痕をかなり残す。粗・細砂かなり含み、焼成やや不良で内面明橙色、外面灰褐色。

深鉢底部 (Fig. 71~75)

精製・粗製の底部105点を図示したが、本遺跡出土のうち図示し得るほぼすべてである。御領系統の全体が丸く上げ底状になるものを始め、平底、僅かな上げ底、外端が強く外方へ張り出すもの、厚手のもの等各種みられる。1は2層No.637で径5.3cm、内外平滑で微細砂かなり含み、焼成やや不良で内面淡褐色、外面淡黄褐～淡赤茶色。2は2層No.25で径5.4cm。細砂多く含み、内面はナデで暗褐色、外面黄橙褐色。3は2層No.53で径6.6cm。外面ナデで橙褐色、内面は褐色。4は2層No.269で径7.4cm。内面茶褐～褐色、外面橙褐色。5はV区2層出土で内面褐色、外面黄褐色。6は2層No.62で径6.6cm。内面はナデで褐色、外面は暗褐色。7はV区2層出土で径6cm。内面は暗褐色、外面淡橙褐色。8は2層No.204で径7.8cm。内面ナデで炭化物付着。内面茶褐色、外面橙褐色。9は2層No.81で径8cm。内面は丁寧なナデで茶褐色、外面は明橙褐色。10はII区2層出土で8mm程のかなりの上げ底で径6.8cm。内面褐色、外面淡黄褐色。11は2層No.644で径7.5cm。内面褐色、外面淡黄褐色。12はIII区1層出土で径7.6cm。内面ナデ

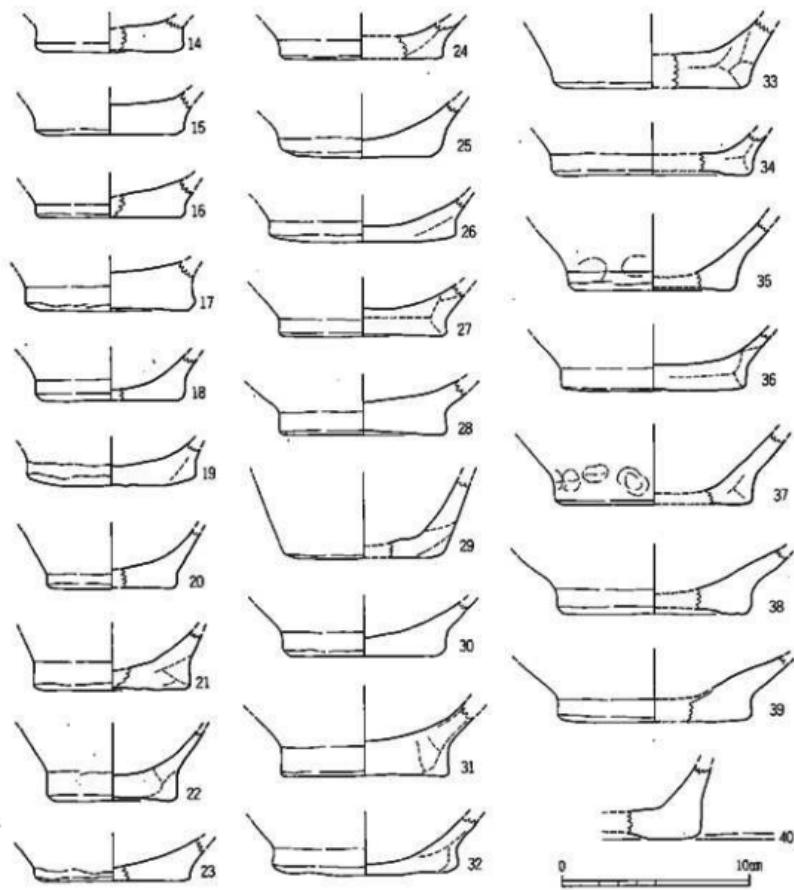


Fig.72 深鉢底部実測図（その2）(1/3)

で暗褐色。外面もナデで橙黄褐色。13は2層No386で径11cm。内面ナデで淡褐色。外面淡黄橙褐色。14はP268出土で径8cm。内面暗茶褐色。外面橙褐色。15は2層No293で径8cm。内面ナデで茶褐色。外面は黄褐色。16はV区2層出土で径8cm。内面橙色。外面黄橙褐色。17はV区2層出土で径9cm。僅かな上げ底で内外面橙褐色。18はP350出土で径8cm。内面はナデで黄褐色。外面もナデで淡橙褐色。19は2層No215で径9cm。内面は指オサエがあり暗褐色。外面

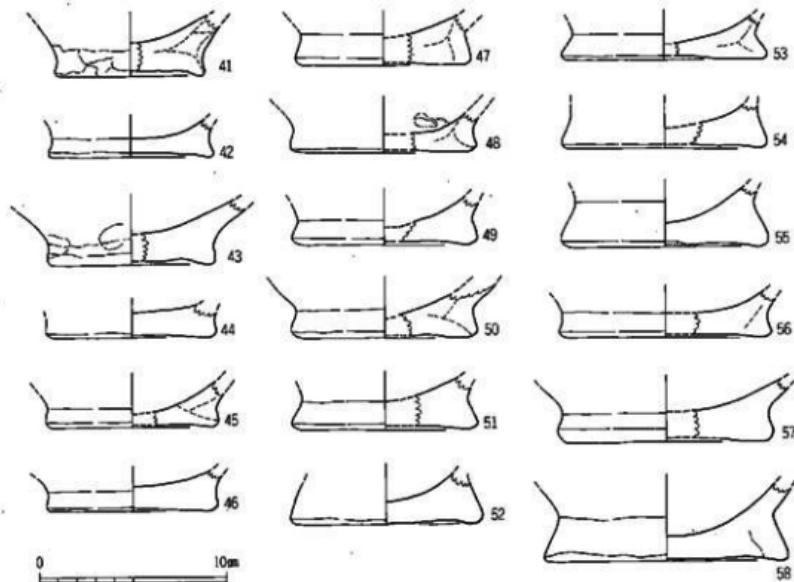


Fig.73 深鉢底部実測図（その3）(1/3)

は橙褐色。20は2層No.274で径7cm。内面暗褐～黒褐色。外面橙褐色。21は2層No.180で径8.4cm。内外面橙褐色。22は2層No.8で径7cm。内面はナデで褐色、外面もナデで橙褐色。23はP294出土で径8.4cm。外面はナデで橙褐色、内面は淡橙褐色。24は2層No.204で径8.7cm。内面ナデで茶褐色、外面橙褐色。25はP230出土で径8.5cm。内面に炭化物付着しており、内外橙褐色。26は2層No.204で径10cm、内外橙褐色。27は2層No.333で径9cm。内底面に炭化物付着。内面ナデで褐色～黒褐色。外面もナデで橙褐色。28はV区2層出土で径9cm。内面褐色、外面橙褐色。29は2層No.250で形状が異類で特殊器種となるか。径8.4cmで内面暗褐色、外面黄褐色。30は2層No.236で径8.6cm。内面ナデで褐色、外面もナデで橙褐色。31はP433出土で径9cmの厚手品。内面灰褐色。外面はナデで灰褐～淡黄褐色。32は2層No.665で径10cm。内面は丁寧なナデで黄褐色、外面もナデで橙褐色。33は2層No.17で径10.4cm。内面はナデで淡茶褐色、外面は黄橙褐色。34は2層No.8で径10.6cm。内面褐色、外面橙褐色。35はV区1層出土で径9cm。内外面ナデで橙褐色。36は2層No.343で径10cm。内面褐色、外面褐～橙褐色。37は2層No.726で径10.6cm。内外面ナデで橙褐色。38はV区2層出土で底外面中央部が上げ底となる。径10.4cmで内面ナデで褐色、外面もナデで橙褐色。39はP135出土で径10.4cm。内外面橙褐色。40は2層No.558で、

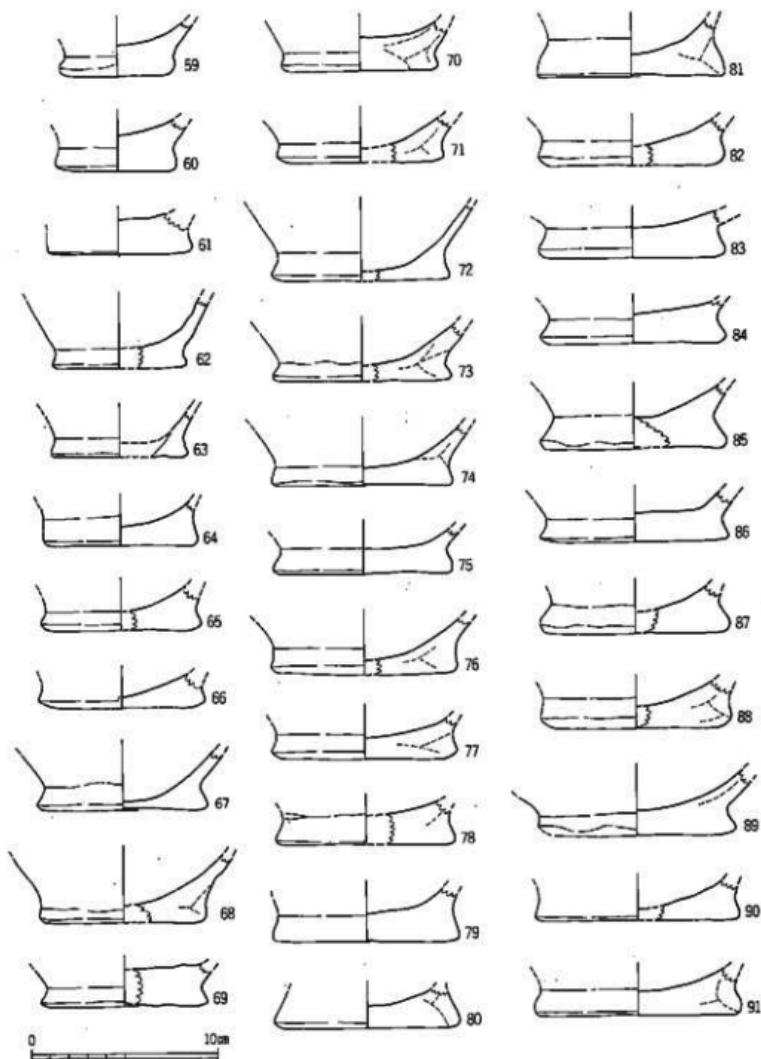


Fig.74 深鉢底部実測図（その4）(1/3)

内面はナデで淡橙褐色。外面もナデで橙褐色。41はV区1層出土で径8cm。内面はナデで橙色、外面は雜なナデで淡褐色。42は2層No.266で径8.8cm。内面はナデで淡褐色、外面もナデで淡褐色。43はV区1層出土で径9cm。内外面ナデで、内面橙褐色、外面褐～橙褐色。44は2層No.124で径9.1cm。内面ナデで褐色、外面橙褐色。45は2層No.488で径9.2cm。内面ナデで褐色、外面は橙褐色。46はIV区1層出土で9.2cm。内面暗褐色、外面橙褐色。47は2層No.546で径9.5cm。内面ナデで内外橙褐色。48は2層No.340で径10cm。内面はオサエナデ、体部外面はやや丁寧なナデ、底外面は回転方向の擦過状。粗・細砂、金雲母を多く含む。焼成や良く内面暗黃茶褐色、外面茶色。49はVI区住1埋土中出土で径10cm。内面橙褐色、外面暗橙褐色。50は2層No.564で径10cm。体部外面横ナデで内外黄橙褐色。51はV区2層出土で径10cm。内外橙褐色。52は2層No.286で径10.3cm。内面ナデで褐～黒色、外面は橙褐～褐色。53はNo.537で径11cm。内面はナデで淡黄褐色、外面は橙黄色。54はV区1層出土で径11cm。内外橙褐色。55はIV区1層出土で側面はナデ、径11cm。内外橙褐色。56は2層No.14で径11.4cm。内面淡黄褐色、外面黄橙褐色。57はIV区1層出土で径11.4cm。内面ナデで橙褐色、外面もナデで暗褐色。58は2層No.690で径13cm。内面褐色、外面はナデで橙褐色。59はIV区2層出土で径6.2cm。側面はナデで内外橙褐色。60は2層No.131で径6.5cm。内面ナデで内外橙褐色。61は2層No.445で径7.7cm。内面ナデで暗褐色、外面は暗橙褐色。62は2層No.150で径7.2cm。内面暗褐色、外面橙褐色。63はP383出土で径7.3cm。内面淡橙色、外面はナデで橙褐色。64はVI区2層出土で径8.3cm。内面褐色、外面橙黄褐色。65は2層No.562で径8.6cm。内外橙黄褐色。66はP215出土で径9cm。内面淡橙褐色、外面暗褐色。67はV区層出土で径9.2cm。内外黄褐色。68は2層No.664で径9cm。内面は丁寧なナデで黄褐色、外面は横ナデで橙褐色。69はV区1層出土で径9cm。内面はナデで橙褐色、外面は黄橙褐色。70は2層No.179で径8.4cm。厚手で内面ナデ。内外橙褐色。71はVI区2層出土で径9cm。内面はナデで褐色、外面横ナデで橙褐色。72はP243出土で径9.6cm。内外橙褐色。73は2層No.359で径9.6cm。内外橙褐色。74は2層No.26で径9.6cm、内面褐色、外面橙褐色。75はIV区2層出土で径9.6cm。内外ナデで橙褐色。76はIV区2層出土で径10cm。内面褐色、外面はナデで淡橙褐色。77は2層No.693で径10cm。内面暗褐色、外面橙褐色。78は2層No.53で径9.6cm。内外ナデで橙褐色。79は2層No.294で内面ナデで淡黄褐色、外面黄褐色。80は2層No.296で径10cm。内面褐色、外面橙褐色。81は2層No.330で径10cm。内面橙色、外面橙黄色。82はVI区2層出土で径10cm。内面暗褐色、外面黄橙褐色。83はP414出土で径10cm。内面ナデで内外橙褐色。84はIV区2層出土で径10cm。内外面ナデで淡橙色。85はII区2層出土で径10cm。内外面ナデで内面黄褐色、外面橙褐色。86は2層No.606で径10cm。内外面ナデで内面淡橙褐色、外面橙褐色。87は2層No.556で径10.2cm。内面暗褐色、外面橙褐色。88はIV区1層出土で内外ナデで内面褐色、外面橙褐色、径10.2cm。89は2層No.118で径10.6cm。内面ナデで橙褐色、外面は淡褐～橙褐色。90はP231出土で径11cm。内外ナデで橙褐色。91は2層No.607で径11cm。内

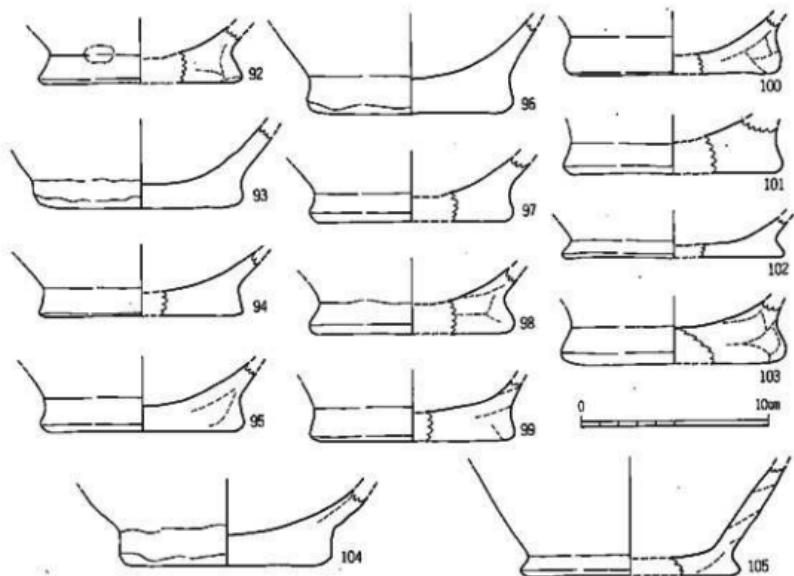


Fig.75 深鉢底部実測図（その5）(1/3)

外橙褐色。92はVI区2層出土で径11cm。内面ナデで内外橙褐色。93はV区1層出土で径11.3cm。内面淡褐色。外面はナデで橙褐～褐色。94はIV区2層出土で径11cm。内外ナデで橙褐色。95は2層No.539で径11cm。粗大石英粒を多く含む。内面ナデで橙褐色、外面は橙黄褐色。96は2層No.685で径11cm。内面はナデで暗褐色、外面もナデで褐色。97はV区2層出土で径11cm。内面ナデで茶橙褐色。外面橙褐色。98は2層No.29で径11cm。内外橙褐色。99は2層No.294で径11cm。内面はナデで暗茶褐色、外面は橙褐色。100は2層No.419で径11.6cm。内面淡黄褐色、外面黄橙褐色。101は2層No.385で径11.8cm。内面橙褐色、外面は暗褐～黄橙褐色。102はP230出土で径11.8cm。内面暗褐色、外面橙褐色。103は2層No.435で厚手類。内面暗褐色でナデ。外面橙褐色。104は2層No.102で径11.4cm。内面は丁寧なナデで黄褐色。外面は褐色。105は2層No.8で径11.8cm。内面はナデで褐色、外面は雜なナデで暗橙褐色。

7 出土石器等

ここではクリナラ遺跡出土の石器類をすべて器種毎にまとめて図示し、網文住居等の各遺構

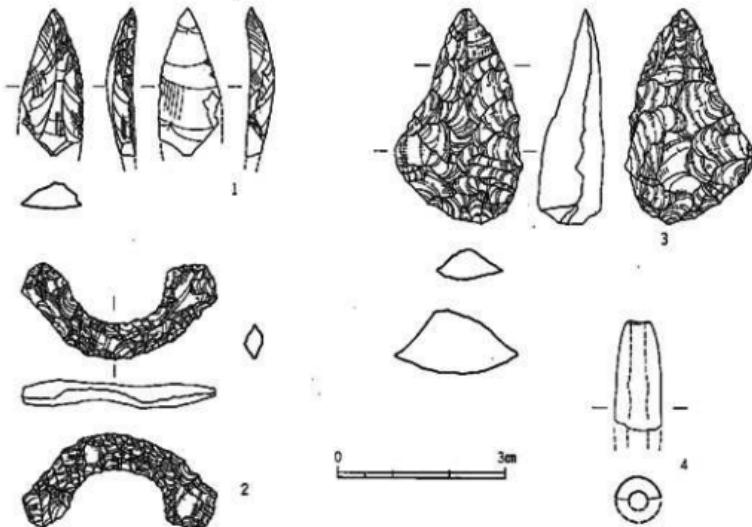


Fig.76 ナイフ形石器・異形石器・管玉実測図(実大)

に伴ったものは既に各項で報告したので、それ以外の第1・2層包含層出土のもの、新しい時期の遺構に混入したものについて報告したい。石器全体の時期としては、旧石器1点、縄文早期前後の石器数点。他は殆どすべて縄文晚期黒川式古期を中心とするものと思われるが、後期三万田～御領式土器が僅かに出土しているのでこの時期の石器も若干混じっているかもしれない。器種組成割合等については各論の項でまとめたので参照されたい。

旧石器 (Fig.76, PL.44)

ナイフ形石器（1）Ⅲ区1層出土で極めて風化著しい黒色の黒曜石製。縦長剥片使用で表面左側辺基部側に押圧剥離的な、右側辺先端側に直角に近いプランティングを施す。右側辺のものは先端方向への順序でプランティング加工がなされている。現存長26mm、幅11mm、厚さ4.5mm、重さ1.1gとなる小型類。尚、Fig.104-21もナイフ形石器で、別項で説明した。

縄文晩期の特殊遺物 (Fig.76, PL.44)

異形石器（2）やや厚手の不定形剥片から作った鉤形品で、両面とも丁寧で微細な調整が施されている。やや半透明良質の黒曜石製で、表裏に素材剥離面を残し、打面は疊面。右端が薄く

なり主頭状に拡がっている。長さ35mm、幅は右端で10mm、中央で6mm、厚さ3~4.5mm、重さ1.5gとなる。使用痕等観察できない。P258出土。

牙状尖頭器（3）P385出土品で、姫島産黒曜石を用い、厚手の素材から先端へ牙状に曲がる製品を作っている。打点は裏面右下辺の中央にあり、裏面には主要剥離面を残す。全体に丁寧に調整された精品。長さ38mm、幅23mm、厚さ12mm、重さ6.3gとなる。儀器的なものか。

管玉（4）紡錘形タイプの緑色管玉で、第1号住居跡下層に混入していたもの。淡青緑色の緑泥片岩的石材で、孔内面には回転擦痕がきれいに残り、中途でふくらんだ部分もみられる。縦半分に割れており、現存長19mm、最大径8mm、孔径2.5~3.5mm、重さ0.8gとなる。

十字形石器・糸巻形石器等 (Fig. 77~78)

十字形石器（1・2）1はVI区2層出土品で緑色片岩製。全体に風化しており、左端突山部も欠損状に薄くなっている。3ヶ所の点線部分の抉り部側面は潰れているようだ。裏面は主要剥離面を大きく残し、抉り部以外は全体に調整は難。長さ72mm、幅69mm、厚さ13mm、重さ46.8g。2はV区1層出土品で灰緑色の緑色片岩製。左右両抉部はしっかりと抉られており側面は斜めに傾いている。上下抉部は打欠いただけで、左右のものと断面形状が全く異なる。十字形石器としてはかなり歪つてあり、あくまでも抉り部を主眼とした石器のようだ。「X形石器」と名称を変えるべきであろう。長さ72mm、幅62mm、厚さ14mm、重さ63.1gとなる。

糸巻形石器（3~13）3は2層No14で、淡灰~灰緑色の黒色片岩に近い石材で端麗な分銅形をなす。両側抉部（点線部）がかなり潰れしており、上下端は刃部とは考えられない。長さ66mm、幅35mm、厚さ11mm、重さ29.7g。4はIV区1層出土品で緑灰色の緑色片岩製。点線部の両抉部が潰れている。上下端は明確な刃部ではない。長さ76mm、幅46mm、厚さ12mm、重さ54.4g。5はV区2層出土品で淡灰緑色の緑色片岩製でやや風化。抉部側面は意識して他部位よりも丁寧に調整されている。上下端の使用痕跡は認められない。裏面上半に大きく素材剥離面を残す。長さ59mm、幅47mm、厚さ7mm、重さ26.2g。6は2層No120で灰白色の硬質砂岩製で、大ぶりの磨製石斧片を再加工したもの。表面に丁寧な研磨面がかなり残り、裏面は剥離面のまま。抉り部は丁寧に調整され、磨れている部分もある。長さ72mm、幅57mm、厚さ7mm、重さ24.3g。7は2層No134で濃緑青色の緑色片岩製。やや風化しており、両抉部は丁寧に加工し、右抉部は側面が潰れている。裏面は素材剥離面を残したまま。上下端の明瞭な使用痕は無い。長さ74mm、幅39mm、厚さ11mm、重さ44.3g。8とともに偏平打製石斧的形状を示すが、あまりにも小型で石斧そのものとは考えられず、糸巻形石器の簡略的なもの、或は石斧のミニチュアと考えたい。8はIV区1層出土品で灰青緑色の緑色片岩製。左右抉りの加工は丁寧で、裏面は横剥ぎと思われる素材面を大きく残す。上下端は使用されていないようだ。長さ70mm、幅43mm、厚さ9mm、重さ40.3g。9はP184出土品で両抉部は側面が殆ど潰れている。暗灰青緑色の緑色片岩

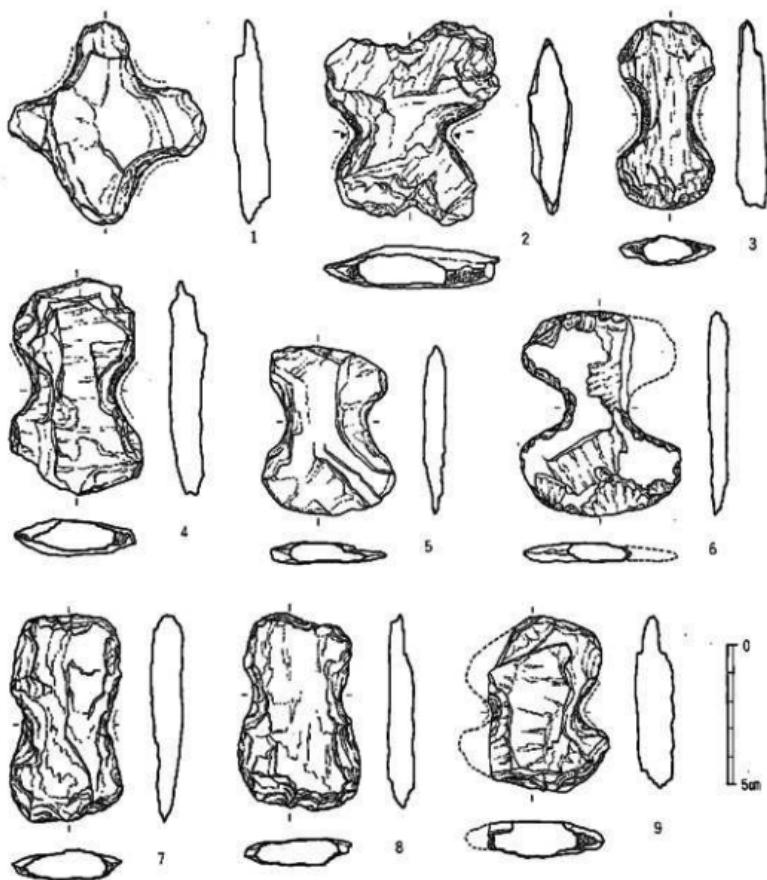


Fig.77 十字形石器・糸巻形石器実測図（1/2）

製で長さ63mm、幅42mm、厚さ14mm、重さ45.1g。図示した面が主要剥離面で横剥ぎ。上下端は使用していない。10はP218出土品と2層Na139とが接合したもので、濃灰色の黒色片岩製。両抉部側縁のみ丁寧な小さい敲打仕上げとなっている。表面は平滑で、素材自然面のままで、裏面は素材剥離面のまま。長さ86mm、幅55mm、厚さ5mm、重さ33.8g。11はIV区2層出土品で白灰色の結晶片岩系石材。抉部のみ丁寧に小敲打仕上げのようだ。その他の側縁は整形調整のみ。

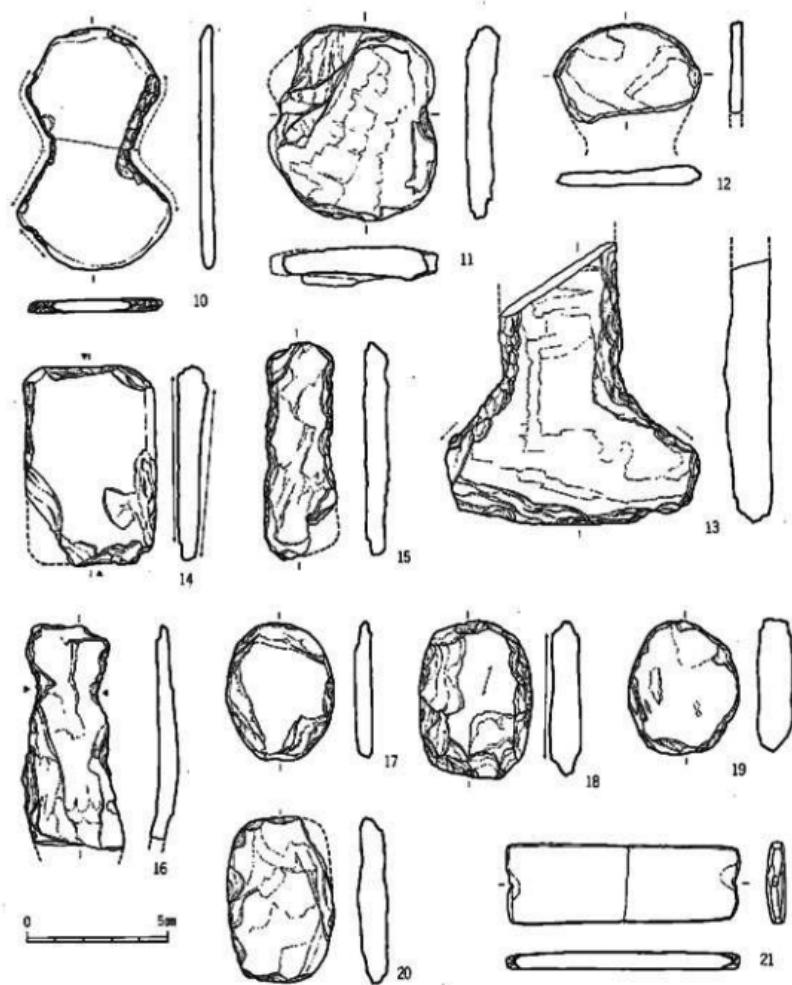


Fig.78 糸巻形石器等実測図 (1/2)

他の糸巻形石器と異り、小さい抉部であり石錐の可能性もあるが、全体の形状を整えており、
石錐よりも糸巻形石器に近い用途の石器と考えたい。長さ68mm、幅59mm、厚さ11mm、重さ57.4

g。裏面は素材剥離面のままで、全体に風化。12はVI区1層出土品で、淡黄灰色の黒色片岩製。抉り部等の確認は無いが、形状・大きさが10に酷似することから同種とした。現存長36mm、幅53mm、厚さ6mm、重さ11.9g。13はVI区住1上層出土品で灰色の黒色片岩製。T字状になる大型類で、矢印間の側面はかなり敲打的仕上げ。石の目が横方向であり、偏平打製石斧の石取りとは全く異なる。裏面は素材剥離面のままで。現存長100mm、幅91mm、厚さ17mm、重さ141.6g。

長方形偏平石器（14～16）3点とも各々異なる用途と思われるが一応まとめて報告する。14は偏平板状磨製石器でP300出土品。淡灰褐色の黒色片岩製で、表裏とも磨面。上下端に抉りを入れたような感じはあるが明瞭ではない。長さ70mm、幅47mm、厚さ11mm、重さ46.6g。15は偏平打製石斧模造品で、VI区2層出土。黒色片岩製で裏面も縁辺調整のみ。長さ77mm、幅26mm、厚さ8mm、重さ21.8g。上下端の加工は長側縁より難で、使用痕跡無し。16は抉入偏平打製石器で、IV区1層出土品。黒色片岩の薄い剥片の縁辺に簡単に整形調整を施しただけのもの。両抉部は簡単な加工だが明らかに意図的でやや側面は潰されている。石材からみて刃器とはなり得ず、祭祀的ミニチュアとしか考えられない。長さ80mm、幅33mm、厚さ7mm、重さ28.3g。

橢円形偏平石器（17～20）17は2層No.699で、灰黒色の黒色片岩製。側面は敲打の後に磨っており、表面は磨面。裏面は素材剥離面のままで。長さ48mm、幅39mm、厚さ6mm、重さ16.7g。18はV区2層出土で淡褐～白褐色のシルト岩製。砥石か磨臼の破片を再利用したもので、裏面は凹凸があり磨面ではない。周縁を整形調整しており、長さ55mm、幅40mm、厚さ11mm、重さ31g。19は2層No.676で緑色片岩製。表裏とも自然面で、側面を粗く整形ののち、部分的に磨っている。長さ47mm、幅40mm、厚さ13mm、重さ42g。20は住6床面出土品で、同造構の項で報告済。これらは偏平打製石斧超小型品と考えられなくもないが、軟質の石材で、形状を描える意図がはっきりしている事、刃部等使用痕跡が認められない事等から、ミニチュア品として祭祀的用途と考えたい。

両端抉入磨製石器（21）V区2層出土品で、白灰色の凝灰岩風石材製。全面丁寧に磨いており、裏面は平坦で表面側がふくらむ。両端に磨った抉りを入れ紐掛けの使用が考えられる。長さ82mm、幅25～29mm、厚さ6mm、重さ23g。特殊な重要品であり、用途・類例等の分析はまとめの項で行う。

磨製石斧 (Fig.79～81)

本遺跡出土磨製石斧は小破片まで含めて18点であるが、偏平打製石斧の量にははるかに及ばない。磨製石のみと呼べる超小型品、撥形類、側面鏡が片反りとなる類、乳棒状基部を持つ類等、各種認められ、木材伐採から細加工に至るまでの各用途に対応する器種が揃っていると思われる。遺跡が山の中である事からも、木材生産加工が日常的に行われた事が想定できる。ま

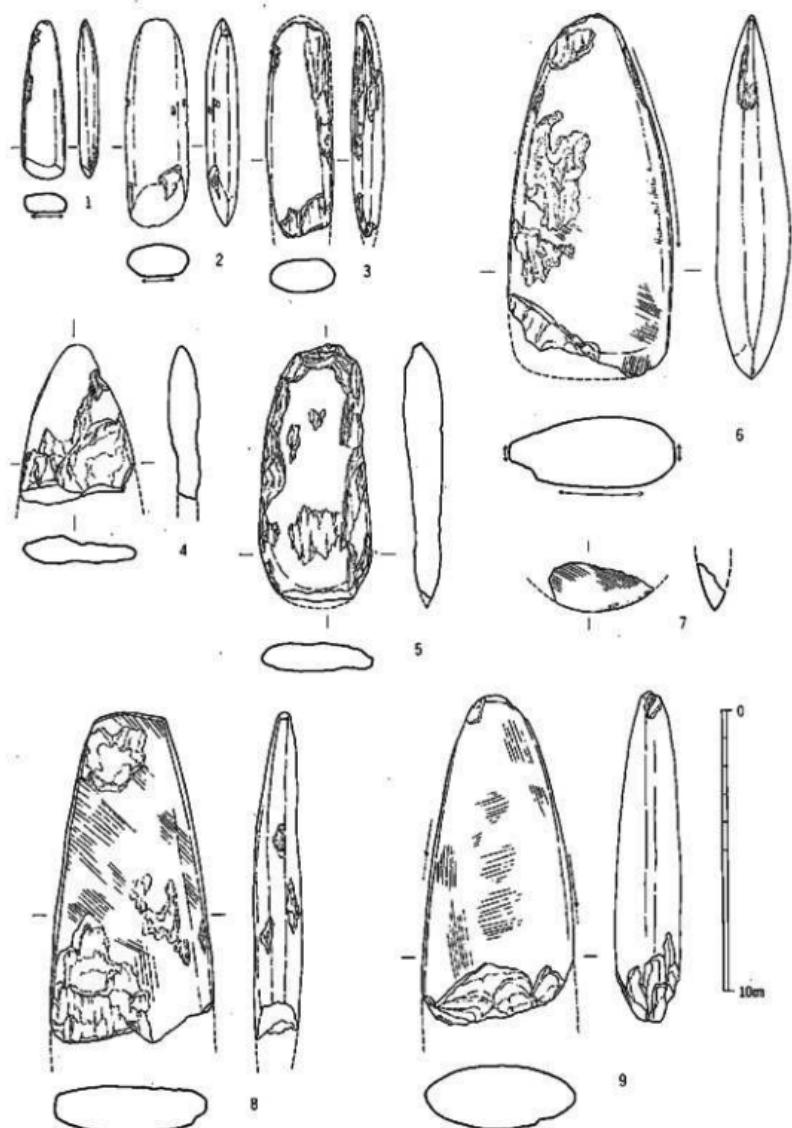


Fig.79 磨製石斧実測図（その1）(1/2)

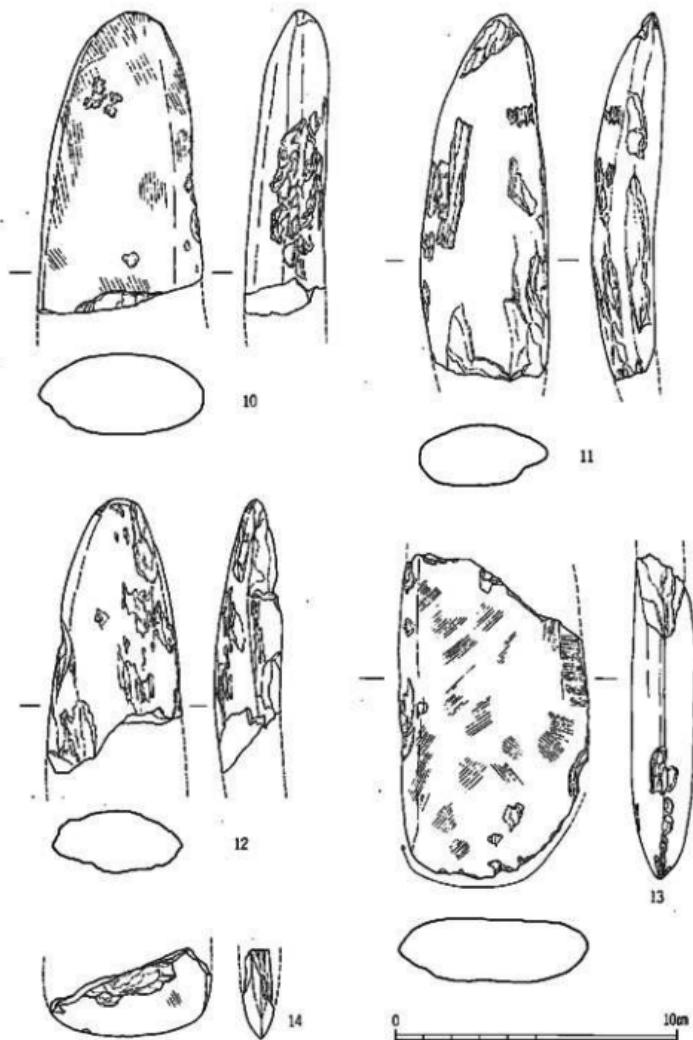


Fig.80 磨製石斧実測図（その2）(1/2)

た、磨製石斧製作そのものについても、白緑色蛇文岩の未製品が偏平打製石斧として利用されている事から、この地で磨製石斧が作られていた事がわかる。破損状況を見ると、刃部だけの小破片が大きな打割面を有すること、刃部寄りの全体の1/3程を欠損したものが多い事などから、やはり強い加熱による破損を伴いやすい作業に用いられたと判断できる。

磨製石のみ（1～3）1はV区1層出土品で淡緑がかった灰白色の蛇文岩製。全面丁寧に研磨しており、裏面は平坦面をなす。刃部は研ぎ出し稜が明確で、片刃的。長さ56mm、幅15mm、厚さ7mm、重さ9g。2はIV区1層出土品で濃緑灰色の蛇文岩製。全面研磨しているが風化。裏面はやや平坦面をなし、片刃的で、平面観も大きく刃部が片寄っている。長さ73mm、幅22mm、厚さ12mm、重さ31g。3は2層No.63で濃緑灰～白灰色の滑石質の強い片岩系石材。全面研磨と思われるが各所欠損。以上3点は超小型品であり、実用品だとすれば、片刃的でもあり石のみ的使用が考えられ、平面観が片寄った刃部である事からは、柄と平行に刃部を使用し、板材や小木片の裂き取り等に用いられたことも推定できる。ミニチュアにしては丁寧に作り過ぎており、考えににくい。

撥形類（4・6・8・9）4はP220出土品で白灰色に風化した蛇文岩製。薄形類で基部側に研磨面を残すがかなり破損。厚さ11mmで重さ29.5g。6は2層No.310で白色の網目状縞に入る白緑色蛇文岩製。全体に丁寧に研磨。両側面には面取りがみられる。裏面中央基部寄りにややへこむ素材自然面を残す。中央が厚く、基部端もわりと鋭利。長さ128mm、厚さ26mm、幅59mm、重さ264g。8は2層No.357で6と同じ石材製。全面丁寧に研磨。側面観が僅かに片反りになる。現存長117mm、幅58mm、厚さ17mm、重さ170g。9は2層No.132で6と同じ石材製。全面丁寧に研磨し、両側面矢印部はわりと明瞭な面取りとなる。現存長116mm、幅54mm、厚さ23mm、重さ204g。

片反り類（10～12）非常に特徴的な石斧であるので特に別項をたてて報告する。10はIV区2層出土品で、暗緑灰色の結晶片岩製。全体に丁寧に研磨しているが片側面には敲打痕が集中する。柄装着部の為か。平面形・側面観ともに反っている。現存長106mm、幅58mm、厚さ28mm、重さ260g。11はIII区1層出土品で淡灰～白灰色の結晶片岩製。全体に研磨しているが、節理方向の剥離凹部が多く残る。平面形・側面観ともに強く反っている。現存長129mm、幅45mm、厚さ22mm、重さ204g。12はIII区2層出土品で淡青灰～白灰色の結晶片岩系石材。全体に研磨するが、基部着柄部位の為か敲打のままの凹部が多い。側面観が反っている。以上の3点は石材も同様で意図的に反り身形に作られた事は明らかである。木をはつる手斧の着柄による工具、或は刃部を柄と平行に着けて斜め上から打ち込む伐薪具と考えられる。重量のある10などは後者であろう。

各種磨製石斧（5・7・13～19）5はV区1層出土品で暗灰色の結晶片岩製小型品。研磨されていない凹部がとても多いが基本的には磨製石斧。側面点線部は若干敲打的。長さ91mm、幅40

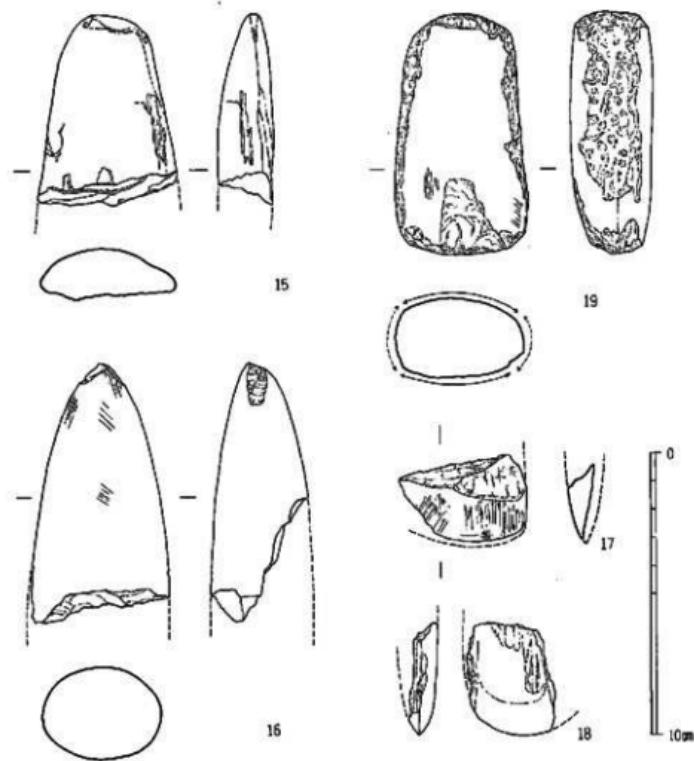


Fig.81 磨製石斧実測図（その3）(1/2)

mm, 厚さ14mm, 重さ81.5g。7は住5出土品で既に報告済。13は2層No654で淡青灰色の結晶片岩系石材。全面丁寧に研磨するが素材面の凹部がいくらか残る。刃部は刃こぼれが多い。現存長114mm, 幅66mm, 厚さ22mm, 重さ292g。14はII区1層西側出土品で白灰草色の蛇紋岩製。丁寧に研磨しているが表面風化。薄手の定角式となろう。15はP295出土品で緑色片岩製。裏面は素材の大きな凹部を持つ。丁寧に研磨しているがかなり風化。現存長57mm, 幅48mm, 厚さ18mm, 重さ78g。16はII区2層出土で灰緑色の結晶片岩製。全面丁寧に研磨しており、現存長90mm, 幅49mm, 厚さ23mm, 重さ156g。17はVI区第1号集石造構下層出土で既に報告済。18はIV区2層出土で濃灰青色の結晶片岩製。丁寧に研磨しており、やや小型の薄手品となろう。19

はⅡ区1層No.1で、淡緑灰色の結晶片岩製。磨製石斧の欠損品の周囲を打ち欠いて敲打具としたもの。四側面ともに敲打しているが、特に上下端をよく使用している。表裏に丁寧な研磨面を残す。長さ85mm、幅47mm、厚さ28mm、重さ212g。

偏平打製石斧 (Fig. 82~95)

全部で76点出土しているが、黒川式期のものが主体とするならば多すぎる気がする。各種あり、形態的には細長い短冊形(1・2・4~6)、やや幅広の短冊形(7・10~13・17・29・34・46・54)、梢円状(21・25・31・33・39・42・45・50・59)、大型幅広類(52・56・58・59・60・64・65)、小型短冊形(8・86~69・73)、超小型の模造品的類(70・71・74~76)等がある。石材は緑色片岩38点、結晶片岩系13点、黒色片岩11点、蛇文岩8点、凝灰岩3点、シルト岩・粘板岩2点、玄武岩1点となり、当甘木朝倉地域で代表的な石材である各種片岩系の石を圧倒的に多く用いている。また、本遺跡出土品の中には研磨・磨耗面のあるものが多くみられ、19点にのぼる。更に、磨製石斧未完成の再利用品と思われるものも7点認められる。1はP419出土の緑色片岩製。表面に大きく裏面のごく一部に研磨面(図中矢印部)がみられる。裏面は素材剥離面を大きく残したまま、基部片側面(点線部)は素材自然面を残す。長さ147mm、幅47mm、厚さ14mm、重さ156g。2はVI区1層出土品で、風化して白色化した蛇文岩製。刃部の磨面は意図的研磨面で裏面には刃部にごく僅かみられる。裏面は横削ぎの素材剥離面のまま。長さ140mm、幅52mm、厚さ19mm、重さ175g。3は第5号住居跡の項で報告済。4はⅢ区2層出土品で緑色片岩製。左側縁中央部(点線部)には敲打が施されている。長さ162mm、幅47mm、厚さ21mm、重さ244g。全面かなり風化しており、表面中央部は原材自然面のようだ。5はⅢ区2層出土品で緑色片岩製。表裏とも同様の研磨面があり、全体にかなり風化。長さ144mm、幅52mm、厚さ18mm、重さ226.8g。6はP155出土品で濃灰緑色の結晶片岩製。表面中央に原材自然面を残し、裏面も横削ぎの素材剥離面を大きく残したまま。薄手すぎるが裏面側縁も調整がみられ、一応製品と思われる。全体に風化しており、長さ131mm、幅38mm、厚さ10mm、重さ55g。7はV区2層出土品で風化して白っぽくボロボロになりかかっている緑色片岩製。裏面は横削ぎの素材剥離面のまま。刃部の使用痕不明。長さ158mm、幅65mm、厚さ16mm、重さ216g。8は2層No.404とP308出土品が接合したもので、暗灰緑色の結晶片岩製。長さ119mm、幅46mm、厚さ16mm、重さ138.2g。基部に礫面を残し、刃部のみに研磨部がみられ、裏面は刃部中央付近のみ。9はVI区2層出土品で濃灰~褐灰色の硬質片岩系石材。厚手で調整が異なる為、他器種の可能性あり。側縁には敲打(図中点線部)が施されている。厚さ18mm、重さ73.5g。10は2層No.24で白~淡灰緑色に風化した蛇文岩製。石質や反っていること、刃部が平面的に片寄る事等から、磨製石斧の未完成品の再利用と考えられる。現存長117mm、幅54mm、厚さ24mm、重さ242g。11はⅢ区1層出土で暗灰色で硬質の黒色片岩系石材。基部に礫面を残し、下半~

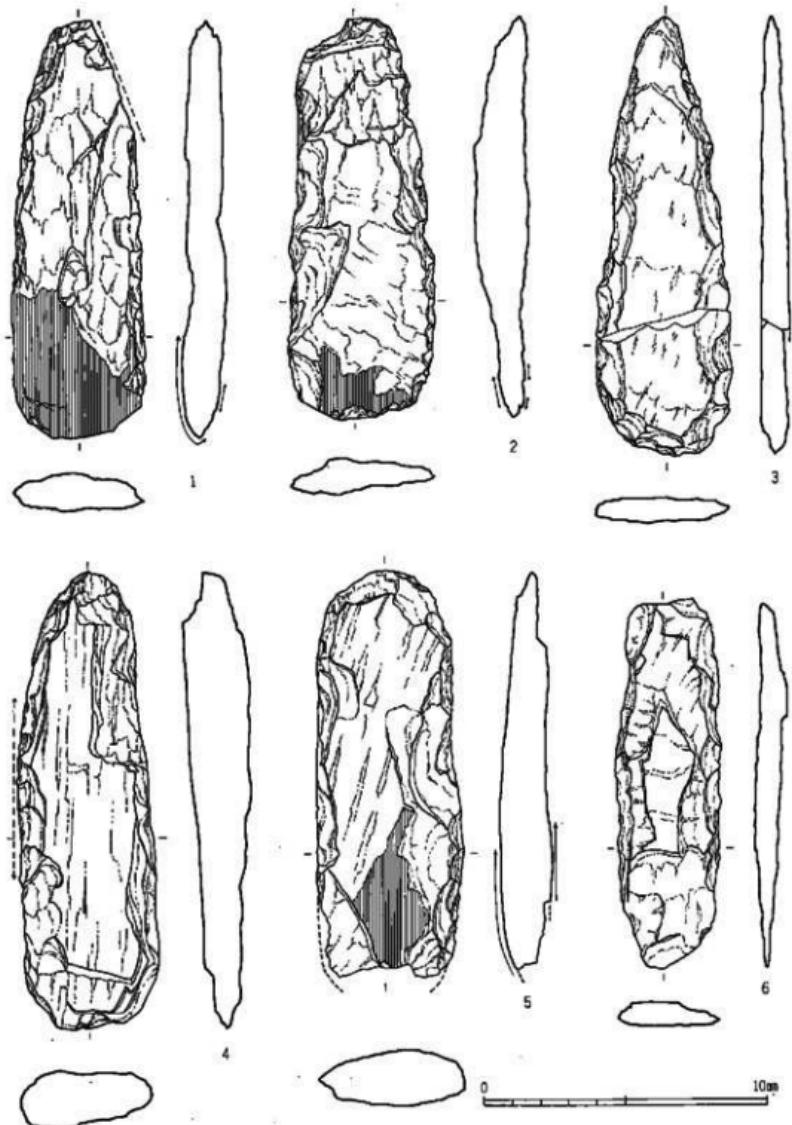


Fig.82 打製石斧実測図 (その1)(1/2)

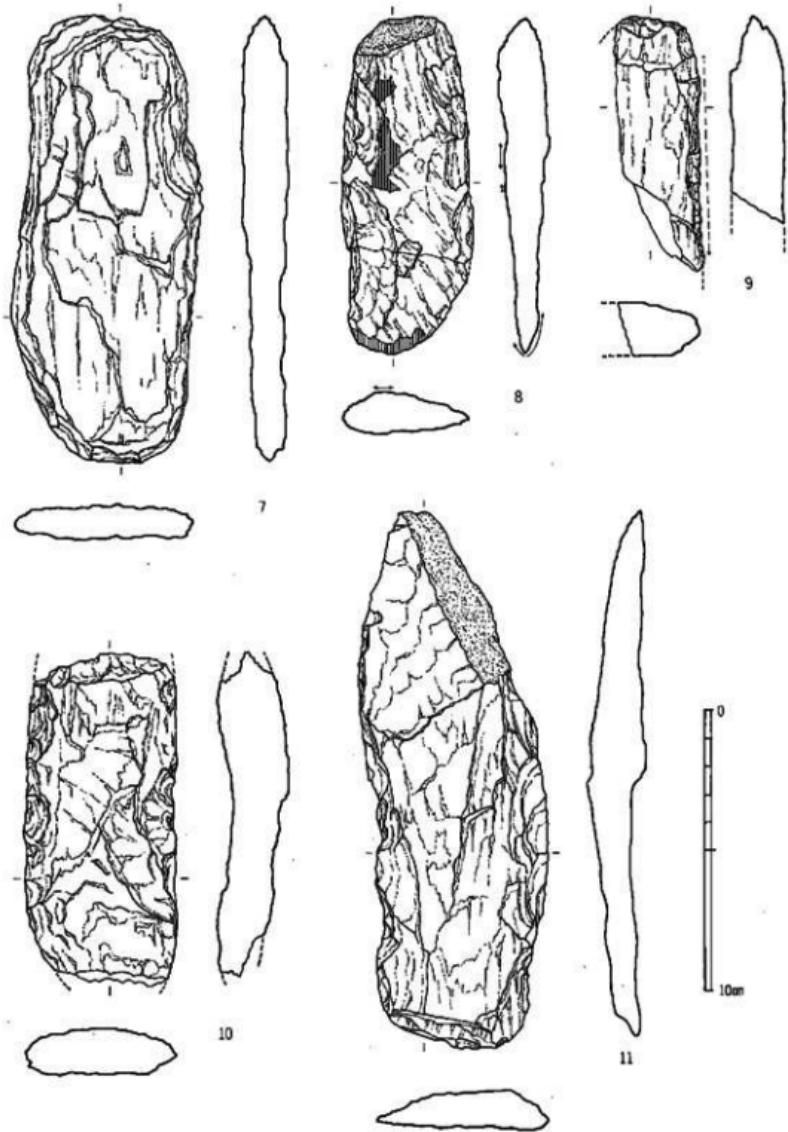


Fig.83 打製石斧実測図 (その2)(1/2)

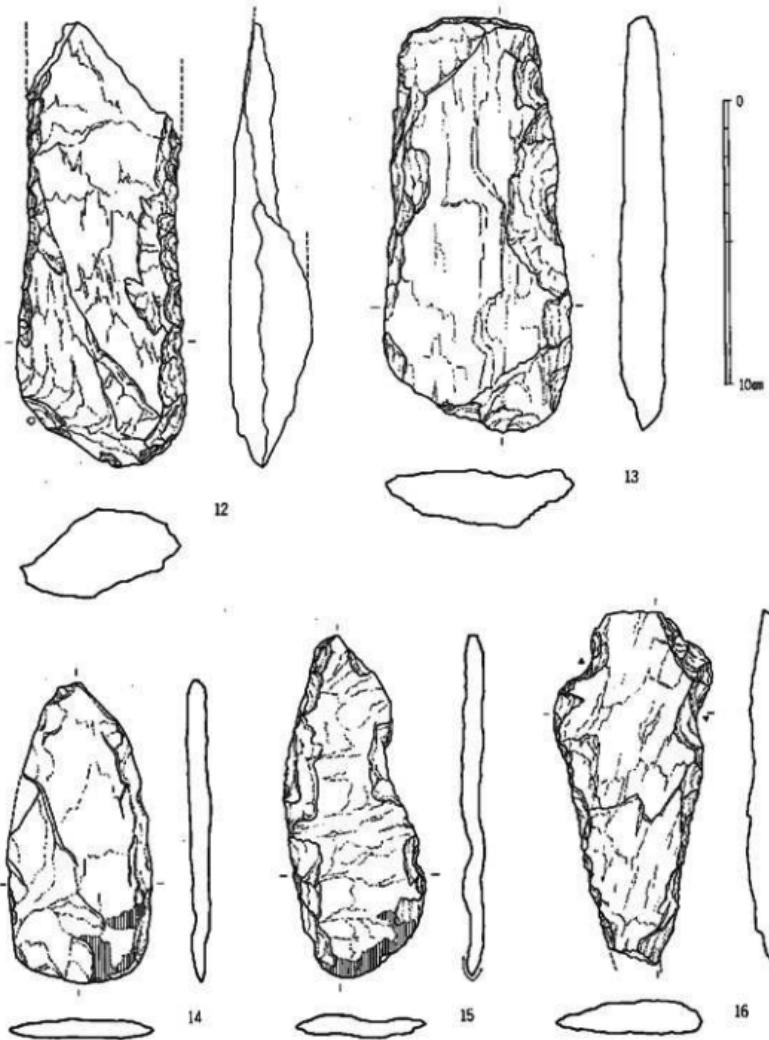


Fig.84 打製石斧実測図（その3）(1/2)

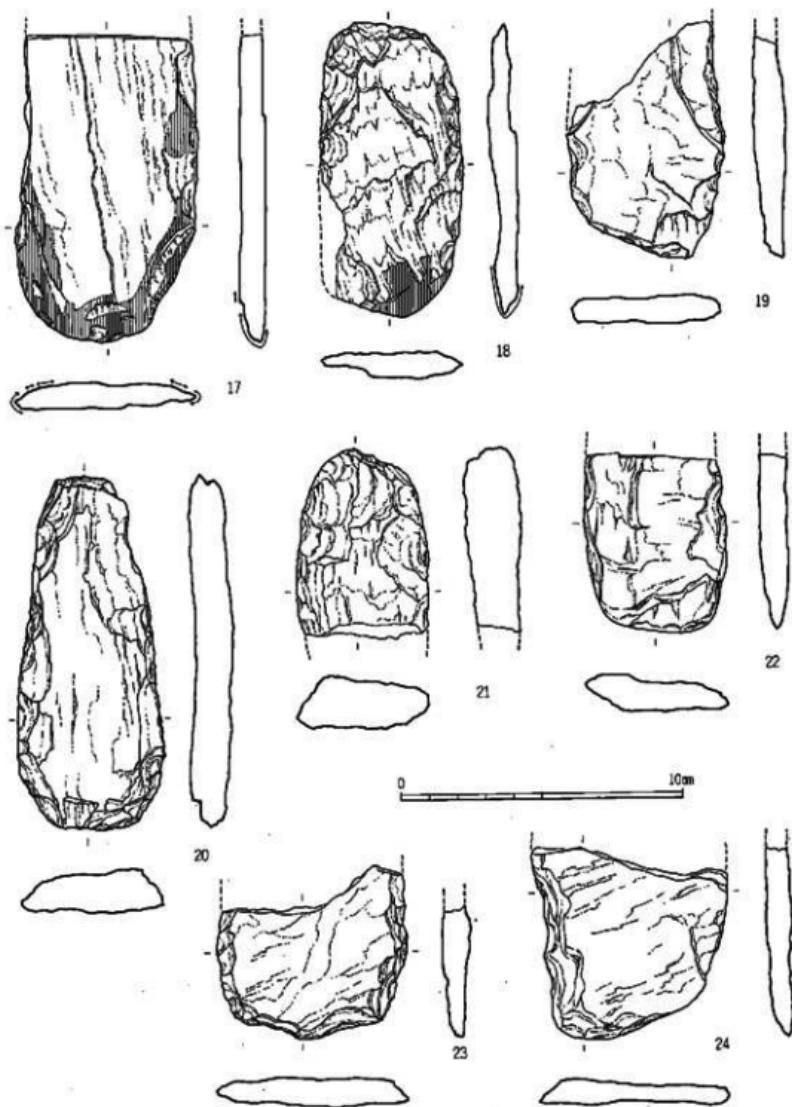


Fig.85 打製石斧実測図（その4）(1/2)

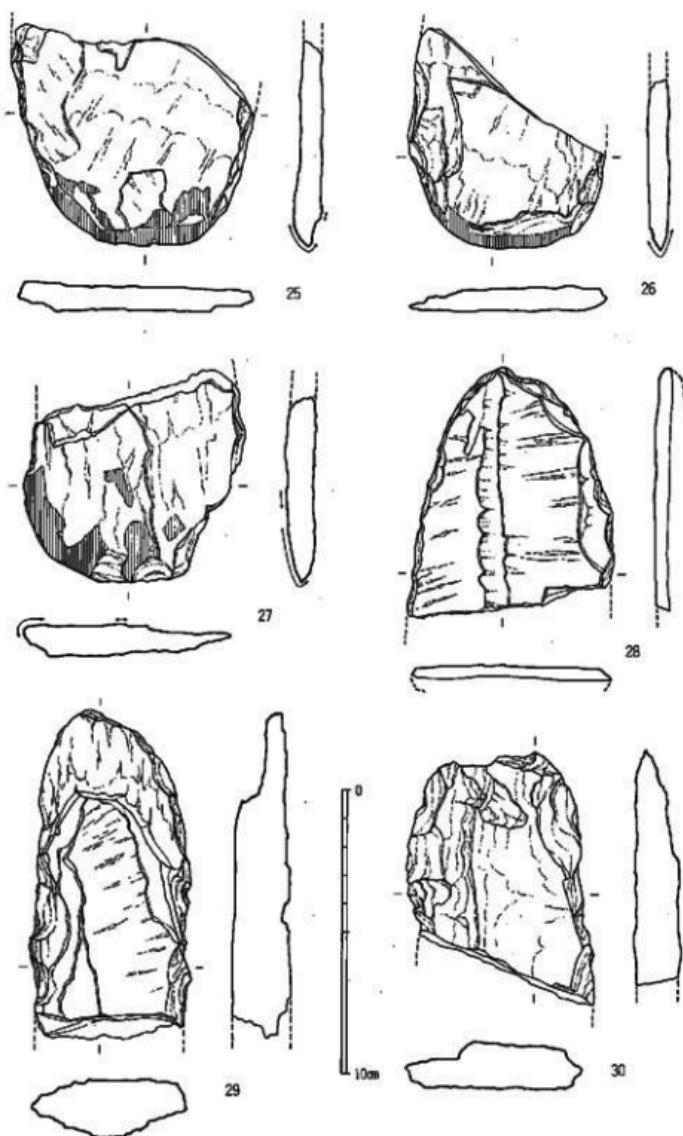


Fig. 86 打製石斧実測図（その 5）(1/2)

刃部縁辺部には幾らか使用磨耗が認められる。長さ190mm、幅53mm、厚さ20mm、重さ298g。12は2層No.30で白灰色に風化した蛇文岩製。磨製石斧の未成品で、整形段階の縁辺のわりと小さめの調整途中で破損したもの。細かい敲打作業にまでは至っていない。裏面上半と表面刃部左側の大きな欠損が放棄に至る致命的なものであろう。現存長157mm、幅60mm、厚さ30mm、重さ310g。13は2層No.241で、やや風化した緑色片岩製。裏面は原材自然面と思われ、縁辺のみ加工。長さ146mm、幅67mm、厚さ18mm、重さ305g。14は第3号土壤出土品で既に報告済。15はP269出土で緑色片岩製。刃部の磨面は使用磨耗的で裏面は刃部中央付近のみ。薄手で長さ121mm、幅46mm、厚さ7mm、重さ57.5g。16は2層No.431で暗灰銀色でやや硬質の片岩系石材。先端が尖り、基部側面に明らかな抉りを入れており、他器種の可能性が高い。抉部側面は滑れており紐かけ等が考えられる。基部端に自然面を残し、裏面は縦割ぎの素材面のままで縁辺のみ細加工を施す。長さ125mm、幅55mm、厚さ11mm、重さ96g。17はII区No.2で淡青灰色のシルト岩質石材。全体にかなり磨滅し、裏面の磨面は刃部のみ。現存長108mm、幅64mm、厚さ9mm、重さ97.5g。18はIV区1層出土で暗灰緑色の蛇文岩に近い片岩系石材。長さ105mm、幅51mm、厚さ9mm、重さ72g。裏の磨面は刃部のみ。19はV区1層出土品で緑色片岩製。裏面は主要剝離面のままで下半側縁の角々は少し使用磨耗あり。長さ84mm、幅56mm、厚さ11mm、重さ56g。20はP50出土品で硬質の黒色片岩製。表面中央は自然面で裏面は縦割ぎの素材面のまま。長さ125mm、幅52mm、厚さ15mm、重さ149g。21はVI区2層出土品で濃灰緑色の結晶片岩製。裏面も中央に素材剝離面を残し縁辺のみの難な調整を施す。長さ67mm、幅47mm、厚さ20mm、重さ93g。22はII区2層出土で緑色片岩製。かなり磨滅しており、長さ63mm、幅50mm、厚さ10mm、重さ62.9g。23はV区2層出土で白灰色に風化した凝灰岩質石材。裏面は素材剝離面のままで、長さ62mm、幅68mm、厚さ10mm、重さ45.7g。24は2層No.112で緑色片岩製。全体に磨滅するが、刃部付近は特に使用磨耗著しい。裏面は横割ぎの素材面のまま。長さ67mm、幅68mm、厚さ9mm、重さ53g。25は2層No.393で緑色片岩製。磨面は使用磨耗痕で裏面は刃部縁辺に僅かのみ。裏面は素材剝離面を大きく残したままで、長さ73mm、幅85mm、厚さ9mm、重さ95g。26はIII区1層出土で緑色片岩製。かなり風化しており、刃部のみの研磨がみられるが使用磨耗もかなりあるようだ。裏面は素材剝離面のままで、長さ77mm、幅69mm、厚さ7mm、重さ58.7g。27は2層No.227でややもろい緑色片岩製。磨面は殆ど使用磨れたなもので裏面には僅か。長さ75mm、幅78mm、厚さ10mm、重さ78.2g。28はIV区1層出土で淡緑灰～濃緑色の緑色片岩製。裏面は剥げ落ちており、長さ88mm、幅73mm、重さ49g。29はIV区2層出土で濃灰緑色の緑色片岩製。全体に磨滅著しく各所が剥げ落ちている。横割ぎ素材か。長さ116mm、幅56mm、厚さ21mm、重さ172g。30は2層No.311で緑色片岩製。裏面下半には素材剝離面を残したままで、長さ90mm、幅61mm、厚さ17mm、重さ134g。31はVI区2層出土で灰綠～暗緑色の緑色片岩製。表裏面ともに下半部がやや磨れた感じ。裏面に大きく素材剝離面を残したままで、長さ92mm、幅62mm、厚さ12mm、重

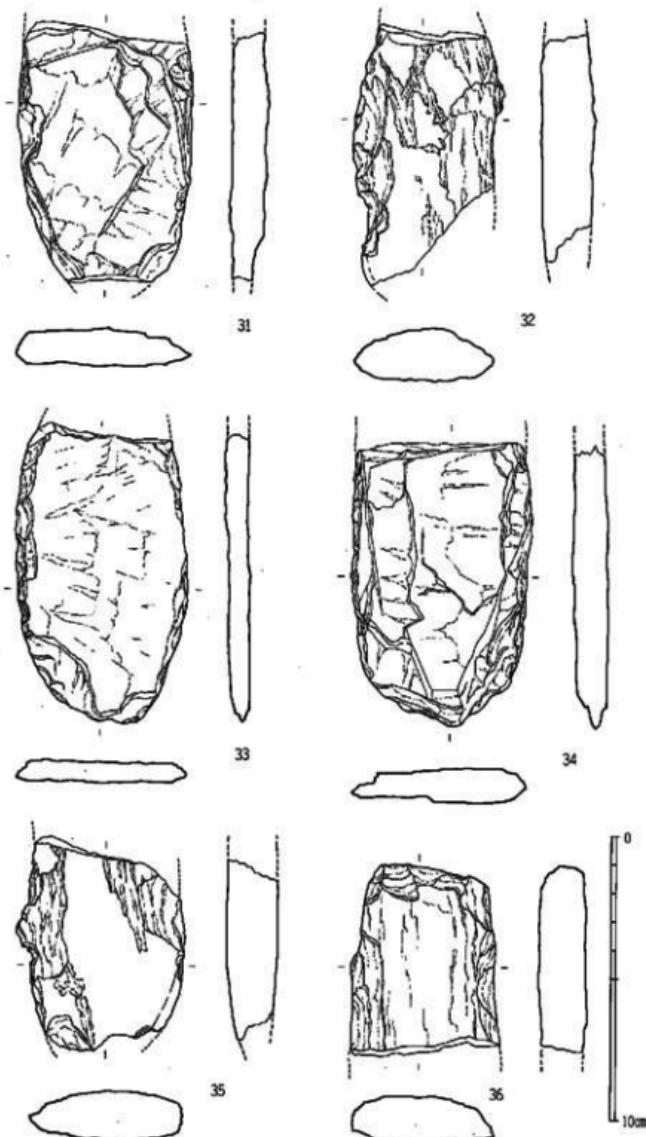
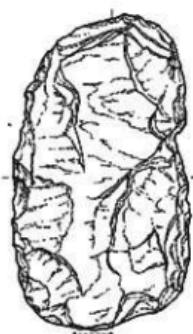
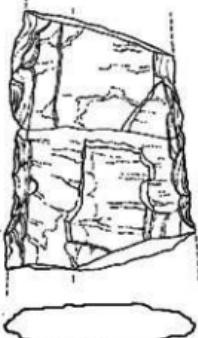


Fig.87 打製石斧実測図 (その 6)(1/2)



37



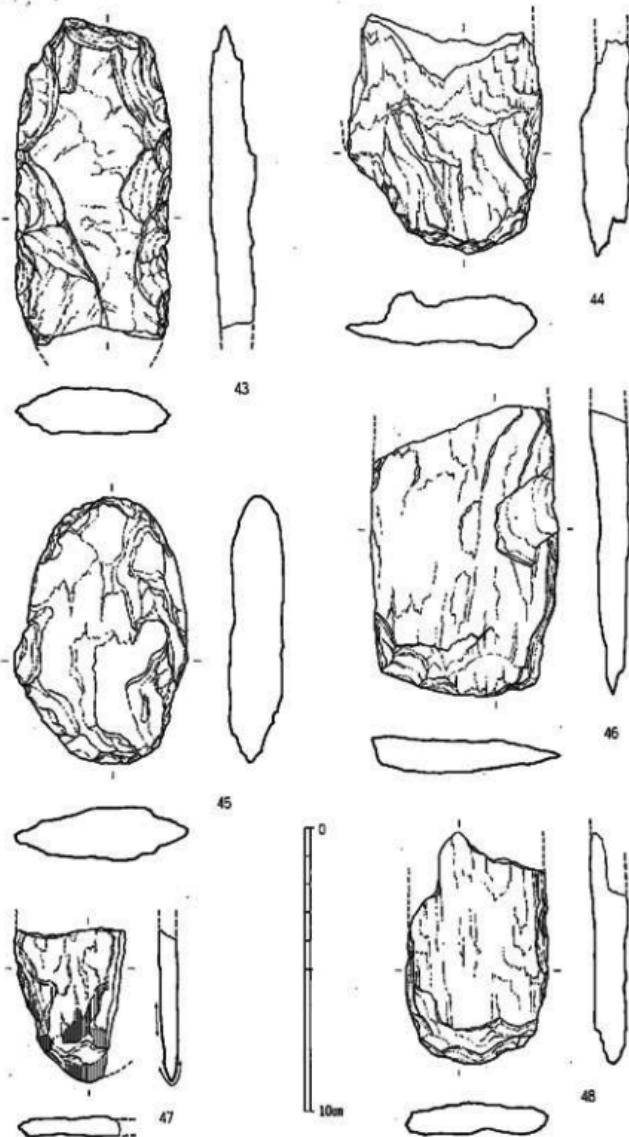


Fig.89 打製石斧実測図 (その8)(1/2)

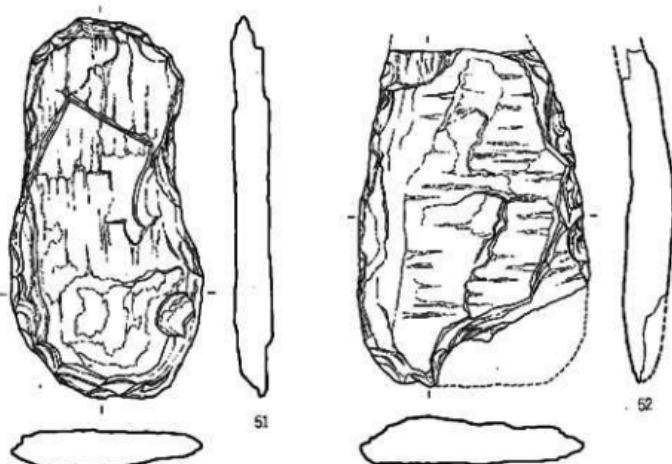
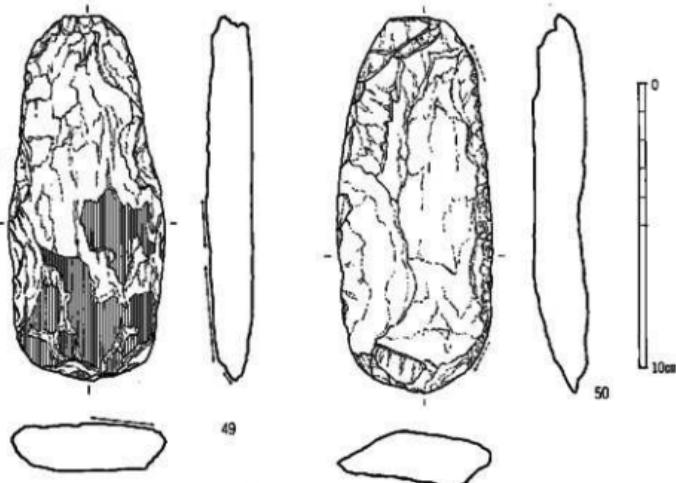


Fig.90 打製石斧実測図（その9）(1/2)

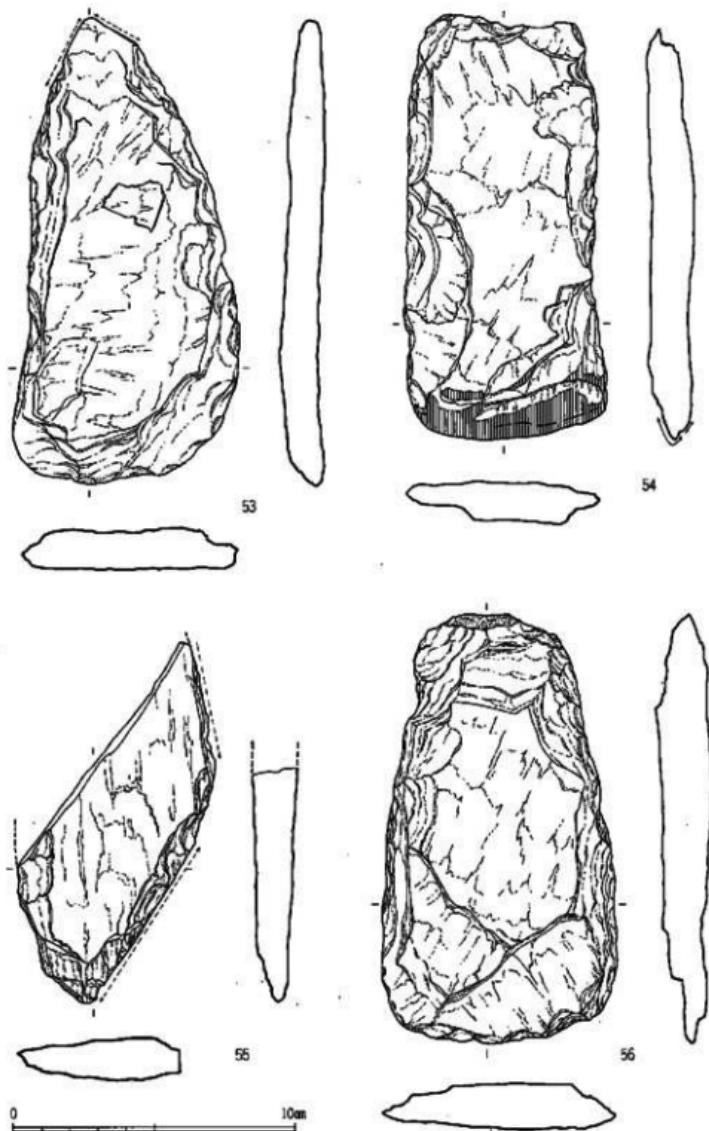


Fig.91 打製石斧実測図 (その10)(1/2)

さ130 g。32はII区2層出土で、灰色の幾らか硬質の黒色片岩に近い石材。表裏とも原材の自然平滑面を残しており一見磨製石斧のようだが、側縁を簡単に打ち欠いただけの粗製打製石斧。長さ91mm、幅50mm、厚さ19mm、重さ124 g。33は2層No673で濃灰緑色の結晶片岩製。裏面は横剥ぎの素材面で縁辺に簡単な調整を施すのみ。長さ106mm、幅60mm、厚さ8mm、重さ98 g。34は2層No674で暗灰緑色の綠色片岩製。下半部側縁が幾らか磨れている。裏面は横剥ぎの素材面を大きく残す。長さ100mm、幅62mm、厚さ12mm、重さ128 g。35は2層No18で黒色片岩製。表裏とも原材自然磨面を残し、偏平河原石の縁辺に簡単な調整を施しただけのもの。石材からみても基本的に偏平打製石斧である。長さ75mm、幅59mm、厚さ18mm、重さ114 g。36は2層No659で綠色片岩製。かなり風化しており、裏面は素材剥離面のまま。長さ67mm、幅53mm、厚さ17mm、重さ108 g。37は2層No296で淡灰黄白色の結晶片岩製。側面観がかなり反っており、裏面には横剥ぎの素材面を大きく残す。刃部（点線部）が使用により僅かに磨れている。長さ110mm、幅63mm、厚さ16mm、重さ142 g。38はII区2層出土品と2層No372が接合したもので綠色片岩製。裏面は原材自然面のようだ。長さ91mm、幅68mm、厚さ14mm、重さ148 g。39は2層No322で白く風化した蛇文岩製。磨製石斧の失敗作を偏平打製石斧として転用したもの。角々がやや磨れている。長さ83mm、幅60mm、厚さ25mm、重さ158 g。40は2層No324で灰～淡灰白色の黒色片岩製。風化して極めて脆い。長さ98mm、幅71mm、厚さ15mm、重さ150 g。41は2層No612で灰黒色の結晶片岩製。表面に平滑な原材自然面が残る。長さ54mm、幅51mm、厚さ16mm、重さ54 g。42はV区1層出土で白く風化した蛇文岩製。磨製石斧未成品を転用したもの。裏面は素材剥離面のまま。明確な使用痕は無い。長さ89mm、幅56mm、厚さ23mm、重さ142 g。43は2層No11で綠色片岩製。使用痕は無く、長さ115mm、幅54mm、厚さ15mm、重さ149.5 g。44は2層No682で灰白綠色に風化した蛇文岩製。磨製石斧未成品を転用したもの。縁辺調整は始めているが、表面の凸部が大きく成品かどうかは疑問。長さ85mm、幅69mm、厚さ17mm、重さ121.7 g。45はVI区2層出土で灰黄緑色に白い筋が入る結晶片岩製。磨滅著しく、縁辺部の粗い調整のみ。長さ94mm、幅60mm、厚さ19mm、重さ140 g。46はIII区2層出土で綠色片岩製。かなり風化しているが、鋭利な刃部付近は使用磨耗が感じられる。左側面は原材粗面のまま。長さ102mm、幅66mm、厚さ12mm、重さ148 g。47はP185山土で綠色片岩製。磨面はかなり使用磨耗的。裏面は素材剥離面のまま。厚さ7mm、重さ20.3 g。48は2層No722で綠色片岩製。全体にかなり風化しており、長さ81mm、幅51mm、厚さ13mm、重さ74 g。49はIV区1層出土で白灰色の結晶片岩製。研磨面は裏面にはみられない。裏面は縦剥ぎかと思われる素材剥離面を大きく残し、周縁調整を施すのみ。長さ128mm、幅55mm、厚さ16mm、重さ182 g。50は2層No278で灰色の結晶片岩製。全体に整形はうまい。右側縁（点線部）は敲打仕上げで、基部側面には原材粗面を残す。使用痕は不明瞭。長さ132mm、幅55mm、厚さ17mm、重さ230 g。51はI区1層山土で暗緑色の綠色片岩製。風化著しく、明らかな使用痕等不明。基部寄りの両側縁が浅く抉られたように整形される。長

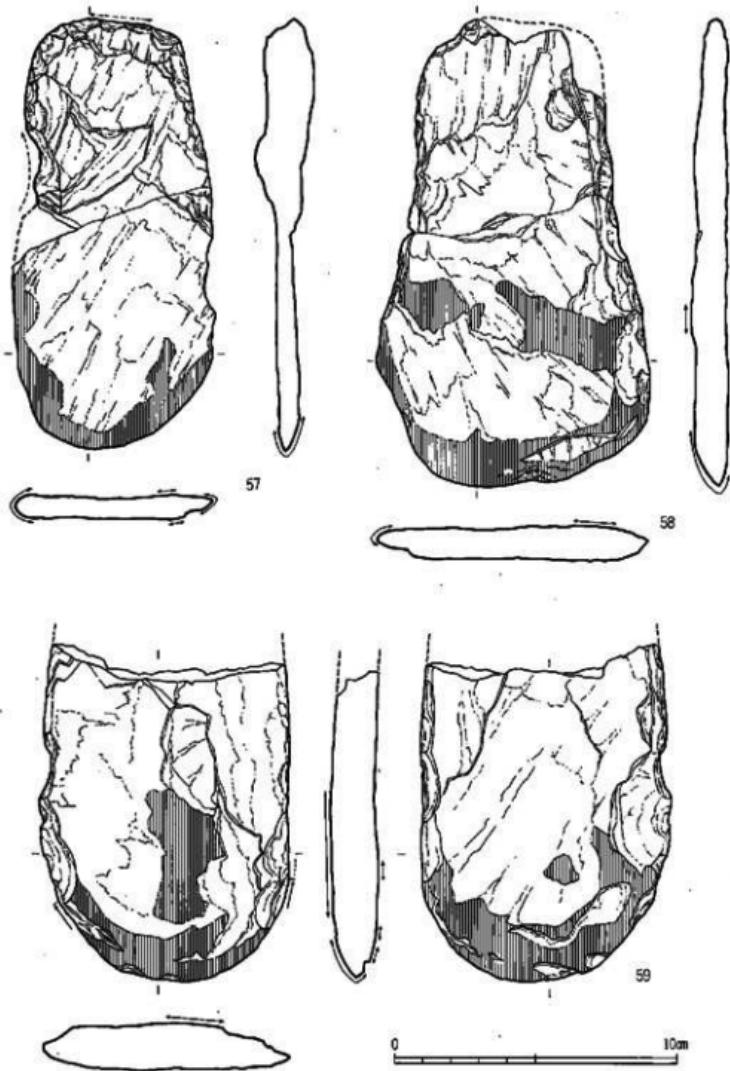


Fig.92 打製石斧実測図 (その11)(1/2)

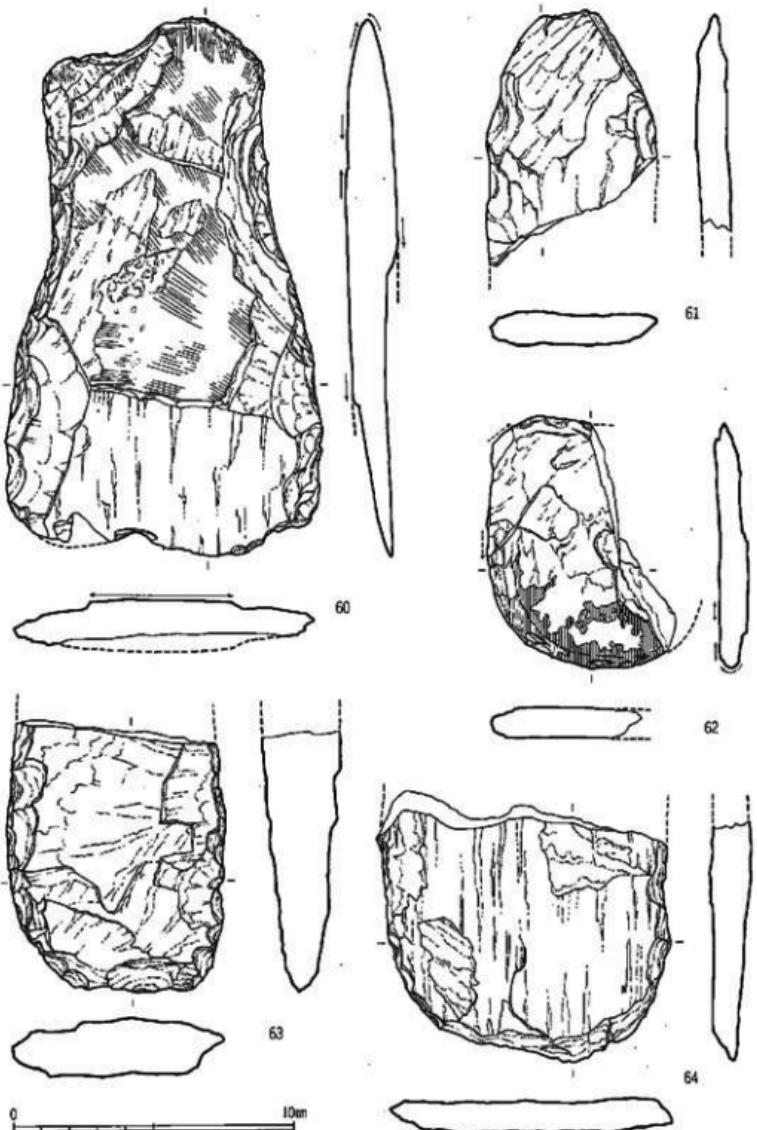


Fig.93 打製石斧実測図（その12）(1/2)

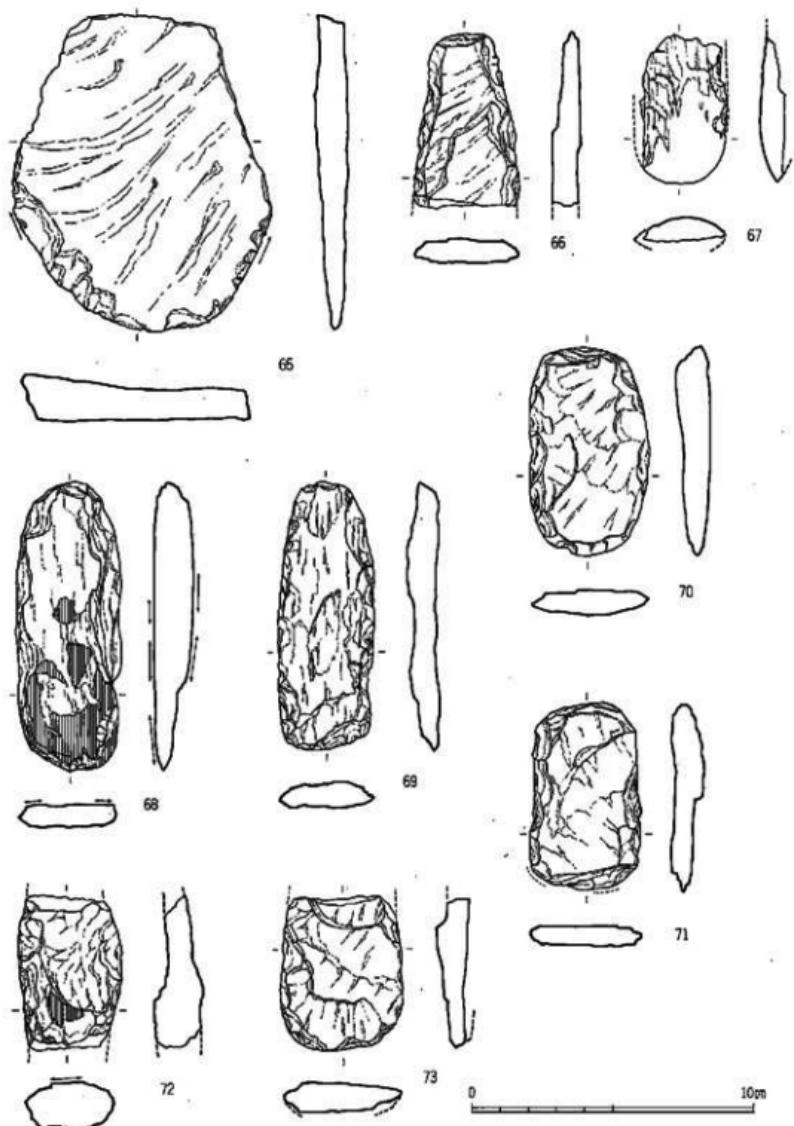


Fig.94 打製石斧実測図 (その13)(1/2)

さ135mm、幅68mm、厚さ14mm、重さ210g。52はⅢ区1層出土で淡灰緑～淡灰緑の緑色片岩製。裏面も横刷ぎの素材面を残したまゝ。反っており撮形に近い類。長さ119mm、幅82mm、厚さ17mm、重さ232g。53はIV区2層出土で緑色片岩製。やや風化しており、刃部付近は幾らか使用磨耗的。裏面は横刷ぎの素材面のまゝ。基部側面（点線部）は原材粗面のまゝ。長さ164mm、幅77mm、厚さ14mm、重さ265g。54は2層No.557で緑色片岩製。磨面は使用磨耗的で裏面は刃部中央に僅か。裏面は横刷ぎの素材面を中央に残す。長さ149mm、幅70mm、厚さ15mm、重さ262g。55は2層No.620で緑色片岩製。右下点線部側面に劈開面を残し、下半の整形調整時に左上刃が劈開で割れてしまった為放棄された未成品と思われる。右上点線部は全く縁辺未調整。長さ126mm、幅70mm、厚さ16mm、重さ143g。56は2層No.225で緑色片岩製。刃部縁辺は幾らか磨耗している。裏面中央には横刷ぎの素材面を残す。長さ152mm、幅83mm、厚さ18mm、重さ358g。57は2層No.397とⅡ区2層出土品が接合したもの。灰色に黒色斑が入るわりと硬めの片岩系石材。刃部はかなり使用しており、縁位の使用擦痕が明瞭である。裏面の磨面も表と同様刃部のみ。左側縁基部寄りには意図的抉部がみられ。その側面は潰れている。基部端側面（点線部）に原材粗面を残す。長さ151mm、幅71mm、厚さ17mm、重さ216.4g。58は2層No.37で緑色片岩製。裏の磨面は刃部に僅か。裏面は素材剥離面のまゝ。長さ164mm、幅97mm、厚さ12mm、重さ314g。59は2層No.672で灰緑色の緑色片岩製。全体に磨減しているが、刃部は偏平打製石斧にしてはシャープで、研ぎ出したものであろう。両側縁にもかなり使用磨耗がみられる。長さ119mm、幅89mm、厚さ16mm、重さ288g。60は2層No.34で白灰色の粘板岩製。下半は表裏ともに剥げているが、石材が軟質のため全体的に刃部側も磨いていたものであろう。表面中央一部に敲打部が残り、表裏は研磨の前に敲打調整が施されていたことがわかる。現存長190mm、幅113mm、厚さ18mm、重さ348gという特大撮形類。61はIV区1層出土で淡青緑色の緑色片岩製。表裏とも縁辺の難な整形加工のみ。基部右側に原材粗面を残す。長さ90mm、幅61mm、厚さ11mm、重さ89g。62はⅠ区2上層出土で緑色片岩製。刃部の磨面は殆ど使用磨耗痕で裏面には殆ど見られない。左上半（点線部）側面には原材粗面を残し、下半（点線部）側面は敲打的。裏面は素材剥離面のまゝ。長さ89mm、厚さ11mm、重さ102g。63は2層No.68で緑色片岩製。やや風化しており、使用磨耗もあるようだが明確ではない。裏面は粗い打割面のまゝ。長さ95mm、幅78mm、厚さ28mm、重さ310gの厚手品。64はP571出土で灰黒色硬質の黒色片岩系石材。矢印間の刃部のみかなり磨耗している。裏面も縁辺のみの調整。長さ82mm、幅103mm、厚さ14mm、重さ157gの大型類。65は2層No.312で淡赤紫灰色の凝灰岩製。刃部（矢印間）のみを簡単に調整ただけ。表面が主要剥離面で裏面は原材自然面。長さ111mm、幅92mm、厚さ12mm、重さ154g。66は2層No.387で灰緑色の緑色片岩製。長さ61mm、幅38mm、厚さ10mm、重さ30gの細身小型類。67はⅡ区2層出土品で灰色の黒色片岩製。刃部だけ丁寧に研ぎ出した局部磨製品であるが、小型で軟質の石材である事から、通常の磨製石斧とは考えられず、粗製石斧の異種と考えた方がよ

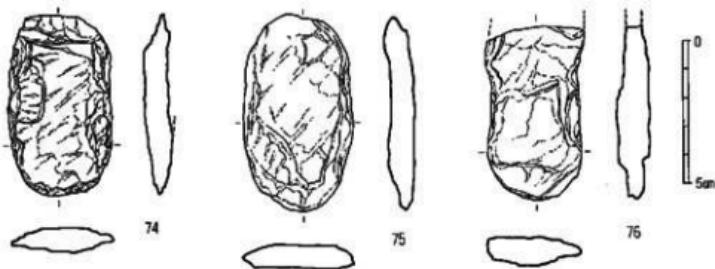


Fig.95 打製石斧実測図（その14）(1/2)

い。長さ52mm、幅31mm、重さ18.2g。68はIV区1層出土で緑色片岩製。かなり風化しており、裏面は中央付近にだけ磨面がみられる。長さ101mm、幅37mm、厚さ14mm、重さ82g。69は2層No.410で灰色の結晶片岩製。長さ95mm、幅34mm、厚さ10mm、重さ63g。裏面は縦削ぎの素材面のままでほぼ平坦。使用痕不明。70は2層No.145と2層No.195が接合したもので淡灰色に風化した玄武岩製。裏面には原材自然面を大きく残す。横削ぎ。71はP267出土で緑色片岩製。刃部点線部に幾らか磨耗がみられる。裏面は素材削離面のまま。長さ66mm、幅40mm、厚さ10mm、重さ40g。72はIV区1層出土で白灰色に風化した蛇紋岩系石材。表面一部に磨面が残り、磨製石斧片を再加工して石のみの小型打製石斧にしたものであろう。長さ53mm、幅36mm、厚さ17mm、重さ47g。73は2層No.544で灰色の片岩系石材。刃部縁辺は僅かに磨耗している。裏面は剥落。長さ54mm、幅44mm、重さ37g。74は2層No.163で灰色の片岩系石材。75・76とともに実用品とは思われず、石斧のミニチュア或は他器種と考えられる。長さ63mm、幅36mm、厚さ9mm、重さ36g。75はV区1層出土で銀灰色の黒色片岩系石材。裏面は素材削離面のまま。極めて磨耗しているが、石斧としての使用によるものでは無い。長さ69mm、幅39mm、厚さ9mm、重さ38.7g。76はV区1層出土で暗灰色の黒色片岩製。石斧としての実用品ではなかろう。長さ60mm、幅35mm、厚さ11mm、重さ35.9g。

打製石器 (Fig.96~100)

総数86点出土しており、漆黒色良質の腰岳産黒曜石製が圧倒的に多く、姫島産黒曜石は少ない。形態的には、縄文頭初期と思われる逆V字彫が混じるが他は晩期のもので、鏡形彫、五角形彫、凹基彫、平基彫と各種ある。中でも五角形彫が目立ち、ややくずれた類まで含めると25点に及び、29%を占める。表裏に素材削離面を残すやや広義の削片彫も多く、27点に及ぶ。全体に調整は難である。

1は2層No.32でかなり半透明良質の黒曜石製。裏面も丁寧で細かい。縄文の古い時期のもの

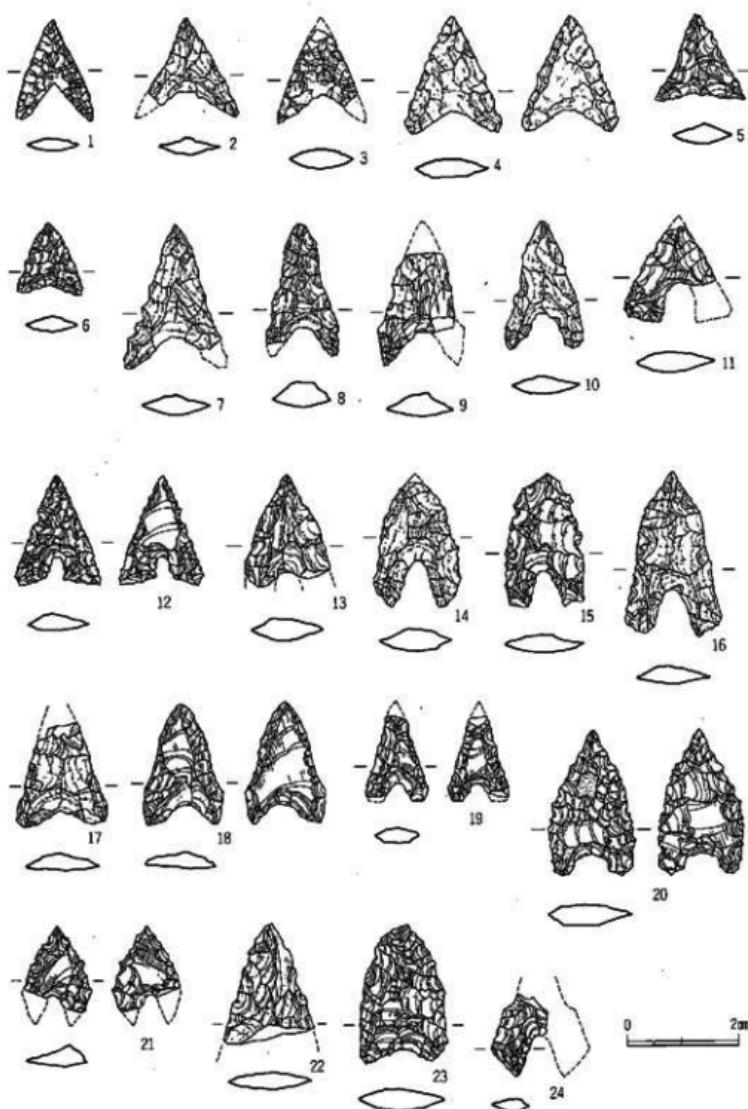


Fig.96 打製石器実測図（その1）(実大)

で0.3 g。2は2層No528でやや風化した安山岩製。左右非対称形で、裏面も同様にやや雜。0.35 g。3は2層No73で漆黒色良質の黒曜石製。裏も丁寧な調整で0.5 g。4は2層No706でかなり風化した安山岩製。裏面に主要剥離面を残すが全体に整形はうまい。0.7 g。繩文早期前後。5は漆黒色良質の黒曜石製で2層No4。裏はやや雜で0.4 g。6は2層No738で黒色良質の黒曜石製。小型品だが裏も丁寧で、抉部も細かいリタッチ。やや風化しており0.2 g。7はVI区2層出土品でかなり風化した安山岩製。裏も同様の粗めの調整で0.9 g。8はIV区2層出土で姫島産黒曜石製。裏も丁寧で0.7 g。10は2層No75で安山岩製。裏も粗い調整で0.6 g。11は2層No515でやや半透明良質の黒曜石製。裏も丁寧で0.5 g。12はII区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。表面にも僅かに素材剥離面を残し0.4 g。13はIII区2層出土で姫島産黒曜石製。裏も丁寧だが、表上半段両脇に素材剥離面を残す。0.8 g。14はV区2層出土で安山岩製。裏面中央まで縦方向の大きな欠損あり。1.1 g。15は2層No354で漆黒色良質の黒曜石製。調整は雑で裏面は平坦。0.9 g。16はV区2層出土で安山岩製五角形鐵。裏面は雑で平坦気味。1.1 g。17はVI区1層出土で安山岩製。表裏とも調整は粗く0.8 g。18は2層No173で姫島産黒曜石製。表裏に素材剥離面を残し0.7 g。19は2層No522で姫島産黒曜石製。裏に主要剥離面を残し0.4 g。20は2層No317で漆黒色良質の黒曜石製。表に裸面、裏に主要剥離面を残す。1.2 g。21は2層No673で漆黒色良質の黒曜石製。表裏に素材剥離面を大きく残す。0.4 g。22は2層No61で、淀姫産より濃い黒曜石製。横らか風化しており、表のみに素材剥離面を残す。0.7 g。23はVI区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。裏は粗雑で、表裏とも中央に僅かに素材剥離面を残す。1.5 g。24はII区1層中央部出土で黒色良質の黒曜石製。0.3 g。25はP539出土で安山岩製。かなり風化しており0.5 g。繩文頭初期のもの。26はV区1層出土で安山岩製。表裏とも丁寧で1.5 g。27はIV区1層出土で安山岩製。裏面下半に主要剥離面を残す。1.3 g。28はP21出土でやや半透明の黒曜石製。長脚の歛形鐵で0.7 g。29はP519出土で安山岩製。丁寧なつくりで1.1 g。30は住3出土品で既に報告済。31は住8出土のチャート製で既に報告済。32はP558出土で安山岩製。縁辺のリタッチは丁寧で0.5 g。33はIV区2層出土で安山岩製。縁辺を丁寧に調整しており1.2 g。34はV区1層出土で安山岩製。あまり風化せず1.1 g。35はV区1層出土で安山岩製。1.2 g あまり風化せず。36はIV区1層出土でやや半透明良質の黒曜石製。全体にやや雑で1.5 g。37はVI区1層出土で安山岩製。裏面も中央に大きく主要剥離面を残す。横長不定形剥片使用で1g。38はVI区1層出土で大きな不純物を幾らか含む黒曜石製。裏面に大きく主要剥離面を残し、極めて粗雑な作り。1.5 g。39はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。雑な作りで0.4 g。40はP516出土で漆黒色良質の黒曜石製。極めて雑で1.1 g。41はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。作りは雑で厚手の素材を用いる。表に素材剥離面を残す。1 g。42はP539出土で安山岩製剥片鐵。0.45 g。43はVI区2層出土で濃灰色不透明のチャート製。

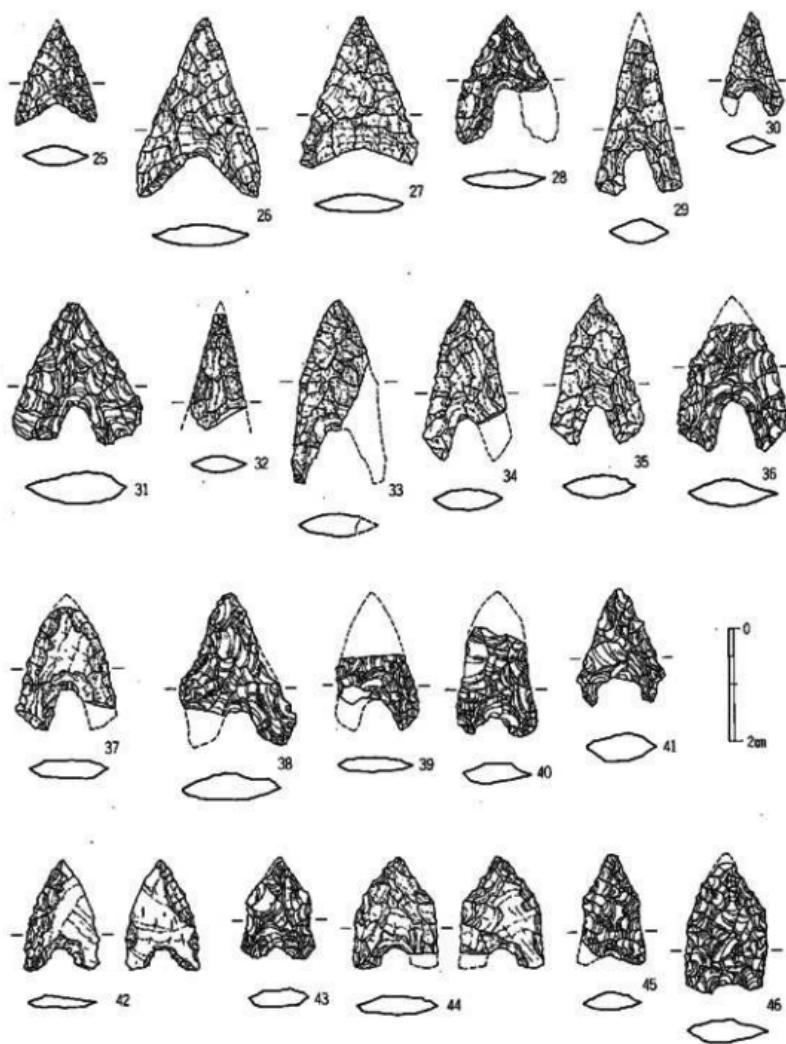


Fig.97 打製石器実測図（その2）(実大)

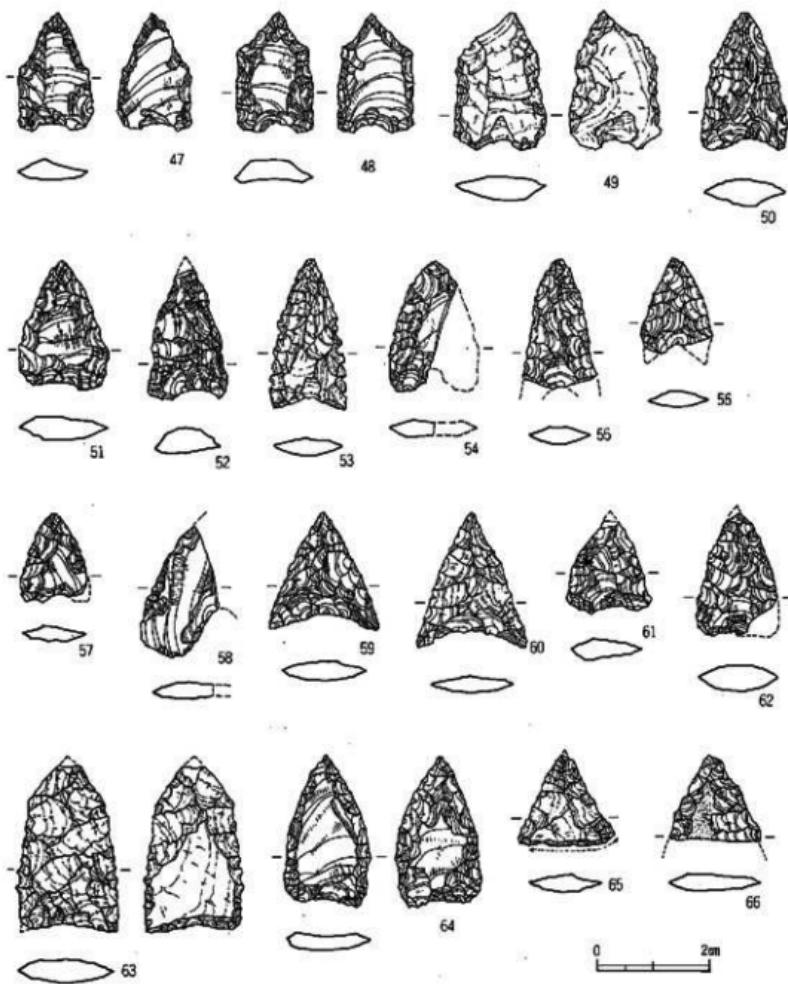


Fig.96 打製石器実測図 (その3)(実大)

裏も雑で0.6 g。44は住5出土の安山岩製で既に報告済。45はV区2層出土で良質の黒曜石製。わりと丁寧なつくりの五角形錐で0.6 g。46はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。刺離度数は多いが作りは下手。1.4 g。47はV区1層出土で小さい不純物を僅かに含む黒曜石製。不定形小剝片使用。0.4 g。48はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。1.1 g。49はV区1層出土で安山岩製。横長不定形剝片を使用。1.5 g。50はIV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石製。かなり雑な調整で、表裏中央に素材剝離面を残す。1.6 g。51はVI区2層出土で不純物をかなり含む黒曜石製。裏面中央にも小さく主要剝離面を残す。1.5 g。52はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。極めて雑な調整で裏面の一部に主要剝離面を残す。1.2 g。53は第3号土墳出土の安山岩鋸齒鐵で既にその項で報告済。54はP575出土でやや半透明良質の黒曜石製。0.6 g。55はVI区第1号集石遺構下層出土で既に報告済。56はP561出土で姫島産黒曜石製。かなり風化しており0.4 g。57はIV区1層出土で姫島産黒曜石製。かなり雑で裏面一部にも主要剝離面を残す。0.4 g。58はI区第1号トレント第2層出土で黑色良質の黒曜石製。裏面にも主要剝離面を残す。大型品で0.7 g。59はV区1層出土でやや半透明良質の黒曜石製。作りはうまく0.9 g。60はIV区1層出土で安山岩製。作りはうまく0.8 g。61はV区1層出土で不純物を僅かに含む黒色の黒曜石製。雑な作りで0.8 g。62はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。雑な調整で1.1 g。63はV区1層出土で安山岩製。2.3 g。64はV区1層出土で小不純物をかなり含む黒色の黒曜石製。1.1 g。65はVI区第1号集石遺構下層出土で安山岩製。その遺構の項で報告済。66はP396出土で漆黒色良質の黒曜石製。雑な調整で表に礫面、裏に主要剝離面を大きく残す。0.6 g。67はIV区1層出土で姫島産黒曜石製。部厚く雑で石鎚的ではない。3.6 g。68はII区1層中央部出土で姫島産黒曜石製。やや風化しており1.4 g。69はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。1 g。70は住5出土の黒曜石製で、既に報告済。71はP284出土で漆黒色良質の黒曜石製。裏も雑で1.2 g。72はV区1層出土で良質の黒曜石製。0.6 g。73はI区1層出土で安山岩製。厚手で雑なつくり。2.35 g。74はV区1層出土で大きい不純物をかなり含む黒曜石製。基本的に錐の作りではなく小スクレイバー的。1.2 g。75は2層No9で黒色良質の黒曜石製。全体にやや雑で表に礫面、裏面一部に主要剝離面を残す。0.9 g。76は2層No452で漆黒色良質の黒曜石製。厚手で3.1 g。77はVI区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。1.5 g。78は2層No328で安山岩製。全体に作りはうまい。1.4 g。79はV区2層出土で小さい不純物を幾らか含む黒色の黒曜石製。表裏とも雑。2.3 g。80はII区2層出土で大きめの不純物を僅かに含む黒曜石製。1.4 g。81は2層No411で不純物を僅かに含む黒曜石製。作りは下手。0.9 g。82は2層No392で安山岩製。裏面に主要剝離面を大きく残す。縦長剝片使用。2.5 g。83は2層No575で安山岩製。横長小剝片使用でかなり風化。極めて簡単な調整のみであるが、とてもうまく素材剝片を利用している。裏面右下に調整打面がみえ、剝片尾端の礫面も残っている。1.2 g。84は2層No291で良質の黒曜石製。裏面は雑で平坦。主要剝離面が2ヶ所残る。

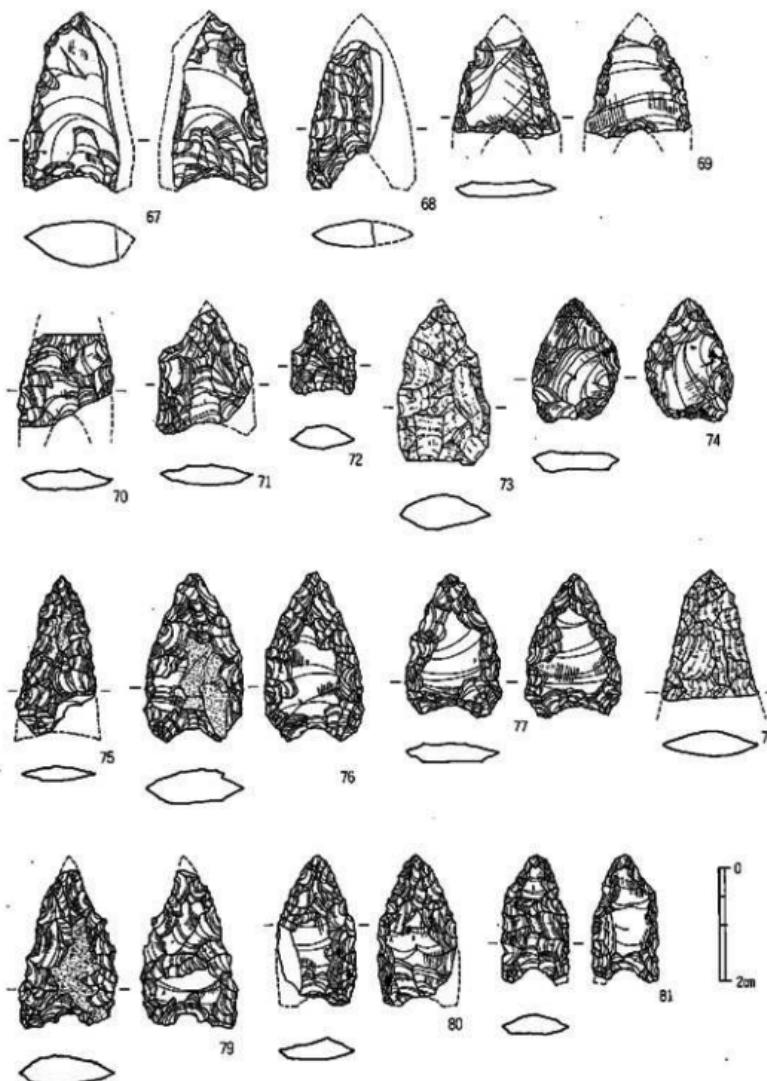


Fig.99 打製石器実測図（その4）(実大)

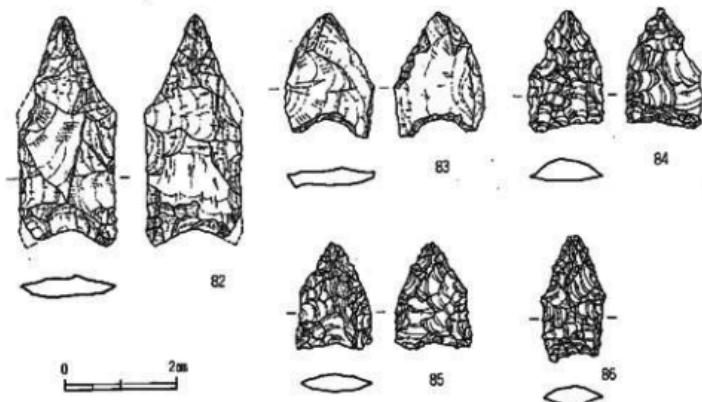


Fig.100 打製石器実測図（その5）(実大)

0.9 g。85は2層No.529で不純物を幾らか含む黒曜石製。裏面は雑で主要剥離面を残す。0.6 g。
86は2層No.189で小不純物を幾らか含む黒曜石製。裏面は雑な調整で0.8 g。

石匙・スクレイパー (Fig.101~106)

撮部を持つ石匙形類は縦・横型双方あるが、横型石匙のうちにしっかりしたもののが幾つか見られる他は、抉りを雜に作り出しただけのものが大部分である。逆に言うと、抉りを入れる事に意識が強く働いていると言える。この種石器全体に安山岩の横長剝片使用のものが多いが、やや精製品には縦長剝片を利用したものが少數ながら存在する。以下、僅かに抉りを意識したものも石匙類に含めて説明する。

縦型石匙 (1・5・7・9・10・19・20) 1は2層No.205で小さな不純物を幾らか含む漆黒色の黒曜石製。打面は縦面で、縦長の大きい剝片を使用。6.6 g。5はV区1層出土で安山岩製。あまり風化しておらず、抉り部調整は雑。裏面左側辺には使用刃こぼれがみられる。14.4 g。7は住5出土の安山岩製で既に報告済。9は2層No.396で濃淡の縞が入る安山岩製。横長剝片使用であまり風化著しくない。左側抉部は縦面であり、素材の形状をうまく利用している。37.6 g。10は2層No.160で安山岩製。かなり風化しており、裏面に主要剥離面は残すがわりと丁寧に調整。打面は縦面で縦長の厚手素材。41.9 g。19はP28出土で安山岩製。あまり風化せず、抉部は明瞭ではないが意識している。縦長状剝片を使用。30.4 g。20は2層No.442で安山岩製。あまり風化せず、縦長剝片使用。刃部は殆ど調整を施さないが左側辺が素材のままの鋭利な刃部となっている。両抉部側面は潰し状に磨かれている。93.5 g。

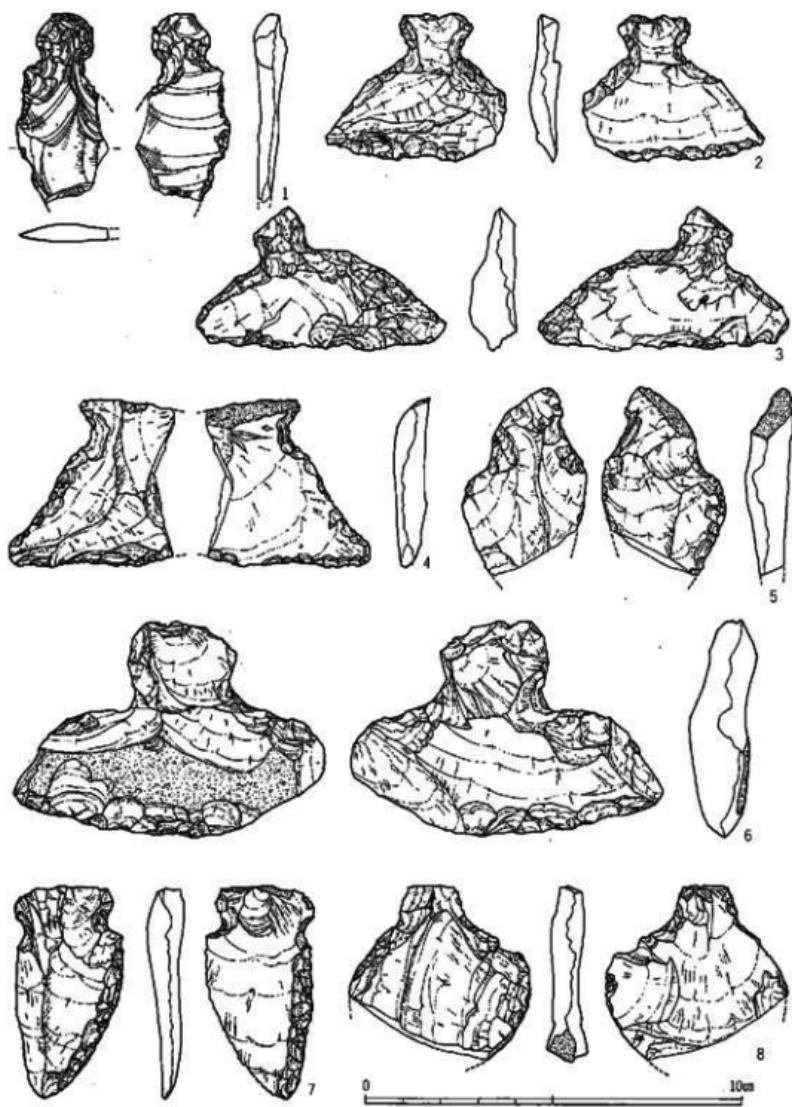


Fig.101 石器・スクレイバー実測図（その1）(2/3)

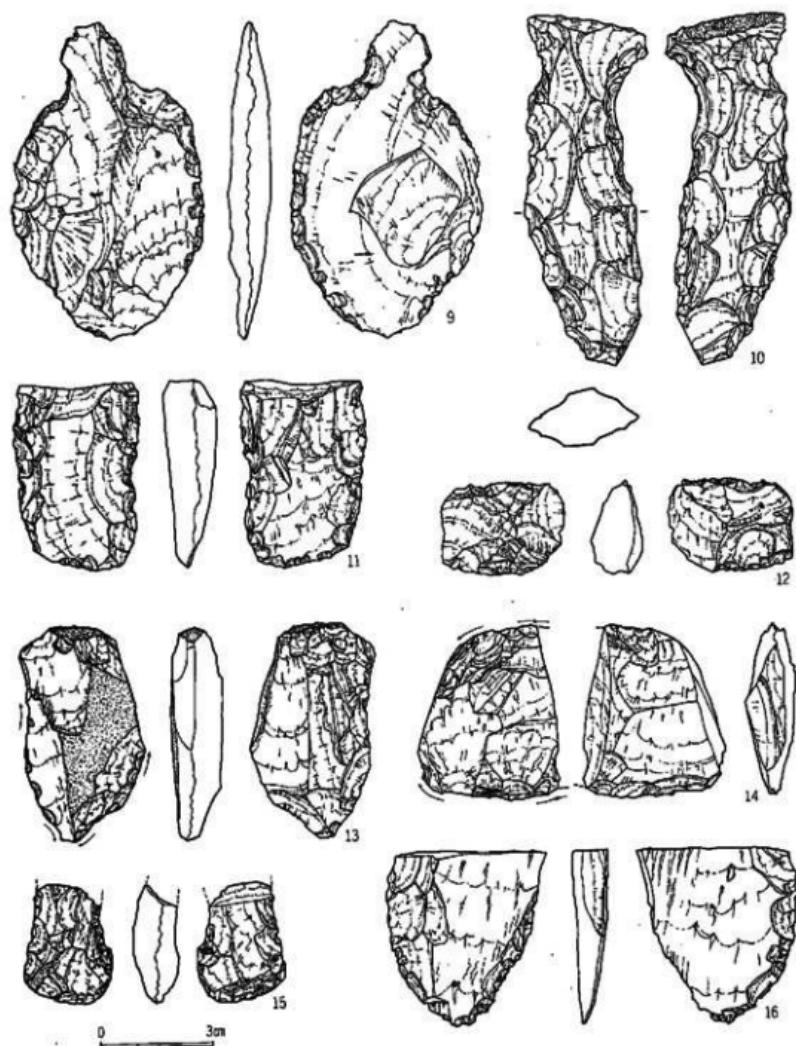


Fig.102 石匙・スクレイバー実測図 (その2)(2/3)

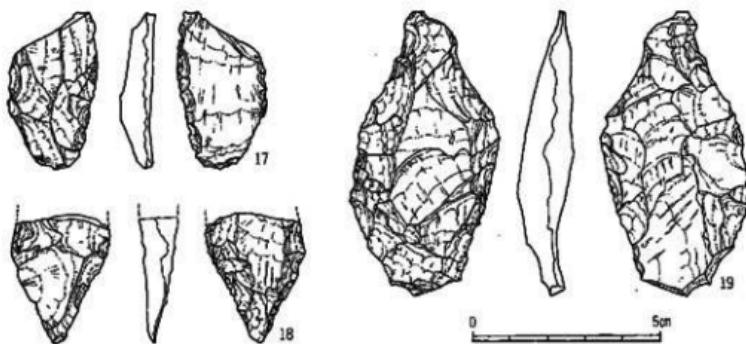


Fig.103 石匙・スクレイバー実測図（その3）(2/3)

横型石匙（2～4・6・8）2は2層No137で安山岩製。やや風化しており、横長剝片使用。打面は縦面で全体に雜。10.3 g。3はV区1層出土で安山岩製。やや風化しており、横長気味の不整形剝片使用。打面は縦面で、全体に作りは雜。17.1 g。4はVI区1層出土で安山岩製。あまり風化せず、横長剝片使用。打面は縦面で、縁辺のみに細調整を施しただけのもの。13.6 g。6は2層No282で安山岩製。あまり風化せず、横長剝片使用で厚みがある。全体に雜な調整のままで、54.4 g。8はVI区2層出土で安山岩製。あまり風化せず、薄手の不定形剝片を使用。抉りも雜な調整のまま。打面は調整面。15.6 g。

スクレイバー類（11～44）11はP280出土で安山岩製。幾らか風化しており、形状から小型石斧或は石ノミ的なイメージがある。23.2 g。12は住6出土品の安山岩製で既に報告済。13はV区1層出土で安山岩製。あまり風化しておらず、横長剝片使用。25.2 g。14はIV区2層出土で安山岩製。あまり風化しておらず、恐らく横長剝片使用。上・下刃を使用。26.6 g。15はP517出土で安山岩製。あまり風化せず、小型石ノミ的使用。丁寧に加工されており、8.5 g。16はIV区1層出土で安山岩製。やや風化しており、縦長剝片使用。両側縁に細加工を施したもの。20.9 g。17はIV区1層出土で安山岩製。あまり風化せず、縦長剝片使用。両側縁に細加工を施しただけで使用剝片的。7 g。18はP291出土で安山岩製。あまり風化せず、尖頭器的形態をなす。6.7 g。21はIII区2層出土で安山岩製。かなり風化しており、技法等からもナイフ形石器と考えてよい。翼状剝片使用で裏面左下刃の調整剝離はやや鈍角でブランディング的。他部分はすべて平坦剝離。長さ81mm、厚さ8.5mm、現存幅32mm、重さ18.3 g。22は2層No249で安山岩製。あまり風化せず、縁辺調整のみで使用剝片的。23 g。24は2層No226で安山岩製。あまり風化せず、横長剝片使用。各縁辺とも丁寧に調整加工を施す。56.6 g。25は2層No617で安山岩製。あまり風化せず横長剝片使用。上端に縦面を残し、他辺はすべて刃部。75.7 g。26は2

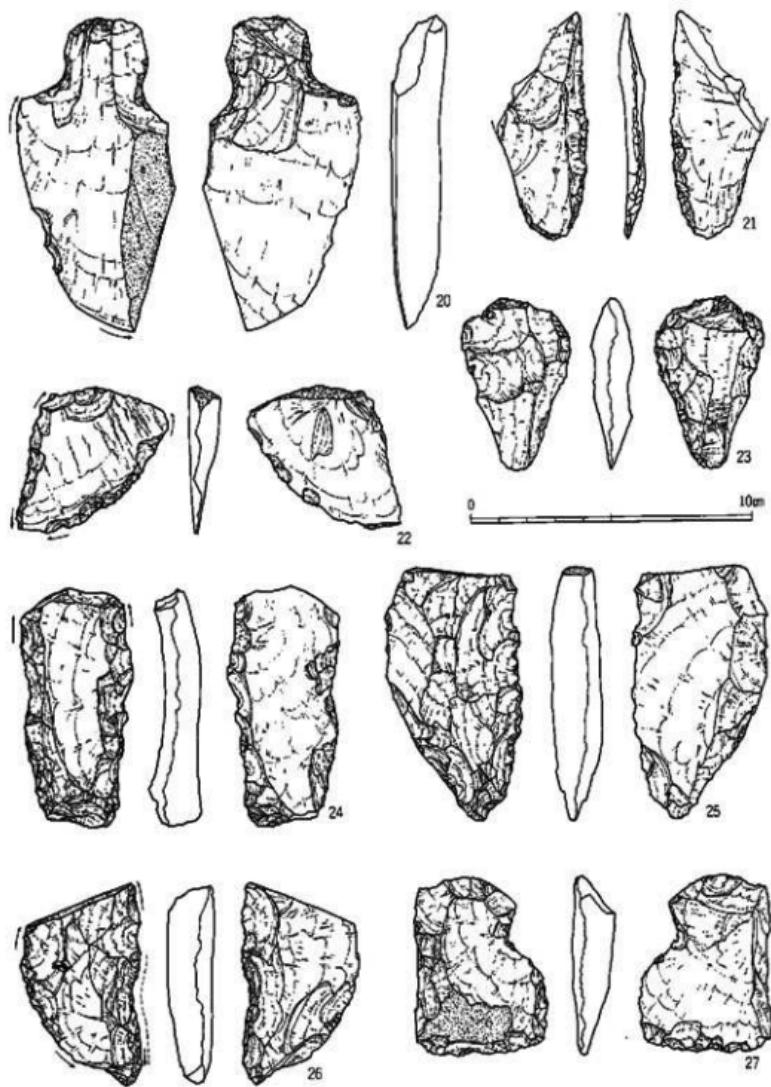


Fig.104 石匙・スクレイバー実測図 (その4)(1/2)

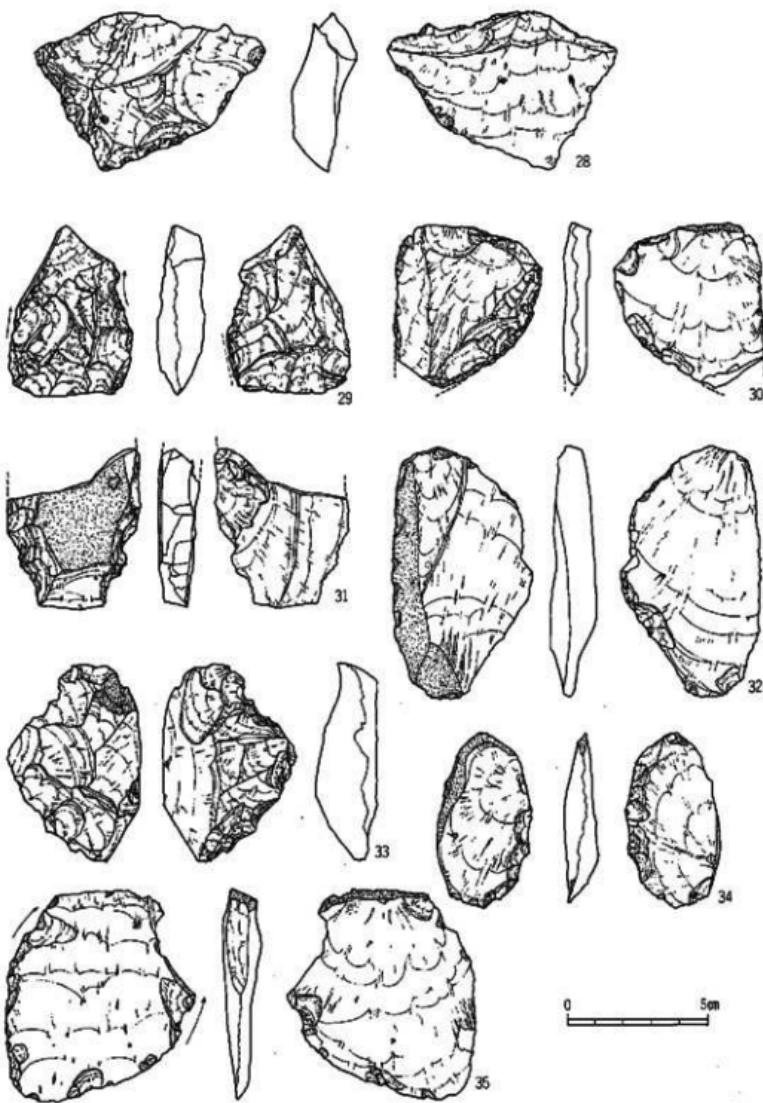


Fig.105 石匙・スクレイバー実測図(その5)(1/2)

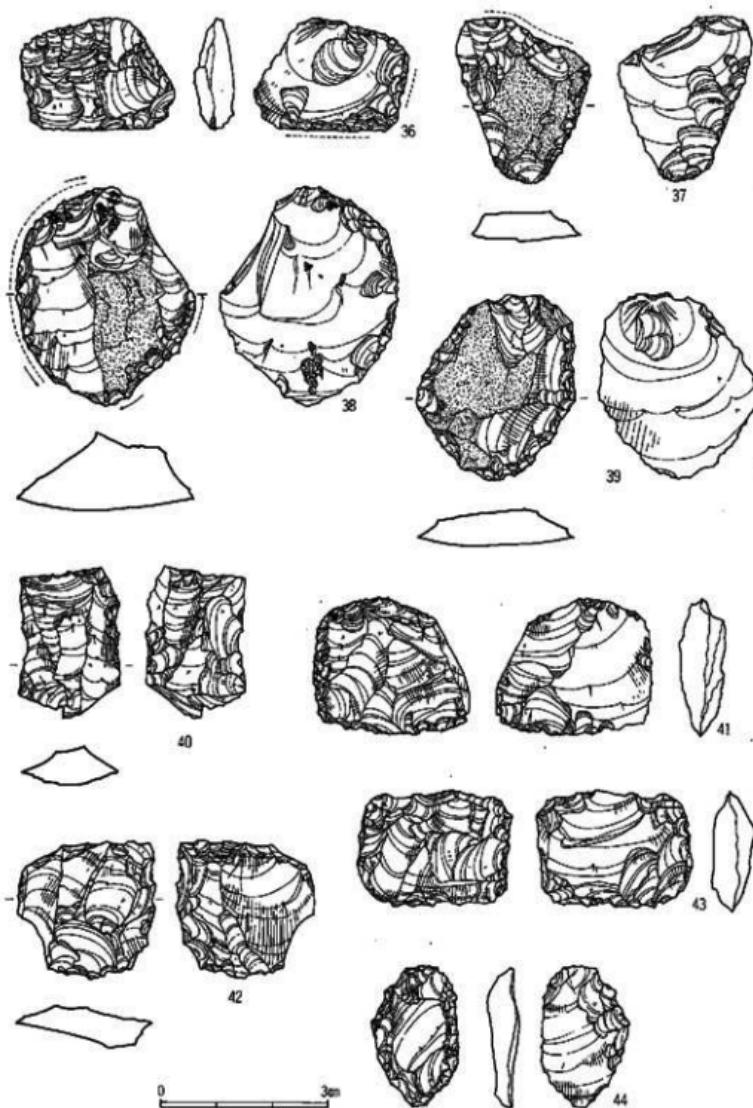


Fig.106 石匙・スクレイパー実測図(その6)(実大)

層No.334で安山岩製。あまり風化せず、横長剝片使用。図中点線部分は刃が潰れており、この内湾部分を使用して搔く作業に用いられたことをしめす。47.5 g。27は2層No.3で安山岩製。あまり風化せず、横長の不定形剝片を縁に半裁して、簡単な縁辺調整を施したもの。38.6 g。28はP294出土で、やや玻璃質の安山岩製。横長剝片使用で、一応全局が刃部として使用可能だが、下半2辺が実際は使用部位となろう。厚手素材で62.6 g。29はP218出土で安山岩製。あまり風化せず、表裏とも丁寧に調整刻離を施している。横刷ぎ素材使用で37.2 g。裏面左辺の点線部は刃潰れの状態。30は2層No.640で安山岩製。あまり風化せず、扁平な不定形剝片使用。疊面の打面を残し、縁辺に簡単な細加工を施しただけのもの。34.7 g。31はV区2層出土で安山岩製。あまり風化せず、横長剝片使用。右辺は鈍角の整形的加工。あまり使用されておらず、上半は新しい欠損。39.3 g。32はV区1層出土で安山岩製。あまり風化せず、殆ど刃こぼれのみの使用剝片。61.8 g。33はP269出土で安山岩製。あまり風化せず、横刷ぎ素材使用。63.6 g。34はV区1層出土で安山岩製。あまり風化せず、横長小剝片の下辺に簡単な刃部加工を施しただけのもの。打点が表裏で上下逆転している。23.3 g。35はP348出土で安山岩製。あまり風化せず、不定形の薄手大型剝片をうまく利用したもの。殆ど使用剝片で72.6 g。36はII区2層出土で小さな不純物をかなり含む黒曜石製。横長状不定形剝片使用でほぼ全周使用可。打面は疊面で、図中点線部はかなり潰れて磨れています。3.4 g。37はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。皮剥ぎ時の不定形剝片を利用しており、全周使用可能。上辺点線部は使用擦れでかなり潰れている。3.8 g。38はVI区2層出土で大きな不純物を含む黒曜石製。皮を残した大きく厚みのある不定形剝片の縁辺に細加工を施しただけのもの。打面は調整面で、左側縁点線部は使用刃潰れがみられる。14.4 g。39はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。頂部以外は全周使用可。打面は疊面。6.5 g。40はV区2層出土で不純物を幾らか含む黒曜石。縦長剝片下半部を使用しており、上端は折取後加工して使用可能部としている。下端は裏からの加撃による折断のまま。よって下辺を除く3辺が刃部として使用可。3.2 g。41はV区1層出土で不純物を僅かに含む黒曜石製。右辺以外全辺使用可。4.1 g。42はVI区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。雑な調整で、左辺以外は全て使用可。打面は除去されており3.3 g。43はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。長方形に丁寧に整形され、全周使用可。4 g。左右両短辺が特に細調整されており、搔器の使用が考えられる。44はP360出土で漆黒色良質の黒曜石製。縦長状不定形小剝片使用。全周使用可。1.7 g。

使用剝片 (Fig.107~114)

本遺跡からは多量の黒曜石・安山岩等の剝片が出土しており、その量に比べて製品の量は極めて少い。詳細の検討はまとめの項で行うが、打製石器と少量の石匙・スクレイバー類を製作する為だけにこれ程の剝片採取作業が必要であったとは思えない程である。この中で使用剝片

の存在は大きい。万能の刃器としての使用剥片は、単に簡便な臨時的補助機能として使用されたのではなく、当初から計画的な主体機能の一つとして石器製作活動の中に組み込まれていたと考えるべきであろう。総数61点を図示したが、これらは明らかな縁辺調整と顕著な使用刃こぼれのあるもののみを選別したものであって、実際に使用されたものはこれの数倍を下らない数となろう。そういう意味で、使用剥片は刃器として軽視できない重要な石器と見なすべきであろう。

1はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。縦長剥片の両側辺に丁寧に細調整を加えたもの。打面は礫面。4 g。2はIV区2層出土で大きめの不純物が幾らか入る黒曜石製。下辺も搔撃的調整が施され、左辺下半（図中点線部）は刃溝し的鈍角の剥離。かなり風化。打面は礫面。6.2 g。3は住3出土で既にその項で報告済。4はV区1層出土で不純物を僅かに含む黒曜石製。縦長剥片のバルブ側折断後、両側辺に細調整を加えたもの。上端は左側辺に抉り状の加工が認められ、裏から加撃による折断。2.1 g。5はP548出土で漆黒色良質の黒曜石製。下尾部折断後に調整し、ほぼ全縁辺使用可能。打面は調整面。3 g。6はP504出土品とP499出土品が接合したもので、漆黒色良質の黒曜石製。打面は礫面で右辺下端の内湾部位は特別目的の使用部位か。2.8 g。7はVI区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。頭部除去後細調整を加えている。1.8 g。8はV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石。尾部折断は裏からの加撃による。打面は礫面。2.8 g。9はVI区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。打面と尾端は礫面。1.7 g。10はVI区1層出土で小さめの不純物を幾らか含む黒曜石製。刃こぼれのみで、打面は礫面。4.1 g。11はV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石製。両側辺使用で右辺点線部も加工は無いが使用可能部。打面は調整面で4.8 g。12はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。両側辺とも細かい丁寧な調整。上下端とも裏面からの加撃による折損。1.3 g。13はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。左側辺にはノッチ状調整がみられ、右側辺は刃こぼれ状。打面は自然面で、下端は裏からの加撃による折損。0.9 g。14はVI区2層出土でやや半透明良質の黒曜石製。右辺上部点線部分はノッチ状部で使用刃溝れ状となる。上端は裏からの加撃で折損。4.1 g。15は住6出土品で既にその項で報告済。16はV区1層出土で不純物を多く含む黒曜石製。すべて刃こぼれ状で打面は調整面。6.6 g。17はVI区1層出土品で漆黒色良質の黒曜石製。左側辺のみに調整を施すが右辺も使用可能。打面は礫面。5 g。18はVI区2層出土で小さな不純物を幾らか含む黒曜石製。右側辺も使用刃こぼれが僅かにある。下端は裏からの加撃による折損。打面は礫面。6.9 g。19はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石。上辺は裏からの加撃による折取り後、細調整を加える。右側線上端の点線部はかなり鈍角な調整。5.3 g。20はIV区1層出土で不純物をやや含む漆黒色の黒曜石製。下辺も使用刃こぼれがある。打面は調整面。5 g。21はVI区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。左右の点線部は使用刃こぼれ部。打面は礫面。6.9 g。22はP378出土で不純物を幾らか含む黒曜石製。裏面上半の横からの剥離面は新しい削

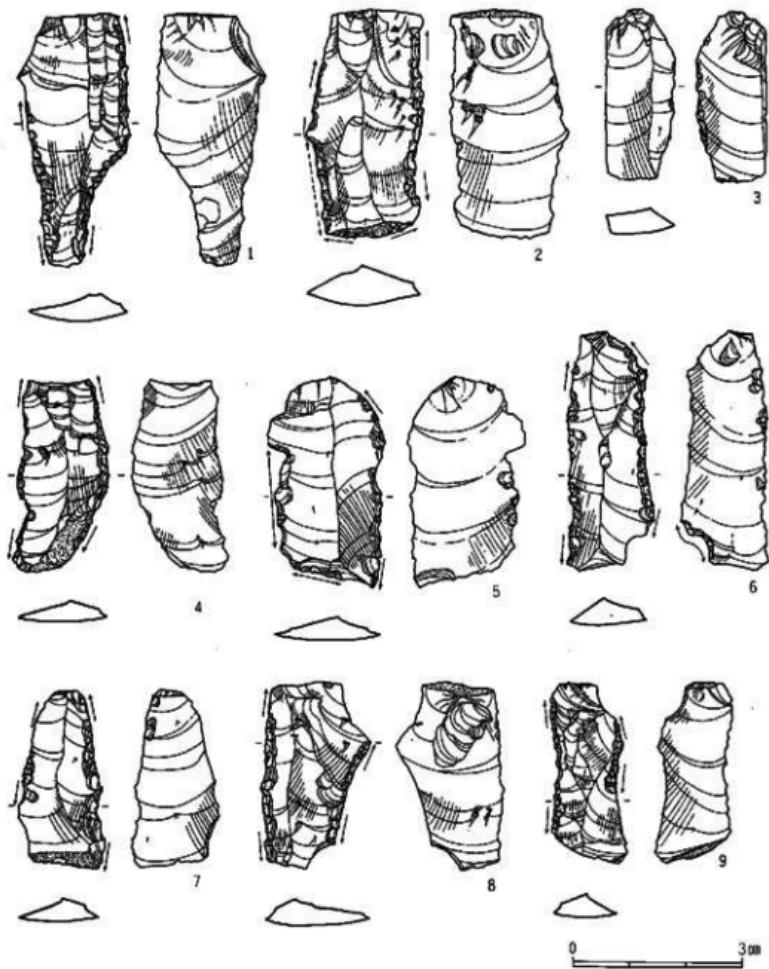


Fig.107 使用刺片実測図（その1）(実大)

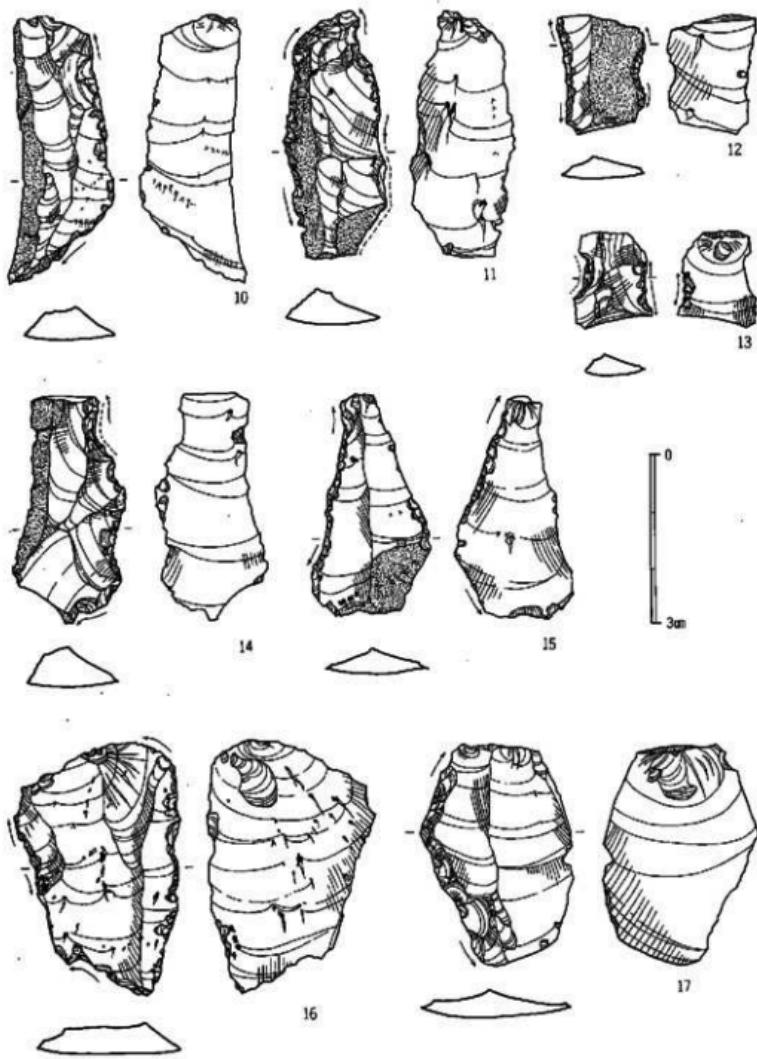


Fig.108 使用剝片実測図（その2）(実大)

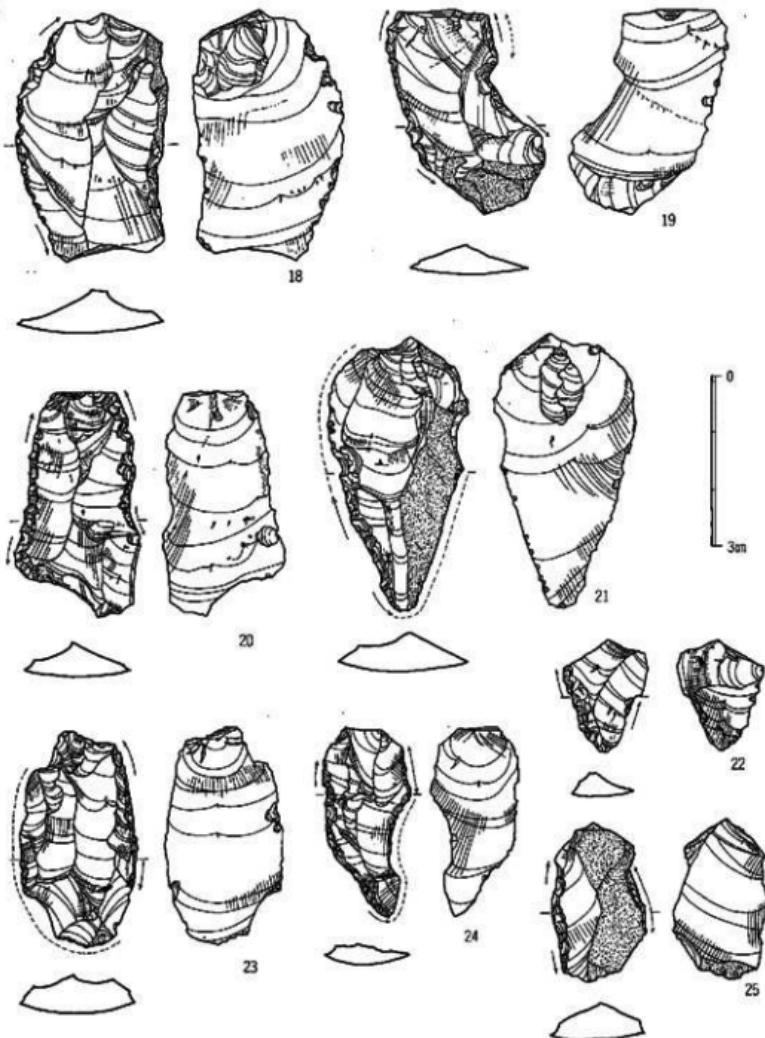


Fig.109 使用刷片実測図（その3）(実大)

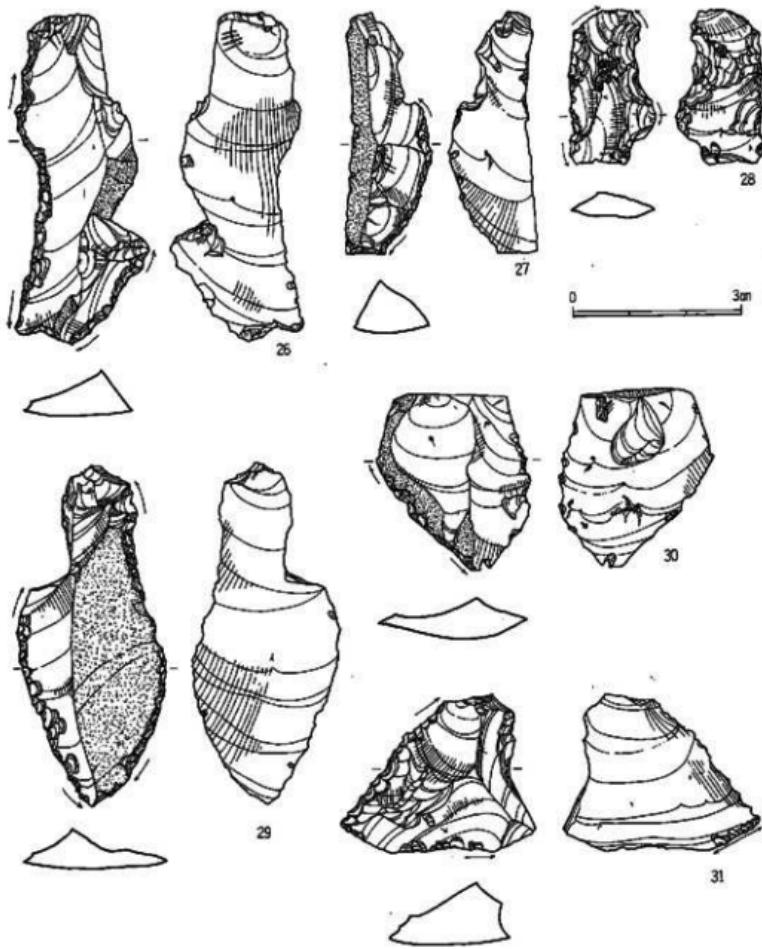


Fig.110 使用刷片実測図(その4)(実大)

れ。0.8 g。23はVI区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。点線部も使用部分で刃こぼれ有り。打面は調整面。5 g。24はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。点線部も使用部分で刃こぼれ有り。打面は調整面。1.6 g。25はVI区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。皮剥ぎ段階の厚

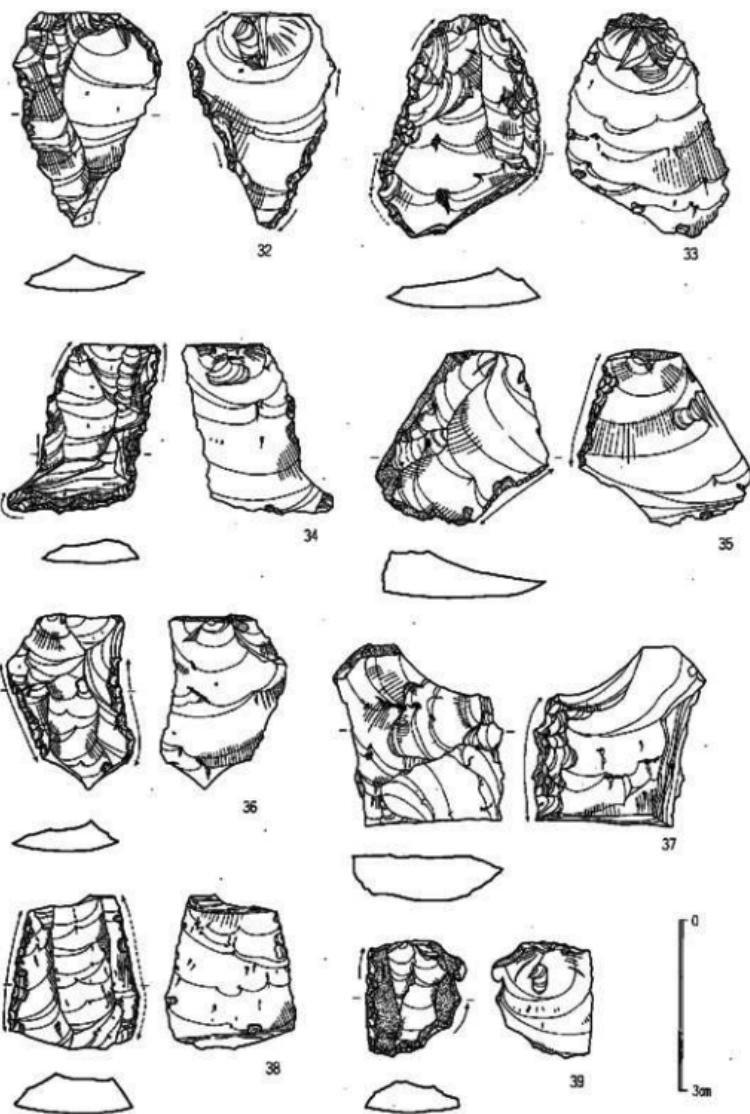


Fig.111 使用刺片実測図（その5）(実大)

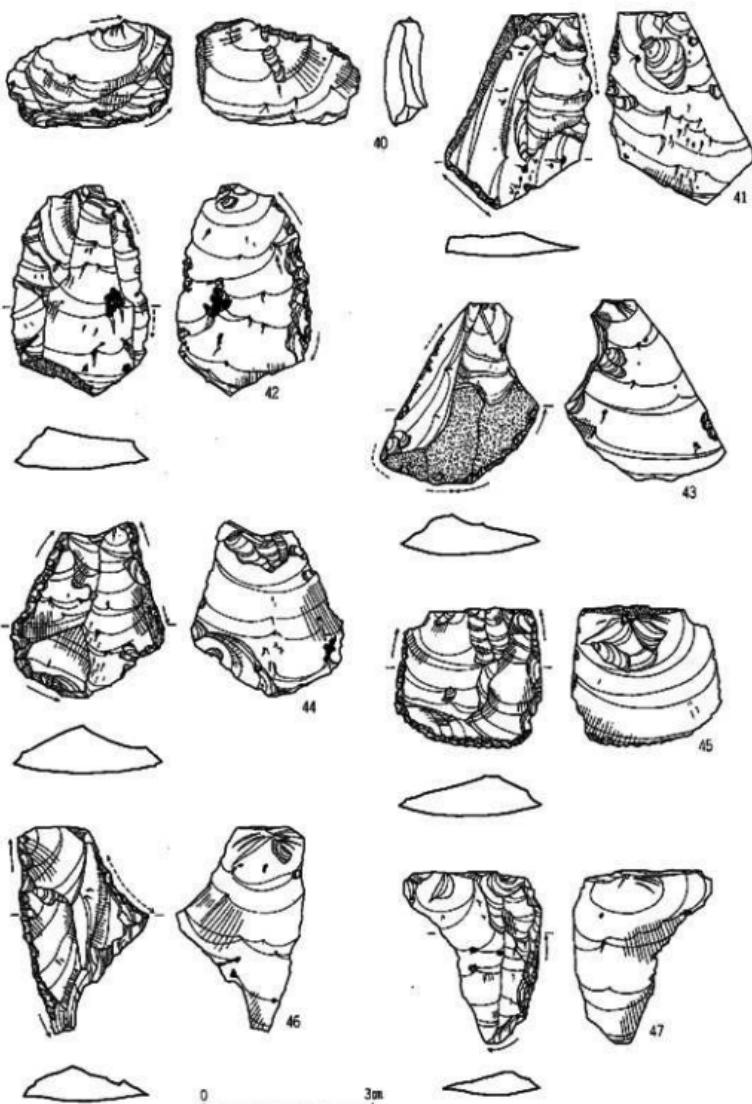


Fig.112 使用剝片実測図 (その6)(実大)

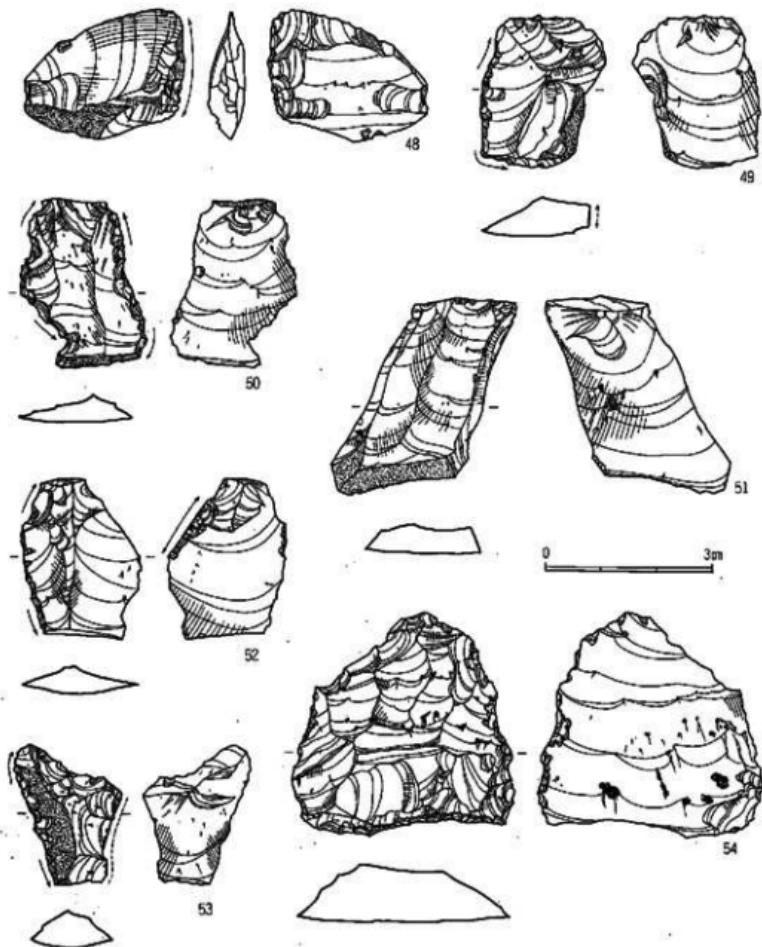


Fig.113 使用剝片実測図（その7）(実大)

手の不定形剝片利用。3.4g。26はP516出土品で漆黒色良質の黒曜石製。打面は調整面で10.2g。27はP292出土で漆黒色良質の黒曜石製。打面90度転換で旧打面が斜めに除去された調整剝片。4.3g。28はIV区2層出土で大きい不純物を含む黒曜石製。不整形小剝片に幾らか整形

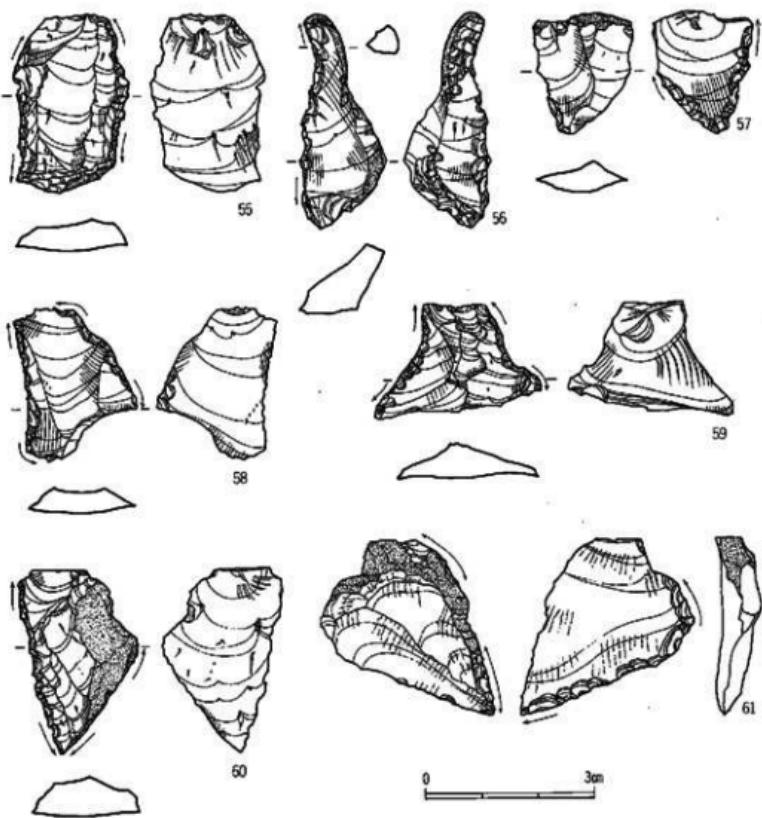


Fig.114 使用剥片実測図（その8）(実大)

剥離を加えている。2 g. 29はVI区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。左側上半は欠損部で抉りではない。打面除去。8.6 g. 30はV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石製。右側縁も使用刃こぼれあり。打面は疊面。5.6 g. 31はVI区2層出土で漆黒色良質の黒曜石。打面除去された厚手の不整形剥片利用。7.4 g. 32はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石。打面は調整面で、表裏から部位を進えて双方の細加工が施される稀例。5.4 g. 33は住3出土で既にその項で報告済。34はV区1層出土で不純物を少し含む黒曜石製。打面は疊面で3 g. 35はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。右下辺は極めて微細なリタッチ。打面は疊面。6.8 g. 36は

IV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石製。打面は疊面で3.5 g。37はVI区2層出土で不純物を幾らか含む黒曜石製。厚味のある素材で裏面片辺のみに丁寧な加工が施されており異質。7.1 g。38はVI区2層出土で小さい不純物を多く含む黒曜石製。右側辺は刃こぼれ的。上端は表からの加撃による折損か。下端は裏面からの打撃による折り取り。5.3 g。39はV区2層出土で小不純物を多く含む黒曜石。打面は調整面。2.4 g。40はVI区住1に混入していたもので不純物を少し含む黒曜石。横長小剣片で打面は疊面。すべて使用刃こぼれ的。2.7 g。41は住4床面出土で既にその項で報告済。42はIV区2層出土で大きな不純物をかなり含む黒曜石。右側辺も使用刃こぼれあり。打面は調整面。6 g。43はVI区2層出土で不純物を僅かに含む黒曜石。打面は疊面。点線部分も使用刃こぼれあり。4.8 g。44はV区2層出土で大小の不純物をかなり含む黒曜石。上端は表からの加撃による折断。45はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石。表のみに微細な調整を丁寧に施した異類。打面は自然面。4.6 g。46はVI区2層出土で不純物を僅かに含む黒曜石。点線部は使用刃こぼれ的。4.1 g。47はIV区2層出土で不純物を少し含む黒曜石製。打面は調整面。2.5 g。48はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石製。横長不定形剣片の右側辺のみに表裏からの調整加工を施したエンドスクリイバー。4.1 g。49はVI区2層出土で不純物を少量含む黒曜石。断面点線部は疊面。打面は調整面。3.8 g。50はIV区2層出土で小さな不純物をかなり含む黒曜石。打面は自然面。3 g。51はV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石。全周に微細な使用刃こぼれが観察される。打面は調整打面。6 g。52はVI区住2に混入していたもので僅かに半透明の黒曜石。打面は調整面。2.5 g。53はVI区2層出土で小不純物を幾らか含む黒曜石。右側辺も使用している。打面は調整面。2 g。54はVI区1層出土で大きい不純物を含む黒曜石。全周使用部。剥ぎ取り面再生剣片使用。13.1 g。55はV区1層出土で不純物を幾らか含む黒曜石。打面は調整面。3.6 g。56はV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石製。剥ぎ取り面再生調整剣片利用。3.9 g。57はV区2層出土で漆黒色良質の黒曜石。打面は疊面。2.1 g。58はIV区1層出土で漆黒色良質の黒曜石。打面側欠損。2.1 g。59はVI区2層出土で不純物を僅かに含む黒曜石。調整打面で2.1 g。60はV区1層出土で小さな不純物を多く含む黒曜石。打面は疊面で3.9 g。61はIV区1層出土で短島産黒曜石製。やや風化しており打面側欠損。5 g

打欠き石錐 (Fig.115~121, Tab.1)

99点出土したが、本遺跡例では長径7~4 cm、短径5.5~3 cmの小さい類が圧倒的に多い。重さでは20~90 gに集中している。これより大きい中型類は長径8~7 cm、短径6~7 cm、重さ135~185 gで7点みられる。大型類は1点で8.2×7.6 cm、重さ270 g。また、更に大型のものとしてよいと思われるものが、後項の磨石の中に短軸両端に打欠きを持つもの2点みられる。以上の大きさの点からみて、小型類は明らかに多量の石錐を組み合わせて使う用法であった事

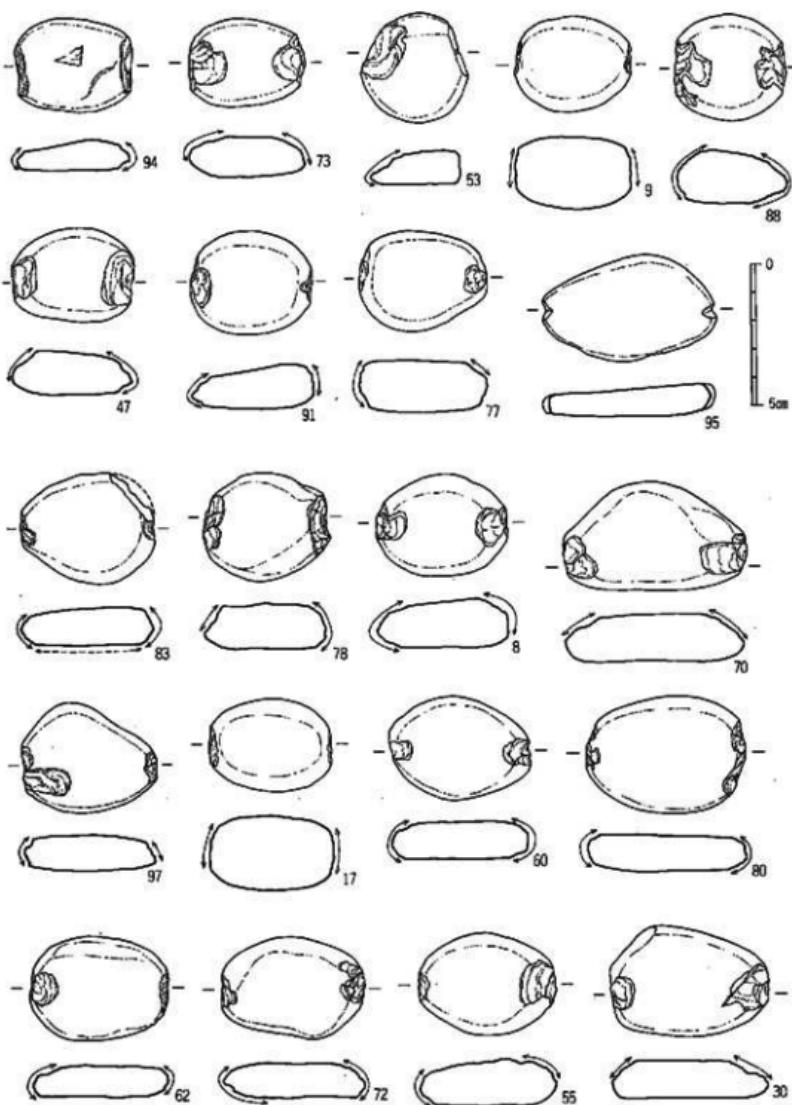


Fig.115 打欠き石錐実測図 (その1)(1/2)

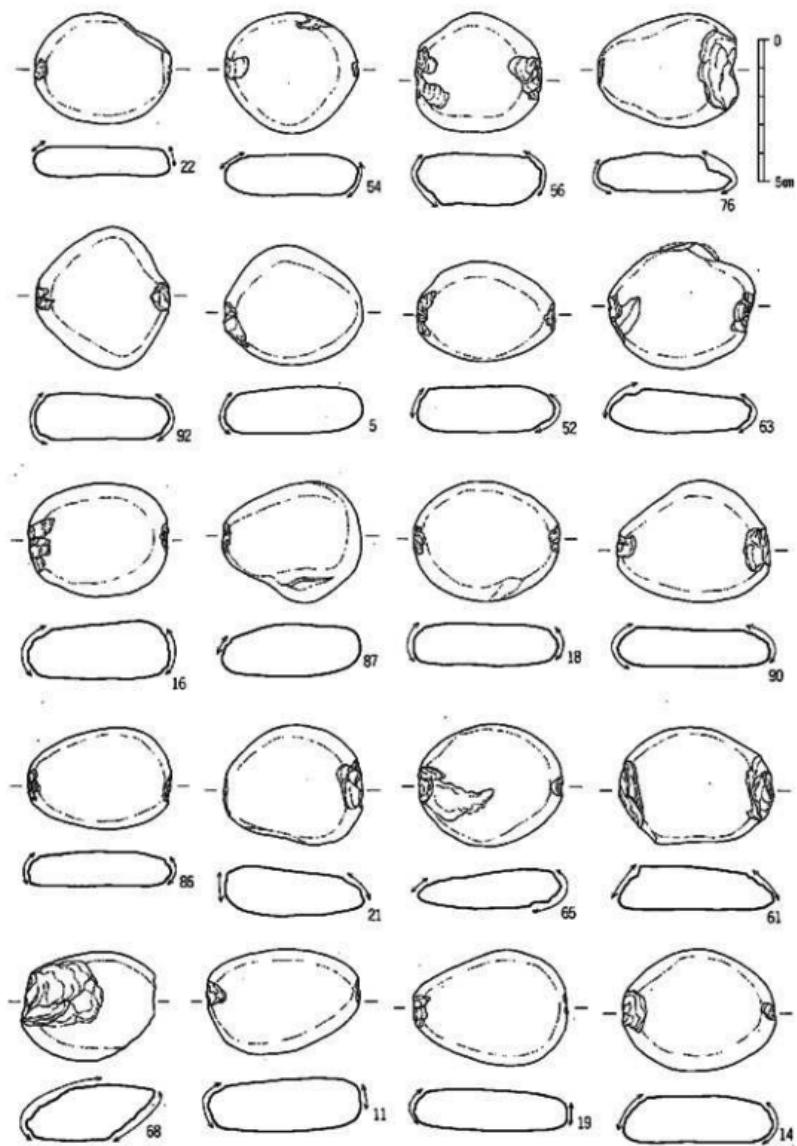


Fig.116 打欠き石錐実測図 (その2)(1/2)

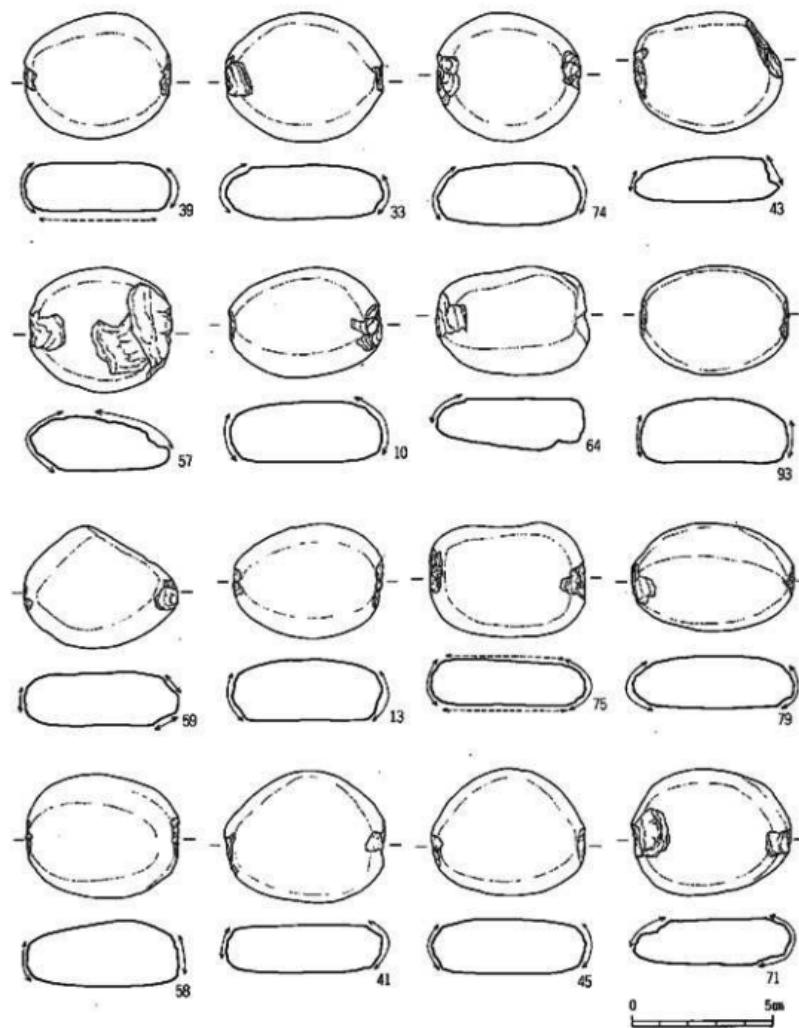


Fig.117 打欠き石錐実測図 (その3)(1/2)

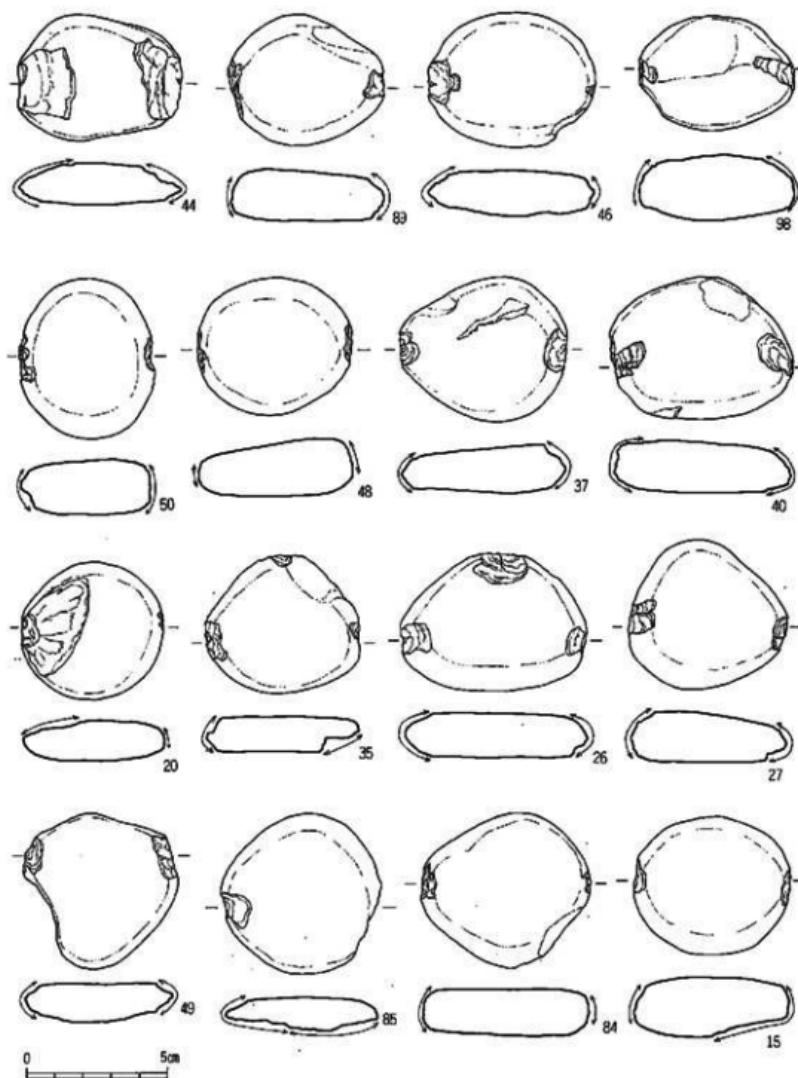


Fig.118 打欠き石鎚実測図 (その4)(1/2)

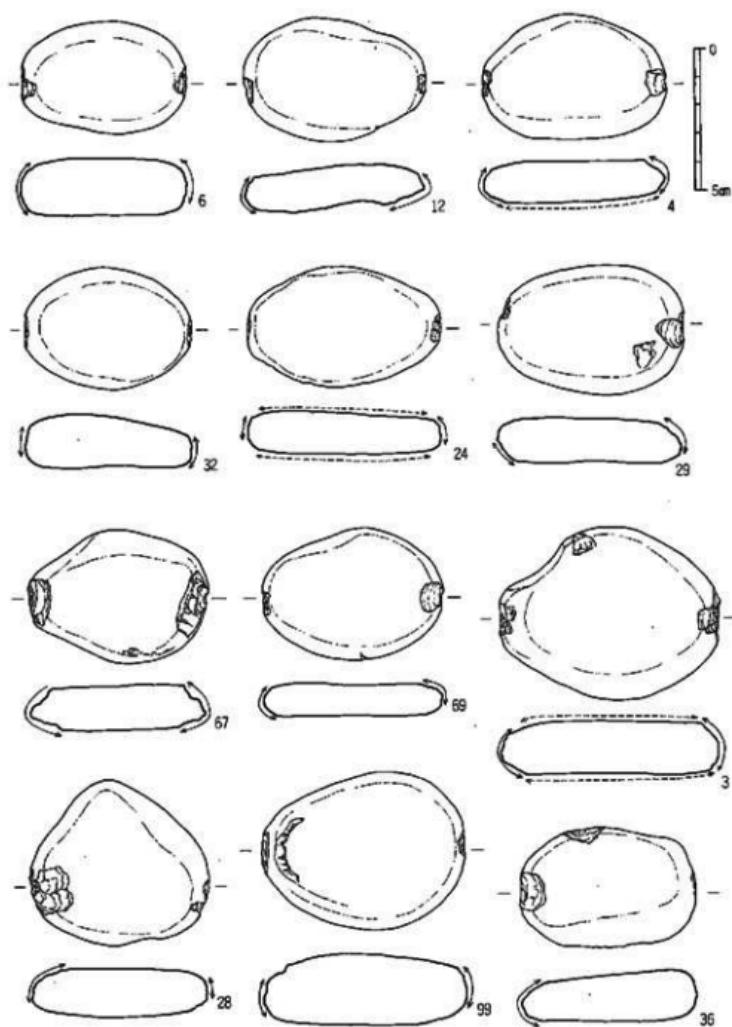


Fig.119 打欠き石鏃実測図（その5）(1/2)

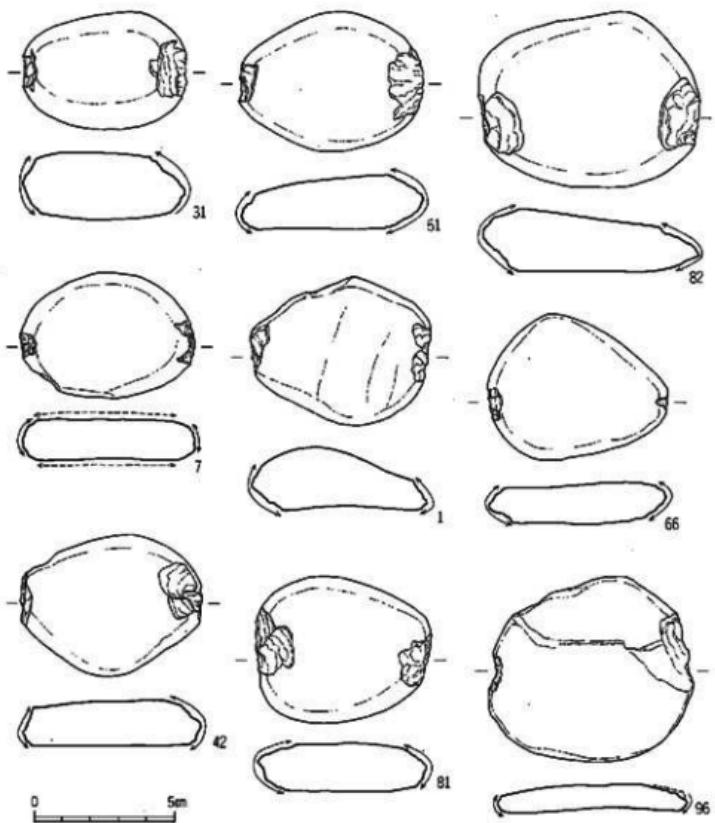


Fig.120 打欠き石縫実測図 (その6)(1/2)

がわかる。

抉りの状況を見ると、Fig.115-95のみ1点が両端とも擦り切り状の切目石縫であり、他はすべて1~数回の簡単な打撃で打欠いたもの。また、小型類ではFig.118-50だけが短軸両端に打ち欠きを持つ。更に、三方に打ち欠きを持つもの(Fig.118-26)も稀にある。

使用石材は白っぽい凝灰岩質のものが圧倒的に多く、黒色片岩系のものが4点あるのみ。また、すべてが小河原石の転石で、下方の河原で拾ってこの山まで持ち込んだものである。更に

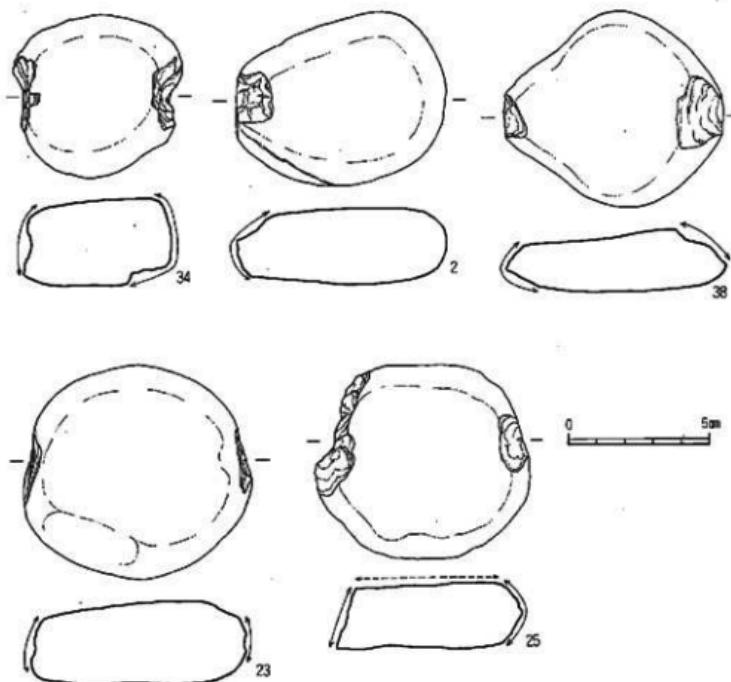


Fig.121 打欠き石錐実測図（その？）(1/2)

片面、或は両面が磨石として用いられているものも8点みられ、両者の共通性が判かる。

打欠き石錐の詳細については別表に記した。更にまとめの項で検討するので参照されたい。
図中の番号は一覧表の番号と同一。

Tab. 1 クリナラ遺跡出土打欠き石錐一覧 (単位: cm. g.)

順	出土地点	種 別	長径×短径×厚さ	重 き	石 材	備 考
1	2層地113	両端打欠き	6.5×5.2×2.1	86.1	淡灰色緑灰岩質	
2	V区2層	片端打欠き	7.8×6×2.6	179.2	"	
3	2層地394	両面磨石・両端打欠き	8×6.2×1.9	137.2	"	
4	V区2層	片面磨石・両端打欠き	6.6×4.5×1.4	66.7	"	
5	III区2層	片端打欠き	5.1×4.3×1.6	49.4	"	
6	V区2層	両端打欠き	6×4.1×2	76.6	"	片端は敲き的
7	V区2層	両面磨石・両端打欠き	6.2×4.4×1.6	63.8	"	
8	V区2層	両端打欠き	4.8×3.7×1.7	40.2	"	

No	出土場所	種別	長径×短径×厚さ	重さ	石 材	備 考
9	V区2層	両端打欠き	4.3×3.6×2.5	49.1	淡灰色凝灰岩質	
10	V区2層	"	5.5×4×2.1	63.1	"	
11	V区2層	"	5.6×3.7×1.8	57.4	"	
12	V区2層	"	6.6×4.4×1.7	60.1	"	
13	V区2層	"	5.4×4.1×2.1	66.1	"	
14	V区2層	"	5.5×4.4×1.7	57.8	白灰色凝灰岩質	
15	2層No.210	"	5.7×5.1×2.0	85.1	"	
16	2層No.264	"	5.1×4.2×2	64.9	灰色凝灰岩質	
17	P277	両端敲き渡し	4.5×3.5×2.6	57.7	白灰色凝灰岩質	
18	VII区1層	両端打欠き	5.2×4.3×1.4	47.5	淡灰色凝灰岩質	打欠き不明瞭
19	2層No.242	"	5.5×4.1×1.5	51.3	"	片端は軽い敲きのみ
20	V区1層	"	5.1×4.9×1.4	46.6	"	"
21	V区1層	"	5.0×4.2×1.7	50.7	"	"
22	2層No.183	片端打欠き	4.8×3.8×1.1	31.0	白灰色凝灰岩質	打欠き不明瞭
23	2層No.728	両端打欠き	8.2×7.6×2.9	272.2	暗灰色凝灰岩質	
24	V区1層	両面磨石・両端打欠き	7.7×4.3×1.4	64.9	淡灰色凝灰岩質	打欠き不明瞭
25	III区2層	片面磨石・両端打欠き	7.6×6.9×2.2	183.5	"	
26	V区2層	両端打欠き	6.6×4.9×1.5	70.6	"	三方打欠き
27	2層No.577	"	5.6×5.3×1.8	77.5	"	
28	V区1層	"	6.4×5.9×1.7	87.8	"	
29	2層No.129	"	6.7×4.6×1.6	64.7	"	
30	IV区1層	"	5.7×4×1.3	44.9	"	
31	VII区1層	"	5.8×4.2×2.3	68.6	"	
32	V区1層	"	6.1×4.4×1.9	68.4	"	
33	VII区1層	"	5.7×4.6×1.9	69.4	"	
34	V区2層	"	6.2×6.7×3.0	154.6	"	
35	V区2層	"	5.5×4.9×1.3	49.7	"	
36	VII区1層	片端打欠き	6.3×4.3×1.8	70.3	"	
37	P184	両端打欠き	6.1×5.2×1.7	66.8	"	
38	VII区2層	"	7.9×7.1×2.1	132.8	"	
39	V区1層	片面磨石・両端打欠き	5.3×4.4×1.7	62.0	"	片端は軽い敲き
40	2層No.262	両端打欠き	6.7×6.1×1.8	71.1	"	
41	IV区2層	"	5.8×4.8×1.7	66.3	"	
42	2層No.304	"	6.4×5×1.7	79.1	"	
43	2層No.130	"	5.3×4.3×1.6	51.1	"	
44	V区1層	"	5.9×4.6×1.4	53.7	"	
45	P-260	"	5.6×4.7×1.9	69.6	"	
46	IV区2層	"	6.0×4.8×1.6	65.3	"	
47	2層No.523	"	4.4×3.4×1.6	31.0	"	
48	V区1層	"	5.5×4.9×2.0	73.5	"	
49	2層No.110	"	5.5×5.2×1.4	47.3	"	
50	II区東部	"	5.7×4.9×1.9	65.9	"	短袖端に打欠き
51	VII区1層	"	6.7×4.9×1.9	77.9	"	
52	IV区1層	"	5×3.7×1.6	39.9	"	
53	VII区2層	"	3.9×3.6×1.2	24.4	"	
54	VII区1層	"	5.8×4.2×1.4	38.4	"	
55	V区1層	"	5×3.6×1.8	40.6	"	

No	山土地点	種別	長径×幅径×厚さ	重さ	石 材	備 考
56	2層No.626	両端打欠き	4.5×4.2×1.9	49.5	淡灰色凝灰岩質	
57	V区1層	"	5.2×4.4×1.9	56.2	"	両端大きな打欠き
58	IV区1層	"	5.5×4.4×2.3	80.2	"	
59	P277	"	5.5×4.4×1.9	60.4	"	
60	VII区3号柱	"	5.2×3.7×1.3	34.4	"	
61	土壤3	"	5.5×4.4×1.3	41.5	"	
62	2層No.416	"	4.8×3.7×1.2	25.2	"	
63	VII区1層	"	5.3×4.4×1.5	44.7	"	
64	P189	片面打欠き	5.5×3.8×1.9	57.3	"	黒色のマンガン付岩
65	2層地163	両端打欠き	5.2×4.4×1.3	39.2	"	
66	P295	"	5.5×5.2×1.3	60.2	"	
67	VII区1層	"	6.4×4.6×1.7	65.4	"	
68	V区2層	"	4.7×3.9×1.9	42.4	"	両端大きな打欠き
69	V区1層	"	6.5×4.7×1.2	55.4	"	
70	P258	"	6.6×4×1.7	64.8	"	
71	V区2層	"	5.7×4.7×1.7	69.5	"	
72	IV区1層	"	5.1×3.6×1.4	32.5	"	
73	V区1層	"	4.2×3.2×1.4	26.5	"	
74	V区1層	"	5.2×4.5×2.1	71.0	"	
75	P292	両面磨石・両端打欠き	5.6×4×1.5	59.5	"	
76	2層No.567	両端打欠き	5×4×1.4	37.4	"	
77	V区1層	"	4.6×3.6×1.8	44.3	"	
78	V区1層	"	4.7×4×1.6	29.5	淡赤灰色凝灰岩質	
79	P418	"	5.8×3.8×1.9	59.3	暗灰色凝灰岩質	
80	2層地348	"	5.7×4.2×1.3	39.9	白色凝灰岩質	
81	V区1層	"	6.3×5.2×1.8	73.2	"	
82	2層地720	"	7.8×6.2×2.3	156.0	"	
83	2層No.195	片面磨石・両端打欠き	4.9×4×1.3	35.3	"	
84	IV区1層	両端打欠き	5.5×4.4×1.8	80.6	淡灰色凝灰岩質	
85	2層No.366	"	5.8×5.7×(1.6)	55.6	白色凝灰岩質	裏面大きな打欠き
86	1区トレンチL2層	"	5.2×4.7×1.2	28.1	"	打欠き不明瞭
87	VII区2層	片面打欠き	5×4.5×1.9	53.5	"	
88	V区2層	両端打欠き	4×3.8×1.9	38.1	"	
89	IV区2層	"	5.6×4.6×1.8	63.2	"	
90	2層地77	"	5.4×4.3×1.4	46.4	"	
91	P295	"	4.4×3.8×1.6	34.4	"	
92	IV区2層	"	4.7×4.5×1.6	51.6	"	
93	2層No.563	両端駿き渡し	5.4×3.9×2.2	66.8	淡白灰色凝灰岩質	
94	IV区1層	両端打欠き	4.2×3.3×1.1	22.2	素灰褐色の片岩	
95	2層地2	両端切れ目	5.1×3.7×1.1	31.9	灰色の片岩	
96	IV区1層	両端打欠き	7.2×6.6×1.3	75.2	黑色片岩	
97	V区1層	"	4.9×3.8×1.4	36.1	淡灰色の片岩	
98	VII区1層	"	5.5×4.1×2.2	63.3	白色凝灰岩質	片端は駿き的
99	V区1層	"	7.4×5.8×2.5	152	"	

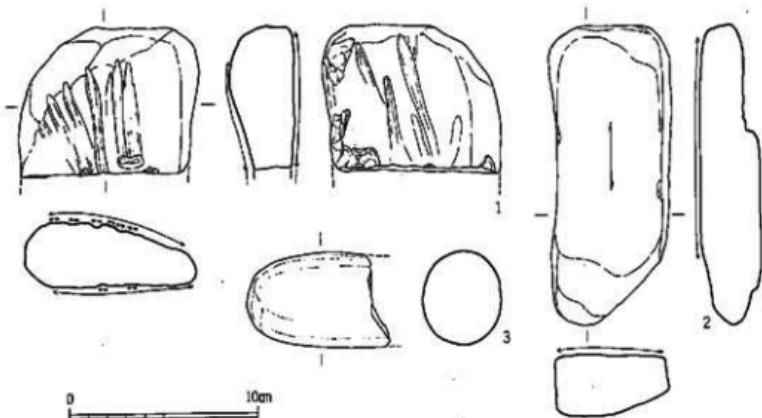


Fig.122 砥石・敲石実測図（1/3）

砥石・敲石 (Fig.122)

1はP131出土で淡灰色の凝灰岩質石材。表裏の磨面に条線状の凹部を持つもので、表に7本、裏に5本が見える。条溝砥石で現存長7.7cm、幅9.3cm、厚さ3.8cm、重さ342g。2はIV区1層出土で硬質の緑色片岩製。表面のみ使用された砥石で、ごく僅か中央部付近がへこんでいる。長さ15.9cm、幅6.4cm、厚さ3.2cm、重さ610g。3はVI区1層出土で灰白色の凝灰岩製。円柱状河原石で形状からみて敲石の基部とみられる。全体に風化著しく、218.5g。

磨白 (Fig.123)

1はIII区2層出土で、淡灰色の凝灰岩質石材。両面とも使用しており、中央部が全体に浅くへこむ。現存長14.1cm、幅7.5cm、厚さ3.4cm、重さ649.1g。2はV区1層出土で、濃灰色凝灰岩質石材。表裏とも磨面となるが、表は平坦、裏は凸状となる。現存長16.7cm、幅9.1cm、厚さ5.3cm、重さ1,033.2g。3は2層No.533で、淡灰色凝灰岩質石材。中央部が明らかにくぼんでいる。裏面も使用しているかもしれないが、全体に波打っており、疑問。径23.1×20.9cm、厚さ5.1cm、重さ4,310g。4は2層No.734で、暗灰色の凝灰岩製。第7号住居跡の上面とその北側に散らばっていたもので、大型のどっしりとした磨白そのものの。中央に幅20cm、長さ30cmに復原できる長円形の凹部をつくり、その外側に幅8cm前後の平らな縁部分をもつ。凹部の深さ5cm程度で、下面是全体に丸く凸レンズ状にふくらむ。全体に作りは丁寧で裏面もきれいな曲面で丁寧に磨き仕上げがなされている。上面凹部とその周縁は火を受けているようで、黒っぽ

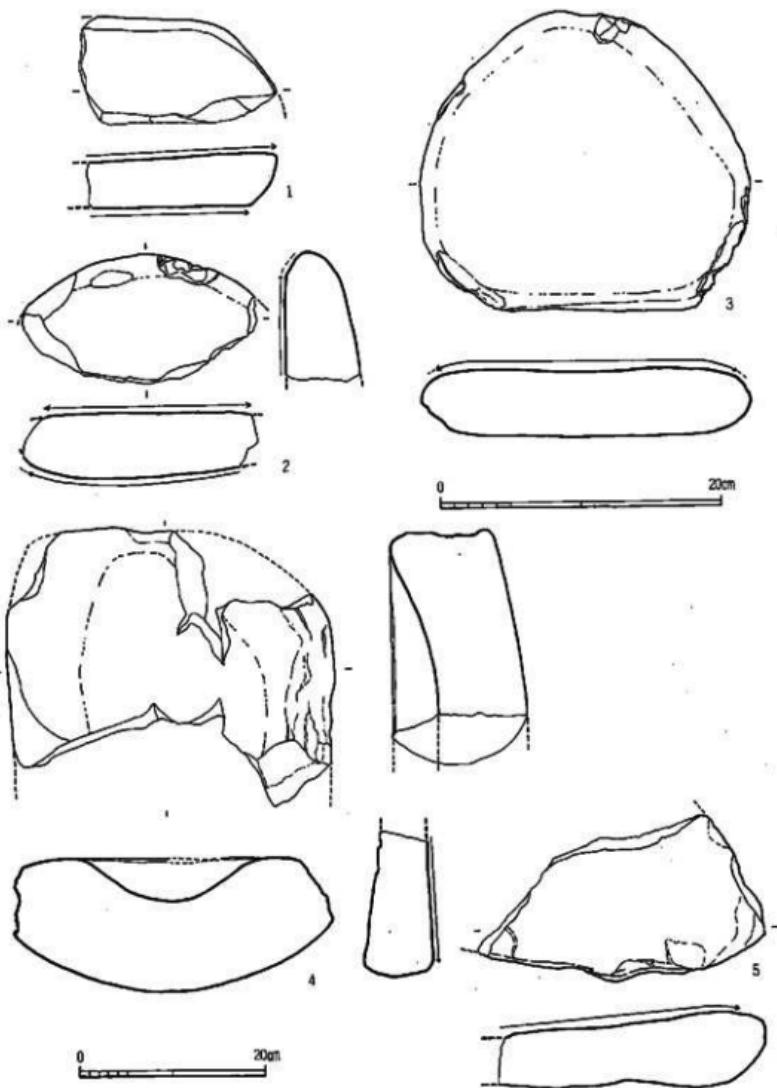


Fig.123 磨臼実測図 (1~3:1/4, 4・5:1/6)

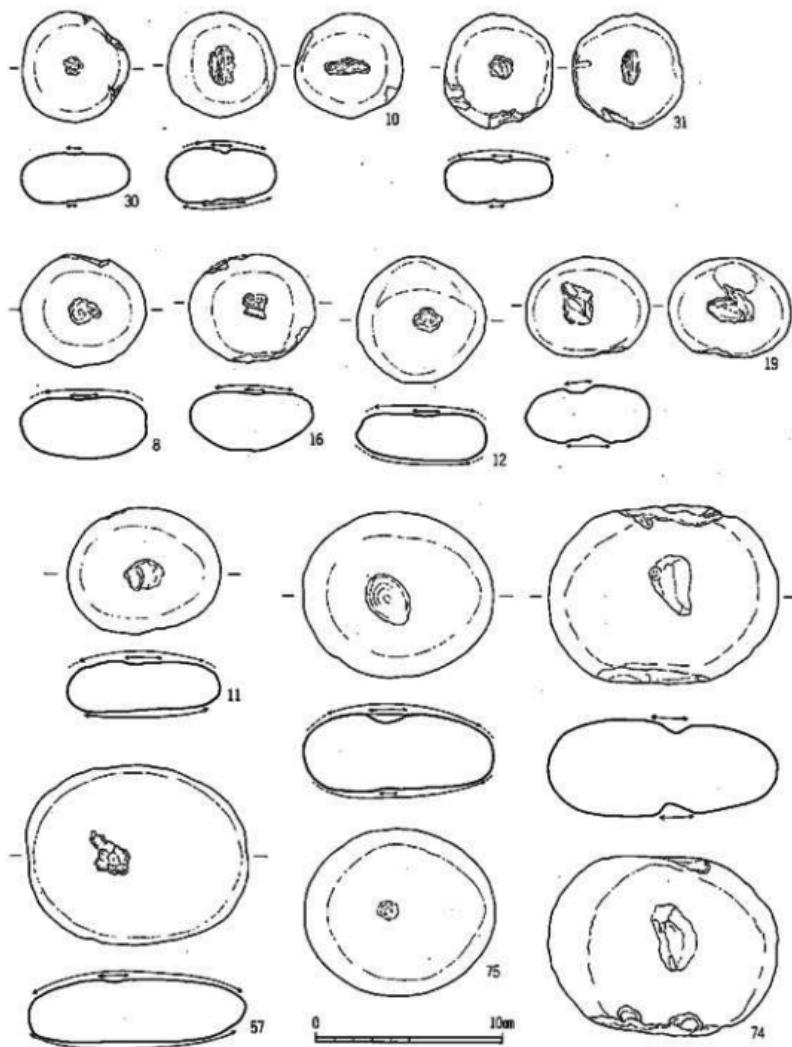


Fig.124 回石・磨石実測図 (その1)(1/3)

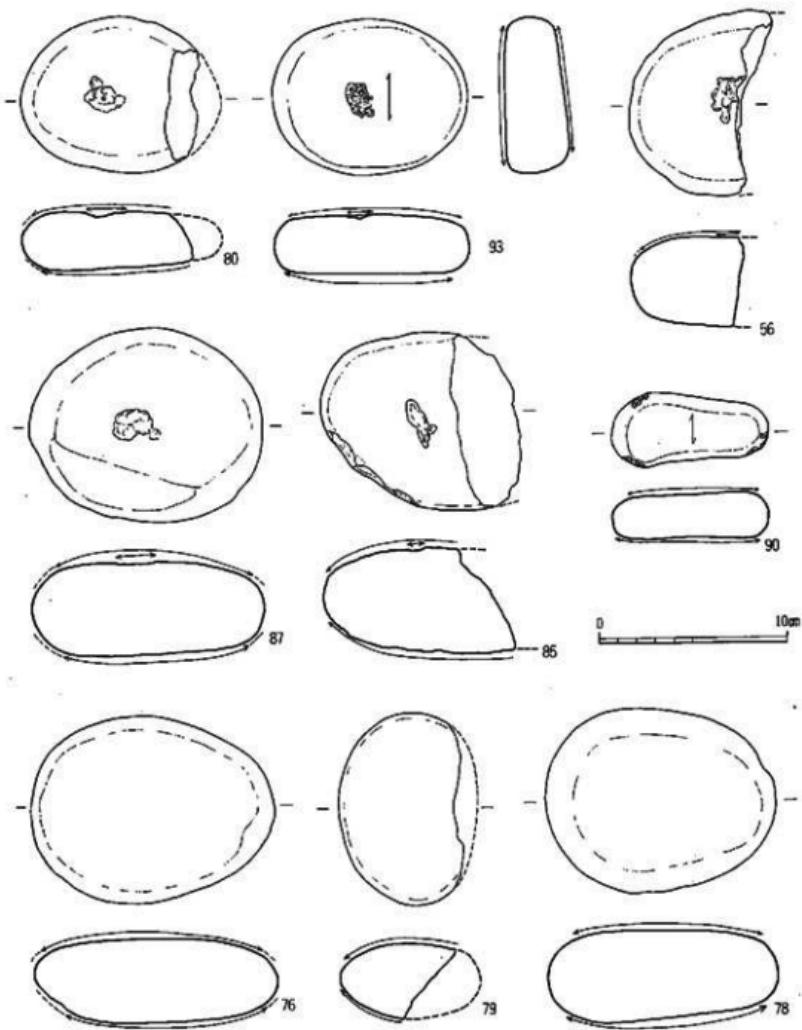


Fig.125 凹石・磨石実測図 (その2)(1/3)

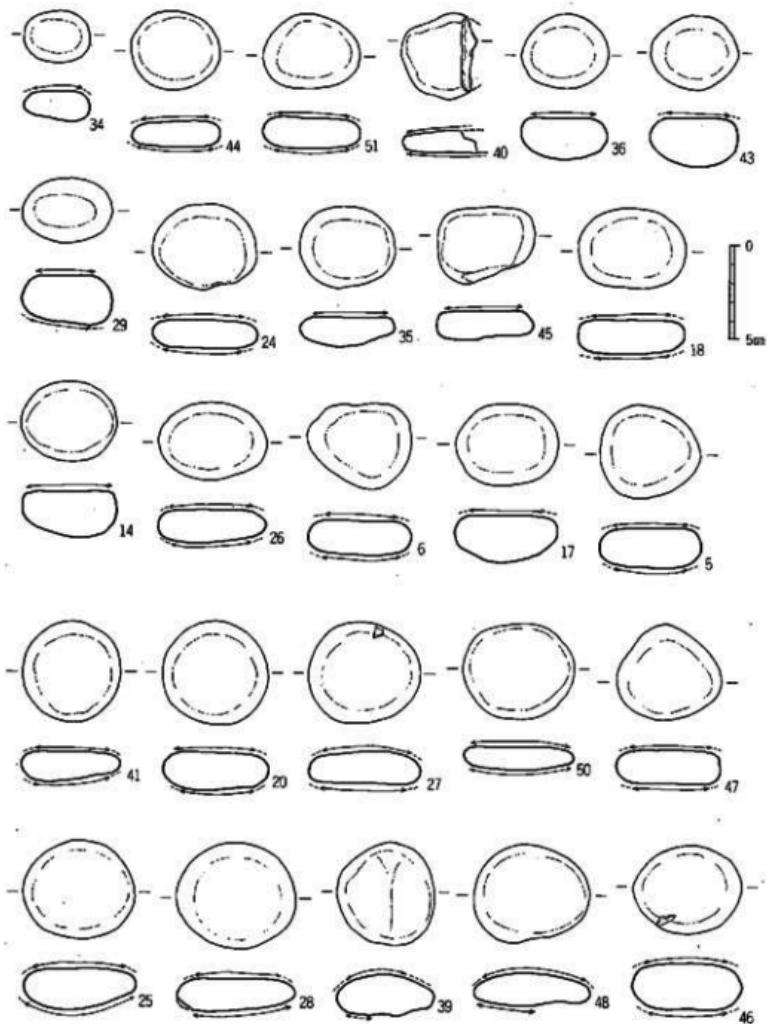


Fig.126 凹石・磨石実測図 (その3)(1/3)

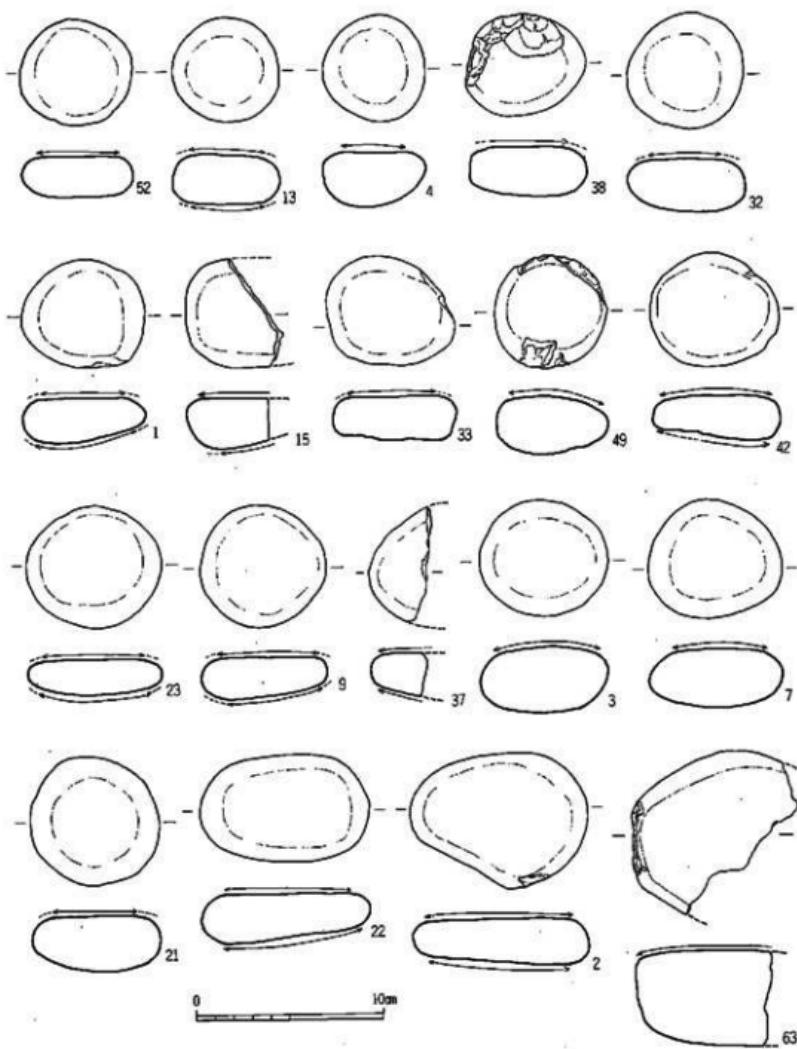


Fig.127 凹石・磨石実測図 (その4)(1/3)

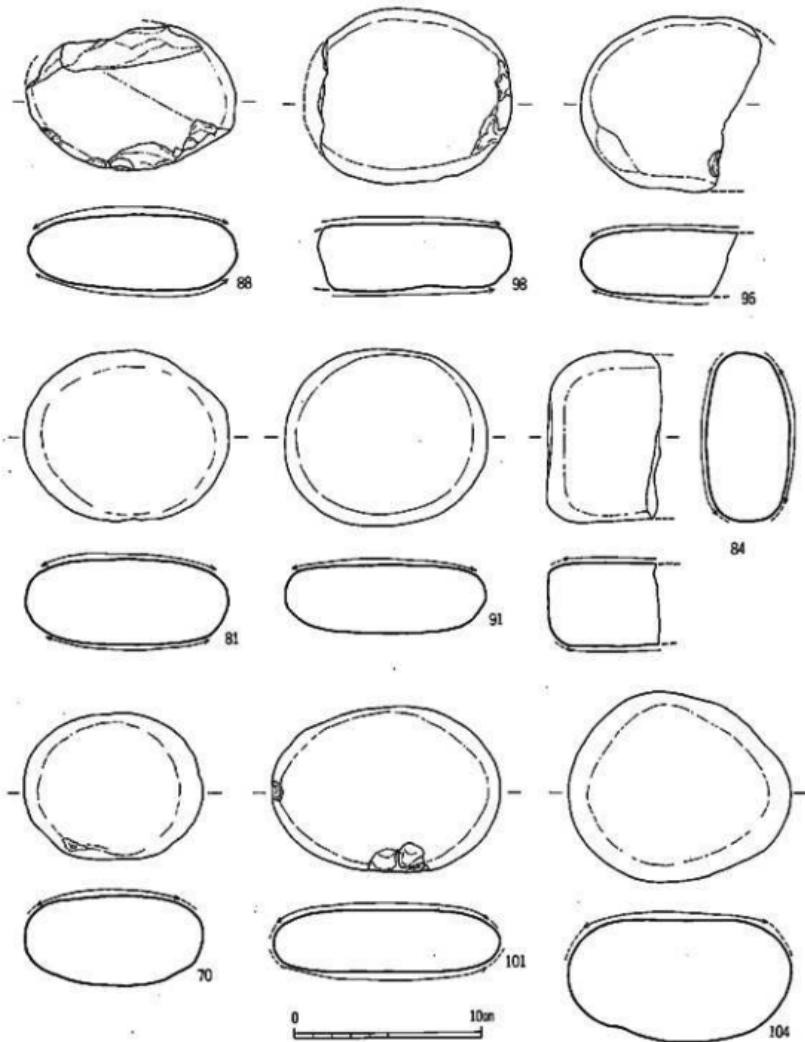


Fig.128 凹石・磨石実測図 (その5)(1/3)

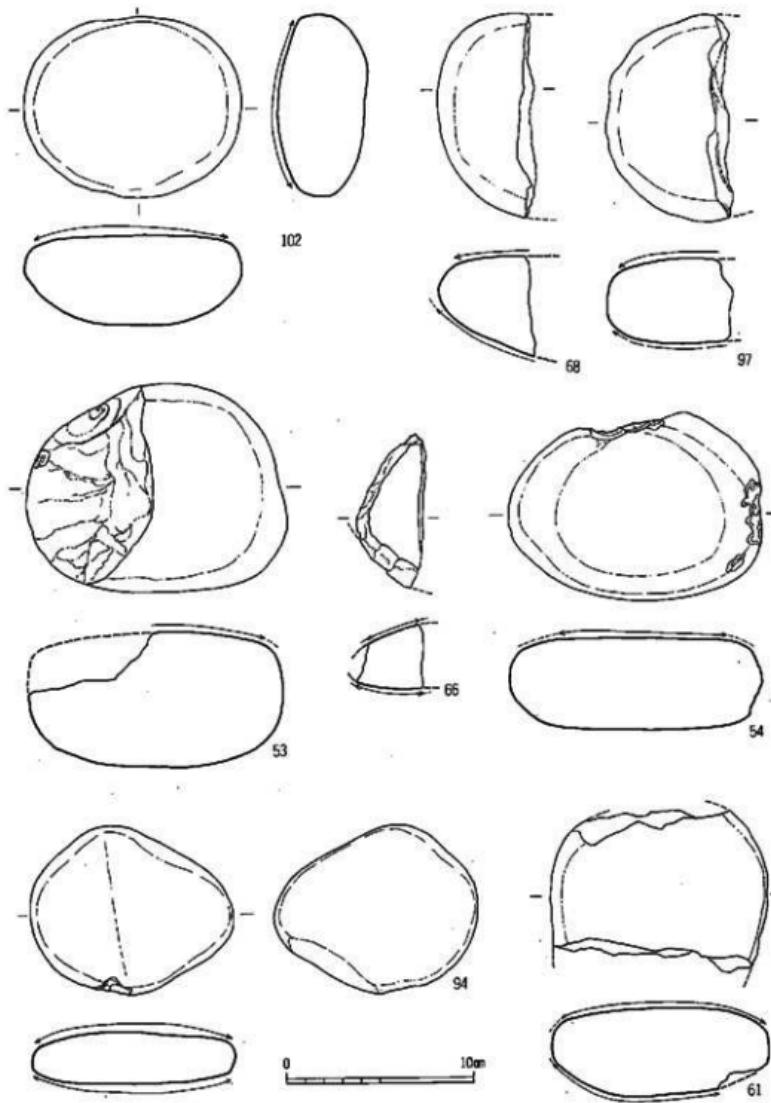


Fig.129 回石・磨石実測図 (その 6)(1/3)

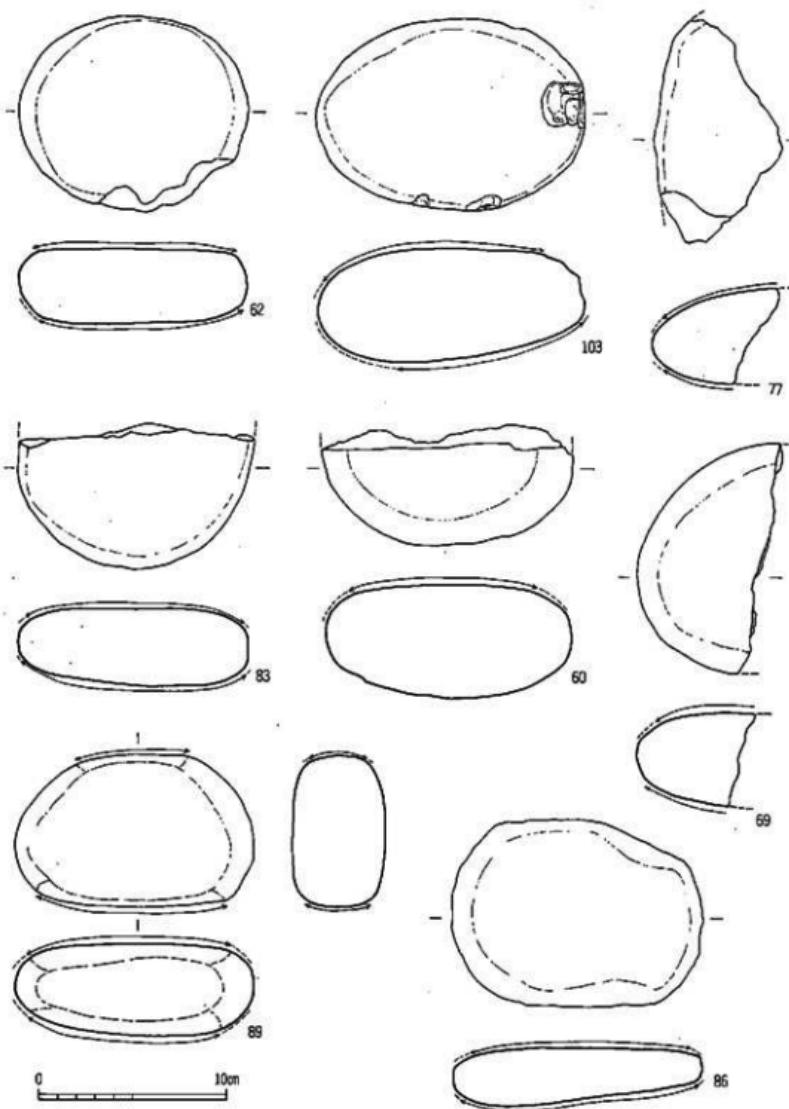


Fig.130 凹石・磨石実測図(その7)(1/3)

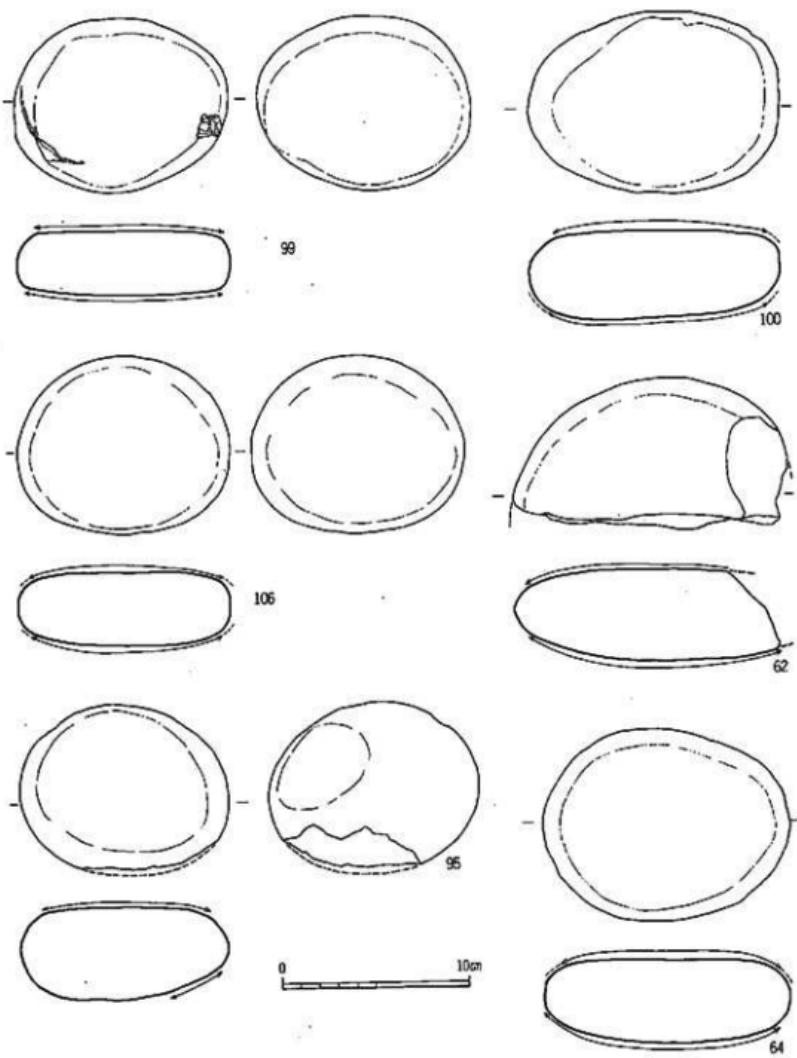


Fig.131 凹石・磨石実測図 (その 8)(1/3)

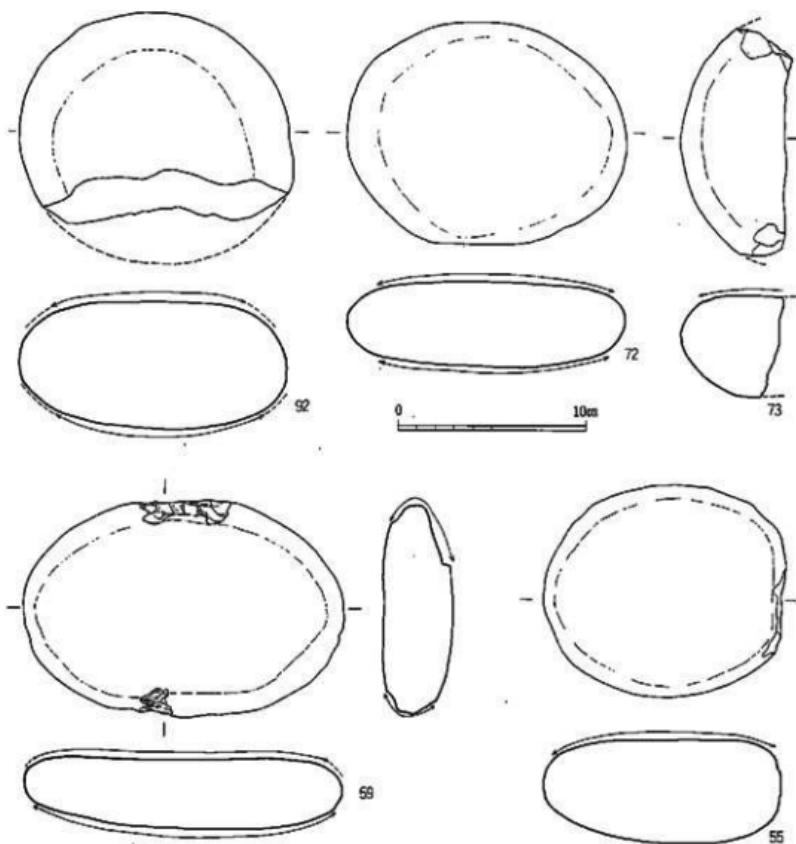


Fig.132 凹石・磨石実測図 (その 9)(1/3)

く変色している。現存長30cm、幅35.4cm、厚さ14.4cm、重さ12,013.2g。5は2層Na308で、花崗岩製。硬質の石材であるが表面はかなりツルツルしており、よく使用されている。大型の石皿状で、裏面は未調整。表面は中央へかなりくぼむ。現存長30.6cm、幅15.8cm、厚さ8.1cm、重さ4,710gとなる。

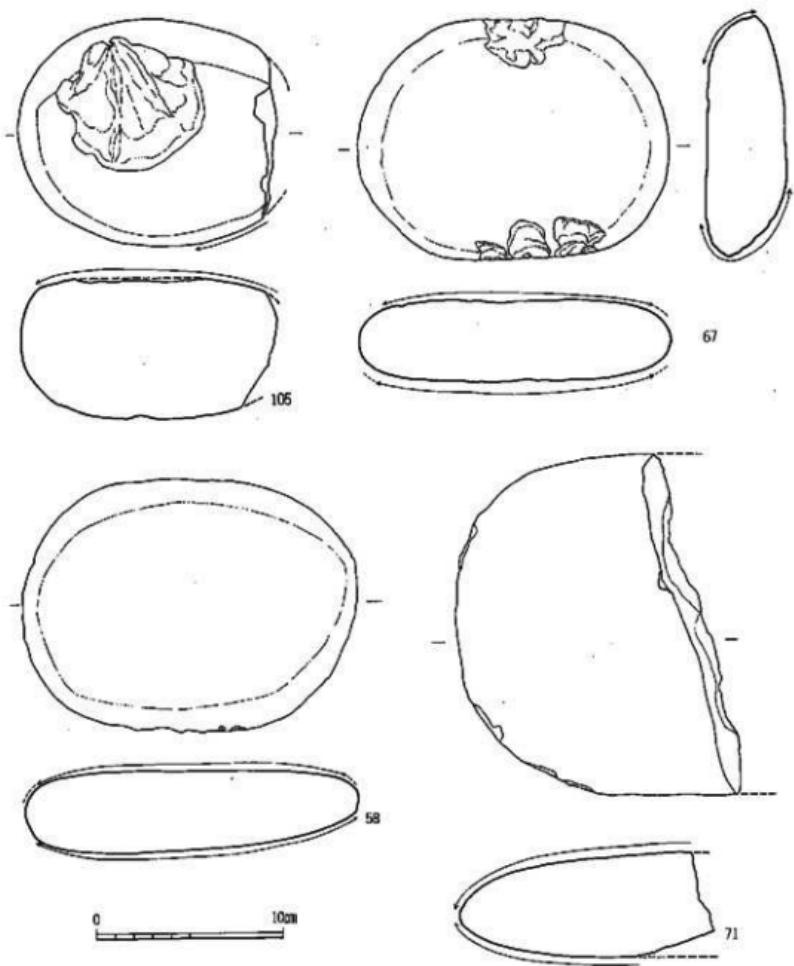


Fig.133 凹石・磨石実測図 (その10)(1/3)

凹石・磨石 (Fig.124~133, Tab.2)

これらの詳細については一覧表に示した。うち凹石は16点出土しており、ここでは特に径5

~7 cmの小河原石のもの8点が目立つ。大型の重量感のあるものと違ってこちらは軽量で、凹部も小さく、自ずから作業対象物が異っていたと考えざるを得ない。また、片面或は両面磨石として使用しているものがあり、片面磨石兼用の場合は必ず凹部のある面が磨面となっており、凹部を使う作業との緊密な関係が認められる。また、画面凹石が6点あるが、凹部の大きさや形状、深さが表裏でそれぞれ違っており、大旨、表裏で大小・深浅の対になっている事が多い。主たる作業面と副次的な作業面を表裏に併せ持った道具と見る事ができる。

磨石は純粹に磨石のみのものが89点出土している。この他に肉眼観察や触感であいまいだったため図示しなかった河原石の類はこの5倍以上の数となる。いずれも旧筑後川の河原から持ち運んできたものであろうが、かなりの労力を費したと考える。さて磨石は、楕円形河原石を用いるのが大半であるが、Fig. 125-90のようにひょろ長い小型類や、Fig. 126-127に示した小型で円形に近い類も非常に特徴的である。また、大型のFig. 132-59やFig. 133-67のように、短軸両端を打ち欠いた大型石鍤状のものもあり、特殊目的で使用されたものであろう。また磨面が中央から左右にそれぞれ傾斜したもの (Fig. 128-88, 129-94) があり、その用法が注目される。更にFig. 133-71のように大型で全体が凸レンズ状曲面をなしてよく使用されたものもみられ、これは大型磨臼とセットと考えられる。

大きさ・重さ等からの検討はまとめの項で詳述する。また、図中の番号は一覧表と同一。

Tab. 2 クリナラ遺跡出土磨石・凹石一覧 (単位: cm, g)

No.	出土地点	種別	長径×短径×厚さ	重さ	石材	備考
1	2層No.330	両面磨石	6.7×5.9×2.3	136.5	灰色凝灰岩質	片面のみ明瞭
2	2層No.444	"	9.5×7.5×2.4	243.5	淡灰色凝灰岩質	
3	2層No.589	片面磨石	6.8×6.2×3.5	209.9	"	
4	2層No.179	"	5.7×5.6×3	128.1	"	
5	VI区2層	両面磨石	5.6×6.1×2.1	88.2	"	片面のみ明瞭
6	VI区1層	"	5.6×4.7×1.9	72.4	"	
7	IV区1層	片面磨石	7.3×6.4×3.1	194.9	"	
8	IV区1層	片面磨石・片面凹石	6.7×6.0×3.3	184.7	"	
9	2層No.190	両面磨石	6.1×6.7×2.2	149.9	"	
10	2層No.110	両面磨石・両面凹石	5.8×5.6×2.9	123.1	灰色凝灰岩質	
11	2層No.371	両面磨石・片面凹石	8.3×6.8×2.9	231.4	淡灰色凝灰岩質	
12	不明	" "	7.9×6.9×2.5	180	"	
13	2層No.104	両面磨石	5.7×5.7×2.7	131.0	"	
14	IV区1層	片面磨石	5.3×4.4×2.5	82.4	"	
15	2層No.135	両面磨石	6.4×(4.4)×2.3	110.3	"	欠損(?)片面のみ明瞭
16	2層No.41	片面磨石・片面凹石	6.8×5.8×3.2	154.8	"	
17	IV区1層	片面磨石	5.8×4.5×2.5	85.8	淡灰色凝灰岩質	
18	2層No.284	両面磨石	5.8×4.4×1.8	73.7	灰色凝灰岩質	
19	P348	両面凹石	6.7×5.4×3	131.4	淡灰色凝灰岩質	
20	2層No.601	両面磨石	5.8×5.5×2.1	94.9	淡灰色凝灰岩質	片面のみ明瞭
21	V区1層	片面磨石	7.1×6.9×3.2	213.5	"	
22	V区2層	両面磨石	9.2×5.7×2.7	207.5	淡灰色凝灰岩質	

No	出土地点	種別	長径×短径×厚さ	重さ	石材	備考
23	2層233	両面磨石	7.3×6.6×1.8	131.2	澁灰色凝灰岩質	
24	2層No.581	"	5.6×4.7×1.6	64.7	"	
25	2層No.668	"	6×5.2×2.2	92.4	灰色凝灰岩質	
26	VI区1層	"	5.8×4.3×1.8	56.8	白灰色凝灰岩質	片面のみ明瞭
27	2層No.213	"	6×5.6×1.7	89.3	淡灰色凝灰岩質	"
28	III区2層	"	6.4×5.8×1.7	90.7	白色凝灰岩質	
29	2層No.196	"	5.0×3.6×2.7	64.9	灰色凝灰岩質	側面一部使用
30	2層No.38	両面凹石	5.8×5.7×2.7	126.5	淡灰色凝灰岩質	
31	V区1層	片面磨石・両面凹石	6.3×6.1×2.5	127.2	"	
32	IV区2層	片面磨石	6.4×6.2×2.9	156.7	"	
33	2層No.336	"	7×5.8×2.5	151.9	"	
34	P294	"	3.8×2.9×1.6	23.4	"	
35	2層259	"	5.3×4.4×1.6	53.6	"	
36	VI区1層	"	4.7×4.1×2.3	60.3	澁灰色凝灰岩質	
37	V区1層	両面磨石	6.1×3.2×2.4	58.9	"	欠損(△)
38	2層No.645	片面磨石	6.6×5.4×2.5	115.3	淡灰色凝灰岩質	
39	P238	"	5.5×5.4×2.2	83.3	淡灰色凝灰岩質	一部使用
40	VI区1層	両面磨石	(4)×4.4×1.2	28.3	淡灰色凝灰岩質	欠損(△)
41	III区2層	"	5.3×5.3×1.6	67.2	"	
42	V区1層	"	7×6.2×2.4	148.7	"	
43	I区+レフ1.2層	片面磨石	4.8×4.2×2.6	72.5	"	
44	P430	両面磨石	4.7×4.3×1.4	37.3	灰色凝灰岩質	
45	IV区2層	片面磨石	5.4×4×1.6	50.4	淡灰色凝灰岩質	
46	2層No.373	両面磨石	6×4.9×2.5	96.4	"	両面とも不明瞭
47	2層No.271	"	5.6×5.2×1.8	78.3	灰色凝灰岩質	
48	2層No.109	"	6.3×5.3×1.7	76.8	淡灰色凝灰岩質	
49	V区2層	片面磨石	6.2×6.2×3.2	148.1	白灰色凝灰岩質	
50	V区1層	両面磨石	6×5.2×1.3	63.9	淡灰色凝灰岩質	
51	V区1層	"	5.2×4.2×1.6	53.1	"	
52	2層729	片面磨石	6×5.7×2.4	103.8	"	
53	2層28	"	13.6×11×7.3	1480.8	灰色凝灰岩質	
54	2層201	"	13.5×10×4.8	972.0	淡灰色凝灰岩質	
55	2層No.144	"	12.7×11.3×5.5	1139.7	"	
56	2層No.48	片面磨石・片面凹石	(6.8)×9.9×5	438.3	緑灰色凝灰岩質	欠損(△)
57	2層No.691	片面磨石	11.9×9.5×3.4	574.6	淡灰色凝灰岩質	
58	2層No.169	片面磨石	18.1×13.4×4.5	1882.6	"	両端打欠きか?
59	2層No.216	片面磨石・両端打欠	17.1×11.5×2.9	1028.3	白灰色凝灰岩質	
60	2層No.202	片面磨石	18.4×6×5.9	617.2	淡灰色凝灰岩質	
61	2層No.275	片面磨石	(7.8)×11.6×4.7	735.1	淡灰色凝灰岩質	片側面・欠損(△)
62	2層No.199	"	12.1×10.3×4.1	813.4	淡灰色凝灰岩質	
63	VII区1層	片面磨石	(6.4)×(10.2)×5.4	482.5	"	欠損(△)
64	V区2層	片面磨石	13.2×10.4×4.6	893.7	"	片面のみ明瞭
65	V区1層	両面磨石	(16.7)×(9.1)×5.3	1033.2	澁灰色凝灰岩質	欠損(△)
66	2層No.265	両面磨石	(8.1)×(5.3)×3.4	105.9	淡灰色凝灰岩質	欠損(△)
67	2層No.47	両面磨石・両端打欠	16.9×12.7×4.5	1264.1	淡白色凝灰岩質	両端打欠きか
68	2層No.261	両面磨石	10.8×5×5.3	385	淡灰色凝灰岩質	
69	2層No.301	"	12.4×6.1×5.3	556.6	"	欠損(△)

No	出土地点	種別	長径×短径×厚さ	重さ	石材	備考
70	区トレチ1面磨	片面磨石	9.6×7.8×4.8	522.7	淡灰色凝灰岩質	
71	2層No.90	両面磨石・レンズ状	(13.4)×18.9×5.2	1963.9	淡灰色凝灰岩質	欠損(少)
72	V区1層	両面磨石	14.9×11.9×4.4	1201.5	"	
73	2層No.383	片面磨石	(12)×(5.7)×5.8	471.5	"	欠損(少)
74	2層No.83	両面磨石	12.3×9.5×5	761.4	淡灰色凝灰岩質	
75	Ⅲ区1層	両面磨石・両面凹石	10.3×8.8×4.2	576.4	"	
76	P270	両面磨石	13×10×4.5	844.6	"	
77	2層No.656	"	11.9×6.6×5.4	341.7	"	
78	IV区1層	"	12.3×9.9×4.8	842.8	淡灰色凝灰岩質	
79	II区2層	"	10.5×6.3×4.1	313.7	シルト岩質	
80	P215	両面磨石・片面凹石	9.3×8.3×3.1	327.2	淡灰色凝灰岩質	
81	P394	両面磨石	10.9×9.0×4.7	588.7	"	
82	II区2層	"	14.3×7.7×4.9	788.7	"	
83	III区1層	"	12.8×7.8×4.1	592.7	淡灰色凝灰岩質	
84	2層No.420	"	(6)×9×4.5	461.3	淡灰色凝灰岩質	片側面・欠損(少)
85	2層No.553	両面磨石・片面凹石	11×9.4×5.5	716.5	淡灰色凝灰岩質	欠損(少)
86	V区1層	両面磨石	13.4×9.9×3.0	538.9	"	風化著しい
87	V区1層	両面磨石・片面凹石	12.6×10.3×4.9	905.2	"	
88	2層No.465	両面磨石	11.2×7.5×4.1	455.8	"	欠損(少)
89	IV区1層	両面磨石・両側磨石	12.7×8.1×4.9	800.3	淡灰色凝灰岩質	
90	IV区2層	両面磨石	8.4×4.1×2.3	129.5	"	両側面
91	V区1層	片面磨石	10.9×9.4×3.7	560.8	灰黒色凝灰岩質	片面のみ明瞭
92	V区1層	両面磨石	(10.2)×14.4×6.6	1644.2	淡灰色凝灰岩質	欠損(少)
93	V区1層	両面磨石・片面凹石	10.5×8.3×3.5	404.7	白紫色凝灰岩質	
94	2層No.632	両面磨石	11×8.8×3.9	398.9	白灰色凝灰岩質	
95	2層No.527	"	11.3×9.0×4.9	664.9	淡灰色凝灰岩質	
96	2層No.716	"	(9.3)×8.0×3.5	424.7	"	欠損(少)
97	2層No.631	"	(6.7)×11×4.7	461.8	暗灰色凝灰岩質	欠損(少)
98	VII区2層No.735	"	10.4×9.3×3.6	596.5	淡灰色凝灰岩質	欠損(少)
99	2層No.659	"	11.5×9.2×4.5	610.7	"	
100	2層No.605	"	13.5×9.7×4.7	956.0	"	
101	VI区1層	"	12.2×8.9×3.3	483.8	白灰色凝灰岩質	
102	VI区1層	片面磨石	11.7×9.7×4.8	830.6	淡灰色凝灰岩質	
103	III区3層	両面磨石	14.3×10×5.8	1055.3	淡灰色凝灰岩質	
104	III区2層	片面磨石	11.9×10.4×6.5	1129.1	"	
105	III区2層	"	13.7×11.8×7.2	1963.3	"	
106	VII区2層	両面磨石	11.5×9.4×4.1	691.0	"	

D 各 論

1 C14年代測定

当教育委員会ではクラナラ遺跡出土の炭化物について下記のようにC14年代測定を依頼した。社団法人日本アイソトープ協会により、クリナラ遺跡第1号住居跡床面出土炭化板材と第1号土壤出土炭化物（消し炭状）の2点の試料につき分析が行われ、平成元年3月7日付で下記のとおり報告書が提出された。

年代測定結果報告書

昭和63年3月30日に受取りましたC-14試料26個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
	(中 略)	
N-5386	KOF 13-1 №23	1690±75yB.P. (1650±75yB.P.)
N-5387	KOF 13-2 №24	970±75yB.P. (940±70yB.P.)
	(後 略)	

年代は¹⁴Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取の誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお¹⁴C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

以上の結果を検討してみる。まずN-5386の試料、つまりクリナラ遺跡第1号住居跡は遺構・遺物の検討から6C後葉と報告した。C-14年代の方はAD260±75 (Libbyの値でAD300±75) 年となり、考古学的年代より約380~200年古く出てしまっている。床面出土の炭化板材だったので信頼できると思っていたのだが、残念である。一方、N-5387の試料、つまりクリナラ遺跡第1号土壤出土炭化物（消し炭状）についてはAD980±75 (Libbyの値でAD1010±70) 年となり、10C初~11C末の年代が得られている。これについては本文中でも触れた如

く、造構が異例で出土遺物からも年代の決め手が無いため、このC-14年代について何ともコメントし難い。ただ、周辺の包含層等から出土している歴史時代遺物を見る限り、もっと新しい平安後半～鎌倉期の造構であってもいいかなという気はする。

2 繩文晚期土器

以前、柿原I 繩文遺跡（註1）報告の中で繩文晚期黒川式土器を中心とした細分案を示し、該期の社会構成検討の為のものさし作りを目指した。しかし、柿原I 繩文遺跡では土器出土量は多かったものの、破片資料が殆どで、細分類しても全器形が明らかでない類が多かった。また、共伴関係が判からず、時期比定を錯誤したりしており、必ずしも充分な分類・編年とは言えなかった。その後、福岡県糟屋郡久山町堀田遺跡（註2）発掘調査の機会を得て、黒川式古期の資料に恵まれ、柿原I 繩文遺跡での黒川式新期の資料とはっきりと異なることを確認した。今回このクリナラ遺跡出土品の整理の段階で、この中には黒川式古期を充実させる資料、さらにそれを超る、より古い時期のものが多く含まれているのがわかり、分類・編年を再度行う必要を痛感した。という訳で、今回は柿原I 分類を全く新たにやり直しておきたい。当甘木朝倉地方を中心として、時期は「広田式以降曲り田以前」の間としたい。

分期 分類表 (Fig.134~138) の左欄にとりあえずの年代観を記したので説明しておきたい。繩文晚期を初葉・前葉・中葉・後葉・末葉の5小期に分ける。初葉は御領式・島井原式。前葉は大石・上加世田・広田式。中葉は古闇・入佐・砾石原(古)式。後葉は黒川式。末葉は砾石原(新)・長行・山ノ寺(古)段階の各土器型式をイメージしている。末葉の後を弥生早期とし、曲り田(古)式・菜畑13層等の刻目凸帯の確立盛行期とする。さらに、これらを将来的に細分できると考えるので、各々古・中・新段階と仮称して分類した。中葉では、東九州・中九州で既に細分案が示されており、北部九州でも分けられるのは時間の問題であろう。後葉は、九州の繩文研究者の懸案とも言える黒川式土器の再検討の試みの一つとして、精製浅鉢C類（短い口縁の胴張り類）で3段階に分けられたため、古・中・新に並べ直す作業を目指した。末葉は、弥生早期の設定に伴い、広義の黒川式土器からははずして位置付けを試みているため、漸移形態的な意味合いが強く、しばらくは汎九州的視点からの細分は無理であろう。そして時間的にも短いものとなろう。以下、各類毎に時期・形状・系統等について検討してゆきたい。なお、この分類表では本文中で分けた類別に従うが、クリナラ出土品に適当な資料が無い場合、甘木市柿原I 繩文遺跡、甘木市高原遺跡（註3）、朝倉町鎌塚遺跡（註4）、朝倉町治部ノ上遺跡（註5）、糟屋郡久山町堀田遺跡、久山町一ノ井手A遺跡（註6）等の良好な資料に替えて示した。
精製浅鉢A類 晩期前葉の丸く湾曲して外反する口縁が長く伸びてしまつて、口唇部の立ち上がりが既に形式的に短くなってしまったものをA1類とした。口唇部外面の沈線は1条し

か無く、A 3 類（中葉新）以降玉縁化が進み、後葉古段階で黒川式を象徴する口唇部玉縁が確立・盛行する。長く延びる口縁の下半部で A 3 段階（4）から屈折を見せ始める。これが口縁が短くなった段階（6）から、副張りの C 類が派生することがクリナラ例で明らかになった。この事は今回の大きな成果である。黒川式を代表する C 類器種の系譜が他地方等に求めずとも、晩期の基本的器種である A 類の中から生まれてくる事が説明付けられた訳である。一方 A 類は後葉古段階で屈曲がきつくなる類（7）と、口縁が長く延びるものでは口唇部を片玉縁につくる類（8）とに分かれ、それぞれ後葉新段階の 21 や 19 へと引き繼がれる。19 では玉縁がすでに角張ってしまっており、口縁の長いのが気になり、以下胴部の形状が確定できない。A 6 類の 8 のような片玉縁は柿原 I 繩文遺跡で多く出土しており、確實に一タイプあるようだ。また、20・26 は A 類の列に並べたが、口縁が大きく開く B 類の系列になるのかもしれない。さらに柿原 I で 2d 類とした 25 は、19 の変化したものと考えるが、胴の張った C 類のような胴部を持つかもしれない。16 は本文中では D 3 類としたが、強く屈曲して外反する C 類の 10 の亜種の可能性も考えられる。

精製浅鉢 C 類 丸く脣張りする黒川式土器典型器種であり、A 4 類から派生してくる事は既に述べた。口縁部が長く内外の 2 段屈折部がまだ丸味を持っている C 1 類から、縁がシャープになる C 2a 類、口縁がより短くなり胴の丸味が増す C 2b 類へと変化する。口縁の長さや形状、屈曲の状況を A 類に対応させると、ここまでが後葉古段階となろう。さらに C 2b 類でも口縁がぐっと短くなり直立する 18 のタイプが出現し、黒川式通有の盛行期となる。口縁のリボン状凸起も、後葉古段階の 14 のような中央切目の中凸起から、18 のような新段階で整美なリボン状へと変化する。この短い口縁の付根の頭部内側が、ぐっと鋭角に張り出してくれるのも C 2b 類からの特徴で、次の C 3 類では内湾した胴部の上にちょこんと口縁の玉縁だけが乗っかっているという感じで、内側への頭部張り出しだけが印象的となる。C 3 類は口縁が極端に短くなる為か、外面への沈線が施されなくなり、内側に丸くなる片玉縁状が特徴となる。柿原 I 分類で 3C-1 類とした 22 は、口縁が太く角張り、長行遺跡（註 7）など北九州市域で見られるような瀬戸内系の影響を受けたもので、後葉新段階に置ける。後葉中～新段階には口頭部を欠いた、頭部だけの C 5 類が散見できる。さらに末葉になると、口縁が玉縁を作らず、外反する先尖りの形状をなす C 4 類が認められる。以上の C 類の胴部上半には 12 のような三日月状（リボン状凸起の横面観）貼り付けや、17 のような円環状粘土紐貼り付けが時偶見される。次に、この浅鉢 C 類における各遺跡での出土状況を確認しておこう。鹿児島県黒川洞穴（註 8）においては、A 4 類と C 1 類が見られ、C 類の発生の状況が把める。また C 4 類もあるが、全体に後葉古段階の口縁の長い類が中心をなしている。久山町堀田遺跡では地点の離れた I 区で 1 点のみ C 3 類が出土しているが、大量に出土した II・III 区では C 2a 類少量と C 2b 類多量のみがみられ、C 3 類の混入は皆無である。これは後葉古・中段階の良好な出土状況を示し、他器種と

のセット関係を把む為にも有力な資料と考える。次に朝倉町治部ノ上遺跡では18と深鉢E類の117とがセットで出土しており、深鉢E2類の最終形態と伴うという良好な資料となっている。各地で出土しているこのC2b類の後葉中段階のセット関係が押さえられた訳である。さらに、近隣の朝倉町長田遺跡（註9）では、後葉中段階のC2b類の良好な土器と、C3類でも最新段階と思えるくずれた形状の資料が出土している。ドングリピット等遺構も発見されており、該期の生活痕跡が明瞭に認められる重要な遺跡である。柿原1縄文遺跡では堀田遺跡とは逆に、後葉中段階のC2b類が1点しか出土せず他はすべてC3類となっている。自ずから両遺跡は他器種の形状も異り、接する両時期となる為、良好な比較編年資料となる。甘木市高原遺跡では1点のみC3類の妙に肩の張った異タイプが出土しているので、基本的に晩期後葉が全く欠落している。即ち、晩期中葉のものと、末葉～弥生早期のものの2グループに大別され、特に中葉のものは、今回の編年作業の中で、クリナラ例の直接の前段階を示すものとして、重視した。中でも浅鉢B類、マリA類、精製深鉢A～C類、粗製深鉢C2類、刻目凸帯文土器等については、高原遺跡出土資料に負う所絶大であった。これも、このC類浅鉢が基本的に無いという確認による所から出発したからである。以上のように、この浅鉢C類は定形深鉢の変遷とともに、晩期後半の編年の中心となる類であり、今回その初現と変遷を他器種とのセット関係も併せて押さえることができたのは幸いであった。

精製浅鉢B類 長く大きく開く口縁が波状となり、頸部で小さくびれて体部へと続く類。クリナラ遺跡では出土量が意外と多く、B3類を中心として明確に一器種を構成している事が判かった。B類の中での流れを追うと、まず29のような高原F区出土品が中葉中段階にみられるが、内面に段を持つ特徴があり、口唇部もB3類のような尖る類ではなく、B3類の直接の祖型とは言い難い。30の高原E区例も長く延びる口縁からみるとB3類に近いが、内湾しないこと、下半の器形が恐らく異なるであろう事等から直接の系譜は追えない。B1類とした口縁外面に沈線文を施すものは、先行する晩期前葉の影響を残すもの。B2類とした特殊例はB3類と同時期としてよいかもしれない。B3類は図示したものはやや外湾的だが、大半は内湾気味のもので占められており、大型類も結構多い。B類はここまで終り、この別類としてE類の強く開く浅い器種が存在する。このB類は古闘遺跡（註10）で古闘式の深鉢等とともに出土しており、クリナラ遺跡例でも中葉新段階まで上げてもいいのかもしれない。このB類の特徴は、細砂粒を含むものが大半である事、外面調整が粗雑になるものがかなりみられる事、口唇形態が玉縁をなさず尖るものである事、くびれが小さく他類のように同一類の中で変化してゆくものでは無い事等があげられる。この諸特徴は当地方晩期中～後葉土器の中では極めて異質であり、その祖型も追い難い。やはり北九州市域や瀬戸内の岩田IV類のもの等に求めざるを得ないだろう。E類とした42の資料に竹管文が認められるが、西瀬戸内系である事を示唆している。胎土の違いもあり、土器そのものがこれらの他地域から持ち込まれた可能性もある。

精製浅鉢 D・F類 本文中では長めに強く開く口縁が変化しながら屈折を持ってゆくものをD類。晩期前葉系の丸く屈曲して開く浅鉢の特徴を残して玉縁となってゆくものをF類としたが、ここでは同系列の中で並べ直してみた。まず、D 1a の浅い体部に長く強く開く口縁を持つ類だが、浅鉢 A 類の変化との対比から中葉中段階に置いてみた。口唇部が尖る特徴を持つこの D 類は D 2b 段階で口縁下半に屈折をみせ、D 2a 類で口唇内面に沈線を持つ。この変化は浅鉢 A 類の中葉新段階に対応している。そして後葉古～中段階で口唇部が玉縁に変わる D 1b 類と、45・46のような短い口縁が強く開き、屈折部が直角的に 2 段屈折して直線的に開く浅い体部のものとなる。D 3 類まで変化すると、D 1・2 類とは全く異なる器種と考えた方がよいかもしれない。一方、F 類は短く丸く屈曲して外反する口縁を付ける類だが、F 1a 類で玉縁状になり、F 1b 類で内面にシャープな稜を持ち新しい様相となる。問題は F 2 類 (32) の位置付けだが、D 2 類・F 1 類のように口縁下半の屈折がまだ無いという点から中葉中～新段階に置くべきなのか、或は外反する口縁形態が、弥生早期～前期の鉢形土器の外湾しながら立ち上がる類へと進む部類である事を示しているので、後葉新～末葉に置くべきものなのか、いずれかであろう。クリナラ遺跡出土土器全体から見た場合、恐らく前者が妥当と思われる。この D・F 類の特徴は口唇部が尖り、胎土に細砂粒をかなり含むという点で、浅鉢 B 類と一致している。さらに、D・F 類はクリナラ出土土器の中では少量であり、近隣に類例を求める事は困難である。以上の事から、D・F 類のうち口唇部が尖る中葉段階の古い一群 (31～34) は、他地方に祖型・中心地を求めるべきであろう。B 類と同じく搬入品の可能性も考えねばならないだろう。なお、50は小型のマリ的類であるが、口頭部の形状が浅鉢 C 3 類の特徴を示しているので、後葉新段階に置いた。

精製浅鉢 E 類 B 類の項で少し触れたが、B 3 類のもっと強く開く類で浅い体部となるもの。出土例は水平口縁となるが、波状口縁があつてもいい。竹管文が施され、西瀬戸内の岩田等に系譜を求めざるを得ないだろう。

精製浅鉢 G 類 内湾気味に開く口縁で、B 2・3 類ほど長くはならない。精製小型深鉢になるかもしれない。柿原 I 繩文遺跡出土品にも類例があり、外面に条痕を残す特徴があり、深鉢とすると、北久根山式あたりから波状口縁となる類品が見られる。ただ、クリナラ例は両面磨きの薄手品であり、中葉新段階の B 1・2 類に関連するものかと思われる。

精製浅鉢 H 類 クリナラ遺跡ではこの類は出土していないが、堀田遺跡例 (47・48)、柿原 I 繩文遺跡例 (51) をもって H 類とする。単純に大きく広く開いた体部だけのもので、大皿状を呈する。51は形骸化した凸起を付ける。単純な器形であり、晩期の終り近くにみられるというのも土器全体の単純化傾向からみても納得できる。

マリ A 類 口縁部が長く、内面に段や沈線を入れる類で、浅鉢としても良いが、マリ B 類の直接の祖型となるのでマリ形土器に含めた。A 1 類の口頭部がはっきりと 2 段階屈折する類は、

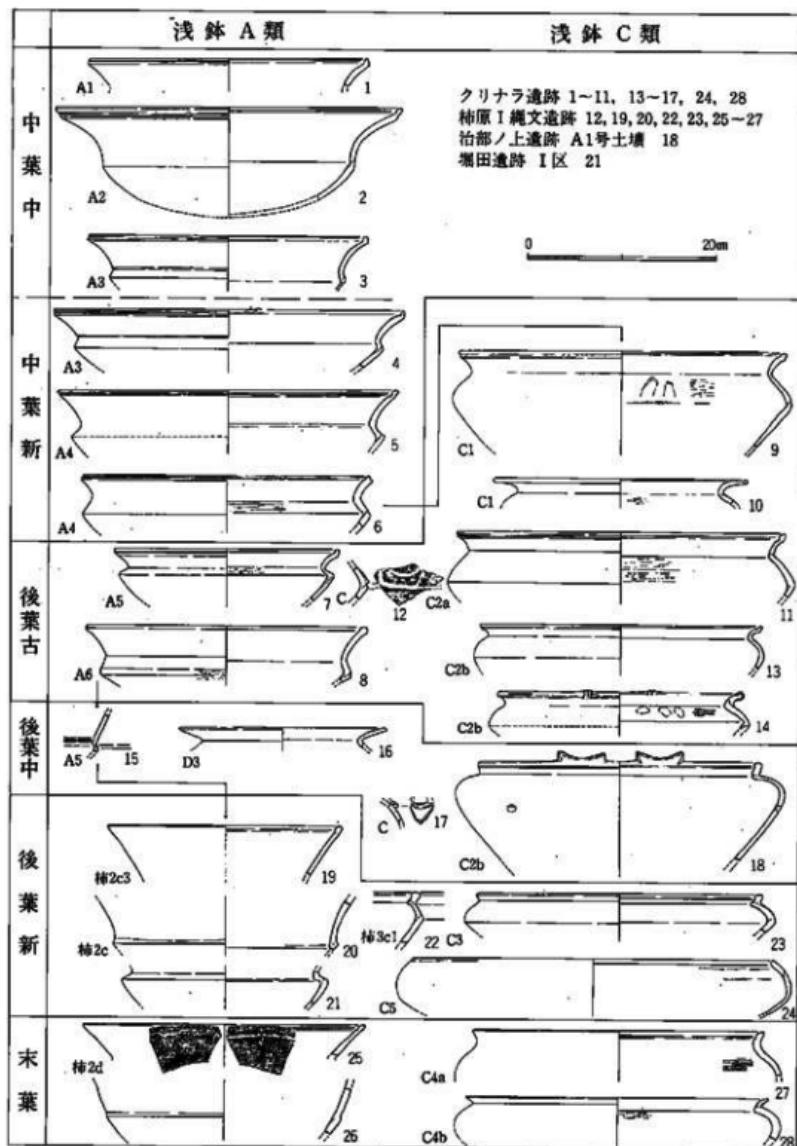


Fig.134 繩文晩期土器分類（その1）(1/6)

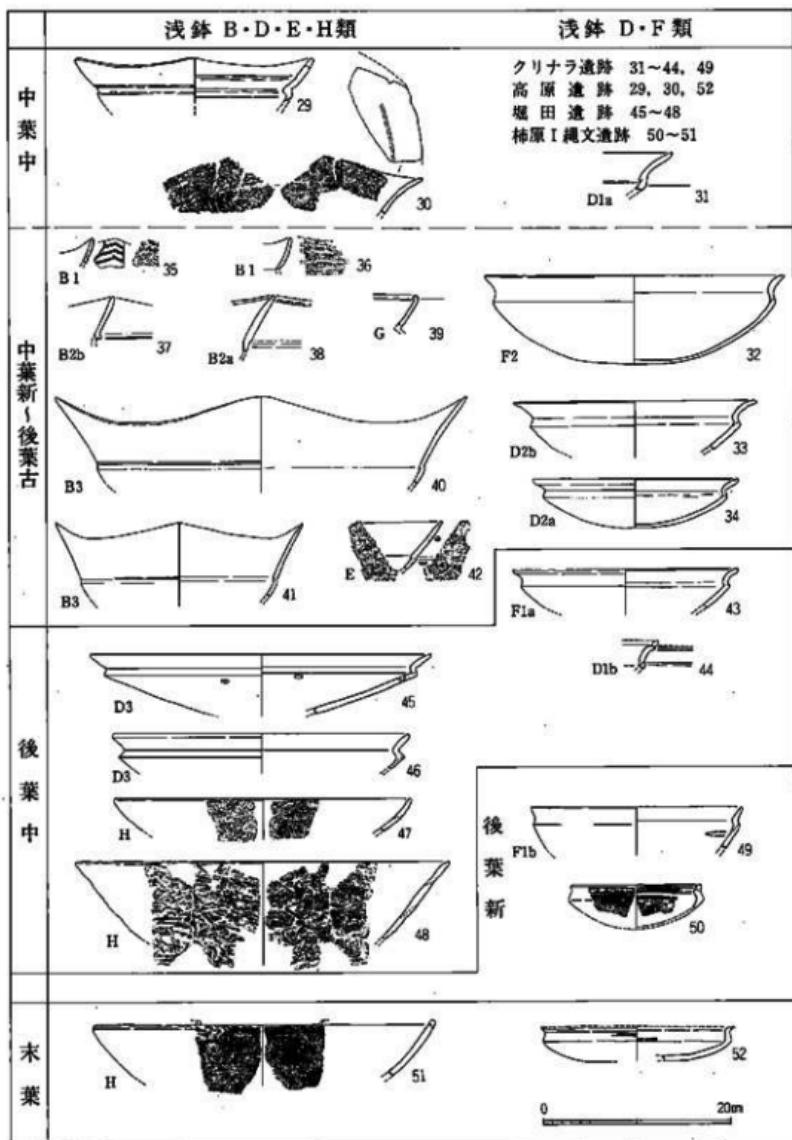


Fig.135 縄文晩期土器分類（その2）(1/6)

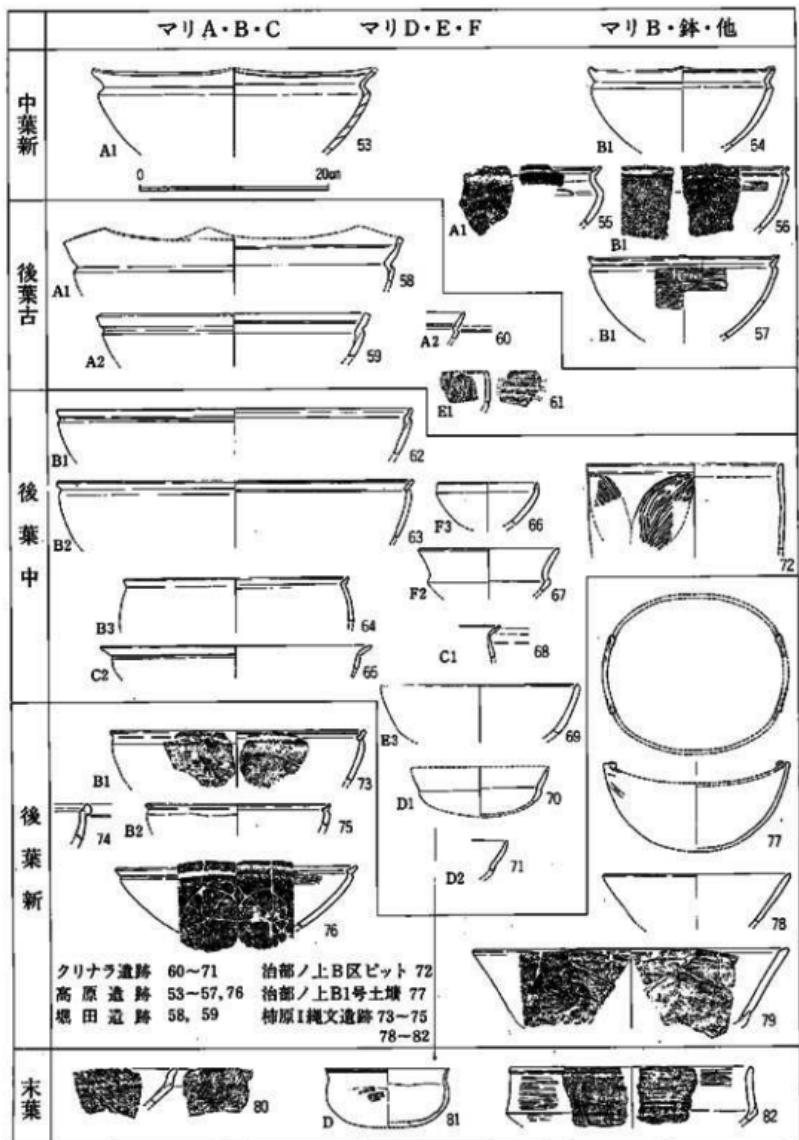


Fig.136 縄文晩期土器分類(その3)(1/6)

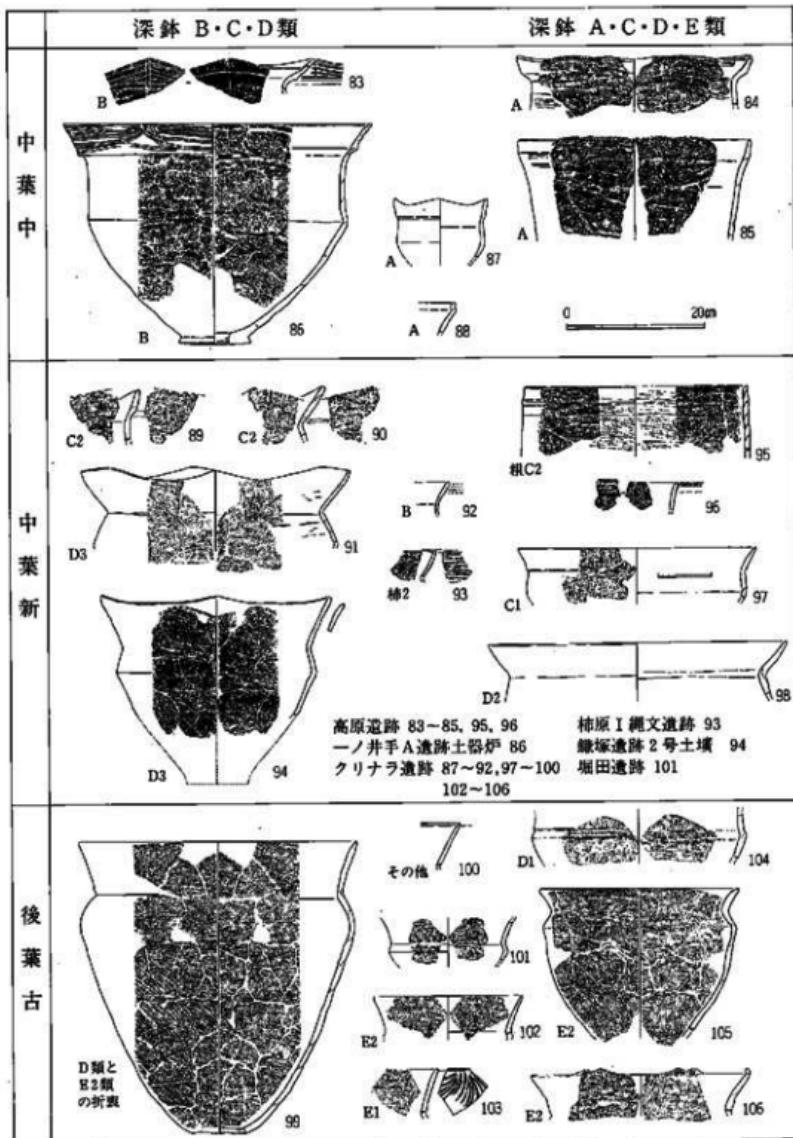


Fig.137 繩文晩期土器分類 (その4)(1/8)

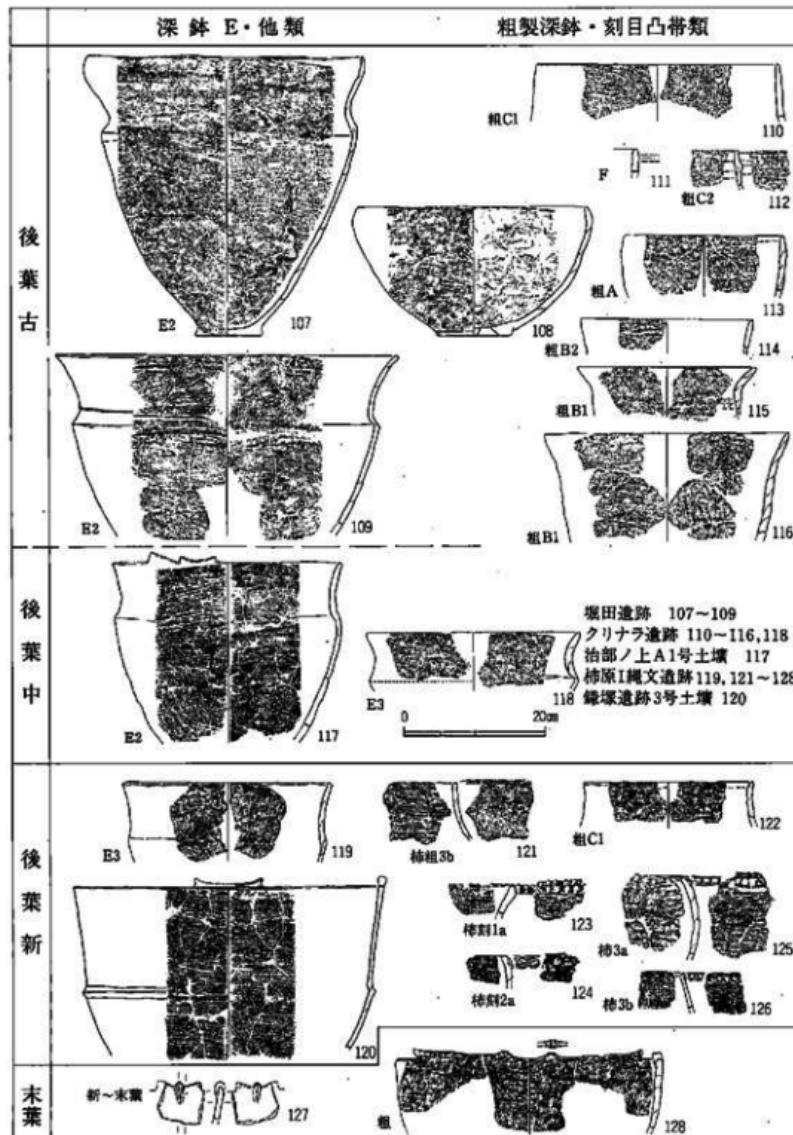


Fig.138 縄文晩期土器分類 (その5)(1/8)

53の高原遺跡F区出土品あたりから系譜を追える。撮田遺跡例（58・59）が後葉古段階の他器種と整合する資料となり、一時期を押さえる事ができる。

マリB類 口縁部が短くなり典型的な定型マリとなる類。高原遺跡出土の54～57は、晩期前葉浅鉢からの丸く外反する頭部の面影を残しており、各屈曲部がまだ丸味を帯びている。このB1類の中葉新段階のものは口縁直下外面のくびれが、小さいが丸く凹線状となっている。これがB1・2類後葉中段階のものとの違いで、後者は頭部外面のくびれ部がシャープな凹穂をなしている。B2類の外面の稜線がだらけて、内面稜が突出してくる傾向は、C3類の様相とも通じる所があり、後葉新段階の柿原I例（73～75）となる。74はかつて柿原I分類時には、このB類の粗型的なものとして中葉新段階に置いていたが、今回、逆に退化形態と考え直して、後葉新段階と位置付けた。また、76は高原B区出土品であるが、口唇部の玉縁が無くなっているという意味で、B類の最終段階に置いた。ただ、体部の傾きも典型B類的では無く、逆に古く中葉段階まで遡るものかもしれない。また、胴部の張るB3類はあながち特異例ではなく、晩期中葉新段階の古闕遺跡出土品の中に口縁は異なるが胴部の張るものがみられ、細々と伝統的に引き継がれてきたものであろう。

マリC類 C1類は胴部はB3類のように張るが、口縁が開いて片玉縁状となる類で、後葉中段階を中心とする時期となろう。C2類も1点のみで特殊例であろう。どうにも系譜がたどれない類である。

マリD類 浅鉢B・E類が小型化したような形態を持つが、やはり関連はあるだろう。くびれのだらけてしまったD2類が系譜的に流れゆく状況はみられない。ただ、柿原I縄文遺跡出土の81は、D1類の系統と思われる。

マリE類 器形全体がボール状に丸くなる単純な器形のものであるが、口縁外面に沈線で装飾を施すE1類は前代からの流れを受け継いでいる。晩期前葉代までは口唇内外に1～2本の沈線と若干の装飾を施す程度だが、中葉段階になると多条の沈線文で飾られる。後葉古段階に幾らか残る程度で、北部九州ではそれ以降見られなくなる。口唇部がはっきりと玉縁となるE2類は、もちろん後葉の黒川式の特徴を示しているが、口唇内外に細沈線を入れる晩期初～中葉の古いタイプとは区別しなければならない。文様も何も持たない素文のE3類は、時間・空間を超えて存在してよさそうだが、晩期の中では後葉代に幾らかみられる程度である。

精製鉢・高杯等 72は治部ノ上遺跡出土の異類品で、木葉文を沈線で施しその部分だけ赤色顔料を塗っている。下半の形状は見当がつかないが、時期的には周辺の包含層等の土器からみて後葉中段階と考えられる。77は治部ノ上B1号土壙出土品で後葉新段階のもの。橢円形状の波状口縁となるマリ状器形。リボン状凸起が横に長く延びたような形状のものは、鎌塚遺跡出土例（図中120）があり、時期的にも合っている。79は口縁内面に稜を持つ特徴的な大型器種であるが、類例が見当らない。器形からみて、晩期後半に知られる組織圧痕土器と関連す

るものかもしれない。82は口唇部がやや外傾しており、弥生早期に特徴的な口唇部が小さく折れる鉢の祖形となろう。低い筒状の脚部を付けるかもしれない。80は、短い口縁が僅かに外反して高杯となるもので、弥生早期に繋がる類。高杯的な器形としては後期三万田あたりに充実した細身の脚部、或いはそれ以前に透しのある広い脚台付の鉢等があり、細々と統くようではあるが、北部九州晩期においては確立された器種とは言えない。クリナラ出土中に刻目を持つ脚台部分 (Fig.30-9) があり、本文中では三万田～御領式期かとしたが、意外と晩期後～末葉のものなのかもしれない。

精製深鉢 A 類 晩期前葉の口縁が直に立ち、外面に平行沈線を施す、晩期の代表的深鉢の系統を A 類とした。中葉段階では口縁が外傾化してきて、外面の沈線が横位角度になったり、無文化していく。中葉中段階で盛行する B 類は、口縁が幅広くなり、強く外傾して開くようになり、A 類の様相をまだ全体としてはよく残している。また85のような高原遺跡 F 区出土品は、口縁の立ち上がりが不明瞭となり、次の中葉新段階では85のように、外面に低い突出棱を作る類へと繋がってゆく。よって A 類は B・C・D・E 類へと流れゆく定型深鉢である一方、粗製深鉢 C 2・C 1 類から刻目土器・刻目凸帯土器の臺形土器へと繋がってゆく流れも、ここから派生する。

精製深鉢 B 類 口縁外面の文様帶が中葉中段階で幅広く誇張され、口縁自体も外面を肥厚させ大きく開く形状となり。器形的にも華いだ雰囲気となる。沈線文も単純な平行線から、花房状に密に施したり、山形凸起をつくりその部分に縱・斜めの線を加えたりして、文様も華麗さが最高潮に達する。この様相は次の C・D 類の中葉新段階では全く消え失せてしまう。南九州では入佐式、中九州では古闕遺跡の古い段階が該当するが、多くの遺跡ではこの B 類と C・D 類とが混在するような出土状態である。また、底部も御領式獨得のすばまつた小さめのものが上げ底となる形態のものから、この B 類の時期に平底の外端がとび出す形状へと変化している。安定した平底に変わること、土器の作り方自体、さらには深鉢の用い方自体にも変化が起こり、生活様式の変革が在ったものと解釈できる。

精製深鉢 C 類 前段階の B 類から更に口縁が長く延び、以下の頸部の長さと同じくらいになる類。口縁外面の肥厚はまだ明瞭であるが、無文化している。口縁が波状となるものを C 2 類としたが、この C 類と次の D 類で波状の度合いの強い、つまり高低差のある大きな波状口縁となってくる。また、90のように頸部の内傾が強まり、口頸部がくの字に大きく屈折する D 類に近づいているものもある。この類は、無文化という点と、器形的に D 類に近くなるという点で、中葉新段階に置いた。

精製深鉢 D 類 口縁部が長く延びて大きく開き、頸部と胴部で明瞭に 2 段くの字状屈折をみせる類。D 1 類は胴部の稜直上に段や沈線を施すもので、古くは御領式系深鉢に沈線を巡らす様相で、104などは頸部の立ち上がりが深鉢 B 類に近く、古い形態を残したものと言える。ま

た、深鉢 E 2 類（109）に口縁下半のくびれ外面に段をつくるものがあり、後葉古期深鉢・浅鉢の注目すべき特徴となっている。これらも D 1 類と強い関連を示すものであろう。D 2 類は水平口縁で、98 のように内湾気味に開く口縁もあり、波状口縁となる D 3 類の 91 等と様相を同じくしている。D 3 類は薄手の小破片となると浅鉢 B 類と区別がつかないものもある。内湾的である点で類似性があるようだ。鎌塚遺跡出土の 94 は頸部の屈折部が中位より下に来ており、かつて A～C 類で口縁と呼んでいた部位の方が頸部であった部分より長くなってしまっている。これは中九州あたりではあまり見られず、北部九州での地域性的特徴と言えるかもしれない。またこのタイプは、次の E 2 類の、頸部下端近くで屈曲する形状へと移行する祖型となっている。更に、頸部屈折部に付けられる蝶ネクタイ状凸起も、E 2 類深鉢へと引き継がれている。また、後葉古段階に置いたが、105 は頸部中位内面に稜を持ち、D 2 類と E 2 類の中間形態を示す。全体の器形からみて、E 2 類により近いものと考える。さらに、99 はクリナラの埋壺本体であるが、肩が丸く張り、外傾気味に立ち上がる直線的な口縁を付けるもので、この時期に類例を知らない。口頸部がぐっと長くなったものは後期末～晩期初葉の天城遺跡（前掲註 10）などで見受けられる。ただ口頸部と胴部のバランスが全く異り、クリナラ例を敢えてその古い系譜に求めなくとも良いと考える。よって、この 99 は D 2・3 類の胴部の綾が丸くなったもので、大型品であるためこのような造形に到ったものではないかと思われる。また、105 と埋壺としてセットであり、両者が同じような中間形状を示す事は興味深く、後葉古段階の E 2 類深鉢に近いものとして押さえられる。

精製深鉢 E 類 脊部上端で内側に折れて外面に稜をつくり、ゆるやかに内側に湾曲して外反する口縁となる類。大きな目で見ると御領式系の口縁に立ち上がる文様帯を付かない方の深鉢の伝統的範疇に入るのかもしれないが、こちらは胴部腰径より口径の方が大きめで、口縁の開きの度合いがより強いという、器形のバランスの大きな違いが認められる。やはり D 2・3 類からの直接的な移行が考えられる。E 1 類は口頸部外面に沈線による大柄な文様を施す類で、雑な花房的な斜め曲線がみられる。これと類似する文様は C 1 類の古閑遺跡出土品にも見られ、細々とではあるが、中葉中段階の B 類からこの種の深鉢に受け継がれてきたものであろう。次に E 2 類は口頸部下半でくびれをみせるもので、黒川式古期の代表例となる。ただし、黒川洞穴でみられるような、口頸部が直線的でくびれ部で小さく屈折する類は、北部九州域には見られない。E 2 類 107 は堀田遺跡の埋壺であるが、口縁が内湾しており、この期のものとしては変わっている。内湾した部分を、深鉢 A～C 類の口頸部がだらけたもの、或はそれを意識したものと名残りだと見ることもできよう。また、109 のように頸部外面下端に段をつくるものは、深鉢 D 1 類や浅鉢 A 3 類、柿原 I 分類での精製浅鉢本部 b 類としたものにもみられ、時期的に中葉後半～後葉古段階に限られるわかり易い特徴となっている。出土土器量からみると、クリナラ遺跡・堀田遺跡とともに、この E 2 類が深鉢の中で圧倒的多数を占めている。また、こ

の頃から胎土・調整ともに粗雑で粗製土器に近いものが多くなり、純粋に精製で磨きのかかったようなものは、逆にごく少くなる。晩期後葉以降のこの種の深鉢に「精製深鉢」を用いるのは適当でなく、「半精製・半粗製」の呼称も曖昧さを残すだけであり、『定型深鉢』とした方がより適切であると思う。次に、E3類は口頭部の外反がゆるやかとなり、口頭部全体で立ち上がり気味に外湾する類を指す。屈曲部外面の稜も丸みを持つ。117は、くびれの具合がゆるやかになっており、E2類とE3類の中間形態だが、治部ノ上A1号土壙で浅鉢C2b類の18と共に伴しておらず、後葉中段階として押さえられる重要な資料となっている。ところでE3類に器形的に類似する深鉢は、小型精製品などで後期後半から散見する。それらは外面に斜格子状沈線文を入れる事もあり、小破片であると見間違う事もある。晩期後葉新段階のこのE3類は、外面の調整が粗く、横位条痕を残すような難な仕上げ状況である事も、区別する一つの目安になろう。次に、後葉新段階に置いた120は、鎌塚遺跡3号土壙出土品で、共伴遺物からこの時期に置けるものである。口頭部が直線的に立ち上がり、くびれ部が形骸化して外面を凸帯的につまみ出している。このくびれ部が、弥生早期の刻目甕の肩部を意識した作りへと繋がってゆくと思われる。もちろん、後述する粗製深鉢C1・C2類の器形と相俟つことである。

粗製深鉢 A類 体部上半が内湾気味に立ち上がる類。クリナラ遺跡・堀田遺跡では粗製深鉢の半数近くになる量となり、柿原I縄文遺跡では2割程度に減る。また二丈町広田遺跡(註11)では後半で半数以上となりそうだ。これらの事から、粗製で簡便な消耗品ではあっただろうが、この内湾気味のA類は、晩期前葉～中葉古段階ぐらいに多量に用いられていたものが、時期が降るに従って割合が少なくなってくることがわかる。

粗製深鉢 B類 やや外傾気味に開く口縁のものをB2類、屈曲して強く開く口縁形態のものをB1類とした。クリナラ遺跡ではB1類は極めて少く、堀田遺跡では皆無。柿原I縄文遺跡でもそれらしいものは見受けられず、晩期後葉では殆ど採用されることのなかった形態と思われる。これに対して、B2類は、全体の器形が定かでないのが難点だが、口縁片だけみると、量的には上記のどの遺跡でも多く、普遍的な器形であった事が知られる。

粗製深鉢 C類 口頭部が内傾するものを指すが、クリナラ遺跡では極少数である。高原遺跡出土例と、柿原I縄文遺跡出土例(122)をも併考してみると、中葉中～新段階には発生し、後葉古、後葉新段階へと継続され、口唇上面に刻目を施すものも出てくる。口縁外面を三角凸帯状につまみ出したC2類も、C1類と同時期にみられる。また、本文中で精製深鉢F類とした、直立した口縁外面に低い凸帯状のつまみ出しを持つ類(111)も同系統であろう。これらは、晩期後葉新段階に至って、口唇上・外面の刻目や、粘土紐貼付け上の指頭押圧や貝殻腹縫による刻目状の特異な刻目文土器群として展開する。ただしこのC類の器形のもののみではなく、刷張り内湾類(柿原刻目土器3a類)124・125や、外反する口縁類(柿原刻目土器1a類)128など、初現の様相にふさわしく、個体的なバラエティーに富んでいる。

刻目文土器 刻目を口縁や凸帯上に施す土器は縄文時代を通じて幾度も現れるが、当然。弥生早・前期に極めて規格的に生産・使用される刻目・刻目凸帯土器群は極めて特異である。その発生は諸説あるが、やはり器種の構成がその文化を規定してゆくに従って、器形が定型化してゆく中で刻目の導入があったと考えるべきである。そういう意味で、晚期後葉新段階と考える柿原 I 縄文遺跡出土の刻目文土器群は、その時期は器種の構成もまだ縄文晩期そのものであり、器形的にも粗製深鉢 C1 類は既に存在しているが、量的にも少く、他の刻目を有する土器は弥生早期に定型化する幾種かの器形を示しておらず、直接に祖型となり得るものではない。やはり、次の晩期末葉段階で、煮沸容器の粗製深鉢の中から、直口するもの、内傾して肩が張るもののが規格化され、刻目が結びつくものと考えられる。

3 縄文晩期石器

石器組成 クリナラ遺跡出土石器総数 (Tab.3) は、実測に供し得たもの522点で、うちナイフ形石器2点と、打製石鎌のうち縄文早期を中心とするもの数点を除いて、他は殆ど縄文晩期のものと言える。石器組成を見てみると、打欠き石鎌が19%、磨石が17%、打製石鎌が16%、偏平打製石斧が15%を占め、これだけで67%となる。ここで注目されるのは、打欠き石鎌99点の多さで、偏平打製石斧のこの時期での多さも意外である。また、数は少ないが晩期に特有の異形石器、十字形石器、糸巻形石器、両端抉入磨製石器などが揃っており、当遺跡の晩期集落

Tab. 3 クリナラ遺跡出土石器製品点数一覧

出土地点 器種	1層	2層	住居跡						土壤 集石 遺構			その他の 計(%)
			3	4	5	6	7	8	9	2	3	
ナイフ形石器	1	1										2点(0.4)
異形石器	2											2(0.4)
石鎌	35	44	1	2			1		1	2		86(16)
石匙・スクレイバー	21	20		1	1							43(8.2)
使用剝片	28	29	2	1	1							61(11.7)
十字形石器	1	1										2(0.4)
糸巻形石器	7	10			1							18(3.4)
打製石斧	21	53		1					1			76(14.6)
両端抉入磨製石器		1										1(0.2)
磨製石斧	8	9		1						1		19(3.6)
打欠き石鎌	48	48							1		東部 1	99(19)
砥石(条溝)	2(1)											2(0.4)
敲石	1											1(0.2)
磨臼	1	4										5(1)
凹石	7	8									出土地不明 1	16(3.1)
磨石	26	63										89(17)
	209	292	3	1	5	3	1		3	3	2	522点(100%)

Tab. 4 クリナラ遺跡出土剣片石器重量一覧

(単位: g)

石材	腰岳系黒曜石		安山岩		チャート系		姫島産黒曜石		計(点数)
	剣片	製品(点数)	剣片	製品(点数)	剣片	製品(点数)	剣片	製品(点数)	
出土地点									
1層	5,861	166.2(54)	1,823	455.85(26)			12	16.7(5)	8,334.75(85)
2層	4,321	166.9(56)	2,227	635.7(30)	45	0.6(1)	52	3.8(6)	7,455(93)
第3号住居跡	62	9.3(2)	25	0					96.2(2)
第4 "	37	5.2(1)	21	0					63.2(1)
第5 "	40	0.9(1)	3	13.5(2)					57.4(3)
第6 "	46	3.8(1)	10	10.3(1)					69.9(2)
第7 "	88	0	38	0					126
第8 "	23	0	5	0.3(1)		2.1(1)			30.4(2)
第9 "	70	0	0	0					70
第2号土壙	10	0	0	0					10
第3 "	20	0	20	0.9(1)					40.9(1)
鰐石造構	0	0	0	0.6(1)				0.7(1)	1.3(2)
ラベルなし	10	0							10
計	10,588	355(115)	4,172	1,117.15(62)	45	2.7(2)	64	21.2(12)	
		10,943 g(115)		5,289.15 g(62)		47.7 g(2)		85.2 g(12)	
	65.9%(60.2%)	32.3%(32.5%)			0.3%(1%)		0.5%(0.3%)		

としての面目を保っている。さらに、石匙・スクレイバー・使用剣片類が合計して全体の2割に及ぶのも晩期の特徴と言えようか。最後に、つまみ形石器と石錐の類が全く見られなかったのも意外であったが、その理由については不明。

出土位置 住居跡等の各造構出土の石器製品については、造構毎のバラつきはあまり無く、とり立てて集中するという事は無い。全体に少なめであると言えよう。各包含層出土点数で見てみると、1・2層とも大旨各器種とも同量であるが、偏平打製石斧が2層の方が1層出土数の2倍以上になっている。磨石も同様に2層の方が2倍以上の出土数となる。その理由は良くわからないが、もし2層の方が時期的に古い段階を示すものなら、土器全体の時期から見て、晩期中葉新段階から後葉古段階にかけて、磨石と偏平打製石斧が半数以下に減少するという現象を確認できる訳である。或は、1層下面の造構が烟状造構、2層下面が堅穴住居を主とする生活集落造構という差が、これら2種石器の多寡を物語っているのかもしれない。

使用石材 全体的に、ほぼ見事に器種毎に石材が使い分けられていると言える。磨石・凹石・打欠き石錐は凝灰岩系の河原石で占められ、旧筑後川河原から運び込んだものであろう。磨製石斧は蛇文岩が多く、偏平打製石斧は緑色片岩が圧倒的に多く、結晶片岩、凝灰岩なども用いる。磨製石斧には硬質の産地が限られたものを用い、粗製の偏平石斧には近隣の容易に入手できる片岩系の石材を採用している。十字形石器・糸巻形石器には、ひたすら加工し易い、軟質の黒色片岩・緑色片岩・粘板岩等の身近に在る石材を用いる。次に、打製石錐・スクレイバー等の剣片石器については、Tab.4のよう、腰岳系黒曜石が剣片を含めた重量から7割弱、安山岩が3割強で大半を占め、以下、姫島産黒曜石、チャート系石材が各々1%未満となる。

全体として腰岳系黒曜石が約11kg、安山岩が約5.8kgに及ぶ。各遺構・層位毎のこれら剝片石器石材の際立った特徴は見受けられないが、強いて言うと、姫島産黒曜石とチャート系石材は2層が主体となっている事ぐらいである。次に、石材別に製品への歩止り率（製品の重さ÷製品と剝片を足した総重量）を見てみると、腰岳系黒曜石が9.2%，安山岩が21%，チャート系石材が5.7%，姫島産黒曜石が24.9%となる。安山岩は大型の剝片が削・搔器的に用いられる事が多い為、歩止りは良くなっている。姫島産黒曜石はFig. 76-3 の牙状尖頭器や、石鎧でも大きめの特異形状のものに用いられる等、特別に意識して選別使用された節があり、製品率が良くなっている理由もそこにあると思われる。それにしても、腰岳系黒曜石の歩止りの悪さは目立つ。この中には大きな原石は見られず、石核も実測する意欲を湧かせるものは少なく、製品にしても縁面の皮部分を残すものが多く、歩止りの悪さは、石器製作技術の低さとともに、持ち込まれた素材（原石）の小ささ・不適形状等の原因によるものと考えられる。

次に各器種毎の石器について簡単に検討を加えてみたい。なお、事実情報や詳細な観察結果等については、本文中に既述しているので、参照されたい。

異形石器・管玉 弧状の黒曜石製異形石器は、やや厚手の不定形剝片から作り出しているという点で、日常的な実用品であるとは思えない。後期末～晚期前半に、九州では精神活動を示す遺物群が認められるが、その中に、黒曜石を丁寧に加工して、五角形的なものやこの細い曲線的なものが作られている。前者は岩偶として考えられる事もあるが、後者については用途は未だ明確ではない。クリナラ遺跡出土品類似のものとしては、鹿児島県加世田市上加世田遺跡（註12）で3点出土しているが用途については明らかにされていない。端部が幅広くなっているため、紐で縛りぶら下げたものではなかろうか。呪術者の首飾りの真中に、両端を縛った半月状装飾品的に用いられたものであろうか。Fig. 76-3 の姫島産黒曜石製牙状尖頭器は類例が無く、やはり牙を模した特殊用途と考えられる。槍状に柄に付けるが、特定者の持ち物としてシンボリックな性格が想像できる。緑色の、硬玉や緑泥岩等で作られた玉類は、繩文晚期初～前半を中心とする時期の特徴ある遺物である。使用された石材が翡翠であるかどうかは別としても、緑色であるという1点に、その存在意義が示されていると考える。晚期前半代の大遺跡では例外無く出土するが、その各遺跡毎の量は、多いと言っても一人分の首飾りの量を超える事は無い。緑色の玉という共通した精神的規制の拡張性を示す事で、九州晩期文化の規制範囲を押さえる事もできよう。当クリナラ遺跡出土品は、大きめだが筋縫形を呈し、他遺跡例と共に通する。層位的に確定できないが、晚期中葉後半段階のものであろう。

十字形石器・糸巻形石器等 十字形石器は、本遺跡では明らかに「X字形石器」と呼べるもののが出土しており、一対の抉り部が意識的に丁寧に加工されたり、磨耗したりしている。この視点で見てゆくと、従来偏平打製石斧の中の分類と分類されていた中に、小型で薄く、軟質

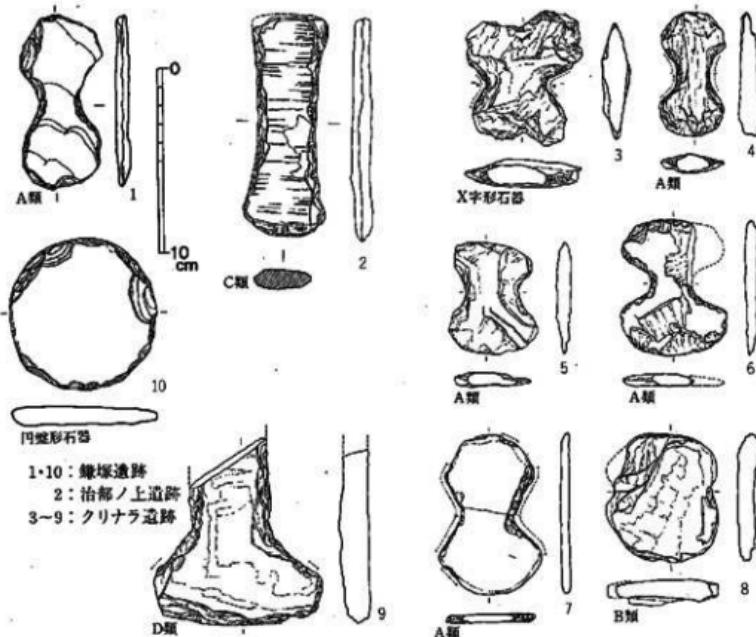


Fig.139 糸巻形石器等分類図（1/3）

石材で両抉り部が極めて深く丁寧に加工されたものがあり、糸巻形石器と呼んで耕具とは区別した方がよいことが判かる。今回、良好な資料がまとまって出土したので、類例を示し、簡単に形態分類をしておきたい。Fig.139は、クリナラ遺跡と近隣の朝倉町内の遺跡出土品のみを例示した。A類（1・4～7）は、端正な十字形石器から一対のみの抉りが重視される3のようなX字形石器の系統を引いた、両側が大きく抉れるタイプである。長さ9.2～6cmの小型分銅形状品で、全体の整形は丁寧で端正である。B類（8）は両抉りが浅く、簡略化されたもので、A類とB類の中間的なものもかなり見られる。ただ、このB類は、一般的な両端打欠き石錐とどう区別するかは難しい。クリナラ遺跡では幸いに8のように雑ではあるが周辺を加工した石錐は例が無いので、この類と判断できた。C類（2）は細長類で、両側がゆるやかに丁寧に抉り込まれている。一見、きちんとした短冊形偏平打製石斧に見えるが、軟質石材の上に、石の目が横方向であり、耕具等実用品には到底使用に耐えないものである。これは、遺跡内の状況から判断して、晩期後葉中段階～新段階のもので図中では新しい部類に入る。D類（9）

は大型品で、下端左右の張り出しあるA類と類似するが、抉り部が長くなりそうな類。勿論、耕具としての刃部は無い。類例が島原半島佐渡跡（註13）で出土している。以上、糸巻形石器を概観したが、この他にも横円形偏平石器、長方形偏平石器と本文中で称して指摘した模造品、祭祀の要素の濃い石製品類が多くあり、糸巻形石器もこれらの活動の一環として用いられたものと想定できる。なお、クリナラ遺跡では出土しなかったが、10のような円盤形石器も晚期の不明石製品群に確かに認められ、上記石器群とセットをなして祭祀を構成していたのではないかと思われる。

両端抉入磨製石器 両端に浅い抉りを持つ長方形磨製石製品は縄文後～晚期の特徴ある遺物として、渡辺和子、小池史哲氏により從来から指摘されてきた。ここでは類例を示し、簡単な分類をしておきたい。まず、全体の形状を見てみると、細長い長方形で、長さは10cm前後、幅は2.3～3cmだが2.6cmに集中する。Fig.140-11の礫石原遺跡（註14）例だけは現物を実見しておらず大きさ不詳。厚さ4～9mmの板状に磨き上げている。短辺両端の抉りの浅深と、その部位の強調の仕方で3類に分かれる。A類（10）は、端部が二股状に外方へとび出し、端部全体を意識して厚く削り出すもの。長方形の本体部分は最も幅が狭い。福岡市四箇遺跡出土（註15）で、縄文後期後葉の時期。B類（4・5・9・11）は、端部が二股状に外方へとび出すが本体部分との明瞭な段等の境を示さないもの。5や9のように抉り部が深く、石偶の足的に見えるものもある。5は権現塚北遺跡（註16）出土でV字の深い抉りがみられ、抉り奥部と片側縁くびれの位置に浅い擦り切りがみられる。紐掛けを示すものか。4は千里シビナ遺跡（註17）出土で、3と現状では接合はしないが、この2点が接合した状態が本来の形状かと報告されている。そうだとすると、3の下端は抉りが無い為、片端のみに抉りを持つ類となり、1や2と性格が全く異なる石器である可能性が出てくる。或は、後期段階の古いタイプが片方のみの抉り加工となるのであろうか。C類は浅い抉りのもので、C1類（6～8）は端部の左右両角がA・B類のように外方へ開かず、長方形の本体部がそのままの幅で端部まで続き、わりと明瞭な抉りを持つもの。6・7は広田遺跡大溝最下層、8は四箇遺跡出土例であることから、後期末の類として押さえられよう。C2類（1・2）は両端がC1類よりもぐっと浅く抉られていくのみの類。1のクリナラ例では、両端中央に浅い削り込みを作るのみ。クリナラの層位からみて、晚期後葉古～中段階（黒川式古期）を下ることはない。以上の各出土例からみて、この石製品は、縄文後期西平・三万田式～晚期後葉まで用いられ、範囲は筑前・筑後・島原半島となる。形態変遷としてはA・B類→C1類→C2類となろう。次に、この石製品の具体的な使用法についてみると、まず、1の裏面が平らで表面が丸くふくらむ片丸造状になることや、5の側面に浅い切れ目がみられる事等から、他の本体となる板・道具・柄などに装着せられた事が考えられる。また、1や7でみられるように片方の幅が広くて、上下の区別は意識されていたと思われる。次に石材は硬質砂岩・粘板岩等のきめの細かいものを選択しており、それを全面

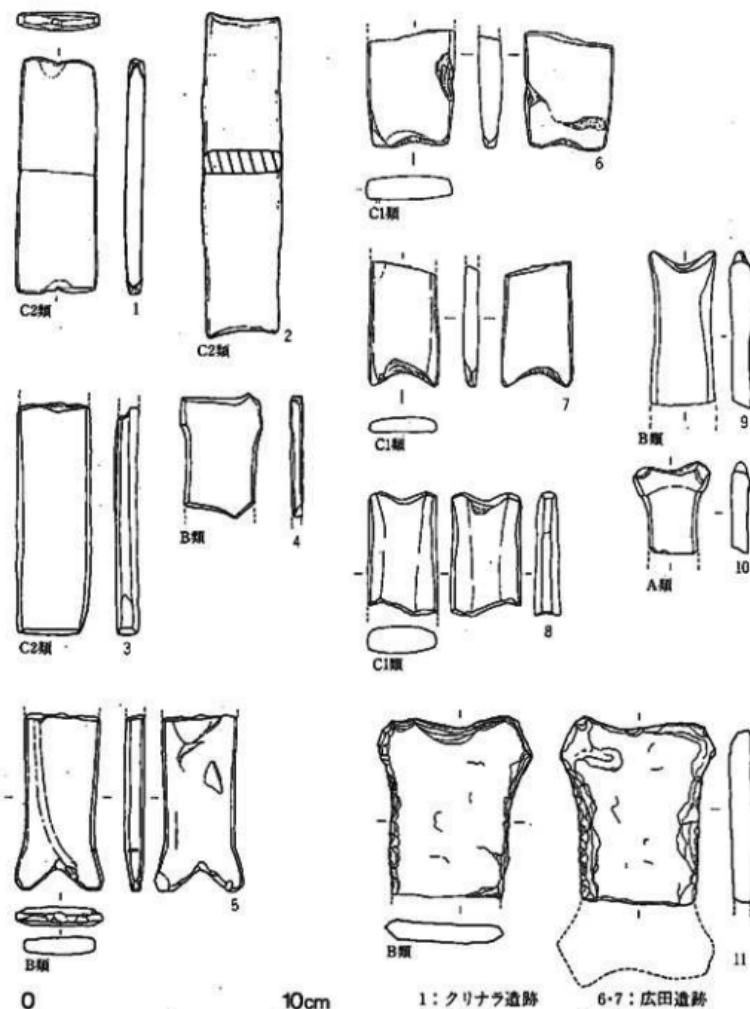


Fig.140 両端抉入磨製石器の類例 (1/2)

丁寧に研磨している事に最大の性格を物語る特徴が在ると考えられる。かと言つて、単なる美しい飾りとしてだけではなく、端部の抉り部を使用する處に意味があったと思われる。以上の事から、この両端抉入磨製石器の用途・性格としては、臨時に模造品的に作られたものではなく常備されたものであるが、権威を示すような石材選択でもなく、一集落に数個あれば充分なもので、何かに装着されており、端部の抉り部を用いた行為が行われたものとまとめることができる。これらから想像できる事はやはり、祭事や呪事ということになろうか。ここで、発想をがらりと変えて、当該期の他の特徴ある遺物群を見直してみよう。十字形石器は素直に実用品として考えれば、糸巻きであろうし、同時期に出現した大型土製紡錘車は、黒川式期にやや小型化し、弥生早期に定型化したことはかつて論じたことがある。(註18) また本書で記述した糸巻形石器も、糸巻きそのものでもよい。粗織圧痕土器は晩期後～末葉に特徴的に出現し、紡織技術の前駆が存在していた事を示している。縞み布の段階であり、未だ機を用いた織り布は作られていないというのが定説であるが、もしこの時期に弥生原始機に先行するような、かろうじて経糸を開く装置を有する技術があったとしたならば、両端抉入磨製石器は縫糸を通すための縫越具と考えられないだろうか。形状的に弥生時代登呂遺跡(註19)出土木製品(長さ12cm)にも似ている。ただ、縄文時代には原始機は絶対無いという事になれば、縞み布の縫糸用糸巻具、或は縫縫を織る時のように経糸を上からぶら下げ、この石器で経糸間を波形に潜らせて通すような技術が在ったのではないかとも想像される。以上、両端抉入磨製石器について、祭・呪具と織具との2案を示したが、後者の可能性が強いと考えている。もちろん、紡織具でも骨製、木製品が主体であったと思われるが、縄文後期後葉～晩期の紡織関連の石器・土製品の出現と進展は、重大な再認識すべき文化要因と考える。黒色磨研土器文化自体が、衣食住の各文化要素を急速に変化させてゆく活力を内包した文化であった事を示す一例になるのかもしれない。

打製石器 全部で86点出土した。石材別に見ると、腰岳系黒曜石45点(52%)、淀姫産より濃い黒曜石1点(1%)、姫島産黒曜石10点(12%)、安山岩28点(33%)、チャート2点(2%)となる。91点と略同数出土した柿原I縄文遺跡例では、腰岳系黒曜石が86%、安山岩10%、姫島産黒曜石1点のみ、チャート1点等となり、両遺跡間ではかなりの差異が認められる。姫島産黒曜石については、クリナラ遺跡の方が確かに、日田盆地から出たばかりの所に位置するので、産地からの遠近度で理解はできる。柿原I縄文遺跡の方が、晩期土器では後葉新段階を中心とするものであるので、時期が新しくなる為に安山岩より黒曜石重視傾向が出てくるものなのか。今後の比較資料増加に待つしかない。次に欠損状況を見てみよう。先端を欠損するものが30点(35%)、片脚を欠損するものが27点(31%)、両脚とも欠損するもの11点(13%)、完形品33点(38%)となる。先端欠損率が割と高い事が注目される。また、形状で特別目につくのは、五角形鐵で25点(29%)に及ぶ。柿原I縄文遺跡では4点のみで、明らかに差異が認め

られる。また、晩期前葉を中心とする二丈町広田遺跡では123点のうち3点のみがこの種で、極めて少ない。まだデータ的には少いが、五角形縁のピークが晩期中葉新～後葉古にあることを示す可能性を指摘しておこう。

石匙・スクレイパー 安山岩の横長剝片を素材とするものを最多とするが、縦型石匙の精製品や、黒曜石製削器の中には縦長剝片、石刃状剝片を用いるものもかなりある。石匙類のうち、不定形剝片の打面直下両側に抉りを入れるだけの簡易なものがいくつか見られる。全体の器形を整えるという規制は薄れ、抉りの意識だけがからうじて残った状況と思われる。晩期後半には共通の傾向のようである。次に、使用剝片とした類を見ると、素材が意外としっかりしたものが多いという事がわかる。具体的には、一部に礫面を残したり、激しく打面転移をみせたりするものもあるが、Fig.107～109のように両側辺を用いる目的のものは、縦長の石刃状剝片素材を作り出しており、打面を一定にするものも多い。打面は礫面の場合が多いが、尾端にも礫面がみられるものが多い事から、原石自体が挙大或はそれ以下の小さいものであった事がわかる。打点剝の頭部を折断しているものも機らかみられるが、主要剝離面側からの加撃による事が多い。なお、両側縁からノッチを入れた折り取りによる擾形石器は見られなかった。使用剝片のうち、不定形剝片は雑な皮剥直後の素材を用いている事が多い。また、56のような剥ぎ取り面再生調整剝片もみられる事からも、繩文晩期の雑な剝離技術というイメージは払拭されるべきであろう。皮剥ぎ時の打面転換が表面に残る場合に、技術の粗雑さを過大評価しすぎているのである。

磨製石斧 幅2.3～1.5cmの超小型・細身の石ノミ状品3点が目につく。刃部が斜めになり、側面観でも刃が片寄っており、細かい細工のノミ的用途が考えられる。磨製石斧全体は小片も含めて18点しか出土しておらず、偏平打製石斧76点に比べれば少い。器種としては、小型頭、やや薄手の撥形類、平面観・側面観とともに反りがみられる特異類、乳棒状類など各種が揃っており、各作業段階での使い分けが行われていたのだろう。使用石材は、蛇文岩が最も多く、結晶片岩系も多い。偏平打製石斧の中に、蛇文岩の磨製石斧未成品の転用品が6点みられる事から、本遺跡内で石斧製作が行われた事がわかる。刃部および刃部寄りで大きく欠損しているものが多く、強い打撃を伴う使用が考えられる。クリナラ遺跡出土磨製石斧と曲り田遺跡(註20)出土のものを比べてみると、曲り田では頁岩質石材が6割程を占め、玄武岩・玢岩がその他となり、クリナラの様相とまったく異なる。器種は太型の蛤刃のものが6割以上を占め、小型で偏平な撥形類と短冊形で中厚のものがその他となり、クリナラと様相が異なる事がわかる。クリナラでは重量のある大型頭が見られず、弥生早期との時期的相違が明らかである。次に晩期前葉の広田遺跡出土品の方は、よりクリナラ例に近い内容となるが、厚みのあるものや寸詰まり状になる短かめの類がみられ、刃部のみ研磨してそれ以外は敲打面のまま残すものが半数みられる。一方、クリナラでみられる反りの強い偏刃頭はみられない。石材は蛇文岩・玄武岩が

多く、両遺跡とも似ている。器種の相違は、時期や地域性の違いだけではなく、海岸沿いと山中という立地の相違が反映されているものと考えられる。以上の事から、クリナラ遺跡出土の磨製石斧は、基本的に縄文文化の流れの中にどっぷり入ったままであるが、結晶片岩や緑色片岩を用いるなど地域性を持った部分もあり、敲打を多く残すものが無く、側面を丁寧に面取りするなど、新しい様相も幾らか入ってきていると言える。

偏平打製石斧 全部で76点出土しているが、この量は予想をはるかに上まわるものであった。晩期後葉新段階の柿原I遺跡では1点のみ、後葉古～中設階の堀田遺跡（前掲註2）では6点、晩期前葉を中心とする広田遺跡では166点出土している。これらからみて、福岡県域では、晩期後葉になって急激に減少傾向が始まり、後葉新段階ではほぼ無くなるものと考えられる。尚、弥生早期の曲り田遺跡では勿論全く見られない。甘木市高原遺跡（前掲註3）では晩期中葉の土器群に伴うと思われるもの5点が出土しており、少い。クリナラ例と異り、遺跡の立地と性格の違いかと思われる。やはり、全体的には晩期前葉までがピークで、それ以降減少傾向が進むと考えた方がよさそうである。ちなみに鹿児島県鹿屋市榎崎B遺跡（註21）では、晩期中葉新～後葉新段階の土器群に伴って偏平打製石斧91点が出土している。後葉古段階が中心であり、クリナラと似た状況を示す。次に、クリナラ出土品を細検討してみよう。石材は緑色片岩が50%，結晶片岩系が17%，黒色片岩14%，蛇紋岩11%，凝灰岩4%，シルト岩・粘板岩系3%，玄武岩1%となり、圧倒的に地元産の片岩系石材が採用されている。形態的には幅広く大きいものが目立ち、60のような特大のものもみられる。これらは、山中の谷斜面の畠開墾に平地とは異なる条件の作業が必要で、鍛的に使用されたものと考えられる。基部寄りに抉り又は明瞭なくびれを持つものは少いが、大型のものは刃部側が撥形に開くため、柄等に緊縛し易くなっている。また、クリナラ例には刃部側の研磨・磨耗が明瞭なものが19点（25%）もあり、注目される。これら磨面は片面のみに著しく、反対面は刃部縁のみという例が殆どである。これは、垂直に土中に打ち込む作業が主ではなく、磨面側を下にして斜めに打ち込まれた作業による結果と考えられ、畠の起耕作業がきちんとなされていたことを示している。クリナラ遺跡の畠状遺構の歓作りを裏付けるものであろう。

打欠き石錐 本遺跡の特徴の一つである打欠き石錐の多さは、海辺・河沿いでもない立地を考えると異常である。99点出土したが、すべて河原石小転石で、長径両端に簡単な打欠き、敲打を施しただけのものが大半である。Fig.141に見る如く、大・中・小類に分けられる。重さでみると、20～90gの小類（91点）、135～185gの中類（7点）、270gの大類（1点）となり、小類が圧倒的数量となる。小類は更に40gと65gに2つのピークを持つが、60gぐらいが平均値となる。磨石転用品もあるが、各類との相關性は無いようだ。大きさは7～4cmに集中しており、厚さは1～2cmと小さい円錐である。これらの小類は打欠きが浅い不完全なものが多く、実際に紐を掛けた場合、長軸方向の打欠きでもある為、強い力の加わる荒い作業には適さない

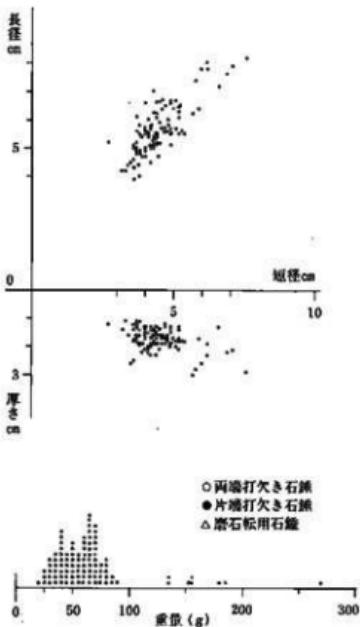


Fig.141 打欠き石錐の大きさ・重さグラフ

と思われる。結局、これらの石錐の使用法を思い廻らす時、旧筑後川での漁労用網に用いたとしたら、小類はあまりにも不適であり、この山中の集落には相応しくない遺物といえよう。これら小類石錐が一括で用いられたとしたら、編み布の経糸の錐、つまり、延縫みの槌の子にあたるものに使用されたのではないかろうか。槌の子の場合、糸を巻くため中央がくびれていなければならないが、編み布の長さを手の届く高さから地面まで以内とすると、糸を巻いておく必要はないので、丸っこい河原石でもよいことになる。わざわざずっと下の河原から大きさの揃ったものを多量に拾い集め、運び上げてきた理由が、新技術の編み布作りに用いられたものだとすると、納得がゆくような気がする。既述した糸巻き形石器・X字形石器・両端抉入磨製石器などに、紡織関連の推定を行ったが、この打欠き石錐類もこの中に入れておこう。確認はないが、現状での仮説として提示しておきたい。

凹石・磨石・磨白 凹石は16点出土しており、中でも5~7cmの大中小河原石のもの8点が特異である。この小型品は125~200gと軽量であり、凹部も小さく、凹石による作業も対象物によって幾種類かあったものと思われる。凹石全体としては、Fig.142に見る如く、磨石の大~小類のばらつきの中で、小類と中類にほぼ収まっており、すべて片手で持て作業できる重さのものが選択されている。両面ともに凹部を持つ場合、表裏に凹部の大きさ、深さ、凹部の長軸方向が異り、ひとつの作業工程の中で、隨時反対面を用いて行う場合があった事を示すものであろう。次に磨石は、打欠き石錐や凹石に併用されているものを除いて89点出土した。両面とも磨面となっているものが多いが、片面のみ使用のものは、210g以下の小類と1kg前後の大類に多く、中類には少い傾向にある。磨石全体としては、大きさ・重さとともにばらつきが大きいが、大旨3類に分けられる。長径4.5~7cm、短径4~7cm、重さ50~150gとなる小類が最も多く、集中して規格性をみせる。中類はややばらつき、長径9.5~14cm、短径7.5~10.5cm、重さ270~1,000gとなる。この中類には短径の細いもの(5~8cm)、つまり細長い類もみられるが、これは原材の形状そのものであり、特別な意味は無いが、横長に用いる作業が中

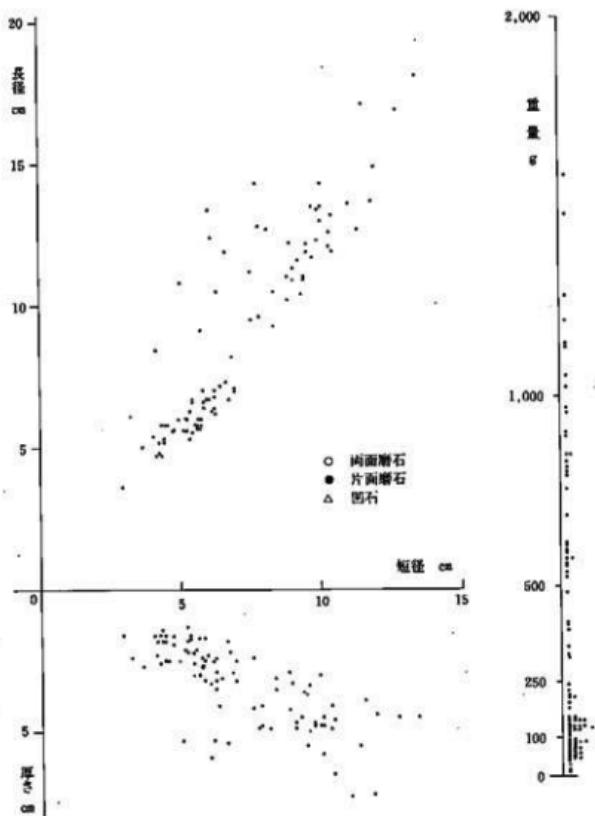


Fig.142 凹石・磨石の大きさ・重さグラフ

型に求められた事を示すのかもしれない。大類は長径18cm、短径18.4cmまでのもので、重さは1～2kgとなる類で、まとまりは無い。ただし、破損している大ぶりの磨石の中には2kgを超えると思われるものもある。大類の中には極めて良く使用されて、断面が凸レンズ状になるものもあり、重量を必要とする作業には決められた磨石が専用品として用いられていたと考えられる。大類のものは当然片手では持ちにくく、両手で作業するものであったろう。以上の凹石・磨石もすべて河原石の転石で、河川敷から運び込まれたものである。次に、磨臼は、大型の中央に大きな凹部を持つ凝灰岩品の他は、大きい花崗岩製の平たい石皿状のもの、30cm大の

中央がややくぼむ中型の類等が出土している。これらは、1か所に据え付けて當時作業が行われたものと、時々移動して作業場所で用いたものとに分けられる。前者は集落に1個、後者は各戸毎に所有していたような出土状況である。また、これらの石皿・磨臼の数に比べると、異常に磨石の量が多い事がわかる。やはり、数の多い磨石小類は、大型の石皿や磨臼とともに用いたものではなく、身近にあった自然石や倒木や木製磨盤等の上で集落構成員総出で使用せざるを得なかった、短期間集中の作業を示すものではなかろうか。

4 クリナラ縄文集落

ここでは、前節までに報告・検討してきたクリナラ遺跡の諸相を、縄文晩期後葉の集落としての視点から、想像を混じえ乍らまとめてみたい。

特異な立地 平地から小河川に沿って測り、更に枝分かれした小さな谷に入り込み、曲がりくねって登って行くと、尾根まで続く谷筋がまっすぐ続いており、その中途がクリナラ集落である。まさに山中の迫といった感じの位置である。まわりの尾根はやせて入りこんでおり、焼畑でもすると絶好の場所かもしれない。住居のあたりは北風も当たらぬ場所で意外と住み易かったか。狩猟にはいい基地になったろう。尾根づたいに山塊へと取り付くことができる。当地方の縄文晩期の遺跡としては、筑後川による低位段丘縁辺直上のわりとまとまった遺跡群、段丘中央の散発的遺物出土例、山腹に貼り付くように小崩状地、谷入口付近につくられる大規模遺跡群、それとクリナラのような高位段丘や山中に作られる集落などがみられる。最後の例は從来明瞭な集落を形成する事もなく、どの地点でも小キャンプ地、季節的住居等と理解される事が多かった。しかし、このクリナラ遺跡では遺物量も多く、同時に複数の住居が営まれた状況があり、この立地としては異質である。それは、狩猟キャンプとしても、基地的な性格を物語るものであり、土器が3型以上連続するという事は、集落の連続性、季節毎であるとしても定期的な決められた移動場所であったことが考えられる。それにしても大きな石臼があつたりして、かなり定住的生活臭が強い。この集落の弱点といえば、谷筋に住居を作ったために、雨期には渓流が走り下り、安住はできなかっただろう事である。簡単に竪穴は土砂に埋まってしまうだろう。やはり、異常な占地と言わざるを得ない。少くとも雨期を避けた、定期的目的集落という事になろう。

住居の構造と配置 検出された7軒の縄文竪穴住居跡は、大小あるがすべて方形住居で谷筋に営まれている。住居内に焼土がみられるものが4軒みられるが、炉と確認できない。屋外に炉と覺しきものは見られない。住居の柱は、住居壁に沿って内側に間隔狭く立てられたもので、壁構造で上屋を支えていたものと考えられる。この作りは、弥生早期の曲り田遺跡住居の中にその系譜が認められるものがあり、当地方の伝統的なものと考えられる。朝倉～杷木町で発掘

された晩期住居の殆どもこのタイプで、明確な主柱穴構造のものはみられない。クリナラ住居群は、切り合いと住居方向で少なくとも3期に分けられ、同時に2軒程度存在した可能性がある。ただし、出土遺物の多さや周辺の小ピット群の状況を見ると、後世の開墾や谷流水による削平等が考慮され、本来、この倍程度の住居は在ったろうと思われる。住居群全体をみると、第3号住居と第7号住居の南側が空いており、地形的に見て広場として保たれていた可能性がある。また、I～III区には主要遺構を検出できなかったが、遺物はIV～VI区には劣るもの、かなりの量が全体的に1・2層ともに出土しているので、集落的様相が在ったと推定できる。

生産活動 ここに集落を作った最大の理由は、山の中だという事であろう。まず、狩猟基地として。同時に、残された家族にとっては山の幸を享受する採集活動の拠点として。狩猟については、打製石鎌の多量の出土もあり、獲物を処理する為の石匙や剥片利器が多くみられる。堅果類を採集・加工する為には、多量の磨石や凹石・磨臼が準備されていた。この木実等の採集活動は意外と大きなウェイトがかけられていたのかもしれない。むしろこの立地を利用して、栗やドングリ類の採集・加工が主目的として秋の期間に集中的に行われた可能性が強い。一方、これらの主生産活動の間に、織布生産も行われた。勿論、大規模なものではなく、生活必需品として欠かせない家事の一環として。また、日常的に石器生産も行われた。狩りの前や耕作に際しては、事前に計画的に集中的に石器加工が行われたであろう。その為には、石器の石材を求めて周辺の山河を歩き廻ったり、黒曜石・安山岩を手に入れる為に遠くまで出向くものがあったろう。以上の活動の他に、畑の經營があった事は特筆される。正確に言うと、畑の面と同じ住居は発見されていない。つまり、2a層下面の住居群が谷への土砂流入で埋まった後に畑がすぐ作られたわけである。この両面で遺物の時期差・量の差が殆ど認められないので、時を経ずして畑が営まれたものと考えられる。雨期に埋まり易い谷筋を見て、住居を作るのをやめてその部分には畑を作ったという事であろう。土器の出土も多いので、すぐ近辺に住居は作ったと思われる。畑に何を作ったかが問題であるが、花粉分析で結果が出なかったので残念だが、畠を作っている事から、根菜類が考えられる。偏平打製石斧の耕具としての用途説を採用すれば、当該期としては多すぎる出土本数が、畑經營活動の状況を物語ってくれている。

以上のようなクリナラ縄文集落のイメージの他に、埋甕や土壤墓の可能性のある集石遺構など、精神生活関連遺構も重要な発見であった。晩期前葉以来衰退してくる土偶や祭祀的石器群の明確なものは、クリナラでは時期相応に出土しなかったが、精神文化がすたれたという訳ではなく、変容してきただけであろう。例えば、石斧のミニチュアと考えられる小物や、軟質の石材を用いた糸巻形石器類の一部は、祭祀目的・対象が変わってきた事を示す精神文化の遺物と考えられるのである。また、「米」は既に在った。(Fig.57-47「米圧痕」)

クリナラ縄文集落は、本格的な農耕社会を控えて、今だ縄文的諸様相の強い社会の中にあつ

たが、決して世紀末的暗さの中でひっそり息付いていた訳ではなく、狩獵や採集、栽培活動にまでも積極的に取り組んでいった、生き生きとした活力に満ちた集団であった。まさに、栗や櫻に囲まれた、豊かな明るい樹林に生きたクリナラ縄文人であった。

- 註1) 中間「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 37」福岡県教育委員会 1995
- 2) 中間「久原遺跡群Ⅲ」久山町文化財調査報告 第3集 久山町教育委員会 1995
- 3) 伊崎俊秋「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 31」福岡県教育委員会 1994
- 4) 井上裕弘・木下修・水ノ江和同「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 22」福岡県教育委員会 1992
- 5) 中間「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 32」福岡県教育委員会 1994
- 6) 中間「久原遺跡群Ⅱ」久山町文化財調査報告 第2集 久山町教育委員会 1994
- 7) 宇野慎敏・山口信義「長行遺跡」(砦北九州市教育文化事業団 1988)
- 8) 河口貞徳「Kurokawa Site, Kagoshima Pref. (1)~(4)」「西日本における晩期縄文土器集成図」1962
河口貞徳「鹿児島県黒川洞穴」「日本の洞穴遺跡」1967
- 9) 井上裕弘・木村幾多郎「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 30」福岡県教育委員会 1994
- 10) 別府大学考古学研究室「古闕遺跡」「古保山・古闕・天城」熊本県教育委員会 1980
- 11) 小池史哲「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」福岡県教育委員会 1980
- 12) 河口貞徳他「上加世田遺跡」「鹿児島考古 第7号」鹿児島県考古学会 1978
青崎和憲・繁昌正幸「上加世田遺跡-1」加世田市教育委員会 1985
旭慶男「上加世田遺跡-2」加世田市教育委員会 1987
- 13) 古田正隆「筏遺跡」百人委員会 1974
- 14) 古田正隆「磨石原遺跡」百人委員会 1977
- 15) 渡辺和子「四隅周辺遺跡調査報告書(5)」福岡市教育委員会 1983
- 16) 小池史哲「椎現塚北遺跡」瀬高町教育委員会 1985
- 17) 渡辺和子「千里シビナ遺跡」福岡市教育委員会 1982
- 18) 中間「紡錘車の研究」「石崎曲り田遺跡 Ⅲ」福岡県教育委員会 1985
- 19) 後藤守一「登呂 本編」日本考古学協会 1954
なお、この資料については下記書により知り、縄具について参考を得た。
竹内晶子「弥生の布を織る」UP 考古学選書9 東京大学出版会 1989
- 20) 中間「石崎曲り田遺跡 Ⅱ」福岡県教育委員会 1984
- 21) 宮田栄二・井ノ上透文「櫛崎B遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993

IV 若宮遺跡

A 調査の概要

把木インターチェンジにかかる埋蔵文化財の調査は、昭和61～62年(1986～87)までにA地点・鞍掛遺跡、B地点・前田遺跡、C地点・西ノ迫遺跡、D地点・クリナラ遺跡が終了していた。E地点の若宮遺跡については、昭和62年度に測量と表土剥ぎを行ったが、用地買収等の関係で測量は調査対象地区全面には及んではいなかった。翌63年度に38地点・外之隈遺跡の調査途中でその作業員の一部をさいて発掘調査を実施した。

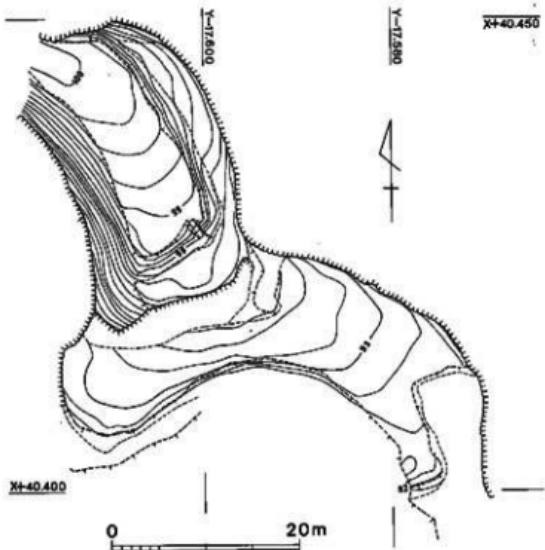


Fig.143 若宮1区北半原地形図(1/600)

若宮遺跡の調査は、昭和63(1988)年4月13日から4月27日までの間に行った。経過は以下のとおりである。

4月13日 テント設営。

14日 1区遺構検出。溝とピット、近世墓の墓壙あり。

16日 1・2区の杭打ち。

19日 黄砂大量に飛来。2区遺構検出作業。

22日 2区の土壤・ピット発掘。

26日 ほぼ発掘終了。

27日 器材撤収。38地点へ戻る。

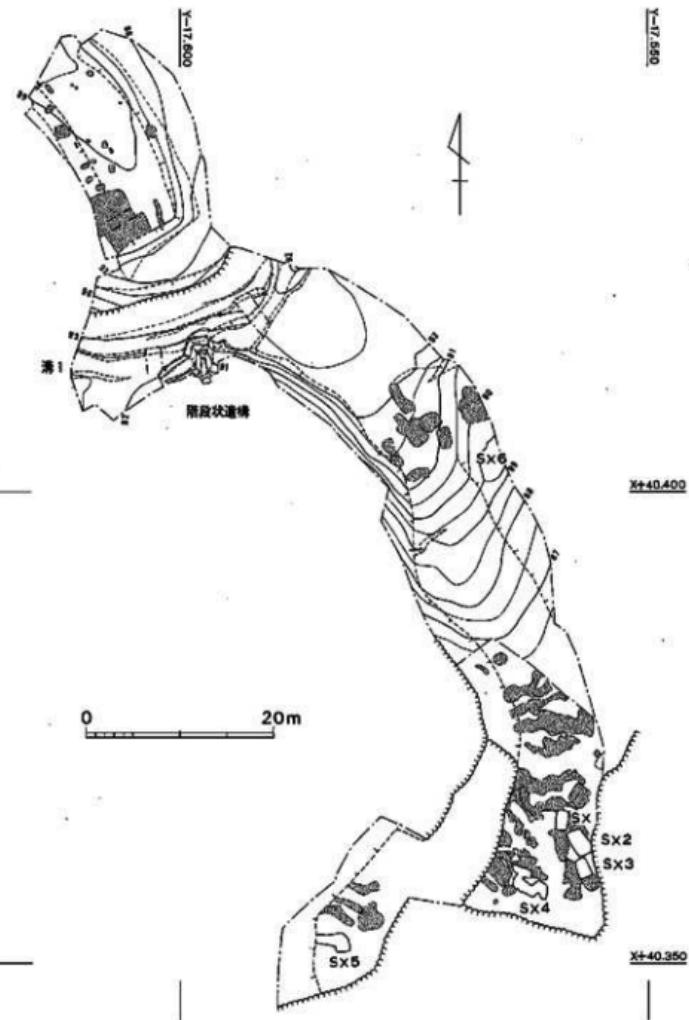


Fig.144 若宮1区造構配図 (1/600)

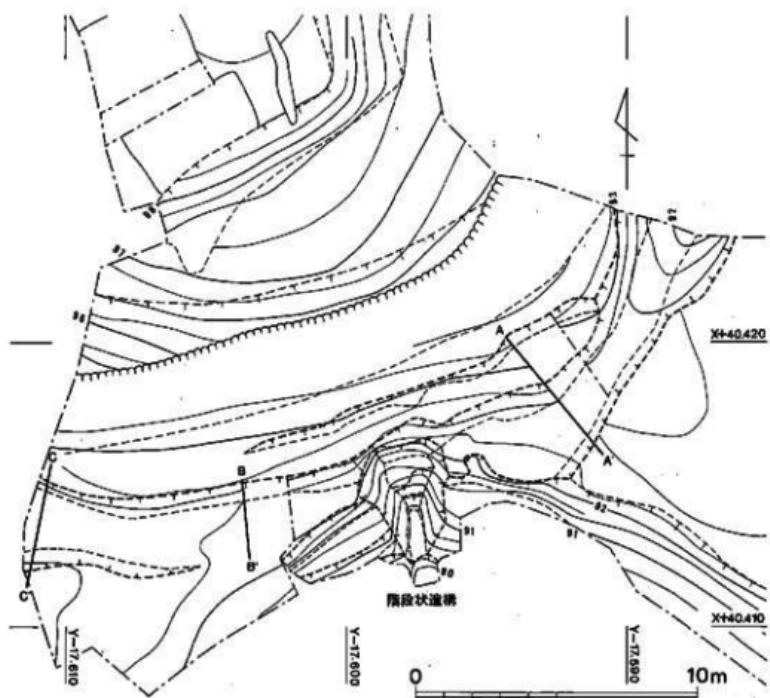


Fig.145 若宮1区溝1測量図 (1/200)

ここは筑後川に向かって伸びてきた丘陵部であり、その頂部は眼下にある前田遺跡より比高差50mほどもある。調査前は、痺せ尾根ながらこの丘陵上に若干の高まりの部分があり古墳ではないかと見られていたが、結果的に明確には古墳は遺存しなかった。

調査対象地のうち南側を1区、北側を2区とし、1区から2区へ調査を進めた。

1区は南から北へと高くなつて行きその比高差は23mに及ぶ。北端部は緩やかな平坦面をなしていた。地元の人の話だと南端部付近にはかつて墓地があったという。2区は1区北端から続いてきた尾根を境に北へはだらかに傾斜し、南へは細い尾根が続いて行く。その比高差は13mである。出土遺物はごく少量であったが、一部について現在のところ所在不明となつてゐる。発見したのち報告することとした。調査面積は合わせて3,666m²である。

B 1・2区の調査

1 1区の遺構と遺物 (Fig.143・144, PL.62~64)

表土除去後も調査区の北端は10×20mほどの緩やかな平坦面をなし、そこにはいくつかのピットと浅い豊穴状の掘り込みがあったものの遺物は何ら出土しなかった。その南側直下にはやや浅いながらも掘切状に弧状の溝1が巡っていた。

調査区中ほどと南端付近には長方形や明確な形にならない不整形の掘り込みが見られたが、これらは近世墓の墓壙および改葬によるもの、または木根の跡であろう。土器等の出土したものについてSX1~6の番号を付したが、個別図は作成していない。なお、SX1・2に切られて1.5×3mほどの長方形プランの土壤があり、この中には赤色顔料を塗布した石材が多量に投げ込まれたような状態で入っていた。もとは古墳の主体部の墓壙であった可能性もあるが、詳細は不明である。

溝1 (Fig.145~147, PL.63)

調査区北端の平坦面の南方直下、比高差約6m下の所に、この平坦部を区画するかのように掘切状に掘られた溝である。弧状に約27mを検出したが、その北東部・南西部ともに自然の傾斜に解消して行くものと見られる。この溝の中央部付近には谷部へ向かって下る階段状の掘り

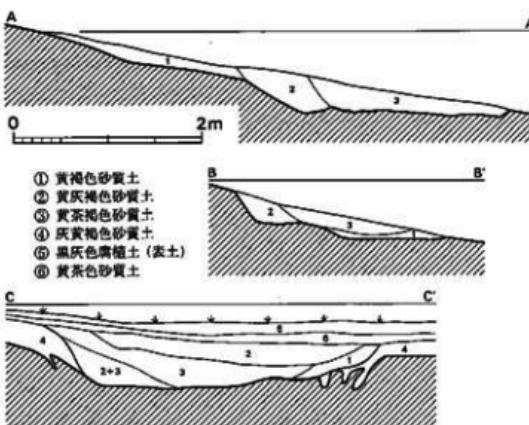


Fig.146 若宮1区溝1土層図 (1/60)

込みがあった。溝の上面幅2.3~3.6m、底面幅2.0~3.0mで断面は台形状をなす。底面レベルは階段状遺構の東側が最も高くなっている。黄褐色系の砂質土が自然堆積した様相であった。

階段状遺構は溝1を切り込んだようにして掘られているが、検出した最下段のさらに南側は急激な段落ちとなっている。この最下段の上(北側)

に傾斜のあるテラスがあり、さらにその上方の溝1の北側にもテラスがある。この都合3段の「階段」はその比高がそれぞれ1mほどもあるので、人が一般的な階段として使用したものとは考えにくい。何か別の用途があったのであろう。

階段状造構の南側側土中から土器片を採集したが整理途上で所在不明のままである。弥生時代後期土器の底部片だったと記憶するが、もしそうであるならこの溝1も弥生時代の所産であった可能性が高いことになる。もう一つの可能性はやや浅いながらもこの溝1を中世期以降の山城に伴う堀切とするものである。今はそのいずれとも判断できない。

SX1 (Fig.144)

1.2×2.3mの長方形プランの土壇であった。深さは検出面から1.65m。釘が出土していることより木棺が埋置されていたことがわかる。

出土遺物 (Fig.148-1 ~ 8・149-13~30, PL.64)

土器器 (1~6) 1・2はともに糸切り底で、1は小皿か。復元底径5.1cm。2は碗であろうか。

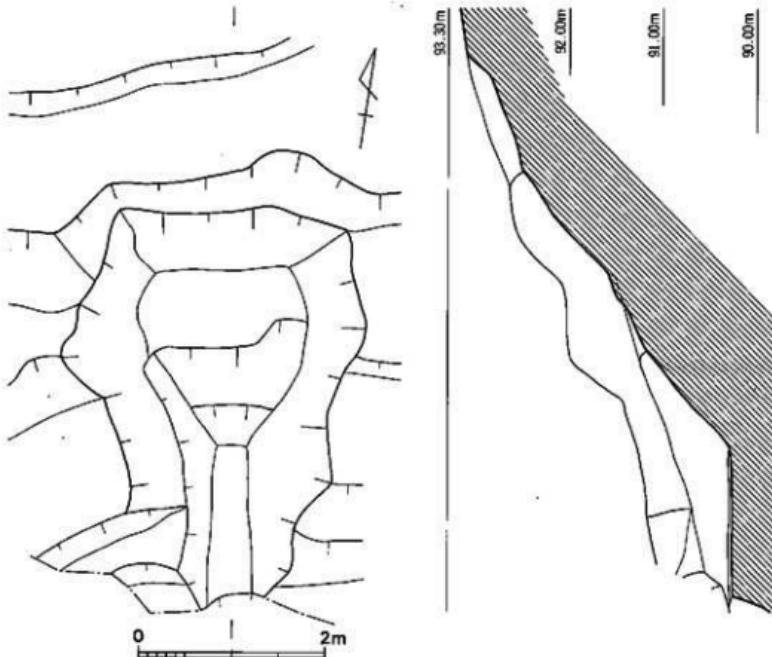


Fig.147 若宮1区溝1階段状造構実測図 (1/60)

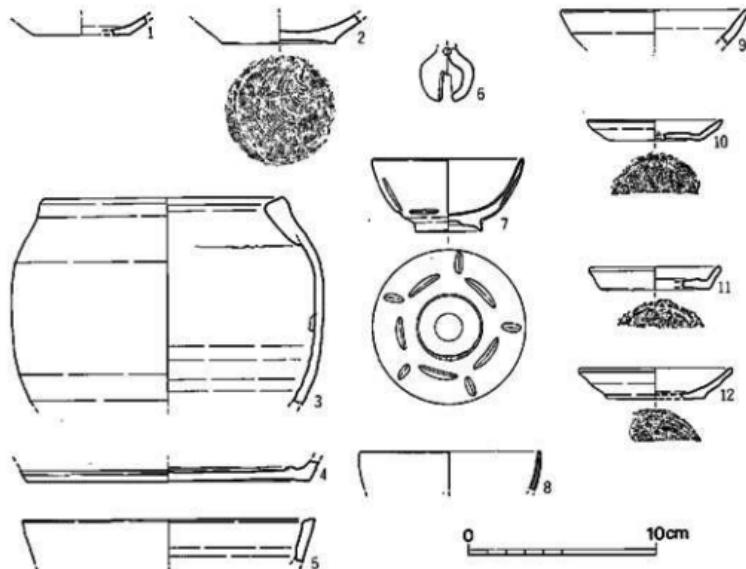


Fig.148 若宮1区出土土器等実測図 (1/3)

底径 6 cm。3 は硬質の壺で骨壺に使用したものか。口径 13.2 cm。4 は 3 と胎土・焼成が類似するが底径があわない。復元底径 15 cm。5 は口縁部として図示したが高台かもしれない。復元口径 15.6 cm。6 は土鉢の破片で、やや軟質の焼である。胸部径 2.8 cm。

磁器 (7・8) 7 は白緑色の釉調を呈する完形の青磁碗で、体部に彫りが入る。壺付と底外面は胎。口径 8.2 cm、底径 3.6 cm、器高 3.9 cm。8 は青白磁とすべき碗で、復元口径 9.8 cm。

鐵器 (13~30) 13・14 は銹が著しく詳細不明であるが、刀子になるのであろうか。15~30 は釘である。15~22 は頭部が残るので最低 8 本はあったことがわかるが、他の 8 本と接合はない。木質の残るものは頭から 0.9~1.3 cm までは横方向の木目なので、これが木棺の棺材の厚さであろうか。完形の 15・16 は全長 4.2 cm。

SX2 (Fig. 144)

SX1 の南にある。1.8×3 m の長方形プランの土壤で、深さは検出面から 1.3 m。

出土遺物 (Fig. 148-9, PL. 64)

土師器 (9) 小皿であろうか。復元口径 10 cm。

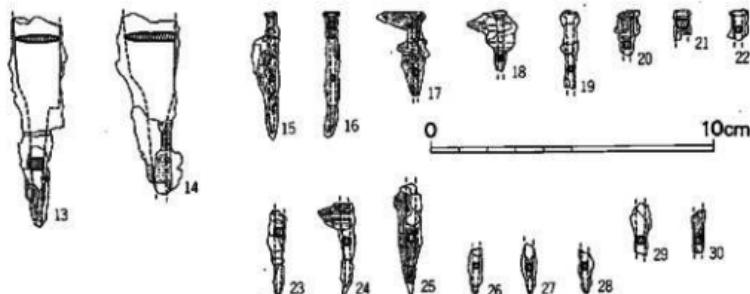


Fig.149 若宮1区 SX1 出土鉄器実測図 (1/2)

SX3 (Fig.144)

SX2 の南にある。1.4×2.1m の長方形プランの土壤で、深さは検出面から1.3m。

出土遺物 (Fig.148-10, PL.64)

土師器 (10) 糸切り底の小皿で、復元で口径7.2cm, 底径5 cm, 器高1.1cm。

SX4 (Fig.144)

SX3 の西にある不整形の土壤である。

出土遺物 (Fig.148-11・12, PL.64)

土師器 (11・12) ともに糸切り底の小皿で、11が復元で口径7.1cm, 底径5.8cm, 器高1.2cm。

12は復元で口径8.2cm, 底径5.2cm, 器高1.6cm。

SX5 (Fig.144)

SX4 の西南方にあり、木の根の抜き跡かもしれない。土器片は所在不明である。

SX6 (Fig.144)

調査区の中ほどの所にある楕円形状の掘り込みである。寛永通宝と土器片が出土したことになっているが現在所在不明である。

2 2区の遺構と遺物 (Fig.151, PL.62)

表土除去後の尾根上にいくつかのピットと浅い豊穴状の掘り込みがあったものの、これらの「遺構」は性格不明である。それには木根の跡も含まれているようである。遺物もほとんどな

い。調査区北端の平坦面に SX7・8 があったが、これの遺物も現在所在不明である。

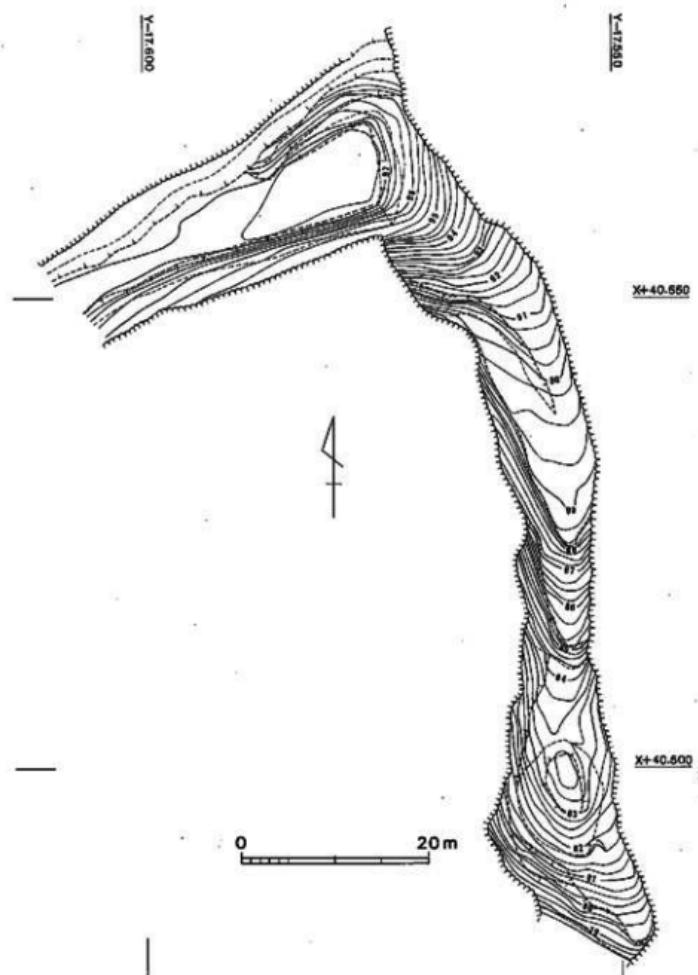


Fig.150 若宮2区南半原地形図 (1/600)

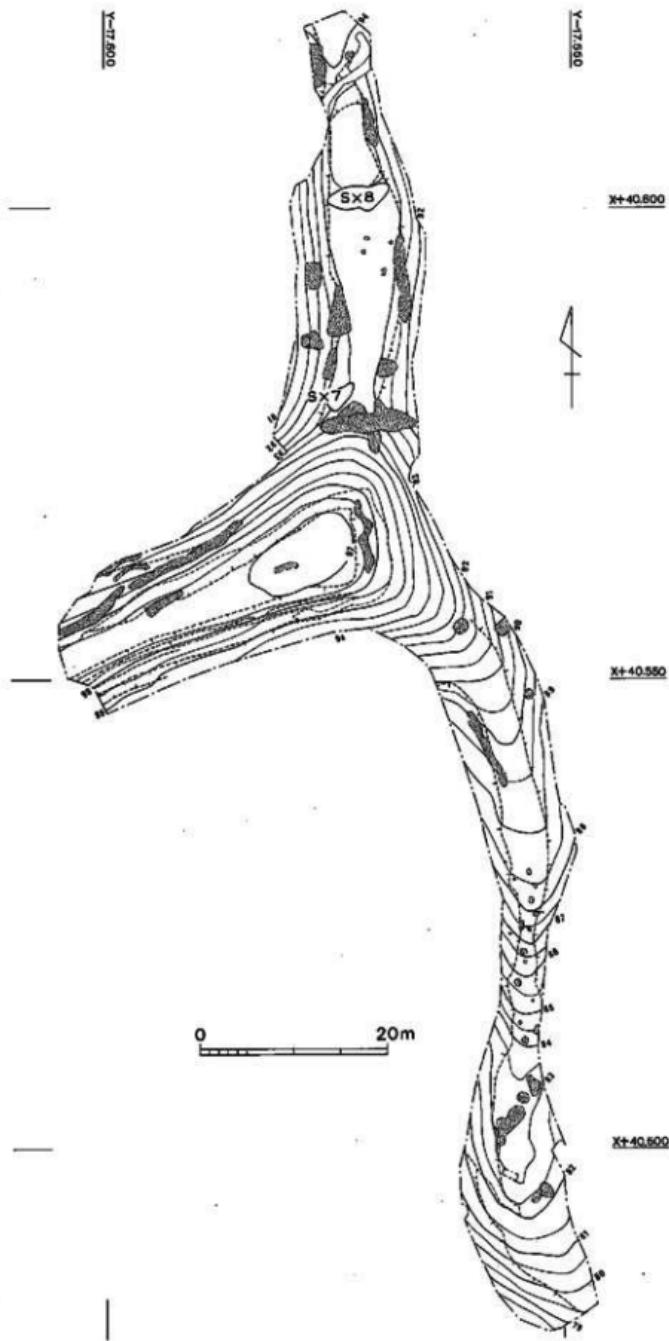


Fig.151 若宮2区構造配置図 (1/600)

SX7 (Fig.151)

1.6×3.7mの長楕円形プランの土壙である。

SX8 (Fig.151)

SX7の北方にある。2.5~6.8mの長楕円形プランの土壙である。

C ま と め

杷木インターE地点・若宮遺跡の調査は1・2区の尾根上を調査したが、特に2区においては取り上げるべき何ものもない。

1区はまず溝1がある。時期が確定できないが、弥生時代後期の所産であるとすればおもしろい。丘陵頂部平坦面を区画するように弧状に溝を巡らした高地性集落として、この同じ杷木インター内で調査された西ノ追遺跡があり、それはこの若宮1区からは北東に350mしか離れていない。眼下の山裾には西ノ追高地性集落にとての母集落とみなされる前田遺跡があるから、もしこの若宮遺跡1区が同じ時期に営まれていたのであれば、非常時における前田遺跡—若宮遺跡—西ノ追遺跡という連関も考えられよう。興味は尽きないが、いかんせん時期がわからない。

SX1~3は近世墓の墓壙とみてよいだろう。SX1における青磁碗や他の土師器小皿などから古くみても江戸時代末頃の所産と思われる。

なお、SX1・2に切られていた土壙は赤色顔料の塗布された石材が投げ込まれていたが、これは古墳主体部の残骸の可能性もあることは本文中でも触れておいた。篠塚遺跡などにおいてやはり赤色顔料の塗られた5世紀代の石室が検出されていることを思えば、ここに同じような時期の古墳がかつて存したとしてもおかしくはない。

V 補 遺

A 柿原I縄文遺跡出土石器

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 37」の柿原I縄文遺跡報告に掲載もれがあつたのでここで補っておきたい。

角錐状尖頭器 (Fig.152-1) B10-44、つまり遺跡南東端グリッドの44番の石器で、前記報告書のFig.68(86頁)の頭に入れるべきものである。安山岩製で、ひどく風化しているという訳ではない。表面を持った縦長剣片のバルブ側を除去し、周縁に大まかな整形剝離を施し、更に基

部左側縁や先端寄りに意識して丁寧な細調整を施す。右側辺はブランディング的な鈍角の剥離が行われる。表中央に平坦な顕面を残すため断面形が台形的となる。広義の角錐状尖頭器としてよからう。長さ50mm、幅23mm、厚さ10.5mm、重さ10.2g。

槍先形尖頭器 (Fig.152-2) D 8-2、つまりD8グリッドの2番の石器で、安山岩製だが極めて風化しており白く変色している。横長剝片を使用しており、表の中央一部と裏の下半に大きく素材剥離面を残す。両側縁は交互剥離で、階段状剥離が中央付近に幾らかみられる。現存長46mm、幅27mm、厚さ11mm、重さ10.9g。やや厚味のあるタイプで、偏平な精美な類ではない。また、多久出土例の中にみられる厚手で階段状剥離の激しい類でもない。

以上の2点は、柿原I縄文遺跡では明らかな旧石器が出土していないことや、下層である黄色土から草創期の刺突文土器・こぶ文土器、早期の押型文土器・厚手無文土器・凸帯文土器・こぶ文土器他が出土してい

ることから、現状では時期的には縄文草創期～早期のものと幅を持たせておきたい。いずれにしても、本遺跡出土の他の尖頭器（上掲書Fig.68）とともに時期の一端を推定できる貴重な資料である。なお、この2点の写真は本書のPL.61。

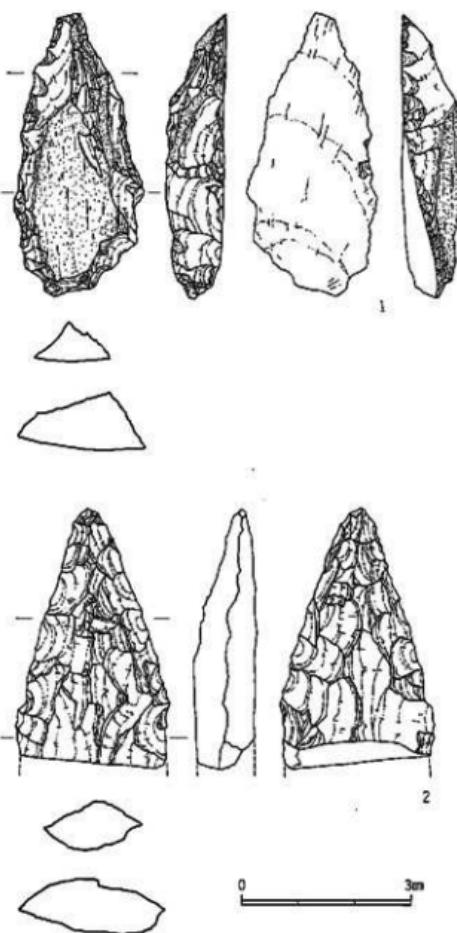


Fig.152 柿原I縄文遺跡出土石器実測図(実大)

B 天園遺跡出土土器

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 42」の天園遺跡報告に掲載もれがあったので、ここで補っておく。

轟B式土器 (Fig.153) 1は第1号住居跡出土でNo.44として取り上げたもので、上記報告書中の第7図(13頁)に入れるべきもの。写真は図版33上段の右上端の土器である。口径22.4cmでわりとシャープな隆線5条を付ける類。口唇直下の1条は水平に、以下の4条は重弧的曲線に付される。内面はナデ、外面は斜位条痕。胎土に細砂多く含み、角閃石が目立つ。焼成良好で内面は茶褐色。外面はこげ茶色をなす。隆線が密に接するように付せられており、上記報告書中で分類した7類の好資料である。

2は、No.471として取り上げたもので、上記報告書中の第27図(46頁)に本来入れるべきもの。写真は図版26下段の右上端の土器である。径25.2cmで、低く細身の隆線5本を外面に付ける。内面はナデ、外面は斜位条痕で、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は淡茶～淡灰色、外面は煤が付着して暗茶～黒褐色となる。薄手でわりと精製品。上記報告書中の分類による2類に含まれる。

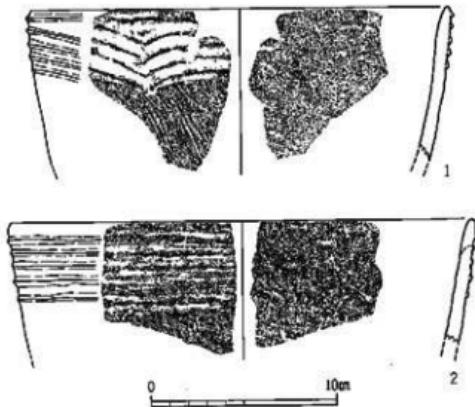


Fig.153 天園遺跡出土轟B式土器実測図 (1/8)



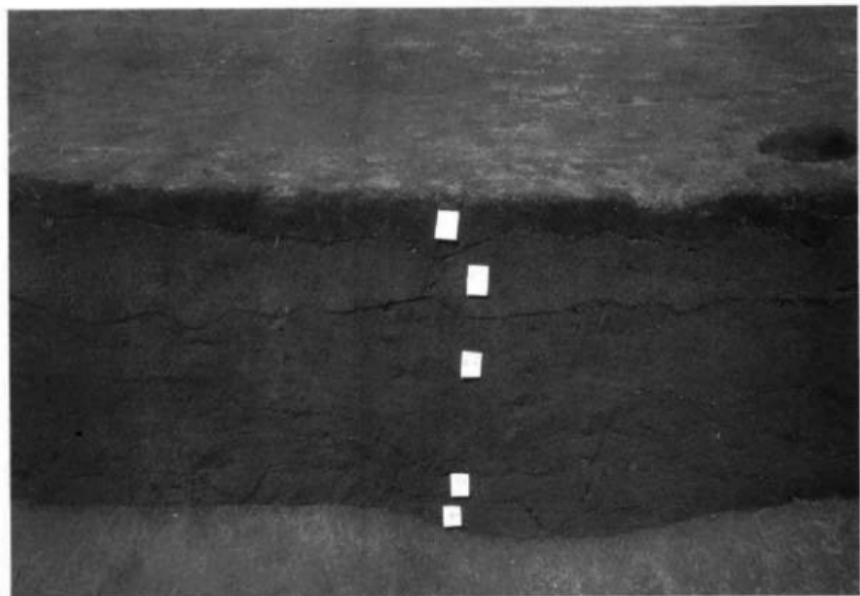
(1) クリナラ道路全般（第1層下面）（西上空から）



(2) クリナラ道路全般（第1層下面）（北西上空から）



(1) 第1号トレンチ (南から)



(2) 第1号トレンチ中央部土塁



(1) 第2号トレンチ (南から)



(2) 第2号トレンチ中央部上層



(1) II区全景（第1層下面）（北西から）



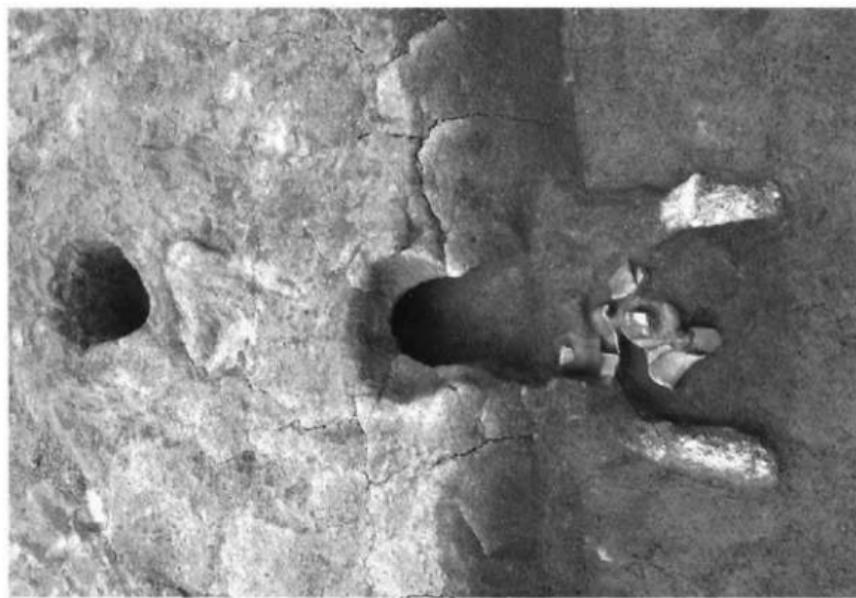
(2) III区全景（第1層下面）（南から）



(1) 第1号住居跡（南から）



(2) 第1号住居跡 貼床除去後（南から）



(1) 第1号住居跡 カマド（煙道陶器）



(2) 第1号住居跡 カマド（煙道陶器）



(1) 第2号住居跡 (南から)



(2) 第2号住居跡 貼床除去後 (南から)



(1) 第2号住居跡 カマド



(2) 第2号住居跡 カマド（第1次面）



(1) 第2層下面住居跡群全景 (上空から)



(2) IV-VI区第2層下面遺物出土状態全景 (北東から)



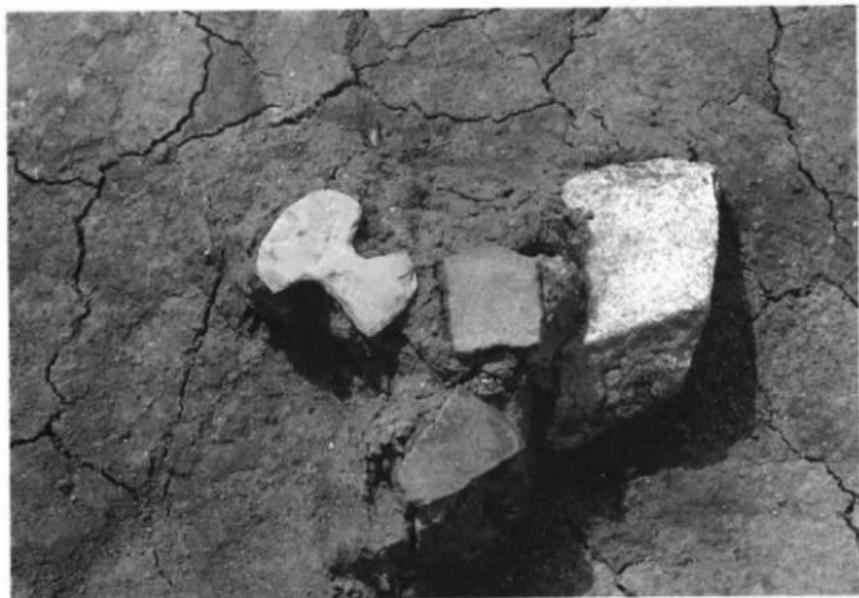
(1) IV～VI[×第2層下面遺物出土状態全景（西から）]



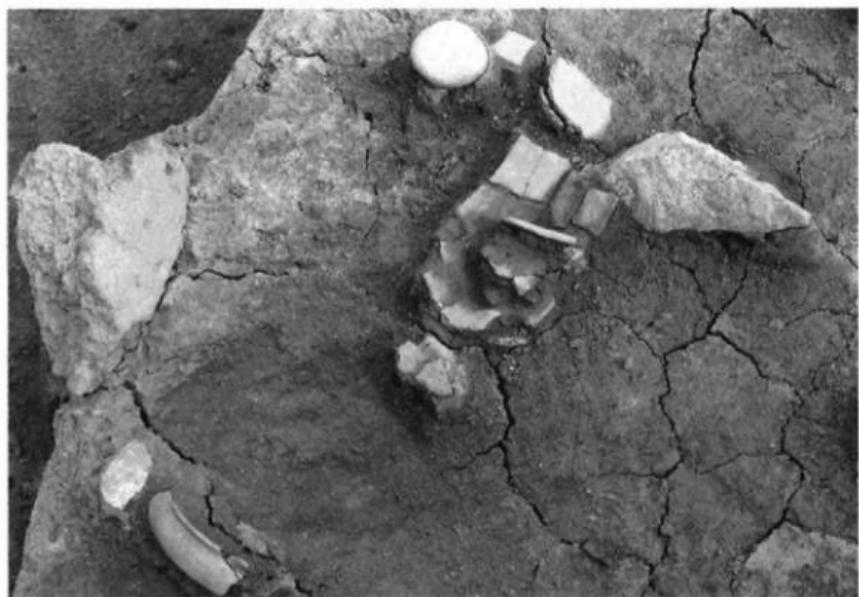
(2) IV[×第2層下面遺物出土状態全景（遺跡西端から）]



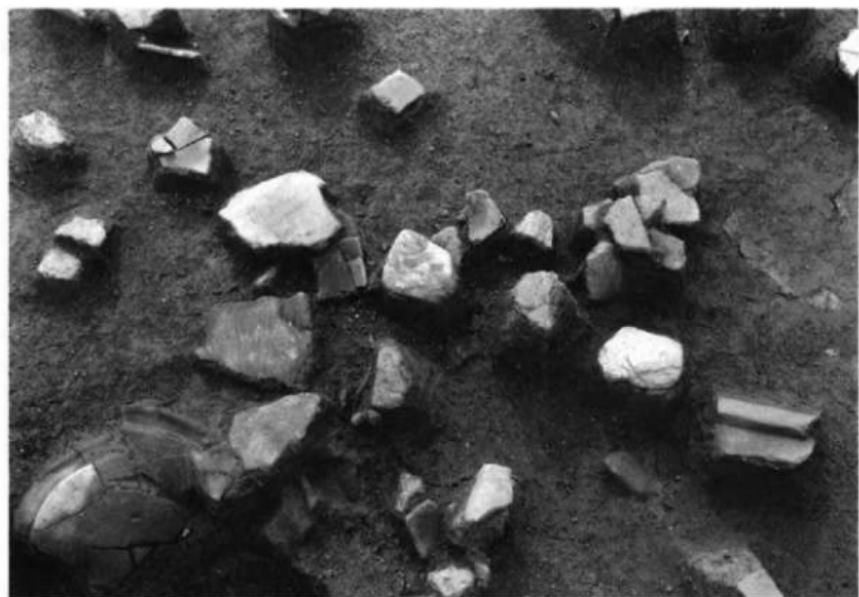
(1) V区第2层下面遗物出土状态 (浅砾·偏平打制石斧等)



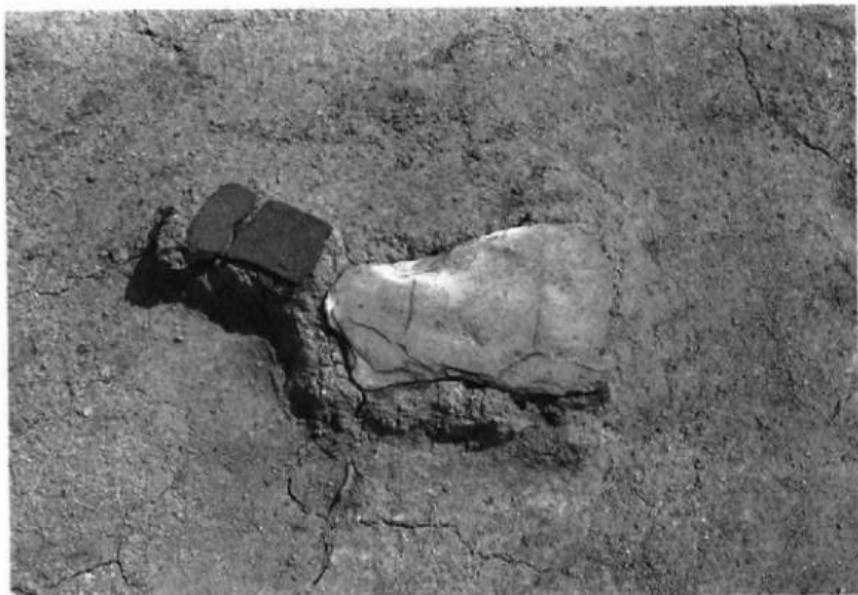
(2) V区第2层下面遗物出土状态 (条卷形石器等)



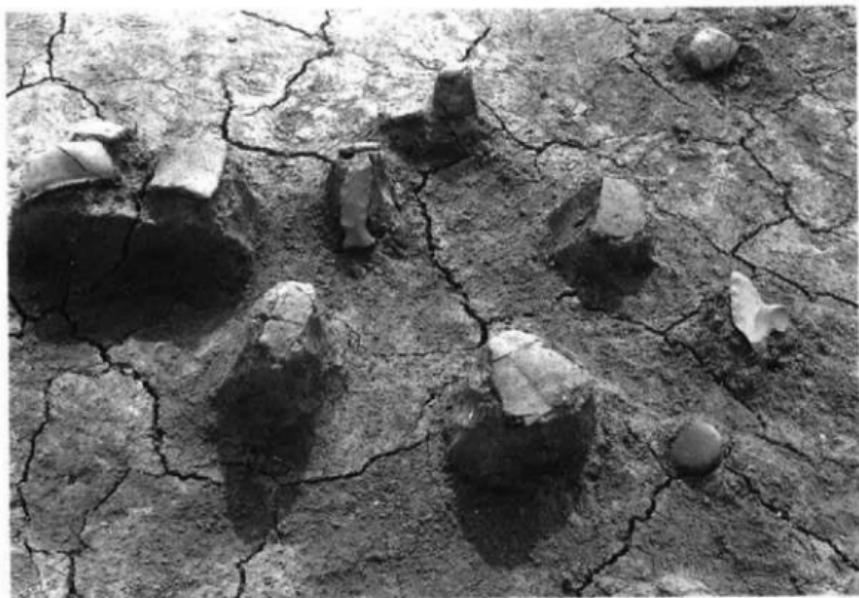
(1) V区第2層下面遺物出土状態 (浅跡・磨石・磨臼等)



(2) V区第2層下面遺物出土状態 (浅跡等)



(1) IV区第2層下面遺物出土状態(偏平打製石器)



(2) V区第2層下面遺物出土状態(浅钵・石匙等)



(1) VII层第2层下面遗物出土状态(石匙·燧土)



(2) VII层第2层下面遗物出土状态(第1号集石遗构)



(1) 第3・4・6号住居跡（東から）



(2) 第3号住居跡遺物出土状態（南から）



(1) 第3号住居跡（北から）



(2) 第4号住居跡遺物出土状態（東から）



(1) 第4号住居路 (東から)



(2) 第3・4・6号住居路 (西から)



(1) 第5号住居跡遺物出土状態（北から）



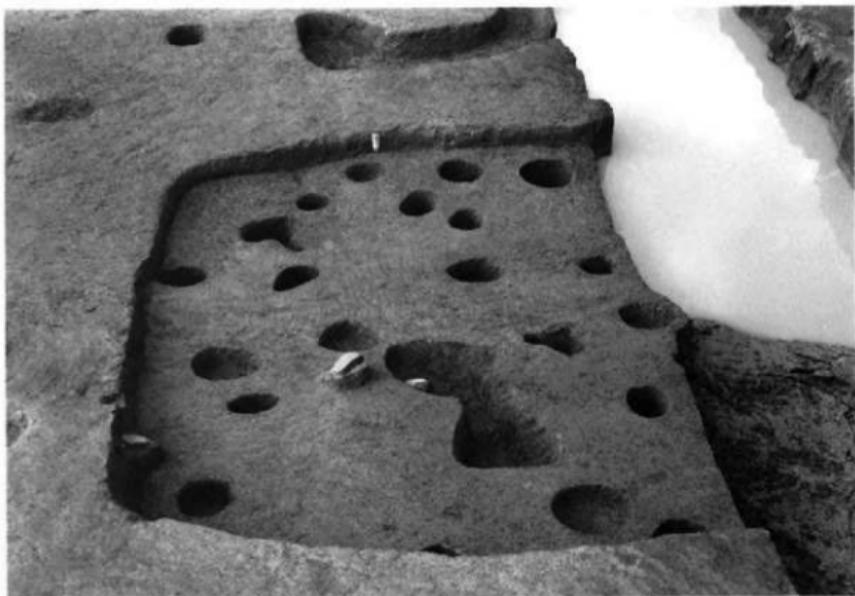
(2) 第5号住居跡（南から）



(1) 第5号住居跡内 炉（焼土）



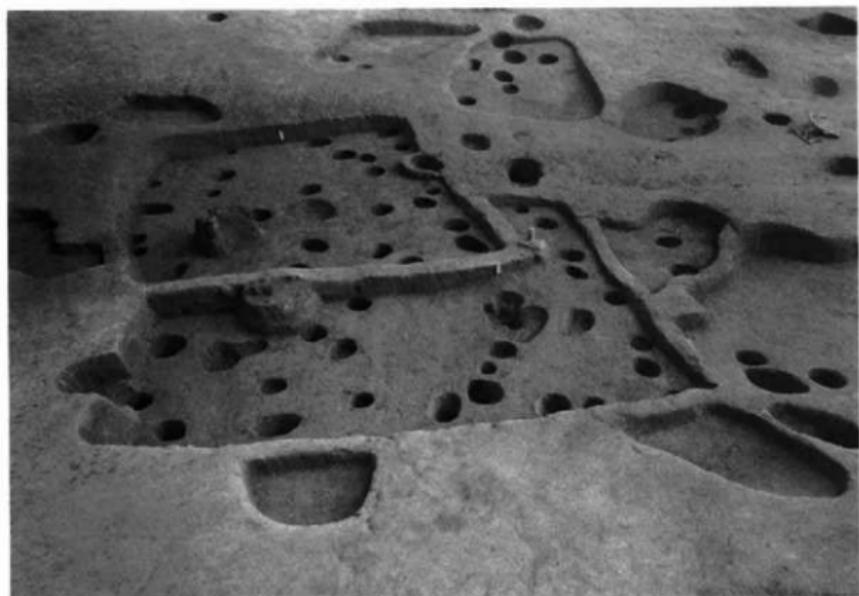
(2) 第6号住居跡（東から）



(1) 第7号住居跡 (南から)



(2) 第7号住居跡遺物出土状態 (南から)



(1) 第8・9号住居路（北から）



(2) 第8・9号住居路 遺物出土状態（南から）



(1) VII区第1号埋甕



(2) VII区第1号集石造構下層



(1) 第2号集石遺構 (南から)



(2) 第2号集石遺構
(北から)



(1) 第1号土壤 (南から)



(2) 第2号土壤遺物出土状態



(1) V区第3号土域（東北から）



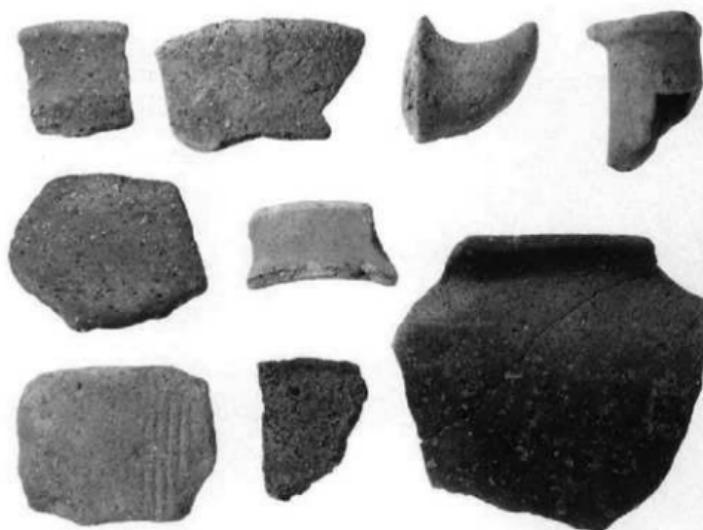
(2) 第1号トレンチ花粉分析試料採取状況（畠中教授）



(1) 第1号トレーニング分析試料採取状況（地中取扱）



(2) 掘削風景（第5号住居跡）



(1) 弥生・古墳・歴史時代の土器



(2) 鉄器・竪穴住居跡出土 玉飾器・銅錢・玉



埋甕



埋甕

浅砵 D2a 類



浅砵 A2 類

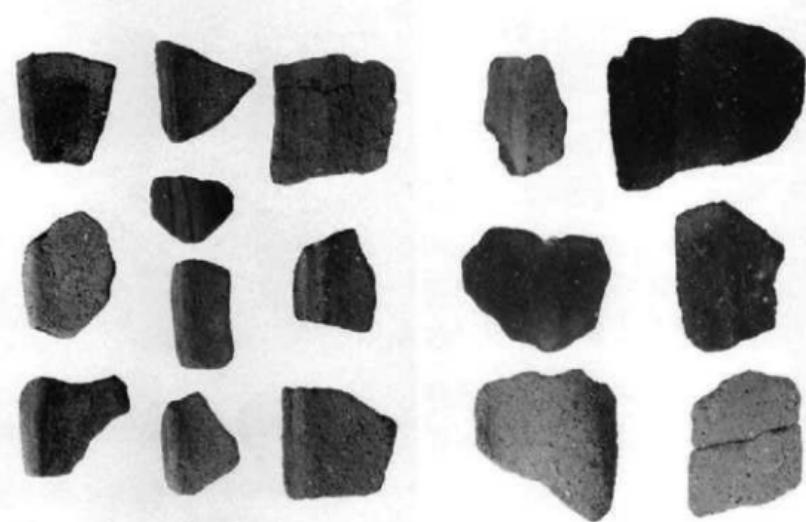
浅砵 F2 類



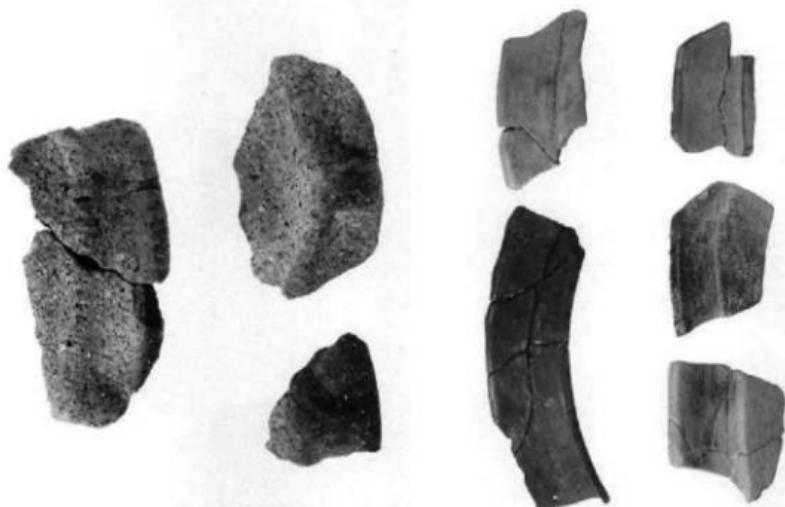
浅砵 C1 類

粗製深砵 B1 類

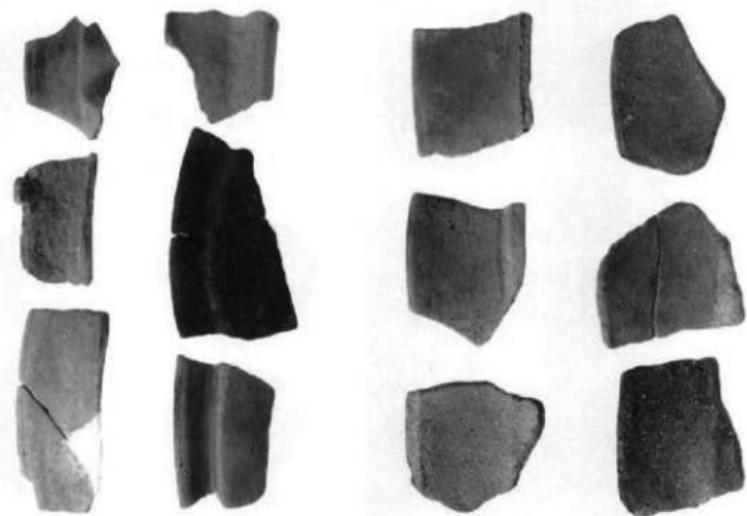
(1) 繩文後期上器



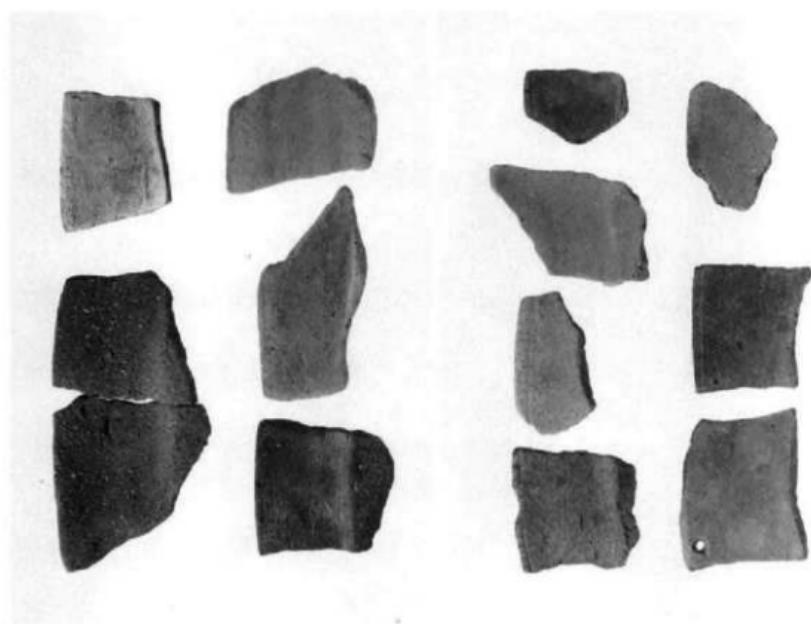
(2) 上：後期土器腹部 下：泥漿 A 類

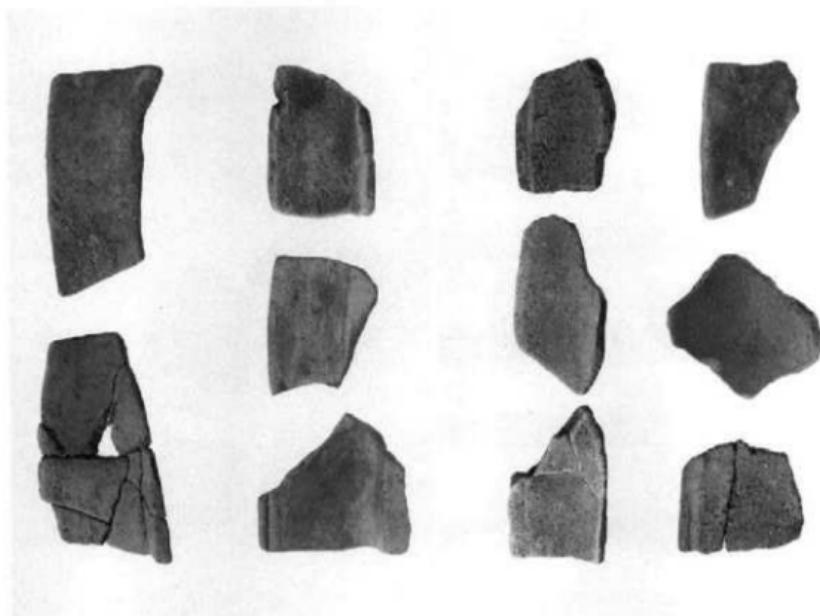


(1) 残片 A 部

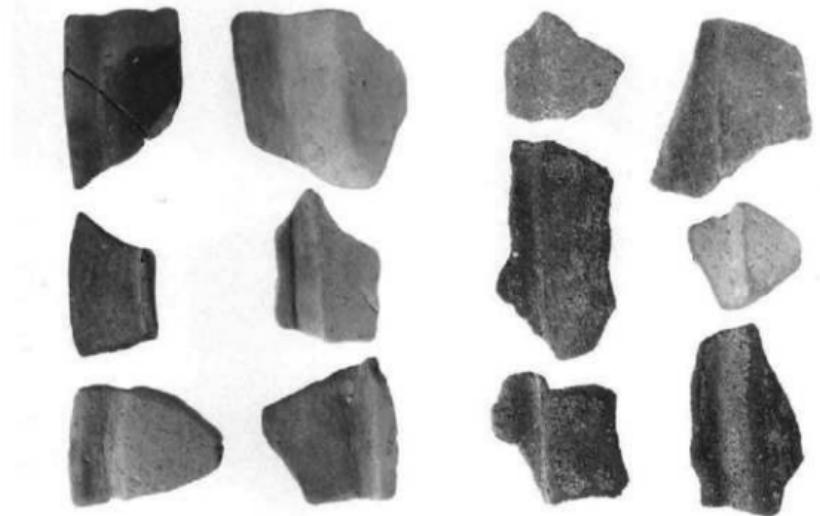


(2) 残片 A 部

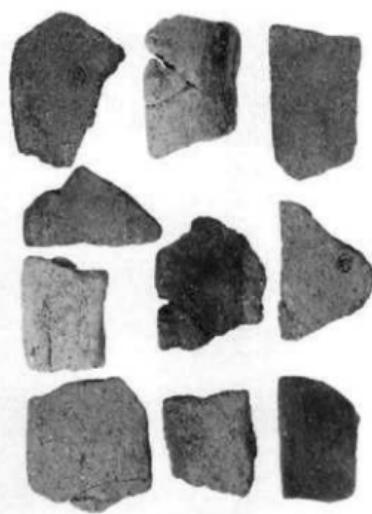
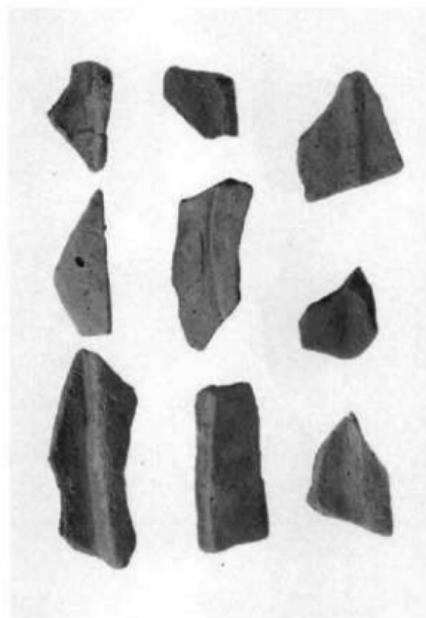




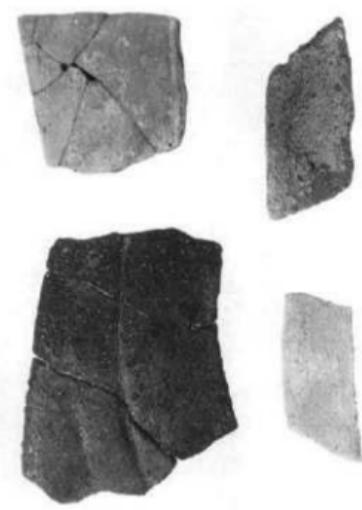
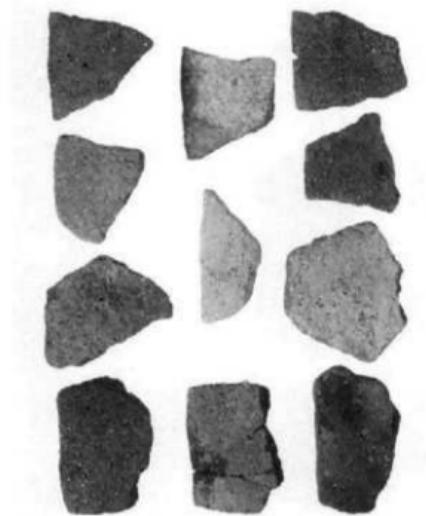
(1) 残片 A 集



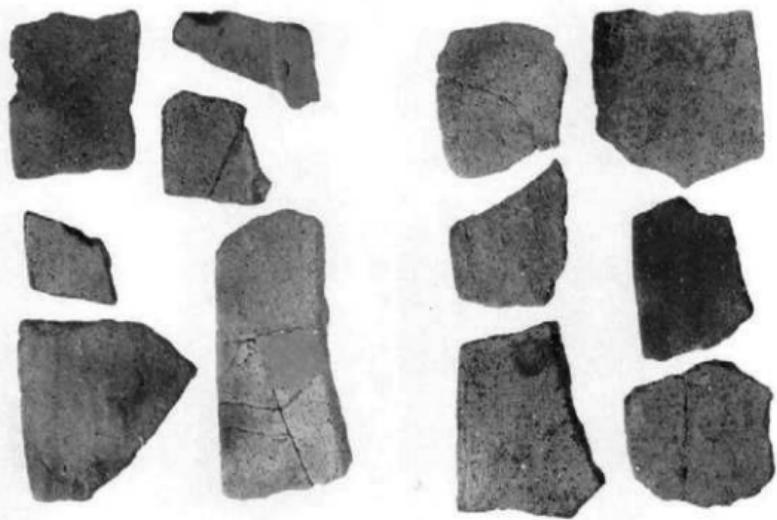
(2) 残片 A 集



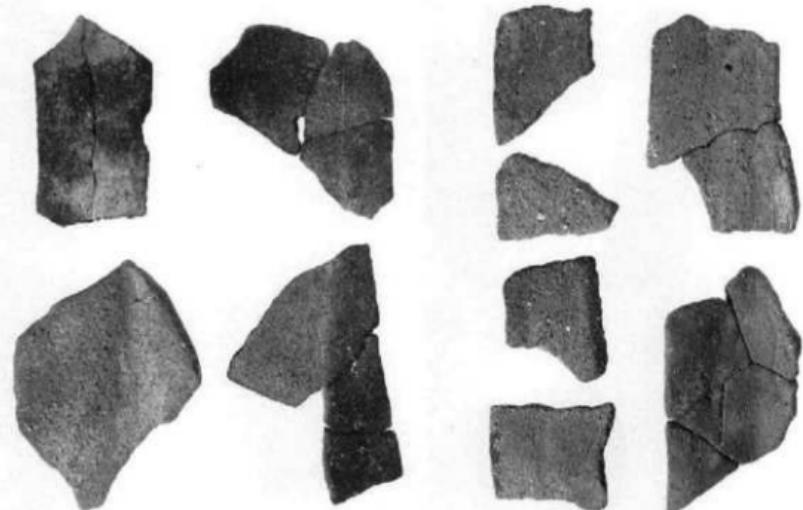
(1) 残片 A 類



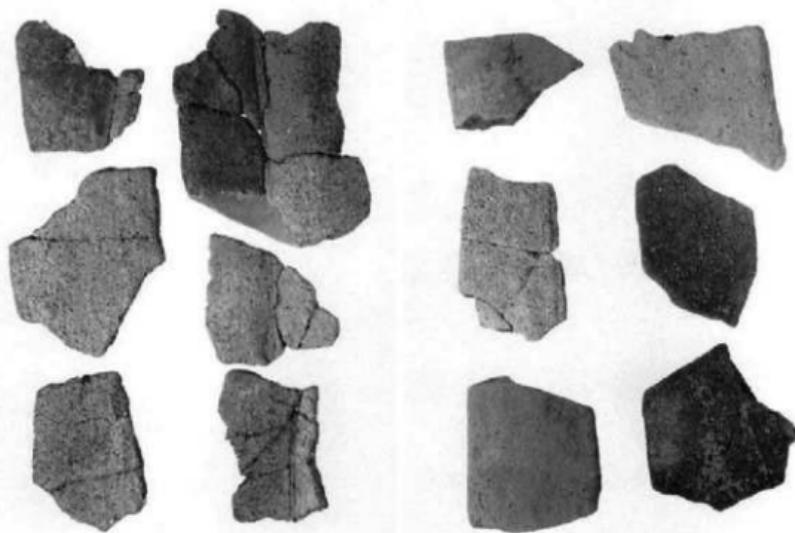
(2) 上：殘片 A 類 下：殘片 B 類



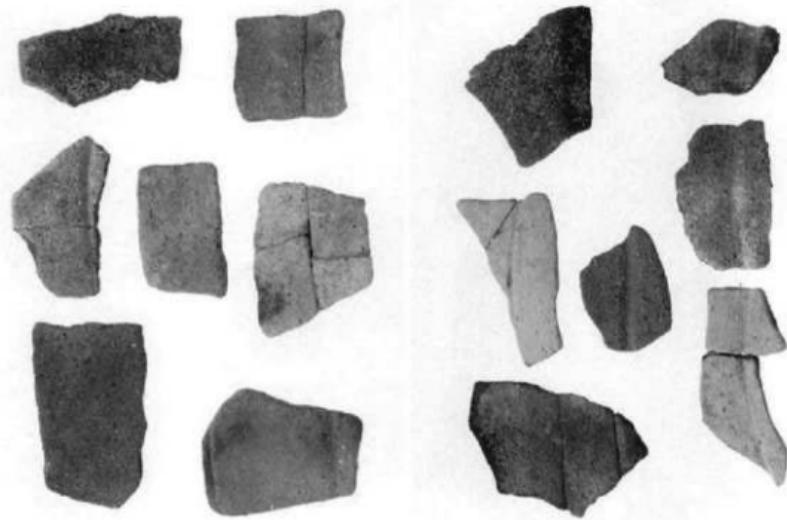
(1) 陶片 B 集



(2) 陶片 B 集

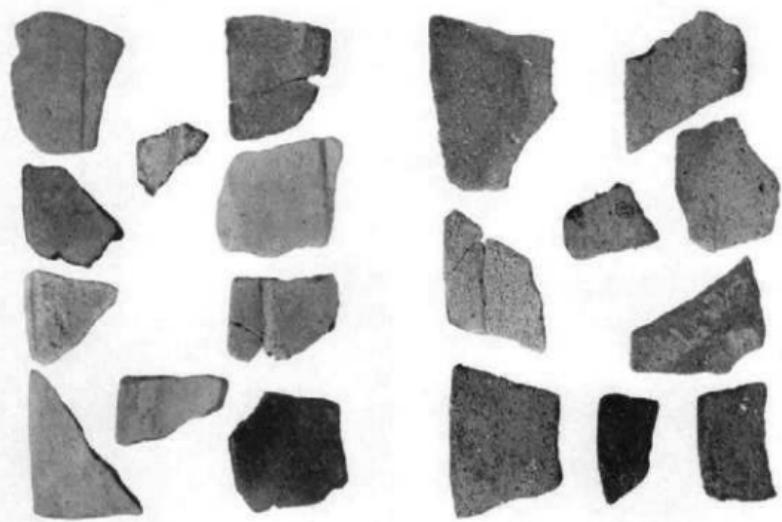


(1) 滾牀 B 組

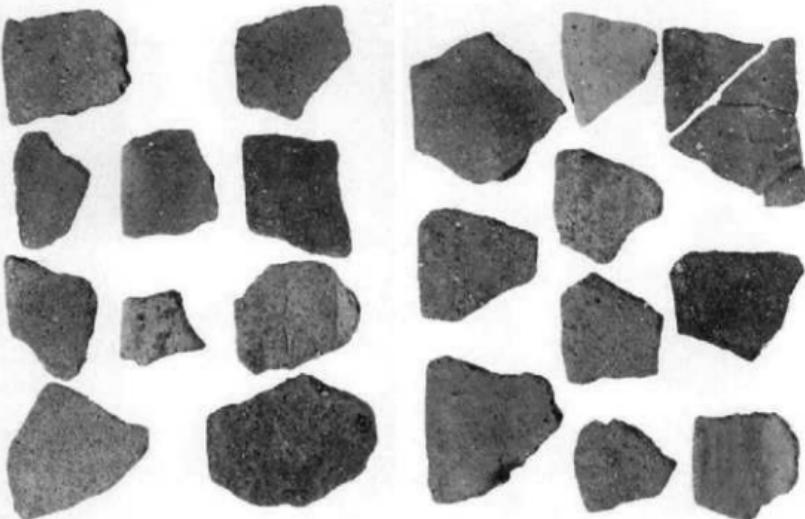


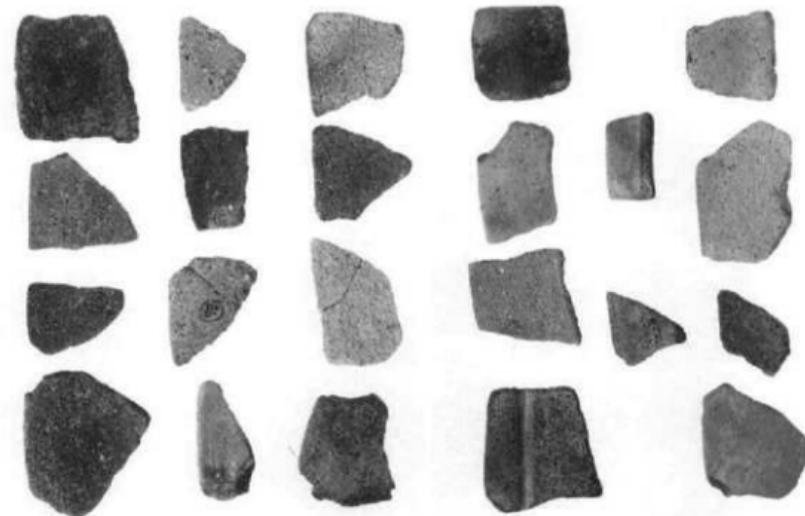
(2) 滾牀 B 組

(1) 滲水B類

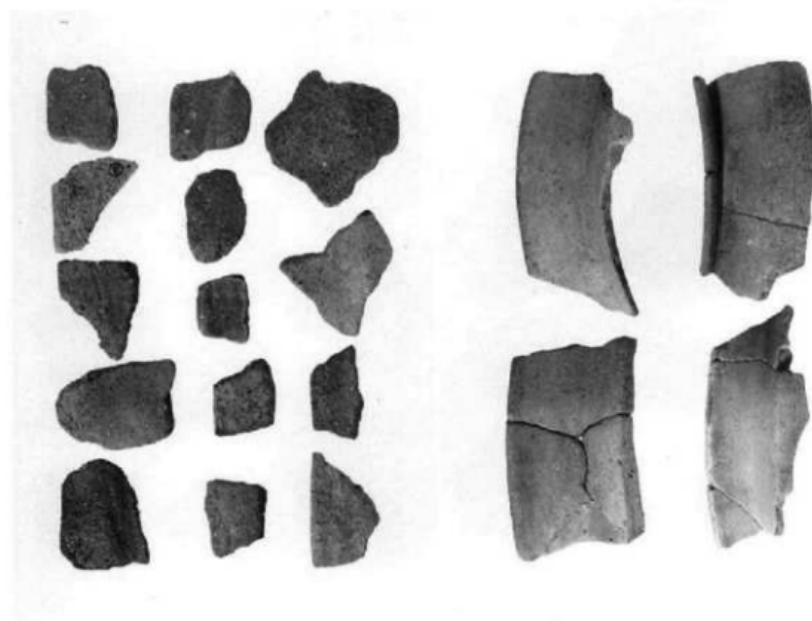


(2) 渗水B類

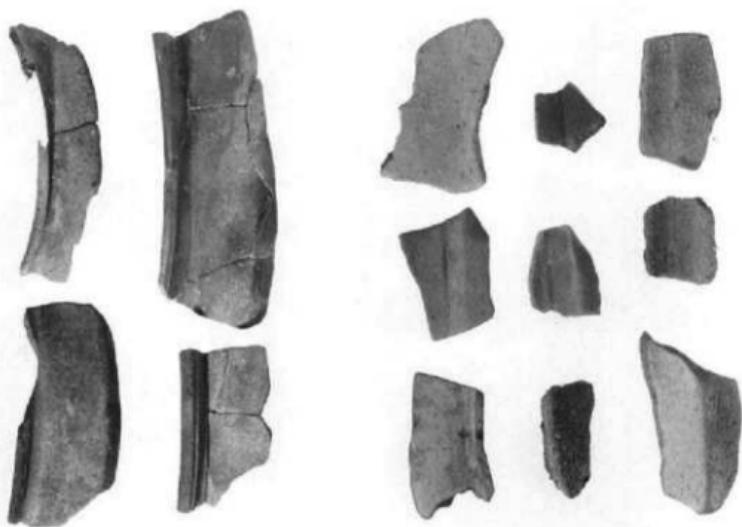




(1) 上：淺灰B類 下：淺灰B類，D類



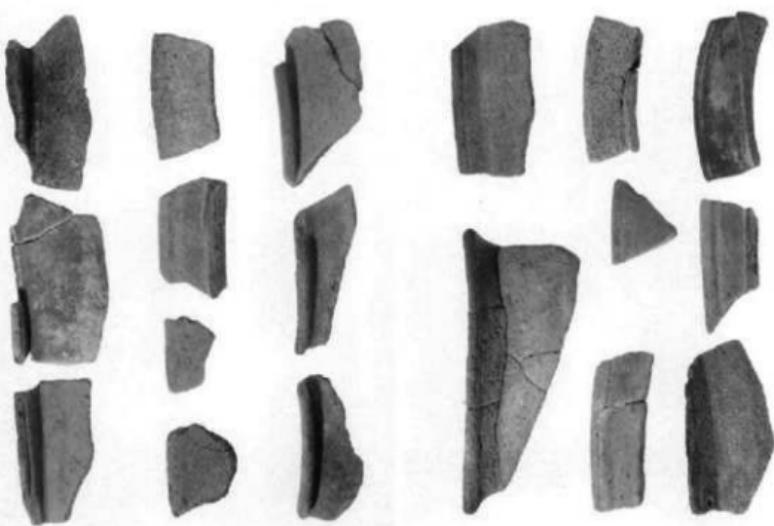
(2) 上：淺灰D類，F類 下：淺灰C類



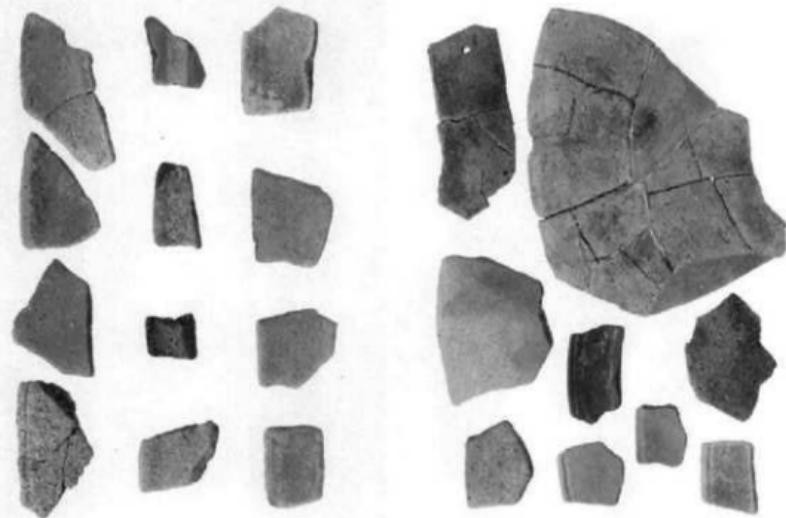
(1) 洪林 C 墓



(2) 洪林 C 墓

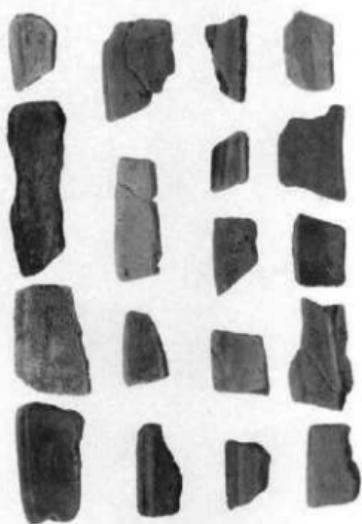


(1) 混杂 C 带

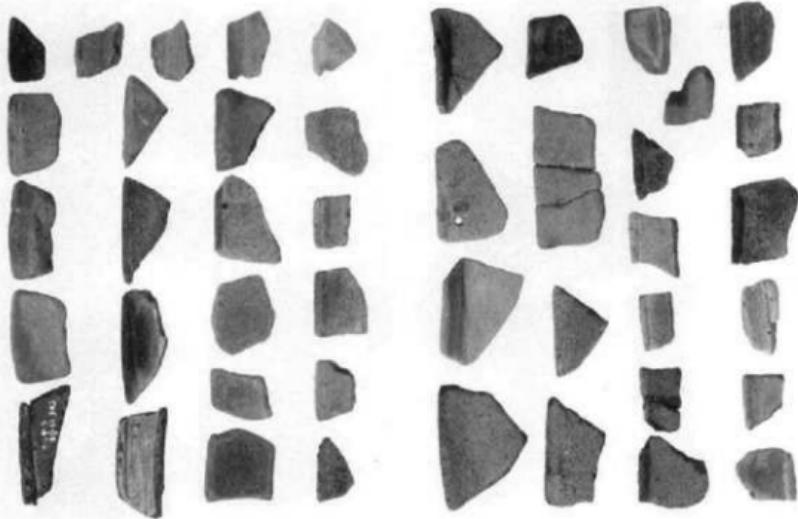


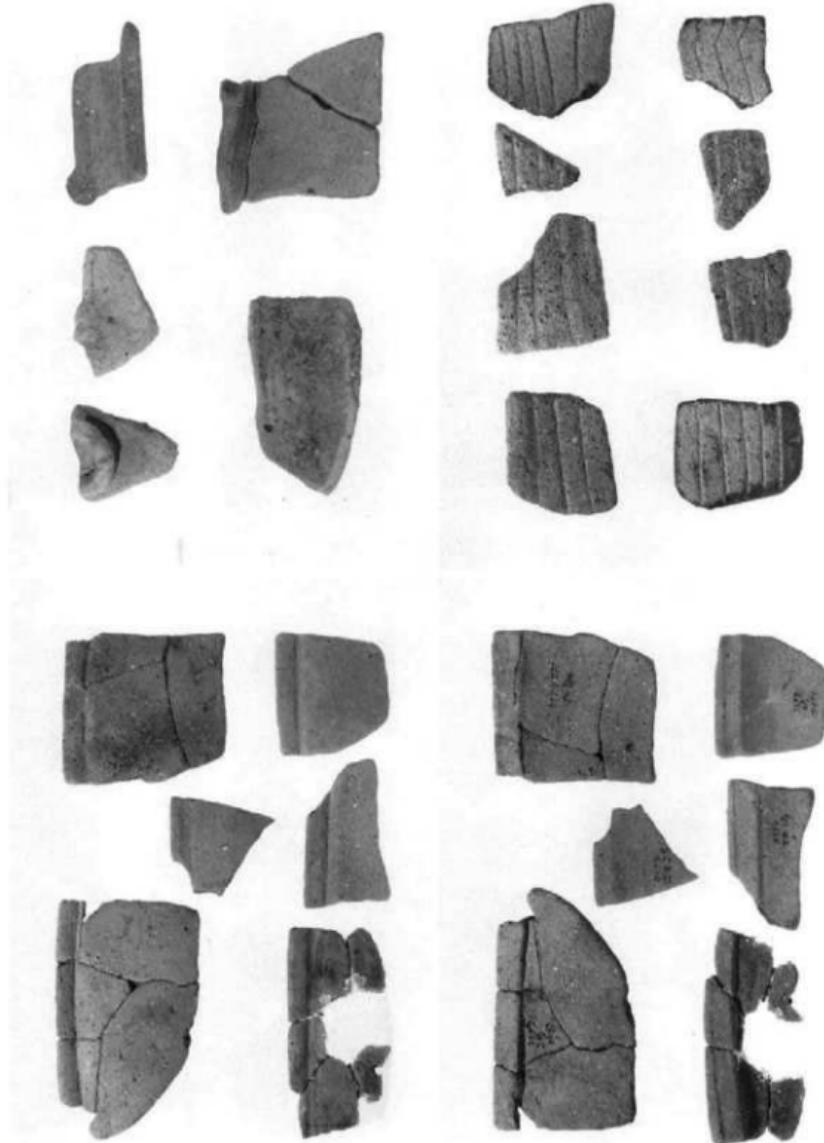
(2) 混杂 C 带

(1) 陶片 C 帶



(2) 陶片 C 帶

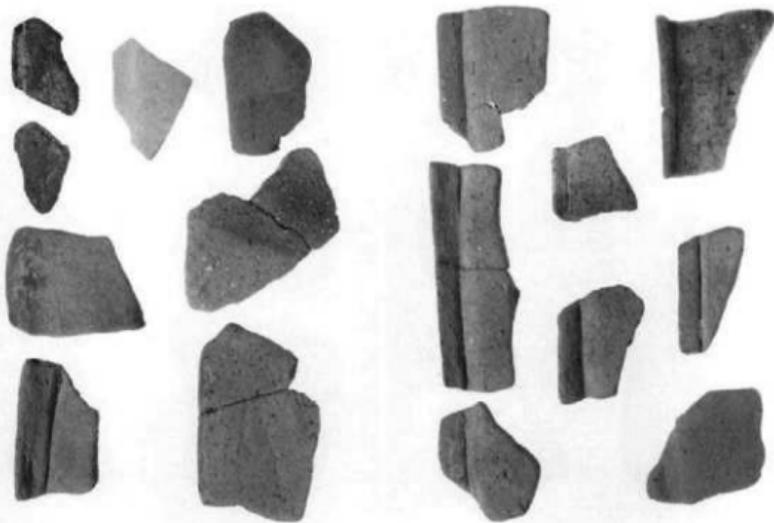




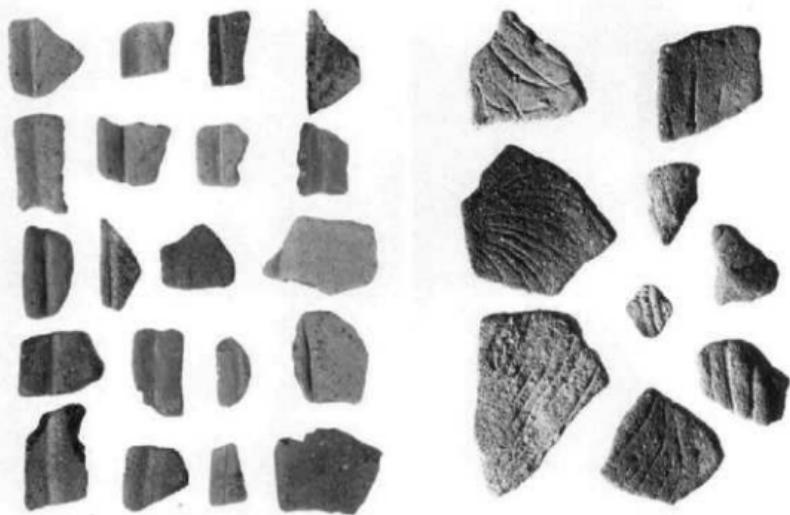
(1) 上：浅灰C類 下：浅灰B1類，下）E1類

(2) マ) A類、B類（外面と内面）

(1) マリ B・C 種



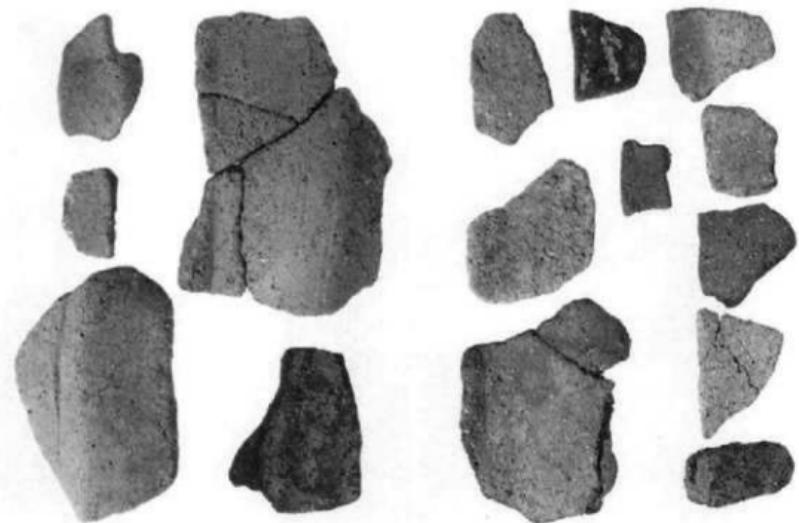
(2) 上：マリ 鑿 下：精製窯体 E1 種



(1) 精製深体 D 類

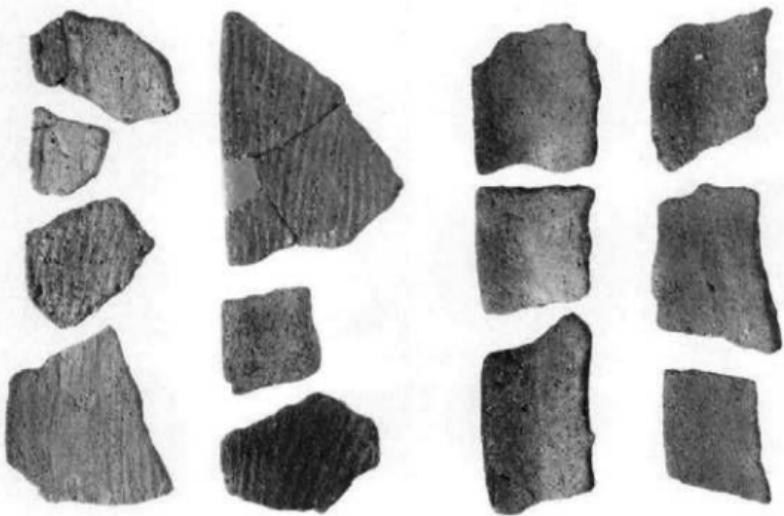
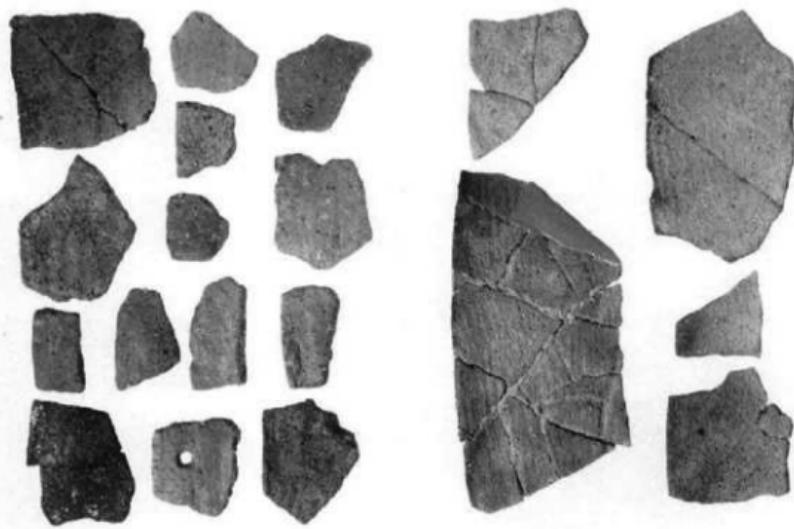


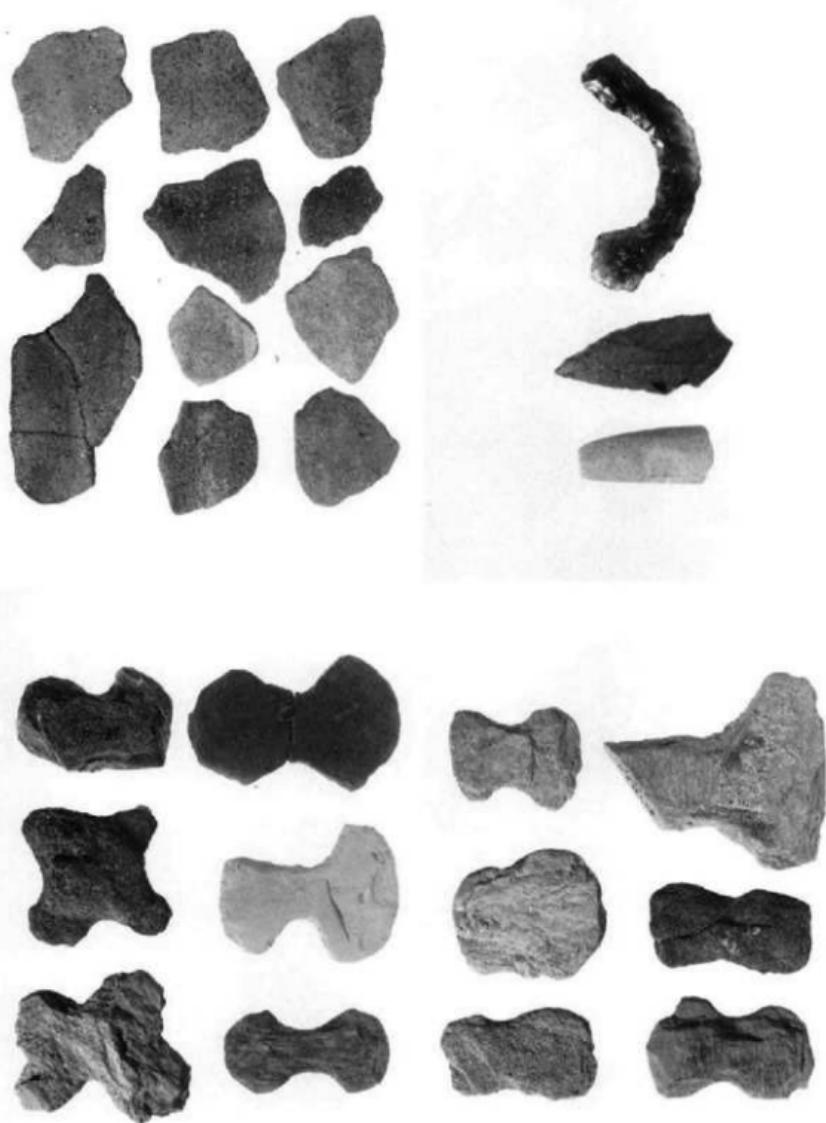
(2) 上：精製深体櫛木クタイ 下：精製深体 E 類



(1) E: 精製深体E2類 F: 精製深体E3類

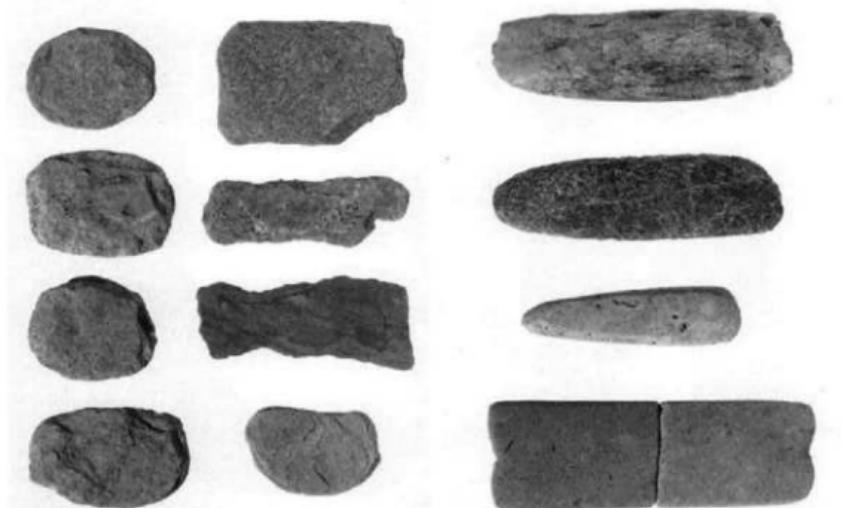
(2) 上: 精製深体E2類 下: 精製深体E3類



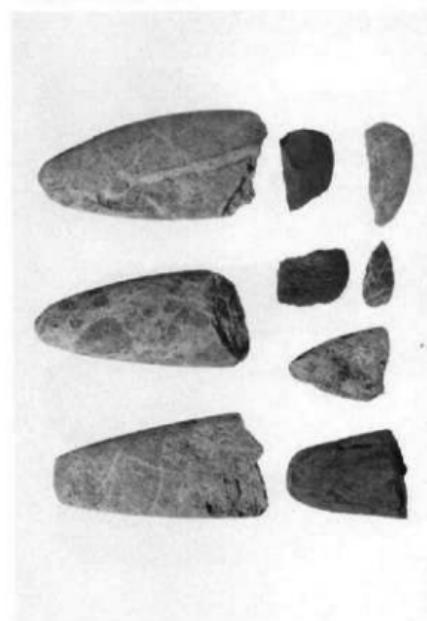


(1) 上：粗製渦体 下：管玉・ナイフ形石器・異形石器

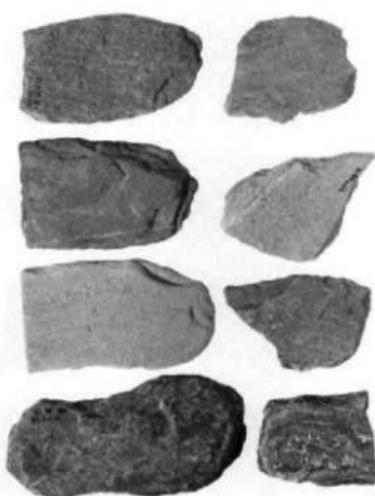
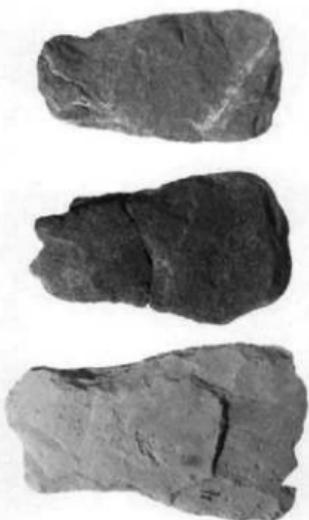
(2) 十字形石器・糸巻形石器



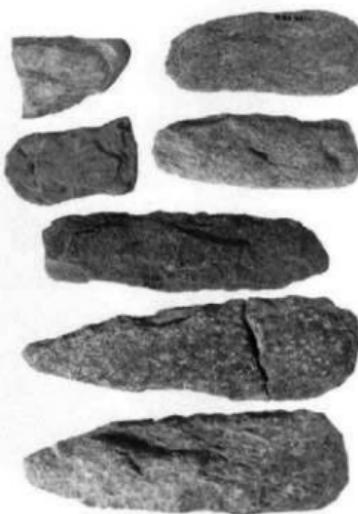
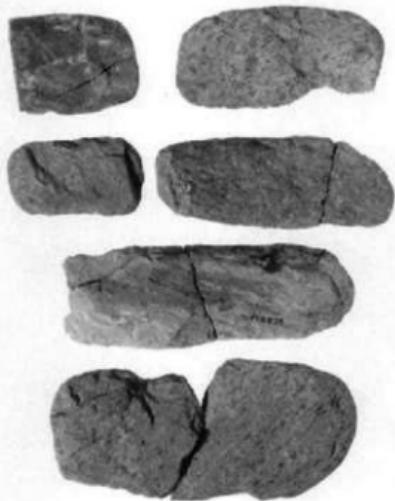
(1) 上：輪円形扁平石器 下：石のみ、両端抉入削製石器



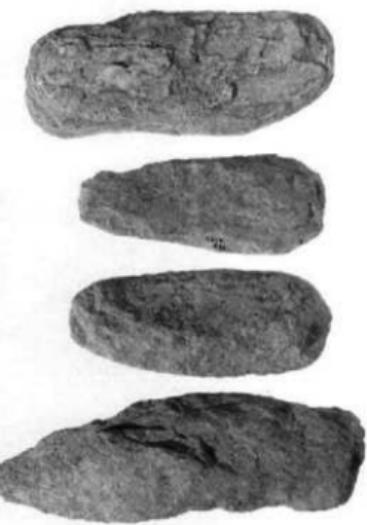
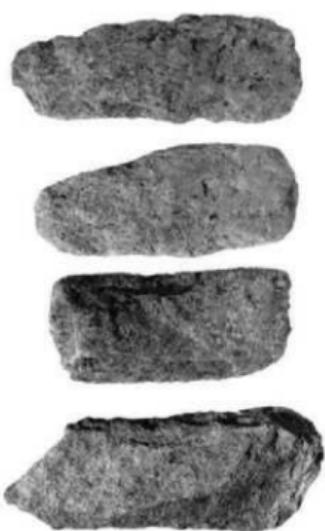
(2) 削製石斧



(1) 偏平打制石片



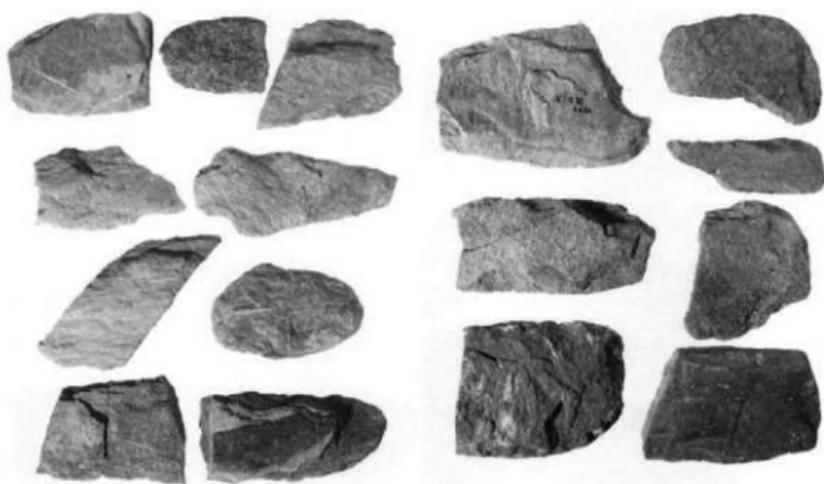
(2) 偏平打制石片



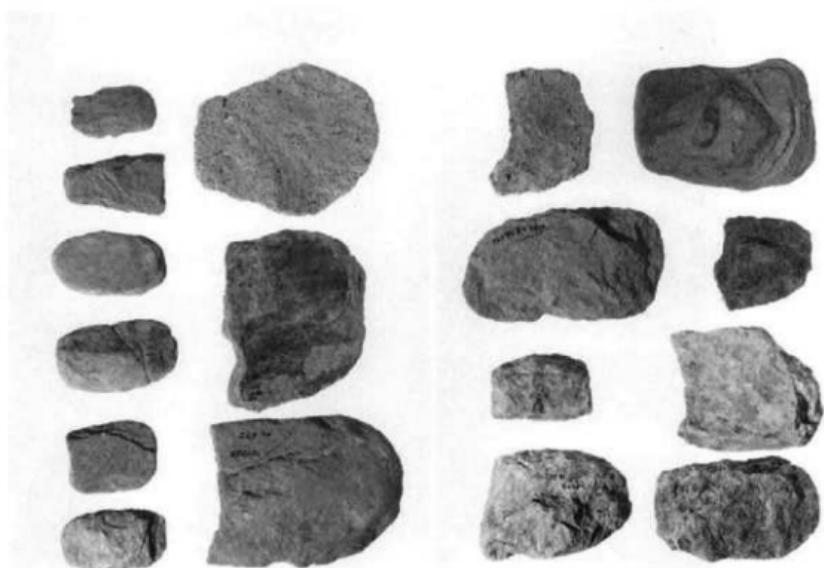
(1) 偏平打製石斧



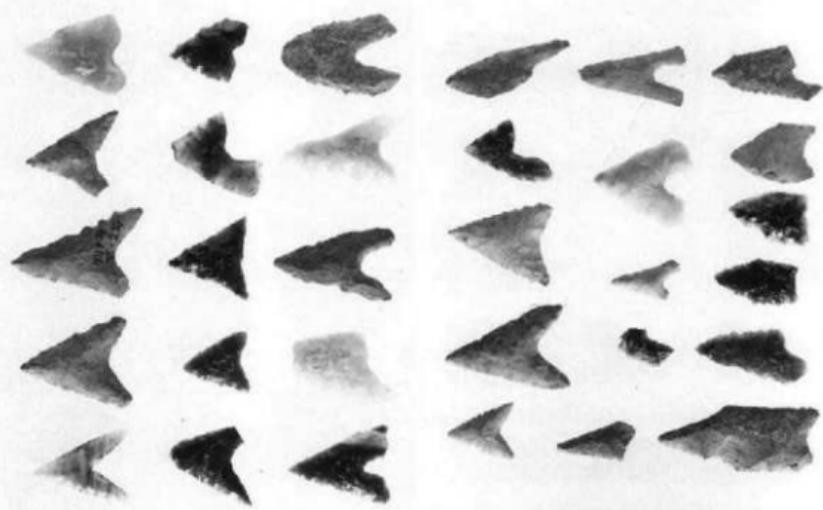
(2) 偏平打製石斧



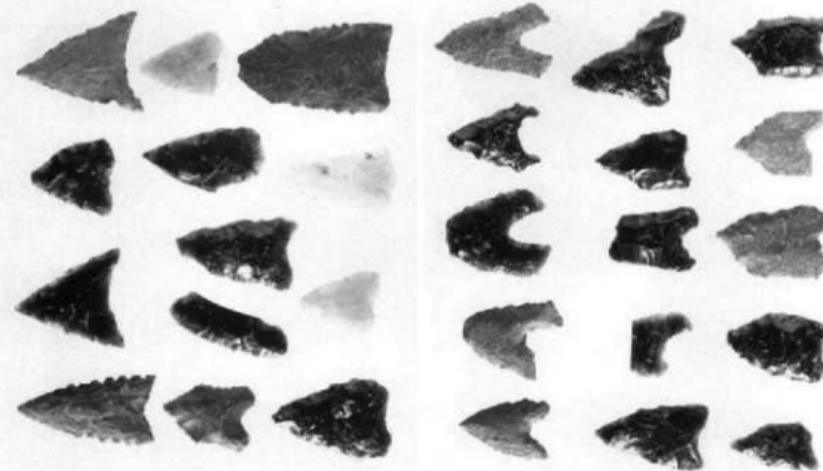
(1) 偏平打製石片



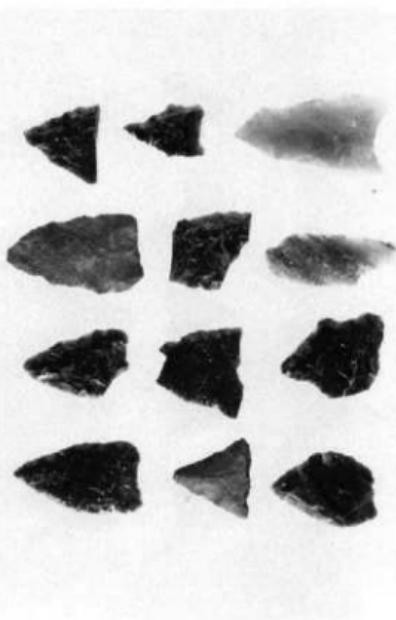
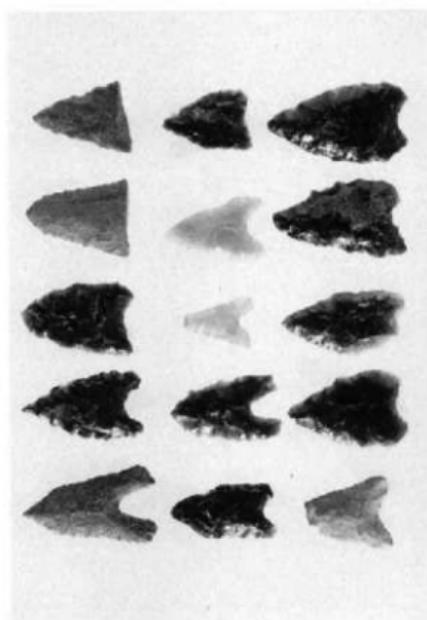
(2) 偏平打製石片



(1) 打制石器



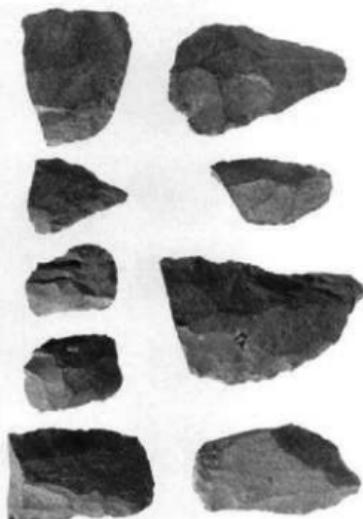
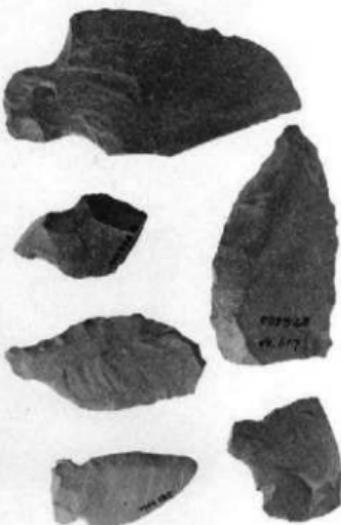
(2) 打制石器



(1) 打製石頭

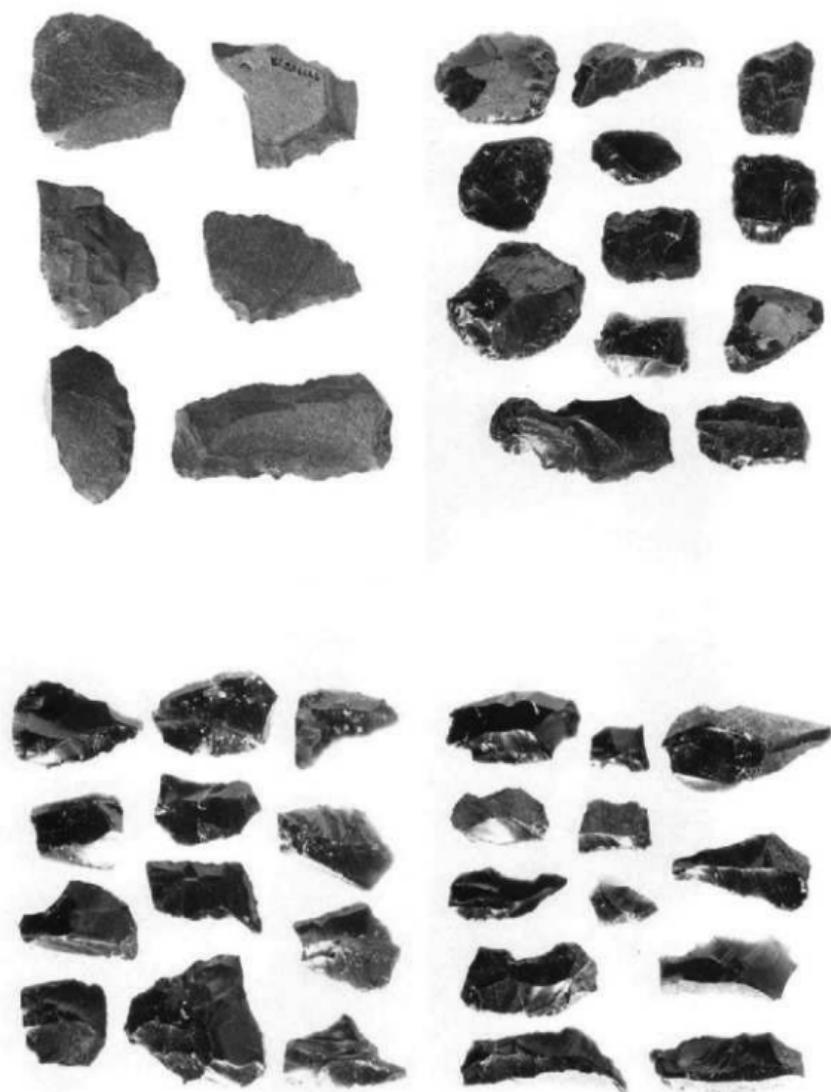


(2) 石器 (表之實)



(1) 石生・スクレイバー (表と裏)

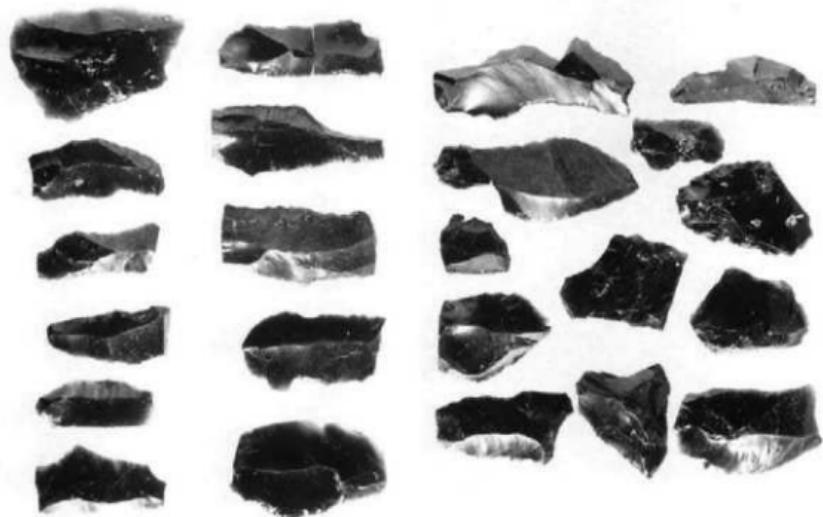
(2) スクレイバー



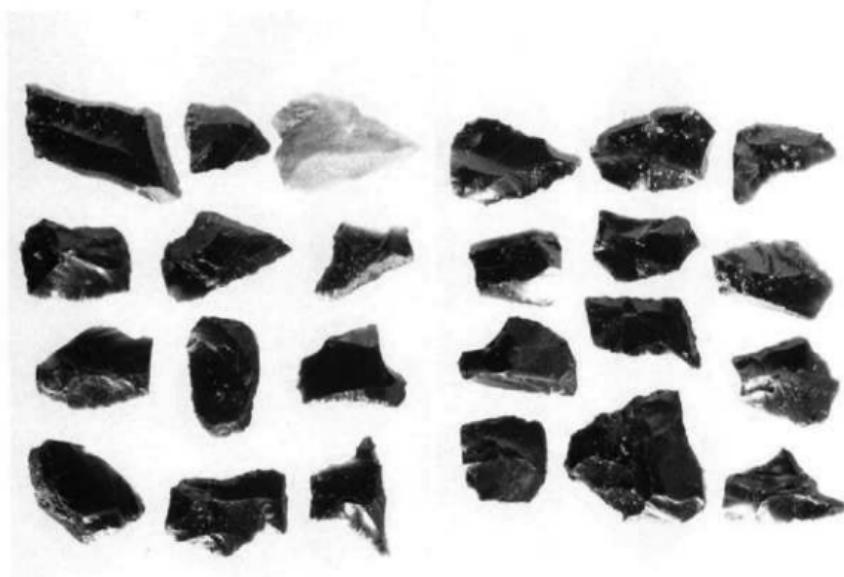
(2) 使用剝片

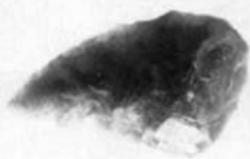
(1) ズグレイ片

(1) 他用剥片



(2) 他用剥片



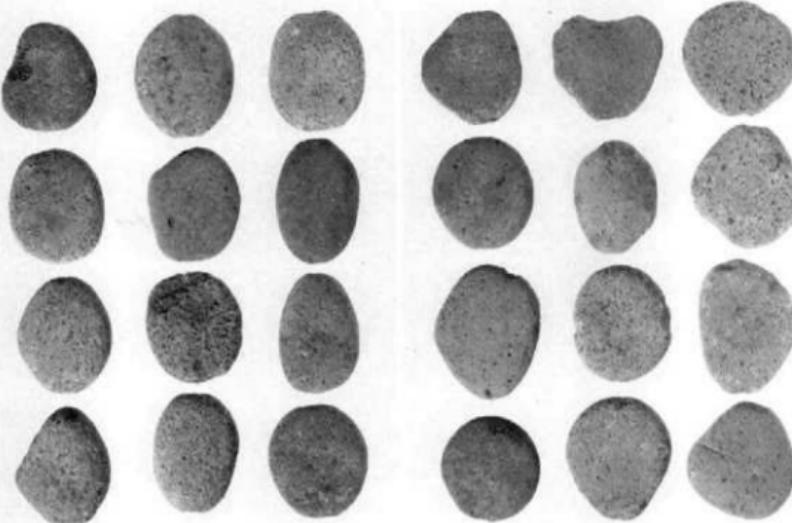


(1) 上：牙状尖頭器・石核 下：打欠き石片

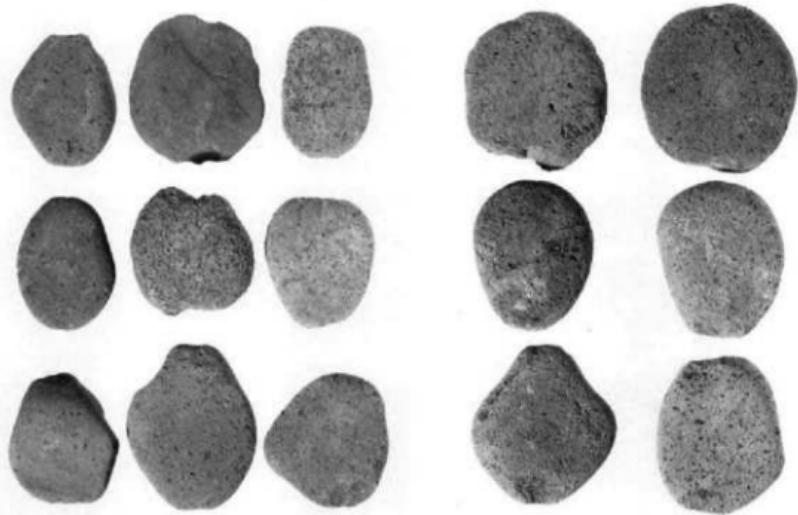
(2) 打欠き石片



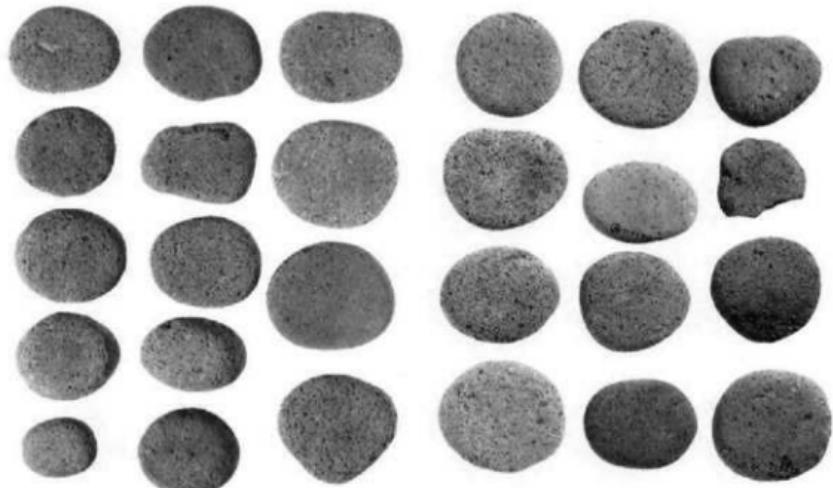
(1) 打欠石器



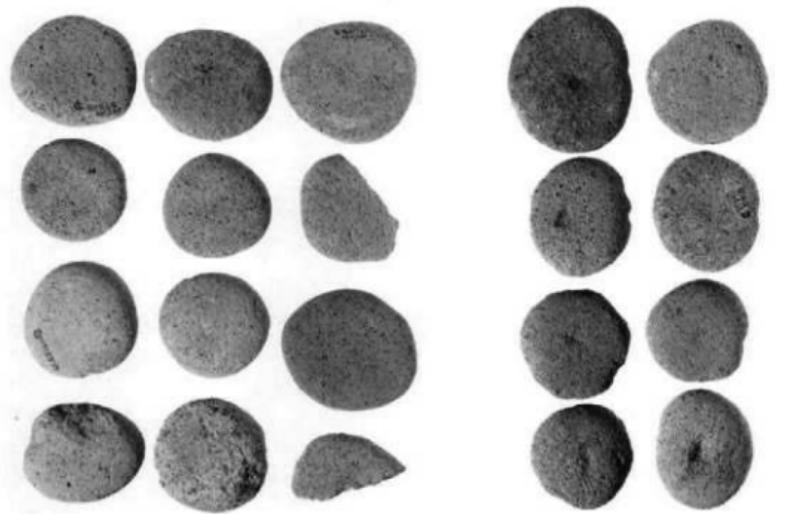
(2) 打欠石器



(1) 打大き石器



(2) 小型整石



(1) 上：磨石 下：凹石



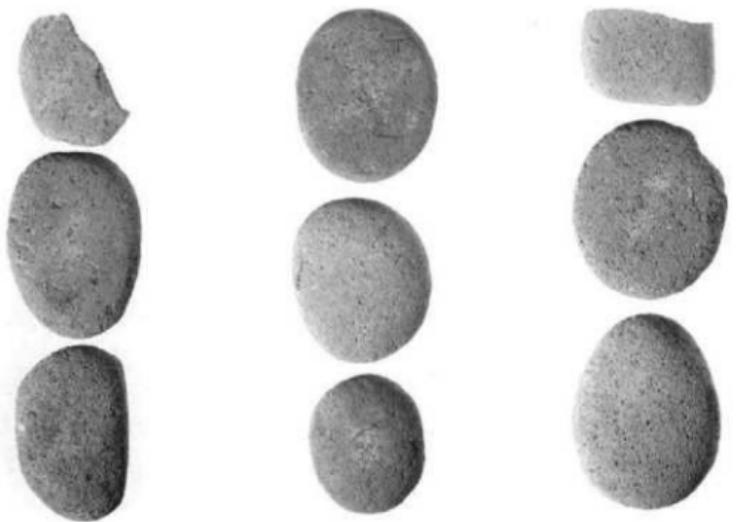
(2) 凹石・磨石



(1) 磨石



(2) 磨石



(1) 中型研石



(2) 中型研石



(1) 大型磨石

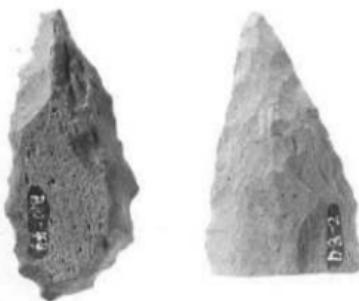


(2) 上：大型磨石 下：条溝砾石・砾石

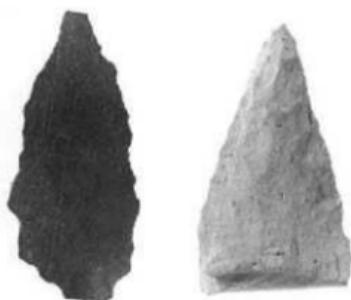


大型磨石

大型磨臼



石皿



石皿



(1) 若宮道路 1・2 区全景 (北東から)



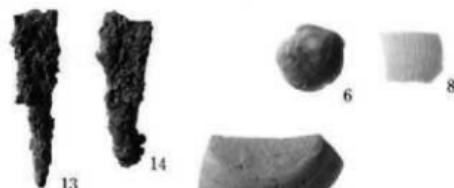
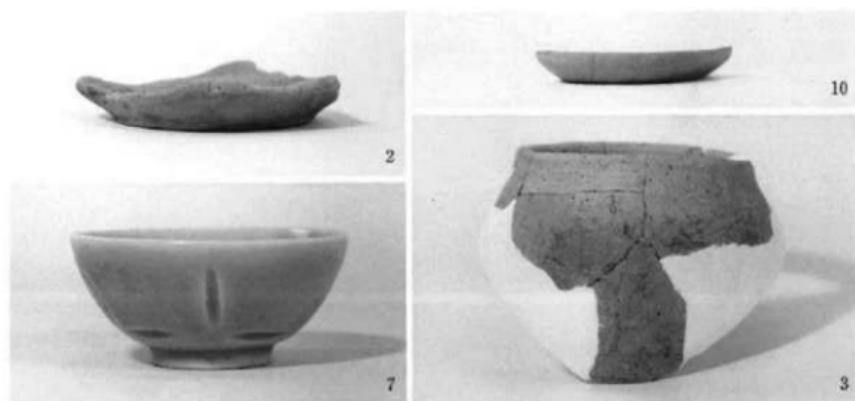
(2) 若宮道路 1・2 区 (東から)



(1) 1区全景 (北東から)

(2) 1区溝1 (東から)

(3) 階段状遺構 (北から)



報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく 43						
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 - 43 -						
副書名	朝倉郡杷木町所在 クリナラ遺跡・若宮遺跡						
巻次							
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	43						
編著者名	中間研志 伊崎俊秋						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812-77 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 TEL 092-641-2903						
発行年月日	西暦1997年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
クリナラ	ふくおかせんあさくらぐん 福岡県朝倉郡 はさまちおおあさとうず 杷木町大字寒水 あざ 字クリナラ		580140	33° 21' 59"	130° 48' 36"	昭和62年 5~11月	4,180 m ²	九州横断 自動車道 建設
若宮	ふくおかせんあさくらぐん 福岡県朝倉郡 はさまちおおあさとうず 杷木町大字寒水 あざわかみや 字若宮			33° 21' 52"	130° 48' 40"	昭和63年 4月	3,666 m ²	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
クリナラ	散布地 集落	縄文晚期	堅穴住居跡 土壙 集石遺構 埋甕 烟穴遺構 堅穴住居跡	7 2 2 1 3 2	晩期黒川式土器多量 晩期石器、菅玉			縄文晚期中~後葉 の土器編年の基準 となる大遺跡
若宮	散布地 墓地	弥生後期?	溝状遺構 階段状遺構 古墳中期 江戸末期	1 1 1 3	弥生土器 刀子、釘、土師器 青磁碗、青白磁碗			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 8	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

—43—

平成9年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 鶴川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号